

京都府遺跡調査概報

第 84 冊

1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡
 - (1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓
 - (2) 菩提城跡・菩提東古墳
2. 名神高速道路関係遺跡
 - 長岡京跡左京第399次(7ANVKN-11・7ANVST-7)
3. 第二京阪自動車道関係遺跡
 - (1) 内里八丁遺跡
 - (2) 佐山遺跡

1 9 9 8

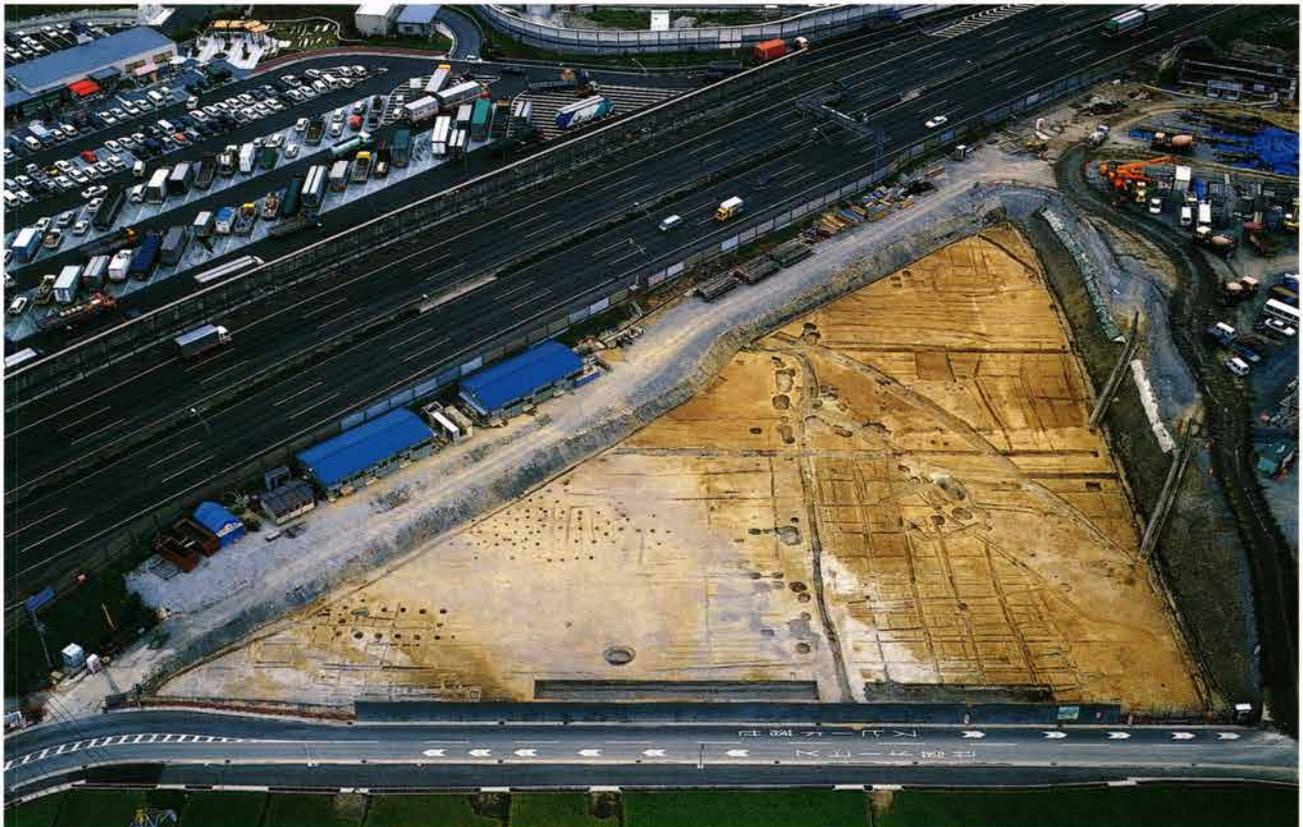
財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1)浅後谷南墳墓第1主体部（北西から）



(1) B-6 地区 S K399504出土印章 (平安時代)



(2) B-6・B-7 地区全景 (南から)

序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成9年度に実施した発掘調査のうち、農林水産省近畿農政局の依頼を受けて行った国営農地(浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓、菩提城跡・菩提東古墳)、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて行った名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第399次)、第二京阪自動車道関係遺跡(内里八丁遺跡、佐山遺跡)に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、網野町教育委員会・弥栄町教育委員会・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・長岡京市教育委員会・大山崎町教育委員会・(財)京都市埋蔵文化財研究所・八幡市教育委員会・久御山町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成10年10月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。
 1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡(浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓、菩提城跡・菩提東古墳)
 2. 名神高速道路関係遺跡(長岡京跡左京第399次)
 3. 第二京阪道路関係遺跡(内里八丁遺跡、佐山遺跡)
2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。
3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 (1)浅後谷南城跡 ・浅後谷南墳墓 (2)菩提城跡・菩提東古墳	竹野郡網野町高橋 竹野郡弥栄町吉沢	平9.10.2～ 平10.2.26 平9.10.13～ 平10.1.23	農林水産省 近畿農政局	伊野 近富 竹原 一彦 河野 一隆 村田 和弘
2. 名神高速道路関係遺跡 長岡京跡左京第399次	京都市南区久世東土 川(金井田・正登)	平.9.4.7～10.16	日本道路公団 大阪建設局	野島 永
3. 第二京阪自動車道関係遺跡 (1)内里八丁遺跡 (2)佐山遺跡	八幡市内里日向堂 久世郡久御山町佐山	平9.4.15～ 平10.3.10 平9.5.27～7.30 平9.10.21～ 12.16	日本道路公団 大阪建設局	森下 衛 森下 衛 岩松 保

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

本文目次

1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡平成9年度発掘調査概要	1
(1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	1
(2) 菩提城跡・菩提東古墳	23
2. 名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要	37
3. 第二京阪自動車道関係遺跡平成9年度発掘調査概要	81
(1) 内里八丁遺跡	82
(2) 佐山遺跡	105

挿図目次

1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡	
(1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	
第1図 調査地及び周辺遺跡分布図	2
第2図 調査地周辺地形図	3
第3図 浅後谷南城跡遺構平面図	4
第4図 掘立柱建物跡S B 1実測図	5
第5図 掘立柱建物跡柱穴P 1出土庖丁実測図	6
第6図 浅後谷南墳墓遺構平面図	7
第7図 第1主体部実測図	8
第8図 第1主体部棺内玉類出土状況図	9
第9図 第2主体部実測図	10
第10図 第3・4主体部実測図	12
第11図 第5・6主体部実測図	14
第12図 第7・8主体部実測図	15
第13図 第9主体部実測図	16
第14図 近世墓S X 1実測図	17
第15図 浅後谷南墳墓埋葬主体部出土土器実測図	18
第16図 浅後谷南墳墓出土鉄器実測図	19
第17図 浅後谷南墳墓埋葬主体部出土玉類実測図	21

(2) 菩提城跡・菩提東古墳

第18図	調査地及び周辺遺跡分布図	24
第19図	遺跡周辺地形図	25
第20図	調査前地形図	26
第21図	調査地遺構図	27
第22図	第1主体部実測図	29
第23図	第2主体部実測図	30
第24図	第3主体部実測図	31
第25図	第4主体部実測図	32
第26図	出土遺物実測図	33
第27図	小型鏡実測図	34
第28図	玉類実測図(1)	34
第29図	玉類実測図(2)	35

2. 名神高速道路関係遺跡

長岡京跡左京第399次(7ANVK-11・7ANVST-7)

第30図	調査地区位置図(長岡京全体図)	38
第31図	パーキング・エリア調査地区配置図	39
第32図	B-6・B-7地区遺構図(中世～平安時代)	41
第33図	井戸S E 399421	41
第34図	井戸S E 399421井戸側・井筒・水溜	42
第35図	井戸S E 399503	43
第36図	土坑S K 399504	43
第37図	B-6・B-7地区遺構図(長岡京期)	44
第38図	南一条大路両側溝断面図	45
第39図	南一条大路両側溝出土土器位置図	45
第40図	掘立柱建物跡S B 399415	46
第41図	掘立柱建物跡S B 399518	47
第42図	土坑S K 399594土師器出土状況	47
第43図	B-6・B-7地区遺構図(奈良～弥生時代)	48
第44図	B-6・B-7地区出土遺物1	50
第45図	B-6・B-7地区出土遺物2	51
第46図	B-6・B-7地区出土遺物3	52
第47図	井戸S E 399421出土櫃復原想定図	53
第48図	B-6・B-7地区出土遺物4	54

第49図	B-6・B-7地区出土遺物5	56
第50図	B-6・B-7地区出土遺物6	58
第51図	B-6・B-7地区出土遺物7	59
第52図	B-6・B-7地区出土遺物8	60
第53図	B-6・B-7地区出土遺物9	61
第54図	B-6・B-7地区出土遺物10	62
第55図	方形周溝墓S T 399602出土土器	63
第56図	長岡京左京二条四坊一町建物配置図	64
第57図	名神京都桂川パーキング・エリア予定地内位構図(1) 長岡京期	65
第58図	名神京都桂川パーキング・エリア予定地内位構図(2) 奈良～弥生時代	67

3. 第二京阪自動車道関係遺跡

(1) 内里八丁遺跡

第59図	調査地位置図	82
第60図	調査区配置図	83
第61図	E地区第1遺構面遺構配置図	84
第62図	E地区第2遺構面平面図	85
第63図	E地区第3遺構面平面図	86
第64図	E地区第4遺構面平面図(1)	87
第65図	E地区第4遺構面平面図(2)	88
第66図	出土遺物実測図(1)	90
第67図	出土遺物実測図(2)	91
第68図	出土遺物実測図(3)	92
第69図	出土遺物実測図(4)	93
第70図	出土遺物(古瓦)	93
第71図	出土遺物実測図(5)	94
第72図	出土遺物実測図(6)	94
第73図	出土遺物実測図(7)	95
第74図	F地区第1遺構面平面図	96
第75図	F地区第2遺構面平面図	96
第76図	F地区第3遺構面平面図	97
第77図	F地区第4遺構面平面図	98
第78図	F地区第5遺構面平面図	98
第79図	F地区第6遺構面平面図	99
第80図	出土遺物実測図(8)	100

第81図	出土遺物実測図(9)-----	101
第82図	出土遺物実測図(10)-----	102
第83図	出土遺物実測図(11)-----	103
(2) 佐山遺跡		
第84図	調査地位置図-----	105
第85図	第1・2トレンチ配置図-----	106
第86図	第1・2トレンチ遺構平面図-----	107
第87図	試掘トレンチ配置図-----	108
第88図	第7トレンチ検出遺構平面図-----	109
第89図	第14トレンチ検出遺構平面図-----	110
第90図	調査トレンチ土層柱状図(第2次試掘調査分)-----	111

付 表 目 次

1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡		
付表1	本概報で報告する遺跡-----	1
(1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓		
付表2	浅後谷南墳墓埋葬主体部一覧表-----	22
(2) 菩提城跡・菩提東古墳		
付表3	菩提東古墳検出主体部実測図-----	28
付表4	菩提東古墳出土玉類観察表-----	36
2. 名神高速道路関係遺跡		
長岡京跡左京第399次(7ANVKN-11・7ANVST-7)		
付表5	平成9年度名神高速道路関係遺跡調査一覧-----	37
付表6	B-6・B-7地区遺構記録番号対応表-----	40
付表7	長岡京跡左京第399次出土土器観察表-----	72
3. 第二京阪自動車道関係遺跡		
(1) 内里八丁遺跡		
付表8	E地区第2遺構面掘立柱建物跡一覧-----	84
付表9	E地区第3遺構面掘立柱建物跡等一覧-----	86
付表10	E地区第4遺構面飛鳥時代掘立柱建物跡一覧-----	87
付表11	E地区飛鳥時代竪穴式住居跡一覧-----	88
付表12	E地区古墳時代竪穴式住居跡一覧-----	89

付表13	E地区弥生時代後期末竪穴式住居跡一覧-----	89
付表14	F地区第3遺構面掘立柱建物跡一覧-----	97
(2) 佐山遺跡		
付表15	佐山遺跡第1・2トレンチ検出遺構一覧-----	106

図 版 目 次

1. 国営農地(丹後東部)関係遺跡

(1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

図版第1	(1)調査前全景(北東から)	(2)調査地遠景(南東から)
	(3)浅後谷南城跡(左上が北)	
図版第2	(1)柱穴P2・P5(北西から)	(2)柱穴P1鉄製庖丁出土状況(北東から)
	(3)近世墓(北東から)	
図版第3	(1)浅後谷南墳墓・浅後谷南遺跡(右山裾)遠景(北西から)	
	(2)弥生墳墓全景(北東から)	(3)第1主体部調査風景(北から)
図版第4	(1)第1主体部埋土断面(北から)	(2)第1主体部埋土横断面(南東から)
	(3)第1主体部棺痕跡検出作業風景(北から)	
図版第5	(1)第1主体部棺痕跡(南西から)	(2)第1主体部西小口棺痕跡(北西から)
	(3)第1主体部北東長側部断ち割り断面(南東から)	
図版第6	(1)第1主体部全景(北西から)	(2)第1主体部全景(北西から)
	(3)第1主体部完掘全景(北西から)	
図版第7	(1)第1主体部棺内全景(南西から)	
	(2)第1主体部遺物出土状況(南西から)	
	(3)第1主体部遺物出土状況(北西から)	
図版第8	(1)第2主体部棺痕跡検出状況(南東から)	
	(2)第2主体部木棺痕跡及び埋土断面(西から)	
	(3)第2主体部木棺痕跡検出状況(南西から)	
図版第9	(1)第2主体部全景(南東から)	(2)第2主体部全景(南西から)
	(3)第2主体部遺物出土状況(南西から)	
図版第10	(1)第3主体部埋土横断面(南東から)	(2)第3主体部全景(南東から)
	(3)第3主体部遺物出土状況(北東から)	
図版第11	(1)第4主体部埋土横断面(南東から)	(2)第4主体部全景(南西から)
	(3)第4主体部遺物出土状況(北西から)	

- 図版第12 (1)第5主体部全景(北西から) (2)第5主体部全景(南西から)
(3)現地説明会風景(北東から)
- 図版第13 (1)第6主体部全景(東から) (2)第6主体部遺物出土状況(北から)
(3)第6主体部埋土内土器出土状況
- 図版第14 (1)第7主体部全景(東から) (2)第8主体部全景(南西から)
(3)第9主体部全景(南西から)
- 図版第15 浅後谷南墳墓・城跡出土鉄製品
- 図版第16 (1)第1主体部出土玉類 (2)墳墓埋葬主体部出土土器
(2)菩提城跡・菩提東古墳
- 図版第17 (1)調査地全景(右が北) (2)調査地全景(下が北)
(3)樹木伐採後の調査地(南から)
- 図版第18 (1)樹木伐採後の調査地西側(南から) (2)頂部平坦地試掘状況(南から)
(3)東側斜面表土掘削作業(南から)
- 図版第19 (1)頂部平坦地北側遺構検出状況(北西から)
(2)頂部平坦地遺構検出状況(北西から)
(3)遺構検出状況(北から)
- 図版第20 (1)「コ」の字状溝完掘状況(南から) (2)頂部平坦地ピット完掘状況(南西から)
(3)東側テラス部分遺構検出作業(北から)
- 図版第21 (1)鉄器出土状況(1)(東から) (2)鉄器出土状況(2)(南から)
(3)第1主体部棺内掘り下げ作業(北東から)
- 図版第22 (1)棺内遺物出土状況(西から) (2)第1主体部全景(北西から)
(3)第1主体部全景(南から)
- 図版第23 (1)第1主体部完掘状況(南から) (2)東側テラス部分全景(北東から)
(3)第2主体部遠景(西から)
- 図版第24 (1)第2主体部完掘状況(東から) (2)第3主体部遠景(南東から)
(3)第3主体部完掘状況(東から)
- 図版第25 菩提城跡関連出土遺物
- 図版第26 菩提東古墳第1主体部出土遺物

2. 名神高速道路関係遺跡

(1) 長岡京跡左京第399次

- 図版第27 (1)B—6・B—7地区中世遺構検出状況(東から)
(2)B—7地区S B399420(南から) (3)B—7地区S B399418(北から)
- 図版第28 (1)B—6地区柱穴520(北から)
(2)B—6地区土坑S K399504印章出土状況(西から)

- (3) B-6 地区土坑 S K399504 印章出土状況(東から)
- 図版第29 (1) B-7 地区井戸 S E399421 井戸側・井筒(南西から)
 (2) B-7 地区井戸 S E399421 井戸側除去中(北東から)
 (3) B-7 地区井戸 S E399421 水溜(櫃)出土状況(北西から)
- 図版第30 (1) B-7 地区掘立柱建物跡 S B399518(北から)
 (2) B-7 地区掘立柱建物跡 S B399415(東から)
 (3) B-7 地区土坑 S K399594 土師器皿 C 出土状況(南から)
- 図版第31 (1) B-6 地区南一条大路北側溝 S D33003 l 区西壁(東から)
 (2) B-6 地区南一条大路北側溝 S D33003 n 区西壁(東から)
 (3) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 l 区西壁(東から)
- 図版第32 (1) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 n 区西壁(東から)
 (2) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 p 区西壁(東から)
 (3) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 r 区西壁(東から)
- 図版第33 (1) B-6 地区南一条大路北側溝 S D33003 上層 n 区土器出土状況(南から)
 (2) B-6 地区南一条大路北側溝 S D33003 下層 o 区土器出土状況(南から)
 (3) B-6 地区南一条大路北側溝 S D33003 下層 o 区土器出土状況(東から)
- 図版第34 (1) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 下層 r 区土器出土状況(南から)
 (2) B-6 地区南一条大路南側溝 S D33002 下層 r 区偶蹄類(馬)下顎骨出土状況(南から)
 (3) B-6 地区溝 S D33304 土器出土状況(西から)
- 図版第35 (1) B-6・B-7 地区方形周溝墓 S T399602、および S D399607・609・610(北から)
 (2) B-7 地区方形周溝墓 S T399602 土器出土状況(西から)
 (3) B-7 地区土坑 S K399506 土器出土状況(南から)
- 図版第36 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(1)
- 図版第37 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(2)
- 図版第38 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(3)
- 図版第39 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(4)
- 図版第40 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(5)
- 図版第41 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(6)
- 図版第42 長岡京跡左京第399次調査(B-6・B-7 地区)出土遺物(7)

3. 第二京阪自動車道関係遺跡

(1) 内里八丁遺跡

- 図版第43 (1) 調査地全景(北西上空から)

- (2) E地区第1遺構面全景(南から)
(3) F地区第1遺構面全景(南から)
- 図版第44 (1) E地区第2遺構面S B212・S K201検出状況(北から)
(2) E地区第2遺構面S E205完掘状況(南から)
(3) E地区第2遺構面S K201検出状況(北から)
- 図版第45 (1) E地区第3遺構面全景(北上空から)
(2) E地区第3遺構面全景(真上から)
(3) E地区第3遺構面道路状遺構検出状況(北から)
- 図版第46 (1) E地区第3遺構面S B225検出状況(西から)
(2) E地区第3～4遺構面調査区中央部柱穴群検出状況(西から)
(3) E地区第3遺構面S K203検出状況(南から)
- 図版第47 (1) E地区第4遺構面遺構検出状況(南から)
(2) E地区第4遺構面調査区南半部遺構検出状況(南から)
(3) E地区第4遺構面S B226検出状況(南から)
- 図版第48 (1) E地区第4遺構面全景(北から)
(2) E地区第4遺構面全景(南から)
(3) E地区第4遺構面S H279検出状況(西から)
- 図版第49 (1) E地区第4遺構面S H280完掘状況(南から)
(2) E地区第4遺構面S H266完掘状況(西から)
(3) E地区第4遺構面S H259完掘状況(南から)
- 図版第50 (1) E地区第4遺構面S H283完掘状況(南から)
(2) E地区第4遺構面S H283竈検出状況(南から)
(3) E地区第4遺構面S H287検出状況(南から)
- 図版第51 (1) F地区第2遺構面全景(南から)
(2) F地区第3遺構面全景(南上空から)
(3) F地区第3遺構面S B317検出状況(北から)
- 図版第52 (1) F地区第3遺構面S B313検出状況(南から)
(2) F地区第3遺構面S B311検出状況(北から)
(3) F地区第3遺構面S E319検出状況(北から)
- 図版第53 (1) F地区第4遺構面全景(南から)
(2) F地区第5遺構面全景(南から)
(3) F地区第5遺構面S R535遺物出土状況(南から)
- 図版第54 (1) F地区第6遺構面全景(南から)
(2) F地区第6遺構面水田部全景(南から)
(3) F地区第6遺構面水田部全景(真上から)

- 図版第55 (1) F地区第6遺構面水田跡検出状況(北から)
(2) F地区第6遺構面水田跡稲株痕等検出状況(南東から)
(3) F地区第6遺構面水田跡稲株痕等検出状況(南東から)

(2) 佐山遺跡

- 図版第56 (1) 第1・2トレンチ全景(南東から)
(2) 第1トレンチ全景(南から)
(3) 第1トレンチSH01・SD01検出状況(北から)
(4) 第1トレンチSH08遺物出土状況(東から)
- 図版第57 (1) 第2トレンチ全景(西から)
(2) 第2トレンチSH06・SH07・SD03検出状況(北東から)
(3) 第2トレンチSH03検出状況(北から)
(4) 第2トレンチSD03遺物出土状況(南から)
- 図版第58 (1) 第4トレンチ素掘り溝群検出状況(南から)
(2) 第5トレンチ全景(南から)
(3) 第5トレンチ弥生土器壺検出状況(北から)
- 図版第59 (1) 第7トレンチ全景(西から)
(2) 第7トレンチ竪穴式住居跡検出状況(南西から)
(3) 第7トレンチ噴砂検出状況(南西から)
- 図版第60 (1) 第10トレンチ全景(西から)
(2) 第11トレンチ全景(北西から)
(3) 第15トレンチ全景

1. 国営農地(丹後東部地区)関係遺跡 平成9年度発掘調査概要

はじめに

本概要報告は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している、丹後国営農地開発事業(東部地区)に伴い、平成9年度に実施した11遺跡の内の2遺跡の調査概要である。これらの調査は、農林水産省近畿農政局丹後開拓建設事業所からの依頼を受けて、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した。今回報告するのは、竹野郡網野町に所在する浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓と竹野郡弥栄町に所在する菩提城跡・菩提東古墳である。これらは、略報という形で『京都府遺跡調査概報』第83冊上で報告したが、本概報は、遺物整理の進展を踏まえて、詳細な報告を行っている。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係長伊野近富、同主任調査員竹原一彦、調査員村田和弘が担当した。本概要の執筆は、各遺跡の調査担当者が分担して行った。調査期間中、極寒の中、地元有志の方々や学生諸氏には、作業員、補助員、整理員として作業に従事していただいた。また、調査に当たっては、網野町教育委員会・弥栄町教育委員会をはじめとする関係諸機関のご協力を得られ、現

付表1 本概報で報告する遺跡

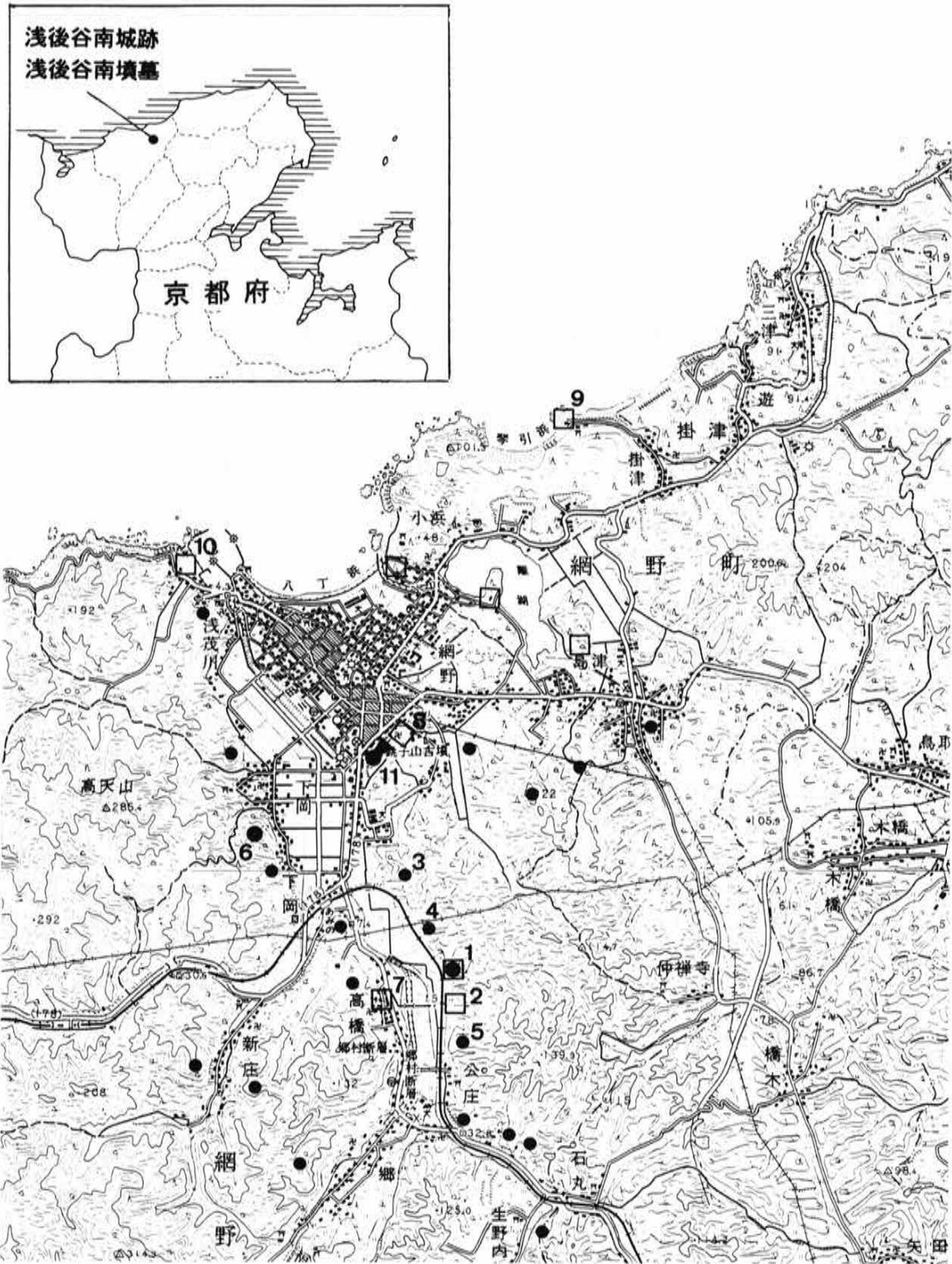
地でも多くの方々のご協力とご指導を賜ったことに感謝の意を表したい。なお、発掘調査に係る経費は、全額農林水産省近畿農政局が負担した。

番号	1	2
遺跡名	浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓	菩提城跡・菩提東古墳
所在地	京都府竹野郡網野町高橋	京都府竹野郡弥栄町吉沢
調査期間	平成9年10月2日～同10年2月26日	平成9年10月13日～同10年1月23日
調査面積	350m ²	450m ²
担当者	調査第1係長 伊野 近富 主任調査員 竹原 一彦	調査第1係長 伊野 近富 調査員 村田 和弘

(伊野近富)

(1) 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

浅後谷南城跡は、琴引浜の西、日本海に注ぐ福田川の河口から、約2km上流の右岸丘陵上にある。城跡からの眺望は良く、西側眼下に狭長な平地が広がっている。この遺跡は、国営農地郷1団地造成に先立って、尾根先端部で発掘調査を実施した。調査面積は約350m²である。調査により城跡関連遺構を検出すると共に、下層から新たに弥生時代の墳墓もあわせて検出した。新規に弥生時代墳墓を検出したので、網野町教育委員会との協議によって、墳墓に関しては浅後谷南墳墓の遺跡名称を与えた。



第1図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/50,000)

- | | | | |
|------------------|-----------|-------------|-----------|
| 1. 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓 | 2. 浅後谷南遺跡 | 3. 勝山城跡 | 4. 浅後谷北城跡 |
| 5. 公庄城跡 | 6. 下岡城跡 | 7. 高橋遺跡 | 8. 林遺跡 |
| 9. 琴引浜遺跡 | 10. 浅茂川遺跡 | 11. 網野銚子山古墳 | |
| ●. 山城跡 | □. 弥生時代遺跡 | | |



第2図 調査地周辺地形図

1. 調査の概要

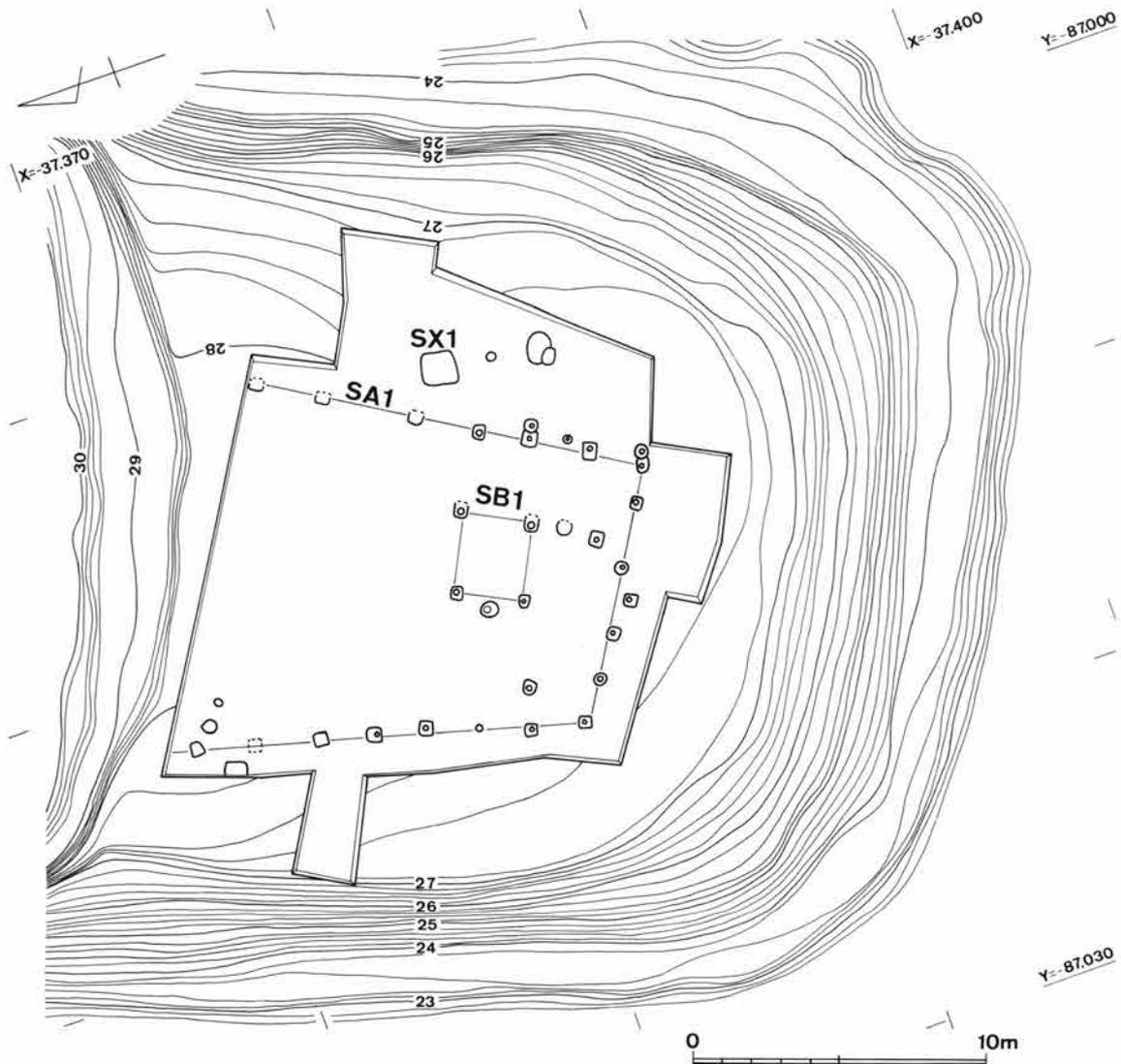
調査地点は城跡が存在する尾根の先端部、標高約28m付近の平坦部が対象となった。この平坦部にトレンチを設定し、試掘調査を実施した。試掘調査の結果、地表下約40cmで風化花崗岩層の地山面を確認すると共に、さほど古くない耕作溝群と柱穴を検出した。柱穴は城跡関連遺構と判断したことから、その後は試掘トレンチを拡張して、平坦面のほぼ全面と斜面の一部が対象となった。

調査の結果、城跡関連遺構として、尾根上の平坦面から掘立柱建物跡1棟と建物を囲む柵列を検出した。また、近世墓1基を検出した。城跡関連遺構の精査を実施していたところ、建物跡の周辺に土色・土質の変化が確認できた。周辺の精査を進めた結果、平坦面から弥生時代の埋葬施設9基を検出した。

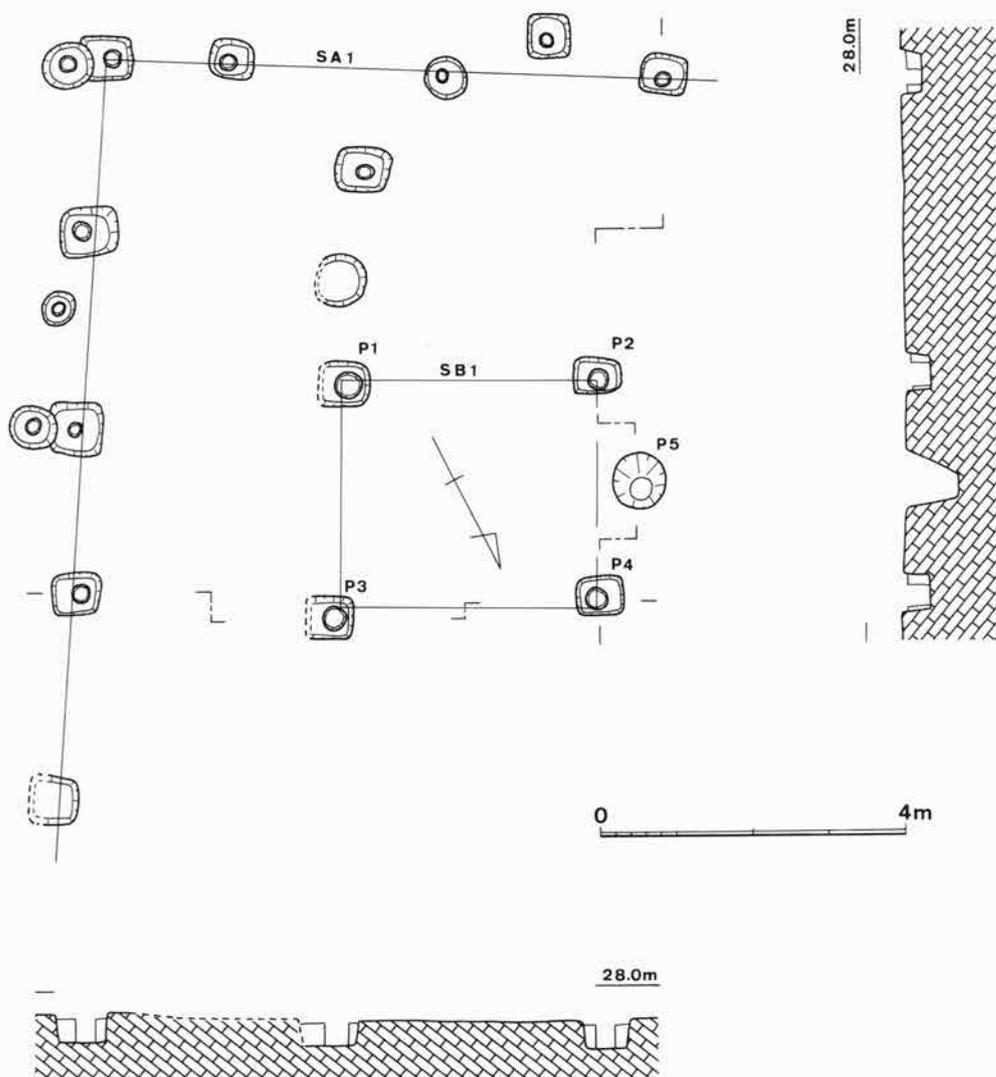
(1) 浅後谷南城跡

① 検出遺構

建物跡SB1(第4図) 平坦面のほぼ中央付近で検出した1間×1間の掘立柱建物跡である。



第3図 浅後谷南城跡遺構平面図



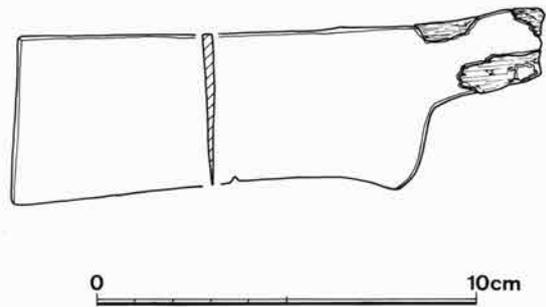
第4図 掘立柱建物跡SB1実測図

建物跡は軸線を尾根筋に合わせ、東西約2.7m×南北約2.4mの規模を測る。建物跡の主軸は座標北から西に約28°振っている。柱穴掘形は方形を呈し、一辺は50~60cm、深さは検出面(地山面)から35~40cmを測る。柱穴内の埋土の精査によって、建物には直径20cm前後の柱が使用されていたことが判明した。遺物は、建物の南東隅柱穴(P1)の埋土中から鉄製庖丁1点が出土した。

柵列跡(SA1) 尾根平坦面の中央からやや西側に片寄って、建物の三方向を取り巻く状況で検出した柵列である。柵列は平地や谷部に面する三面に配置されている。平坦地の北側は尾根筋の上部方向となるが、調査対象範囲外となるために、柵列の延長については確認できない。柵列の柱穴掘形の大多数は方形であるが、一部の柱穴では円形掘形が認められた。柱穴規模は、建物柱穴掘形に比べやや小規模となる。柱穴内埋土に残る柱痕跡は直径約15cm前後を測る。柱穴は一部に切り合う事例があり、柵については補修が行われていたと判断される。

特殊柱穴(P5) 建物跡SB1の西側から検出した柱穴跡である。建物の西辺を構成するP

2・P4柱穴間のほぼ中央、両柱穴心々ラインから西側に約0.6mの間隔を開けて検出した。柱穴掘形は円形で直径約0.7m、深さは地山面から約70cmを測る。柱穴検出時点では、建物に伴う階段据付けの穴とみていたが、建物柱穴に比べ2倍近い深さをもつことから、階段設置の跡とは考え難い。建物と柵列に直接的に関連した遺構でないことは明らかであり、独立した柱が建てられていたと判断する。現時点では旗竿の柱穴と考えている。



第5図 掘立柱建物跡柱穴P1出土庖丁実測図

②出土遺物

城跡関連の遺物は、ほとんど無く、唯一、建物柱穴(P1)の埋土内から鉄製和庖丁(第5図)が出土している。庖丁は鍛造品である。断面の形状は正位置(刃部を下)で左面が平坦であり、対する右面は刃部付近でやや緩やかなカーブをもつことから、右利き使用の庖丁である。全長は14.3cmを測る。刃部長は10.2cm、高さ4.5cm、峰の厚さは3mmを測る。長期間の使用の結果とみる刃部の研ぎ出しで、刃部面は強く内側にカーブする。柄部には一部に木質が遺存している。

(2)浅後谷南墳墓

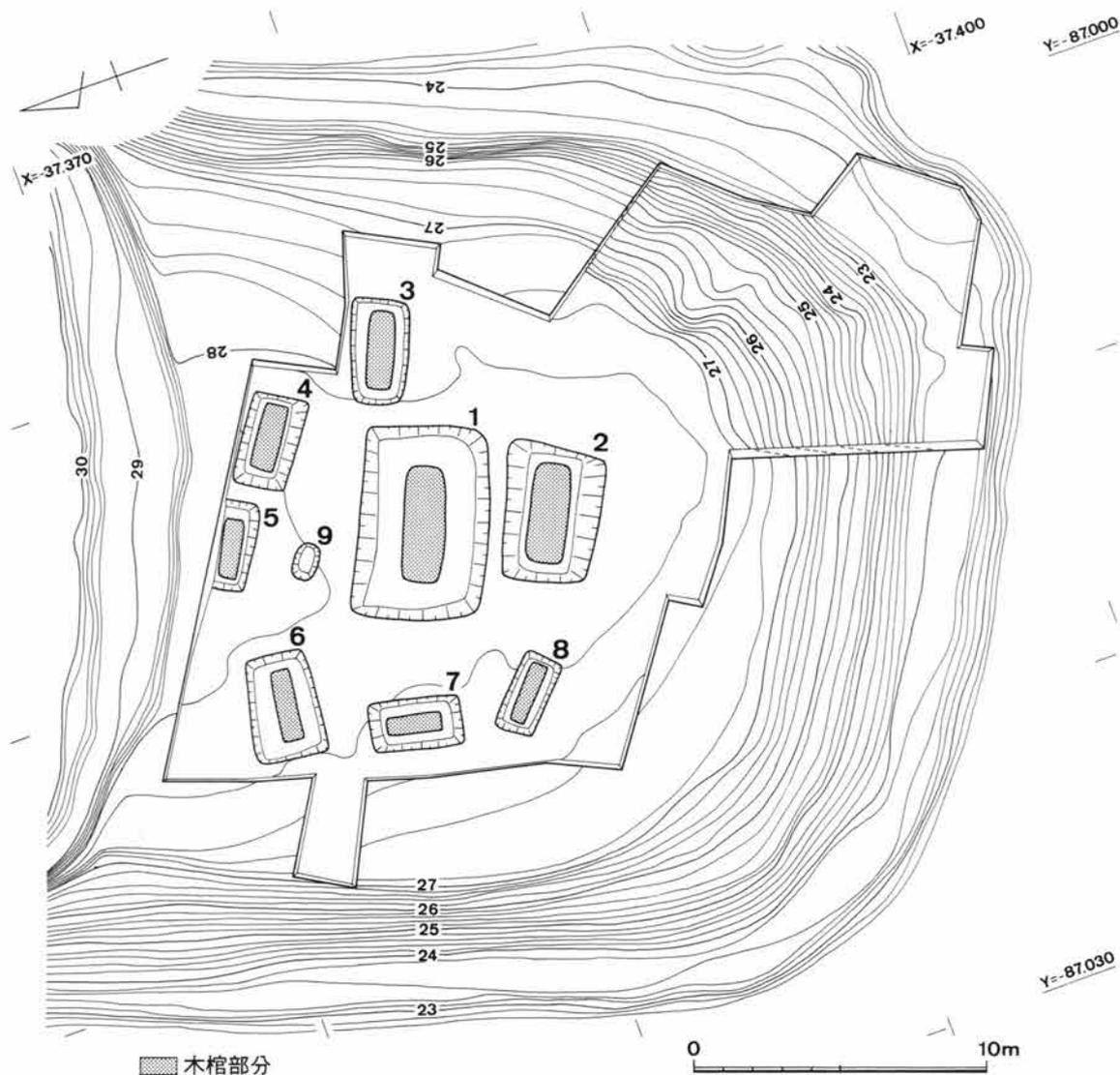
①検出遺構

平坦地の中央から、墳墓の中心埋葬主体部と判断する大型墓壙(第1主体部)を検出した。さらに第1主体部を取り巻く状況で、8基の埋葬主体部(第2～第9主体部)を検出した。このうち第9主体部は、墓壙の規模・形状から棺を持たない土壙墓と判断される。他の第1～第8主体部については木棺直葬墓である。埋葬主体部のうち大多数を占める7基は、その主軸方位を東西に向けるが、第7主体部のみ主軸を南北にとる。

墳墓 墳墓は尾根筋の上部側を大規模に削り、一辺約20mの方形で平坦な墓域を削り出している。限られた範囲の調査であったため墳墓の全容は不明な点が多い。確認した限り、墳墓斜面は地山削出しと一部盛土を行い、方形区画を意識した整形を施している。斜面部の調査では、墳丘裾と判断する傾斜変換線を確認した。墳墓の南西隅斜面での部分的な確認ではあるが、墳丘裾として、標高約25～26m付近に傾斜変換点を含む平坦面が看取される。この標高26m付近を裾ラインとするならば、墳墓の高さは約1.5mを測る。

第1主体部(第7図) 墳墓の中央部に設けられた大型の埋葬施設である。墓壙の主軸は尾根の主軸と直交する。墓壙は比較的幅広な長方形を呈し、地山を掘り下げた二段墓壙である。墓壙規模は全長約6.5m・幅約4.3m、上段の墓壙底までの深さは約1.2mを測る。墓壙壁面の立ち上がりは急であり、立ち上がり角は約70°である。壁面の四隅は、地山の岩礫脈が露出する南西隅を除き、残る三方の隅部は比較的角立って仕上げられている。

上段の墓壙底の中央には、木棺を据え付けるために、さらに掘り下げられている。この部分は、

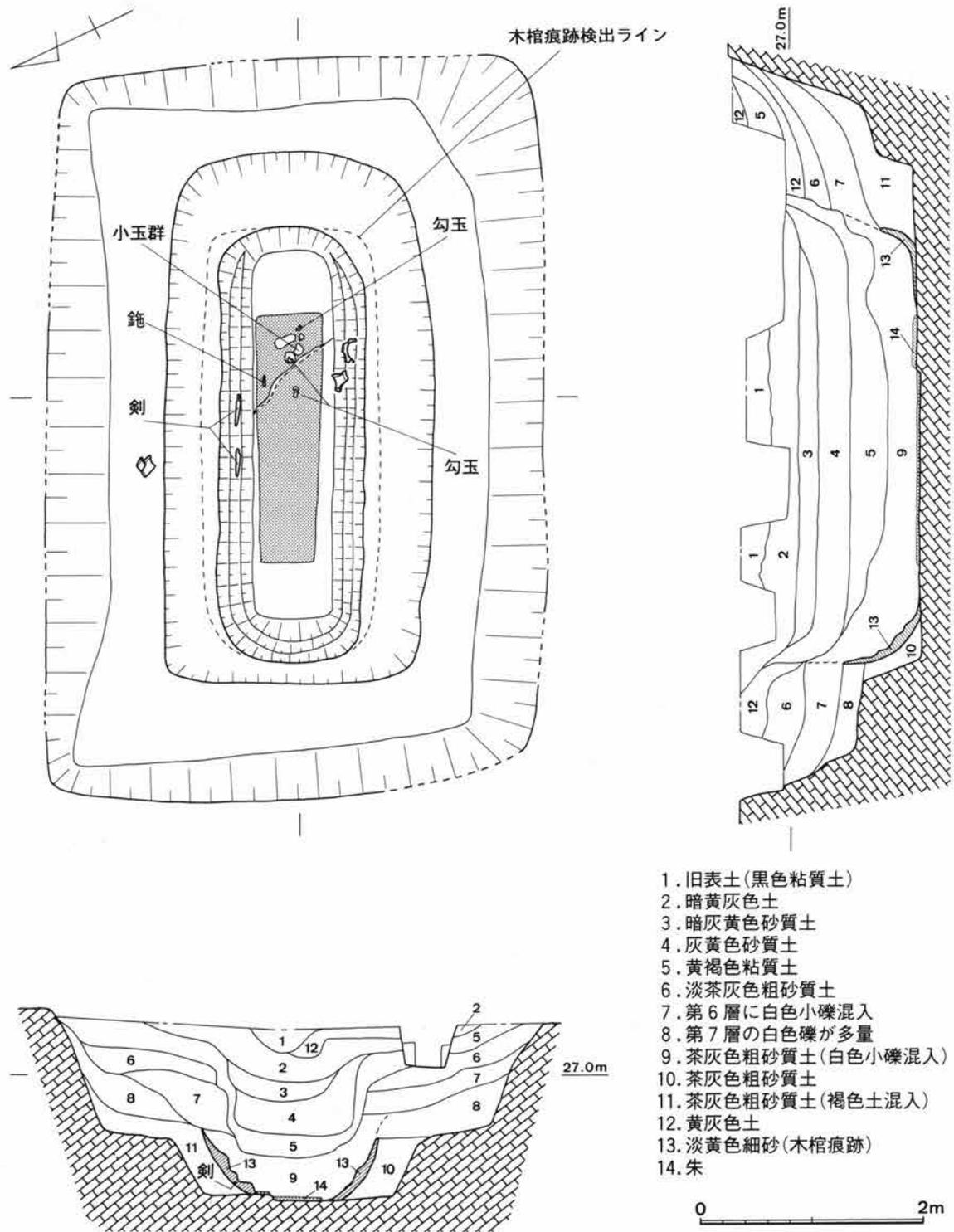


第6図 浅後谷南墳墓遺構平面図

木棺より一回り大きく掘り下げられ、木棺と墓壙壁との間は、裏込めを行っている。下段墓壙の規模は、全長約4.6m・幅約2.3m・深さ約50cmを測る。墓壙底は水平で平坦に仕上げられている。墓壙底の東部には、墓壙主軸に斜行する、上下約3cmに及ぶ、地震によるズレが認められた。

下段墓壙の検出時点の精査によって、木棺痕跡(第7図第13層)を確認した。木棺痕跡は裏込め土や棺内崩落土とは明瞭に異なり、淡黄色系の細かい砂粒として3～5cmの厚み幅をもって検出できた。木棺痕跡にみる平面形は、隅丸長方形を呈し、全長約4.0m・幅約1.55mを測る。墓壙埋土の断面観察による木棺痕跡の形状から、当主体部には舟形木棺が使用されたことが判明した。木棺痕跡の上端から棺底面までの深さは約70cmを測る。棺内底面には鮮やかに発色した朱が、全長約2.2m・幅40～60cmの範囲に散布されている。特に被葬者の頭部付近とみる東側の朱は発色が鮮やかで、厚みをもっている。一方、足元側とみる棺内西部の朱は薄く、散布された範囲も頭部側に比べると、その幅を減じている。木棺の主軸は北から西に約64°振る。

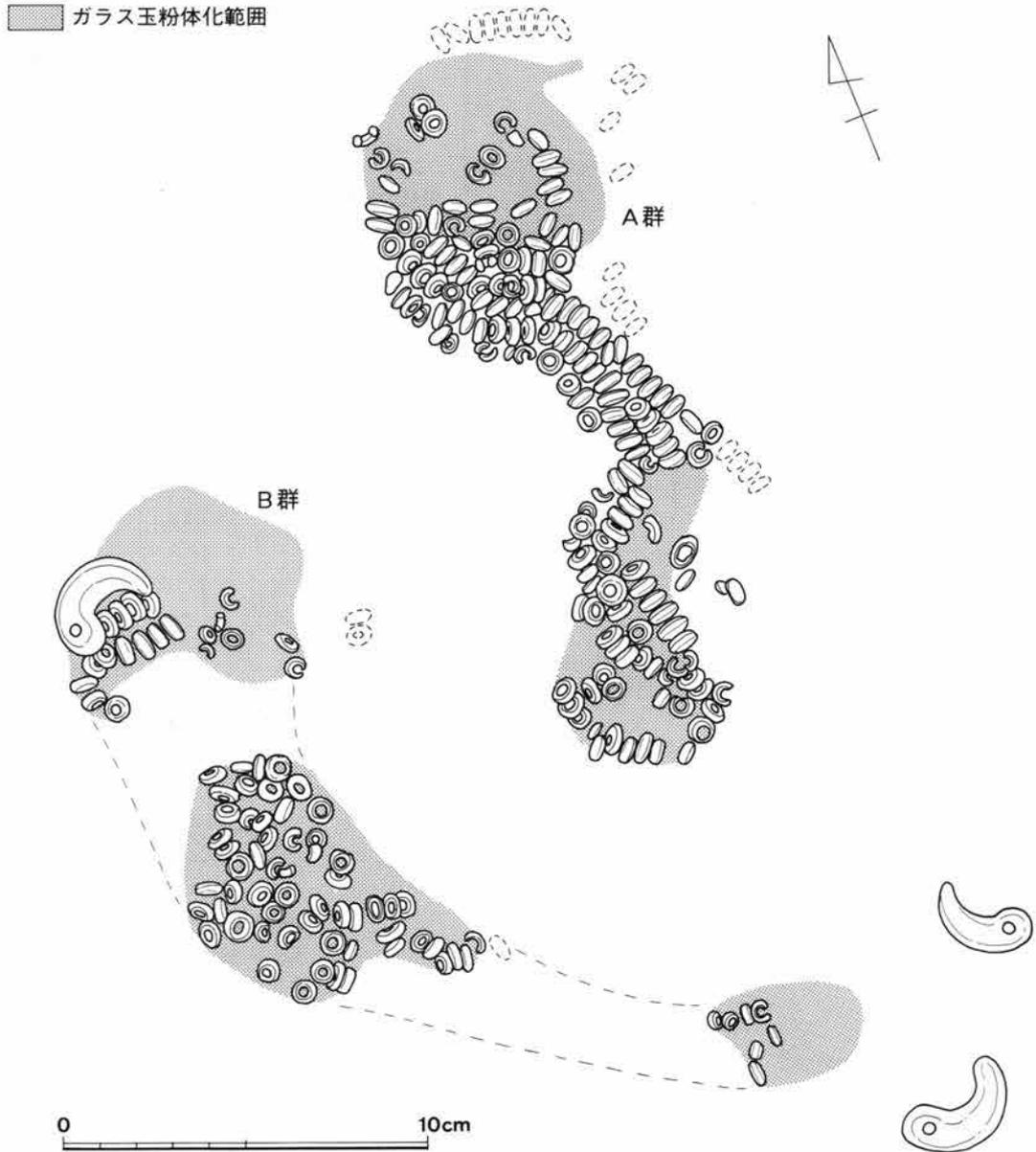
副葬品として、棺内の頭部付近に多量のガラス製玉類(第8図)と鉄製鉈(第16図7)1点・環状鉄製品(第16図8)1点が認められる。ガラス製玉類は風化が著しく、少しの加圧で粉状に崩れ、



第7図 第1主体部実測図

原形を保っては取り上げられない状況であった。玉類としては勾玉5点(第17図1～5)、小玉は280数点を確認した。小玉は粉体化して計数不能分も多数あり、総数はおよそ400点前後と推測する。

小玉の出土地点は朱の散布範囲の東端に近く、近接しながらもおよそA・Bの2群(第8図)に分かれる。勾玉3点はこのB群に混じって出土した。特に小玉群のうち、東側のA群はおよそ200点の小玉で構成され、3～4条の整然と並ぶ小玉列が良好に確認できる。この小玉列は北側

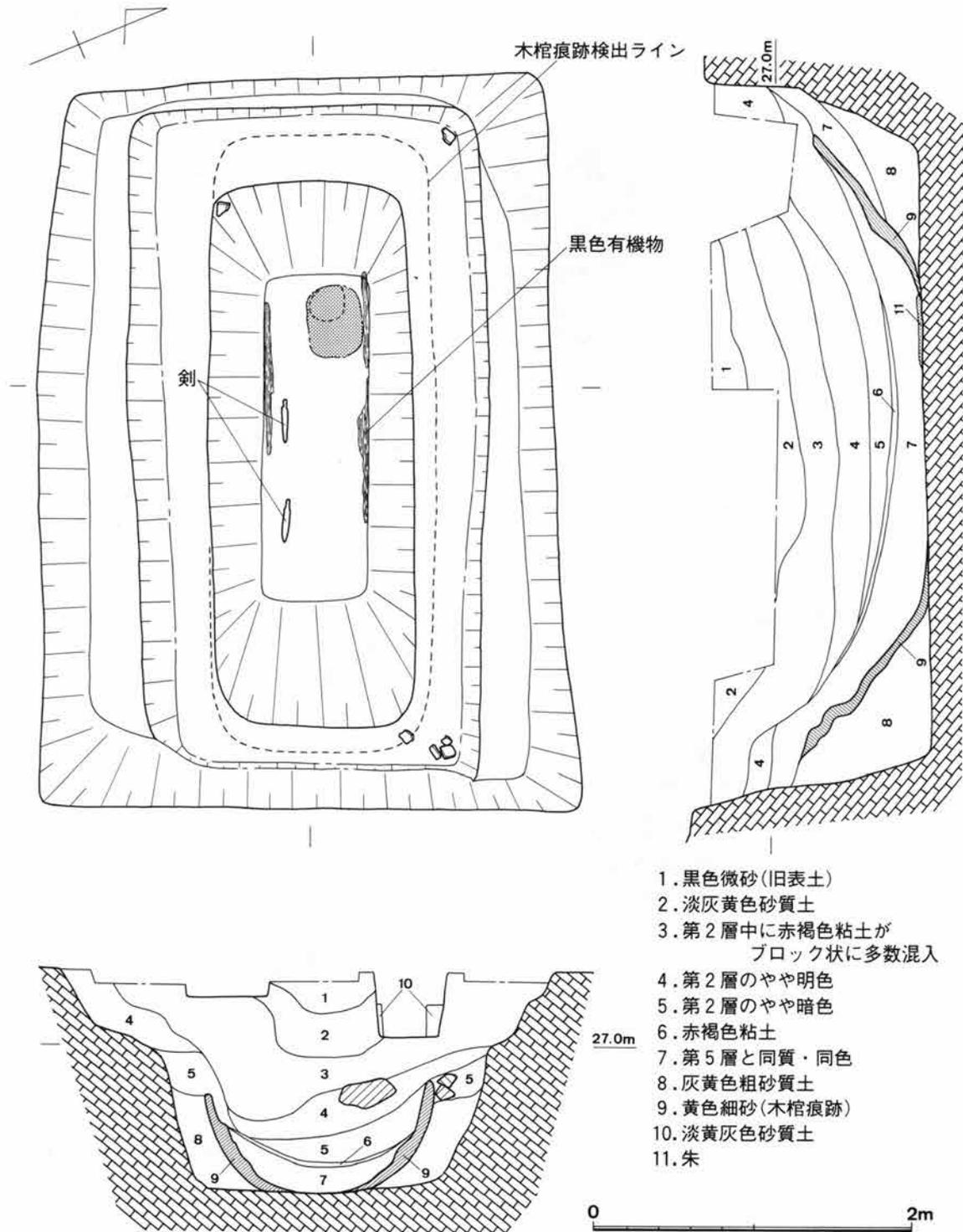


第8図 第1主体部棺内玉類出土状況図

部分で渦巻き状を呈する。B群は勾玉3点と小玉約150点で構成されたと判断する。B群は玉の並びが3か所で寸断されているが、その並びはA群と同一方向に流れている。この小玉列の寸断は木棺の覆土が崩落したためと判断される。

小玉の周辺、および直上から薄い暗茶褐色微粒子の付着がみられた。この微粒子は木質の存在を示すものと思われる。3点の勾玉を含む小玉群は、2群に束ねられた状態で木箱等に入れ、被葬者頭部の上方に納められていた可能性が高い。勾玉のうち2点(第17図1・2)は、小玉群から30cm程度西に離れて出土したことから、被葬者の胸元付近に当たると判断する。鉈と鉄環は被葬者の頭部右横付近から出土している。

棺外遺物と判断するものに鉄剣2点と甕の破片がある。鉄剣2点(第16図1・2)は木棺北側側



第9図 第2主体部実測図

面の木棺痕跡(淡黄色系砂)中から出土した。2点の鉄剣は、棺内底面から約10cm上部に位置している。このような出土状況から、鉄剣は木棺腐朽に伴って、棺外の棺側に置かれたものが、木棺腐朽に伴って落ち込んだ可能性が高い。鉄剣の原位置は棺身上端付近であったと判断される。鉄剣はそれぞれ鋒を西に向け、約20cmの間隔を開けて出土した。西側の鉄剣は木棺に並行であるが、東側の鉄剣は鋒を若干棺外方向に振っている。なお2点の鉄剣の出土レベル高はほぼ同一である。

棺内の崩落土および墓壙上段の底面から、弥生時代後期末の甕(第15図8)の破片が出土した。出土した甕破片は同一個体であり、いわゆる破碎土器供献とみなされるものである。また、旧表土(黒色粘質土)中から高杯脚部の破片が出土し、墓上においても土器の供献が行われている。

第2主体部(第9図) 第1主体部の南西側に位置し、約0.5mの間隔をおいて第1主体部と並行する。墓壙掘形は第1主体部に次ぐ規模を有する。墓壙は長方形で、二段墓壙である。上段墓壙は、全長約4.6m・幅約3.1m・深さ約0.4mの規模を測る。上段墓壙の底の中央部に木棺を埋納するための掘形がある。この木棺掘形は、全長約4.2m・幅約2.3m・深さ約0.9mの規模を測る。木棺掘形を若干掘り下げた段階で、木棺痕跡を確認できた。木棺の木質が淡黄色細砂に置き換わり、その形状から舟形木棺が使用されていることが判明した。木棺規模は全長約3.9m・幅約1.4m・高さ約0.7mを測る。木棺の痕跡にみる主軸は、北から西に約68°振っている。上段墓壙の埋土中には、20~40cm大の花崗岩が多量に含まれていた。この花崗岩は、墓壙掘削で排出された岩が、埋め戻しによって混入したものである。なお、墓壙の東側には、地山の風化花崗岩中に岩脈が存在している。

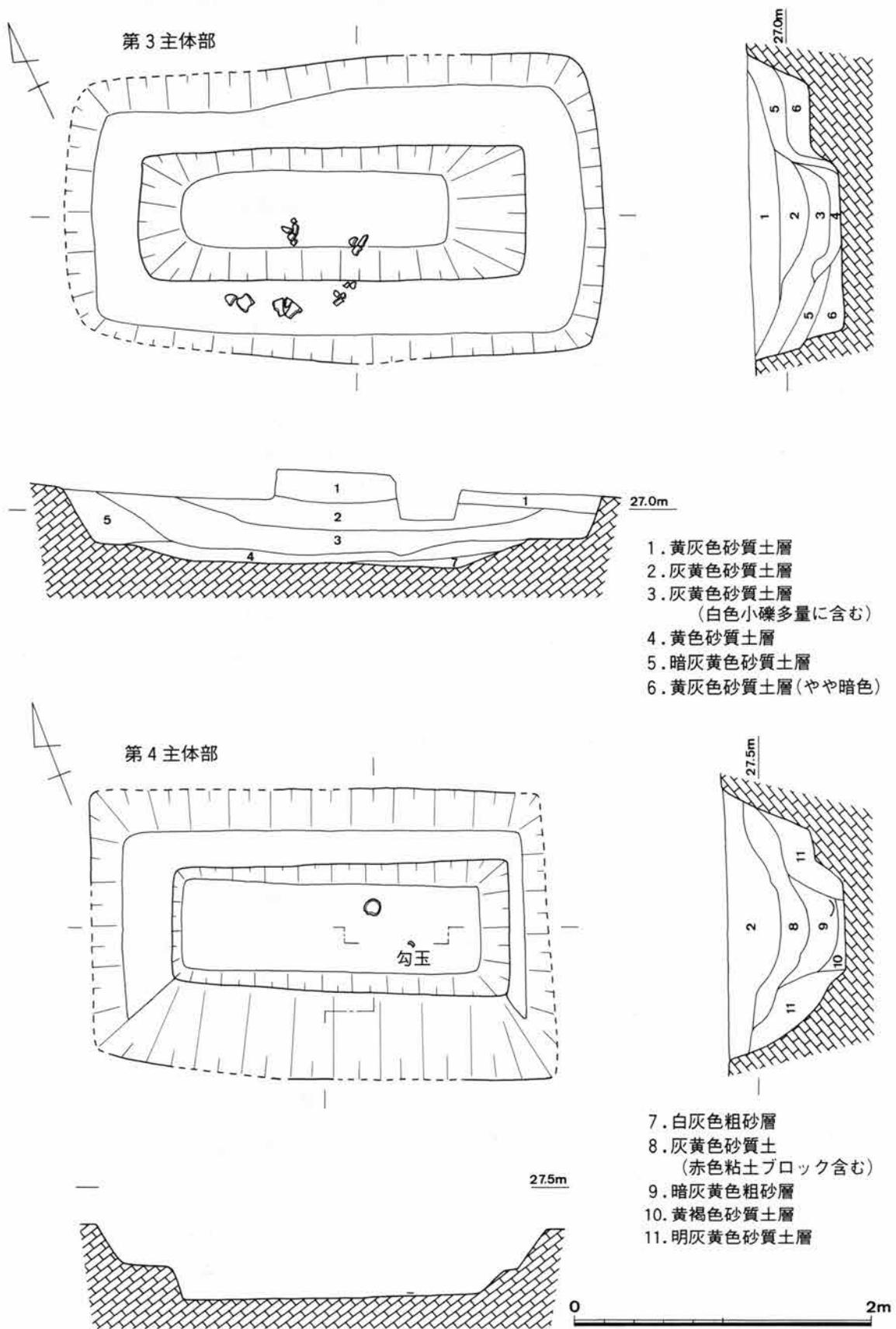
木棺痕跡の淡黄色細砂を残し、棺内に落ち込んだ埋土を除去していく過程で、棺底部の両側部から薄い黒色有機物層を部分的に確認した。この有機物層は、検出状況から腐朽した木棺の木質と思われる。棺底部の北西端で部分的な朱の散布を確認した。朱の散布は木棺中軸線から北にやや外れ、長さ約50cm・幅約37cmの範囲に認められた。特に、鮮やかな朱は中心部からやや西側にあり、直径約20cmの範囲に集中している。

出土遺物には、棺内中央付近の南側の棺側に沿って、鉄剣2点(第16図3・4)が直列の状態で見出された。鉄剣は2本とも鋒を東側に向け、両者の間隔は約35cmを測る。鉄剣は墓壙底直上で検出されたことから、原位置を保っているものと思われる。棺内の朱および鉄剣の出土状況から、被葬者の頭位は第1主体部とは逆の西側であったと判断する。

第3主体部(第10図上段) 第1主体部の東側に位置し、その間隔は約0.7mを測る。墓壙は、長方形の二段墓壙である。上段墓壙の規模は全長約3.6m・幅約2.0m・深さ約0.4mを測る。墓壙底中央の木棺掘形は、全長約2.6m・幅約0.85m・深さ約0.2mを測る。また、この掘形の横断面は半円形に近い曲線を描き、縦断面にみる両小口も斜め上方に立ち上がることから、舟形木棺が使用されたと判断する。木棺埋納壙にみる主軸方位は北から西に約67°振っている。

棺内には副葬遺物が認められないが、棺上および棺側部から甕(第15図6)が出土している。これらの土器は破碎土器供献に伴うものである。墓壙底は西側小口が若干高い位置にあり、被葬者の頭位は西側であったと推測する。

第4主体部(第10図下段) 第1主体部の北東側(尾根筋上部側)に2基の埋葬主体部が存在するが、東側の主体部が第4主体部である。墓壙は、長方形のいわゆる二段墓壙であるが、上段の墓壙底の平坦面は三方にめぐる。墓壙南側は、検出面から墓壙底まで曲線を描いて掘り下げている。上段墓壙の規模は、全長約3.2m・幅約2.0m、深さは検出面から0.6mを測る。木棺は掘形より一回り小さく、裏込めを行っている。木棺の形態は掘形の形状及び埋土の断面観察から、組合式



第10図 第3・4主体部実測図

箱形木棺が使用されたと判断する。木棺規模は全長約2.0m・幅約0.5mの規模を測る。木棺掘形にみる主軸は、東から南に約21°振っている。

副葬遺物として、木棺内の中央から東に偏ってガラス製勾玉1点が出土した。勾玉を東側の棺小口下端から、西に約45cmの地点で検出したことから、被葬者の頭位は東向きであったと判断する。また、勾玉は頭部を欠き、被葬者の胸元付近に置かれていたと思われる。

その他の遺物としては、甕の体部破片が勾玉から北側にやや離れて出土した。その出土状況から、破碎供献土器であり、当初は棺上にあったと判断される。

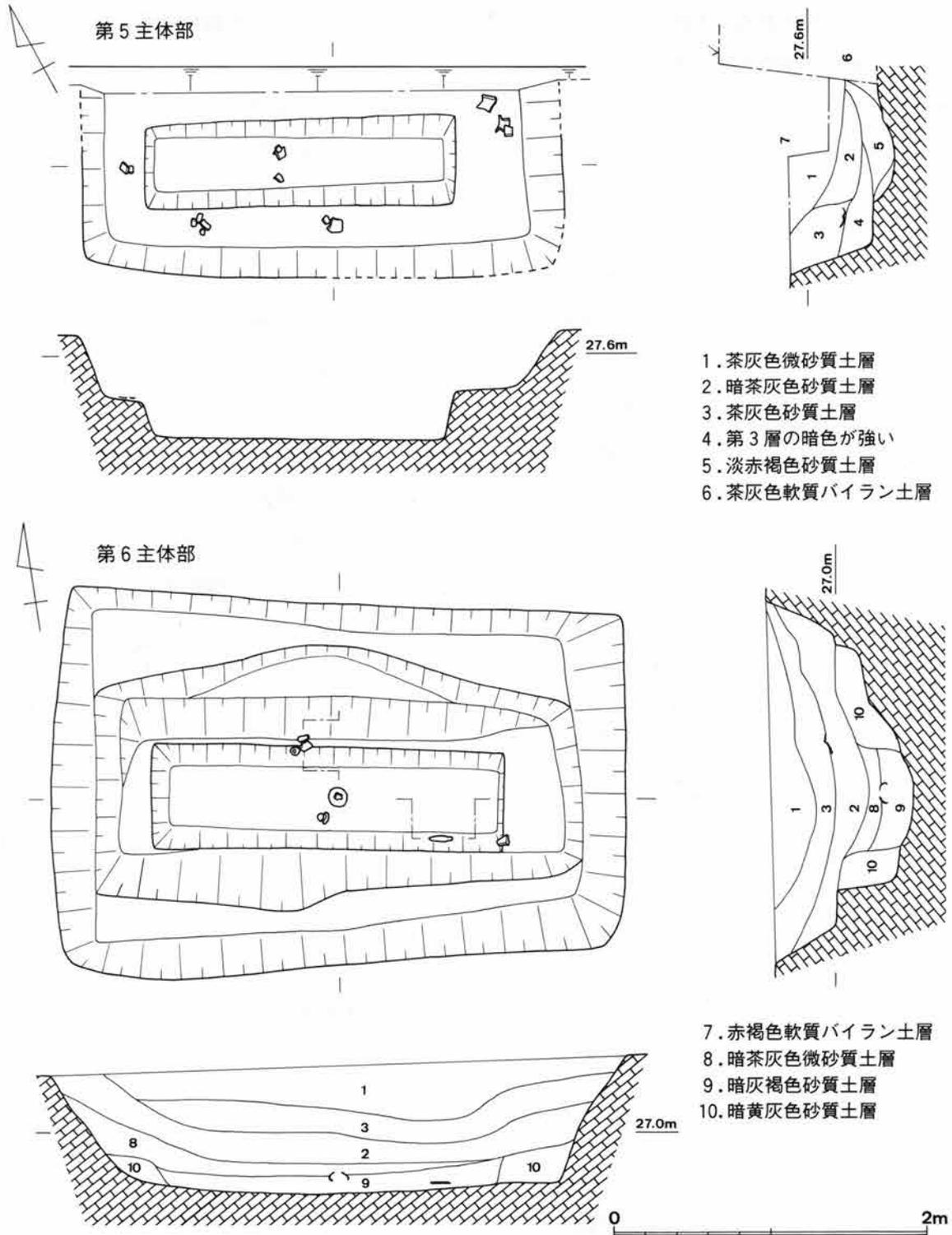
第5主体部(第11図上段) 第4主体部の西に位置し、約0.6mの間隔を開ける。中心主体部との位置関係でみると、第5主体部は第4主体部に対し、若干距離をおいている。調査対象地の限界まで調査を実施したが、主体部の一部は調査範囲外に延びている。墓壙掘形は二段墓壙であり、平面形は長方形を呈する。上段墓壙の掘形は全長約3.0m・深さ約0.4mを測る。墓壙幅は約1.2m分を検出したが、全体の幅は約2m程度と推測される。上段墓壙底の中央に、浅い木棺掘形(深さ約0.35m)が穿たれる。木棺掘形の横断面は、円弧を描き、縦断面にみる両小口の立ち上がりが急であることから、割竹形木棺が使用されていたと考えられる。木棺埋納壙は全長約2m×幅約0.6mの規模を測る。被葬者の頭位は、木棺掘形の西小口側が若干高くなることから、西向きであったと判断している。木棺掘形にみる主軸方位は、北から西に約63°振る。

木棺内に副葬遺物は認められないが、埋土中から甕破片が多数出土した。甕破片は広範囲に散った状況にあり、出土位置から棺身の上端外部および棺上に散布されたものと判断する。このような状況から、破碎土器供献であったと思われる。

第6主体部(第11図下段) 中心主体部の真北に位置し、約2.3m離れている。主体部は長方形の二段墓壙である。なお、長側部は、それぞれ地山を二段に掘り下げるが、両小口部分に関しては途中で角度を変えながらも上端から底面まで単純に掘削を行っている。上段墓壙は全長約3.7mを測る。幅に関しては東西で異なり、東端部で約2.1m、西端部は約2.5mと幅を広げている。上段墓壙の深さは約0.4mを測る。下段墓壙の底の中央部に木棺掘形を穿っている。木棺掘形は側面の中央付近が大きく膨らむが、木棺の規模・形状を示すものではない。埋土の断面観察によると、木棺は掘形より一回り小さいことが判明しており、周囲には裏込めを行っている。土層断面観察および木棺掘形の底面の形状から、割竹形木棺が使用されたと判断する。木棺痕跡にみる主軸方位は、北から西に約82°振っている。

副葬遺物としては、棺内の東部南側に沿って、短剣1点が出土した。鉄剣の鋒が西側を向き、木棺掘形の底面は東側が高いことから、被葬者の頭位は東側であると判断する。棺外では、墓壙の中央部付近の埋土内から小型の台付壺と蓋が出土した。台付壺は大きく3分割された状態で出土し、位置は上下に約30cm離れていた。この状況は、破碎土器供献を示すものであり、木棺を埋め戻す時点で最低2回の破片散布行為があったと判断する。

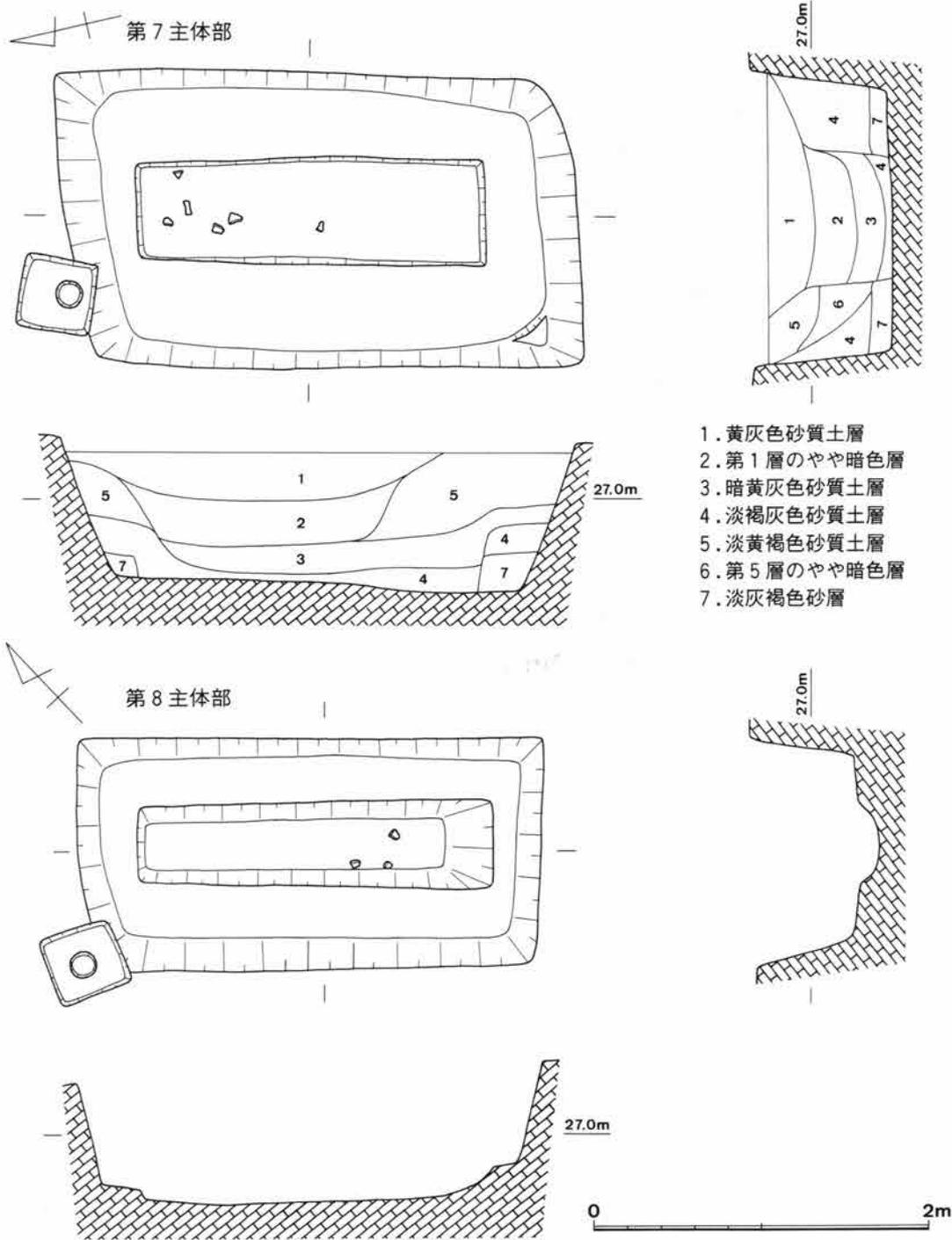
第7主体部(第12図上段) 中心主体部の西北側、第6主体部からは南西側に位置する。この埋葬主体部は唯一南北方向に主軸を向ける。ちなみに木棺痕跡では、主軸は北から東に約14°振っ



第11図 第5・6主体部実測図

ている。墓壙は長方形で、無段の単純な形態である。墓壙の規模は、全長約3.1m・幅約1.8m・深さ約0.9mを測る。墓壙底はほぼ平坦に仕上げられているが、中央付近から南側は、北側に対して若干下がる傾斜をもつ。埋土の土層観察によって、使用された木棺は箱形木棺と考えられる。木棺規模は全長約2.1m・幅約0.65mを測る。墓壙底の高低差から、被葬者の頭位は北側と判断する。

木棺内に副葬遺物はみられないが、棺外遺物として高杯・甕の破片が出土した。これらの土器



第12図 第7・8主体部実測図

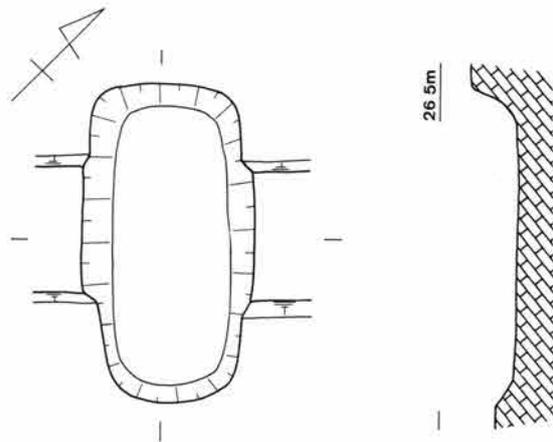
は墓壙底から、若干遊離して出土したことから、棺上で破碎土器供献行為が行われたと判断する。

第8主体部(第12図下段) 中心主体部の西側、第7主体部の南に位置する。墓壙掘形は方形で、二段墓壙である。上段墓壙は、全長約2.8m・幅約1.4m・深さ約0.65mを測る。墓壙底の中央には、木棺掘形が穿たれる。木棺掘形は、横断面において円弧を描き、小口部分の縦断面は緩やかに立ち上がる。この木棺掘形の形状から、舟形木棺が使用されたと判断する。木棺掘形は全長約2.15m・幅約0.55m・深さ約0.2mを測る。掘形の底面は、西に対して東側が高いことから、被

葬者の頭位は東側と判断する。木棺掘形にみる主軸方位は北から西に約48°振っている。

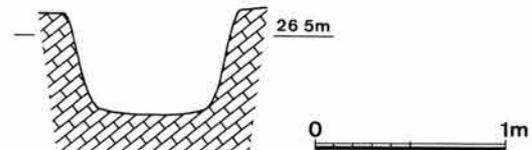
木棺内に副葬遺物は認められないが、破碎土器供献として甕破片が数点埋土内から出土した。

第9主体部(第13図) 中心主体部と第5主体部の中間に位置する土壙墓である。墓壙は、隅丸長方形で、全長約1.7m・幅約0.9m・深さ約0.4mの規模を測る。墓壙の主軸は、北から西に約44°振る。平坦な墓壙底は北側に比べ南側が高い。墓壙底の高低差から、被葬者の頭位は南側と判断する。墓壙内からの遺物出土はみられない。



②その他の遺構

城跡・墳墓に直接関連しない遺構として、土葬墓1基を検出した。



土葬墓(第14図) 平坦地の中央やや東部、弥生

第13図 第9主体部実測図

墳墓の中心埋葬主体部の東側で検出した。墓壙は方形を呈し、一辺1.0~1.2m・深さ約0.6mの規模を測る。墓の埋土中には拳大から人頭大の岩石が多量に含まれていた。岩石の出土状況から墓には棺が存在した可能性が高く、墓上を覆っていた外表施設の集石が、棺の腐朽に伴い墓壙内に落ち込んだものと判断する。平坦な墓の底面付近から土葬人骨(大腿骨・頭蓋骨)の破片が少量出土した。副葬遺物は存在しない。近世頃のものと考えられる。

③出土遺物

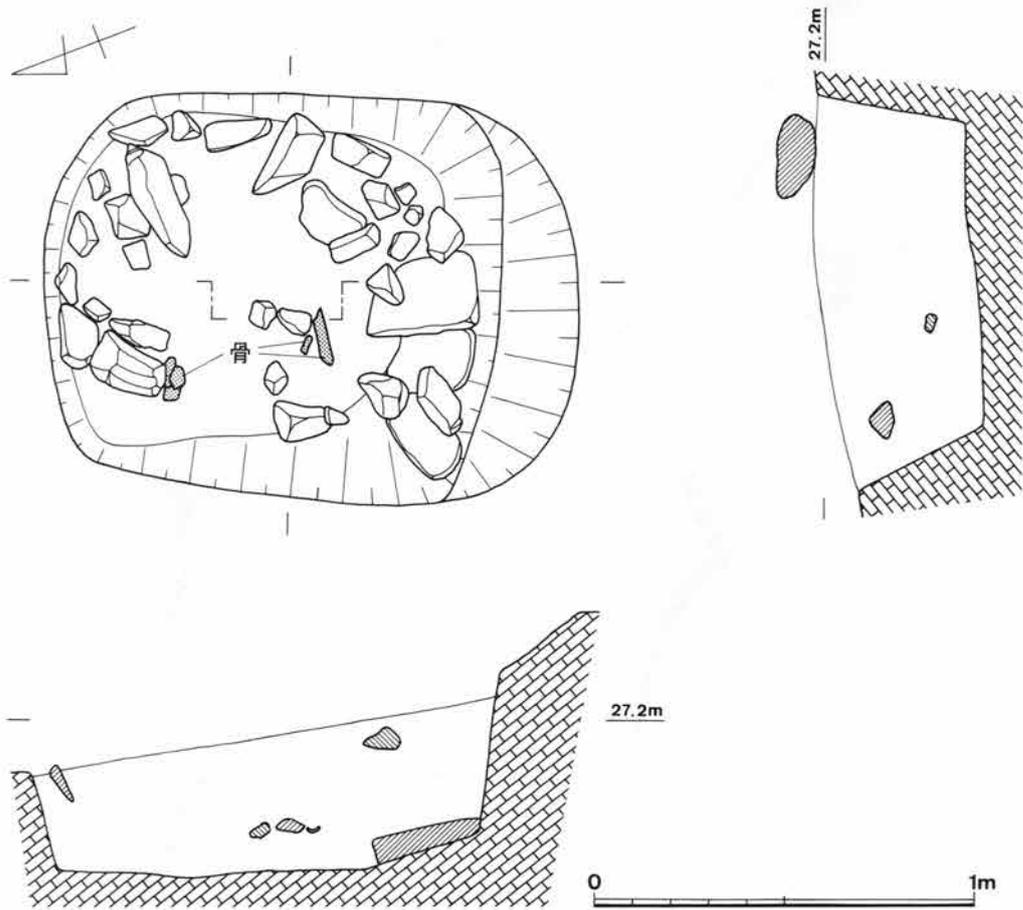
墳墓出土の遺物として、埋葬主体部内から鉄器・玉類・土器が出土している。遺構以外では、埋葬主体部検出作業時点で鉄製鍬(第16図6)1点が出土した。この鍬は出土地点が特定できないが、第2・第8主体部近辺の遺構検出面(地山)上付近から出土したものである。

土器(第15図) 図化した土器は全て埋葬主体部に伴う破碎土器供献の遺物である。

1・2は第6主体部埋土内から出土した蓋と脚台付壺である。共に精製品であり、胎土も緻密である。焼成はやや軟質焼成であり、外面は橙褐色を呈する。

蓋1は、山笠様の蓋頂部に小さな円柱状のつまみが付く。内外面とも丁寧なミガキを全面に施す。口縁部やや内側に2か所、直径3mmの孔が認められる。孔は対角線上にあり、焼成前の穿孔である。口径7.2cm・器高2.1cm・つまみの直径1.2cmを測る。

2は脚台をもつ壺である。口縁部は二重口縁であり、扁球形の体部をもつ。体部の最大径は、体部下端から1/3付近にある。口縁部は、頸部から、一旦水平に外方へ張り出した後、屈曲して外上方に立ち上がる。口縁部外面には4条の擬凹線文を施す。細身の脚柱部は、脚端部が大きく二段にわたって二重口縁状に張り出す。脚端外面にも4条の擬凹線文を施し、外面中央の屈曲部にはヘラ状工具による刻目を巡らす。口縁部の受け面には2か所に穿孔をもつ。穿孔位置は蓋1



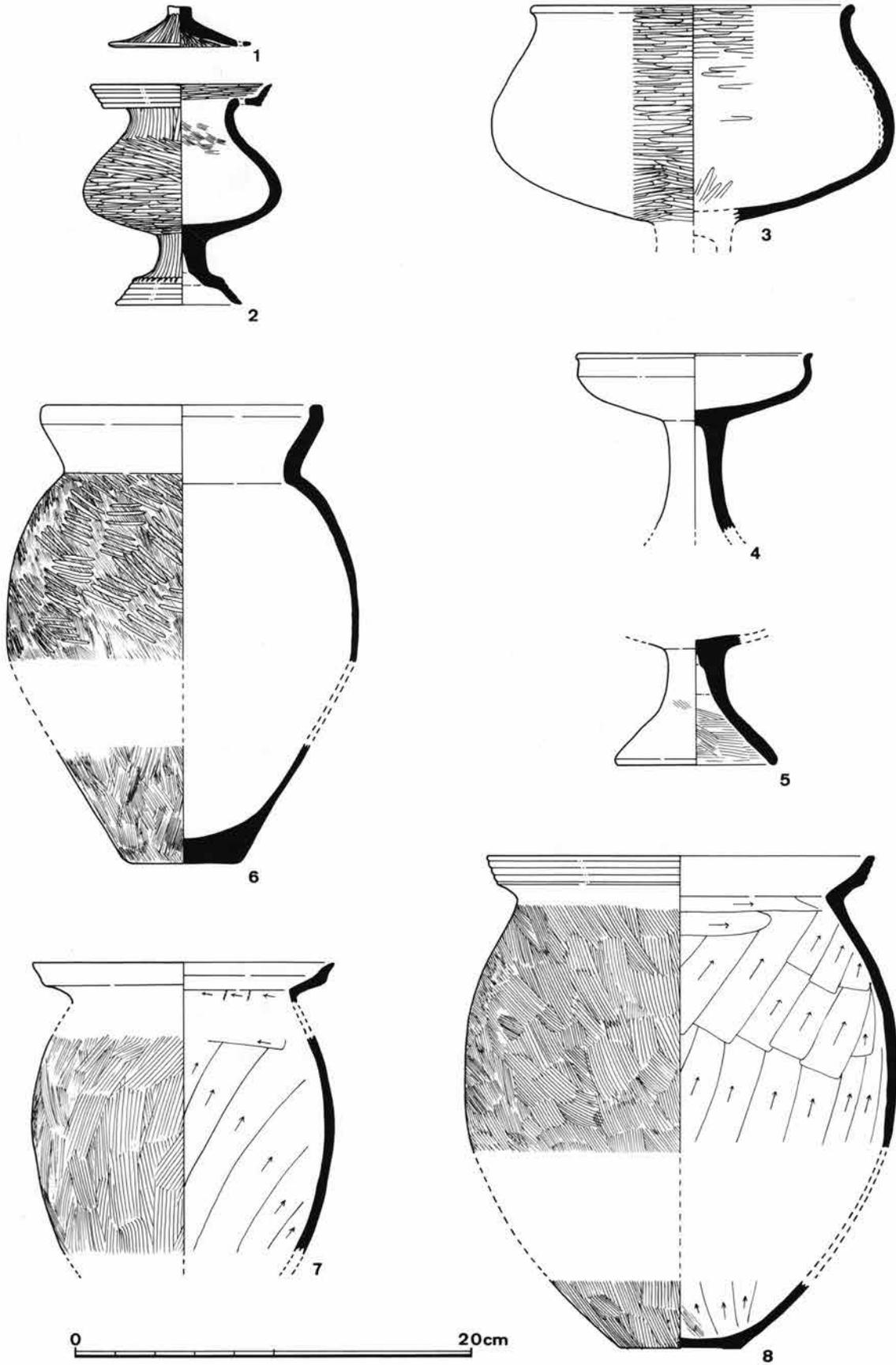
第14図 近世墓S X 1 実測図

の穿孔に対応する。擬凹線を施す口縁と脚端部を除き、外面は全体に丁寧なヘラミガキを施す。ヘラミガキは口縁部の内側にも丁寧に施す。体部内面は、肩部付近にハケメ調整を行う。口径7.1cm・器高11.2cm・体部最大径10cmを測る。

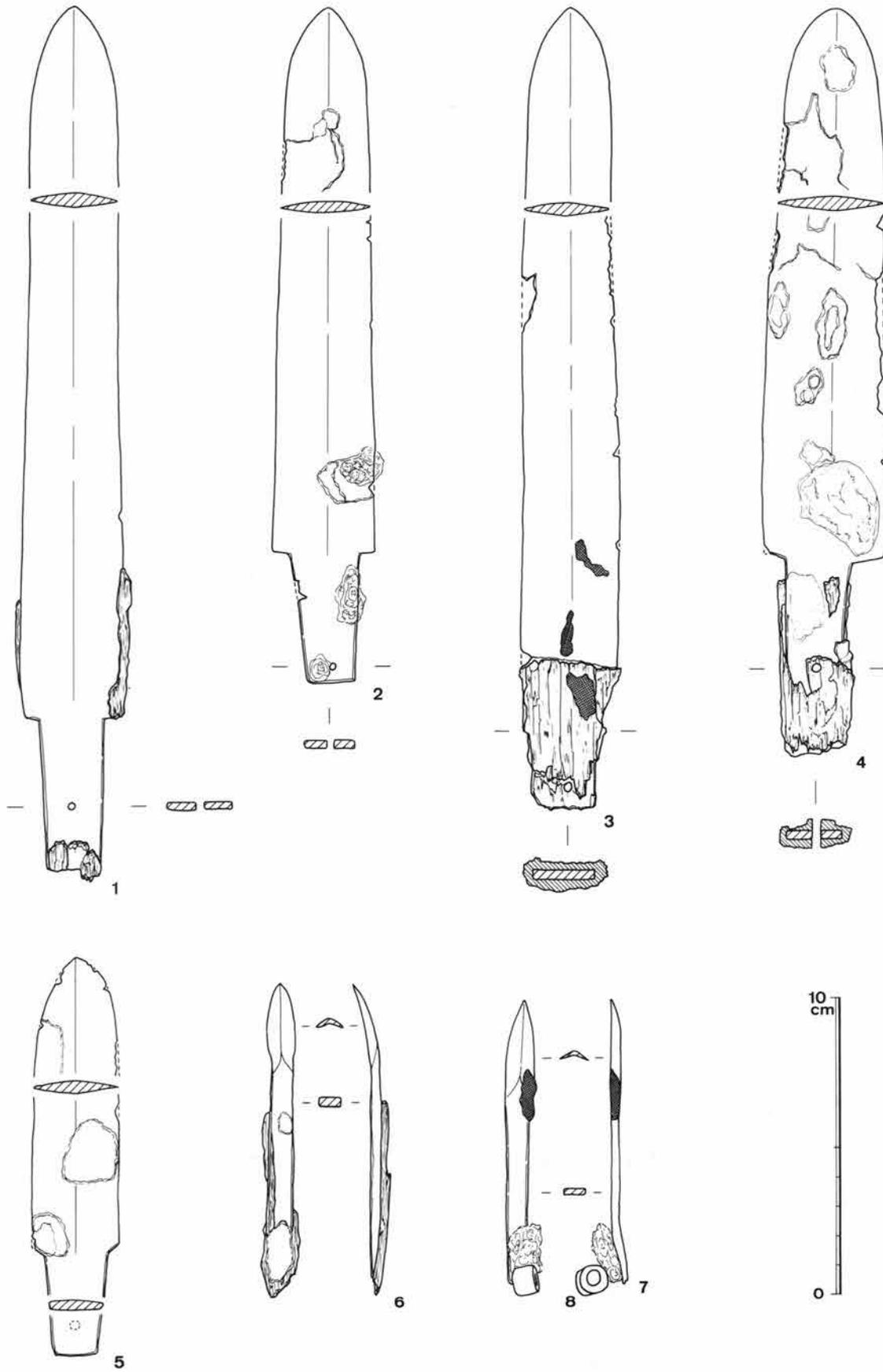
3は、第2主体部出土の脚付き鉢である。体部は扁球形で下端から約1/3付近に最大幅を認める。口縁部は僅かに外反して端部は丸く収める。体部の内外面は丁寧なヘラミガキを施す。脚部は失われているが、丹後地域に類例の多い長脚の付くものである。口径16.3cm・体部高10.9cmを測る。色調は淡い黄褐色である。体部内面は器表面が特に荒れており、多数の剥離痕跡によって凹凸が認められる。

4・5は高杯である。4は第7主体部、5は第8主体部に伴うものである。4の杯部は口縁部がやや内湾したのち、端部を小さく外反させて丸く収める。ラッパ状に開く脚の端部は失われている。口径11.9cm・残存高8.8cmを測る。色調は淡い褐色を呈する。5は脚部である。高さは5.9cmと低脚である。脚は中程で屈曲し、脚端部が大きく開く。内外面はハケメ調整する。

6は第5主体部出土の甕である。砲弾形の体部の最大幅は上部2/3付近にある。くの字に外反する口縁の端部は屈曲して上方に短く立ち上がる。口縁端部は面をもつ。体部外面はタタキの後、ハケメ調整する。口径14.1cm・底面径15.8cm、推定器高は約23cmと判断する。7・8は二重口縁



第15図 浅後谷南墳墓埋葬主体部出土土器実測図



第16図 浅後谷南墳墓出土鉄器実測図

の甕である。7は第3主体部、8は第1主体部出土である。7の体部の張りは弱く、口径と体部最大径はほぼ同一である。口縁部は外上方に鋭く屈曲して外反した後、アクセントをつけて口縁端部をさらに外上方につまみあげる。口縁端部は尖り気味に収める。体部外面はハケメ調整、内面は頸部上端までヘラケズリする。口径は15.2cmを測る。残存器高は約4.7cmを測る。8は口径19.6cm、器高は約25cmを測る。二重口縁の外面には4条の擬凹線文を施す。

(竹原一彦)

鉄製品(第16図) 出土した鉄製品は、剣4点(1～5)、鉞2点(6・7)、環状鉄製品(8)の形8点を数える。鉄剣は、長いもの(1～4)と短いもの(5)の2者があるが、総じて茎部の短い弥生時代終末期通有の型式である。また、鎬はしっかりと作り出し、関部も直線的である。また、茎尻は全て一文字であり、目釘孔は茎尻に近い部分(2・3・5)と茎の中央付近(1・4)に開けるものの2者がある。茎に残る木質から、3は合口の木製の拵が取り付け、上から平織りの布で巻かれていたことが分かる。なお、鞘の痕跡が認められるものは、1のみであり、それ以外は抜き身に布巻きされていた可能性がある。鉞は、2点出土しているが、同型式で、しっかりとした鎬を持ち、裏すきの明瞭なものである。6は柄に台の部分、7は鉞全体を包む布の痕跡が観察される。環状鉄製品は、鉞に付着したものである。この型式の鉄製品は、兵庫県豊岡市鎌田・若宮墳墓群や峰山町金谷墳墓群などの、弥生時代後期末から古墳時代前期初頭にかけて検出されたものであり、金谷墳墓群では一種の装身具に比定されている。

玉類(第17図) 玉類は、ガラス製の勾玉ならびに小玉があるが、風化のために取り上げができないものもあるため、ここでは12点を図示するにとどめる。1～6の勾玉は、頭部と比較すると尾部が小さく、背面の湾曲も大きい。また、6はやや扁平であるが、いずれも丸みを持った作りである。7～12は、白玉状の扁平な小玉であり、管切法によって作られたらしく、径は比較的一定しているが、幅にはやや差異が生じている。これらのガラス製玉類は、白く風化していることから、鉛ガラスであったと思われる。なお、少量ではあるが、緑色の色合いを留めるものがある。

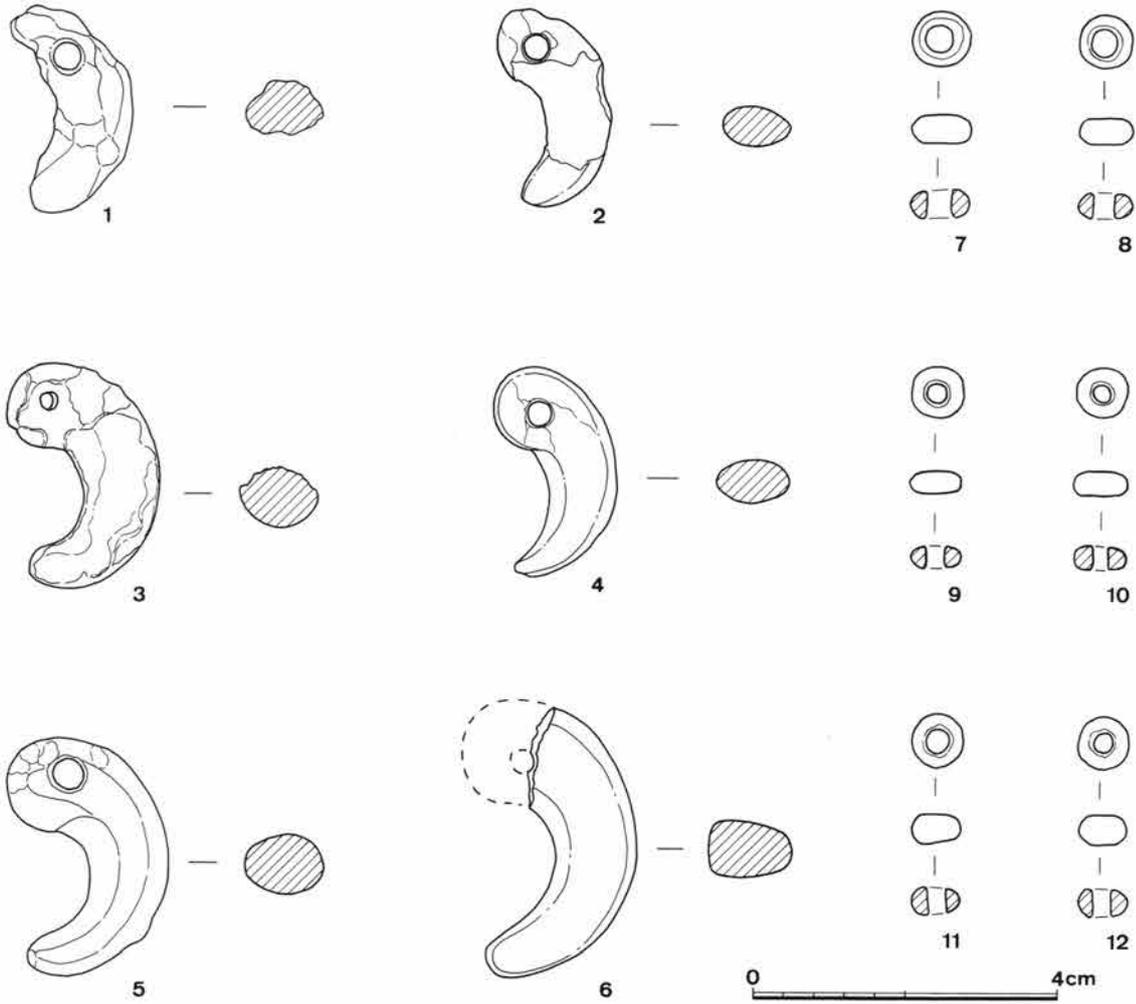
(河野一隆)

3. ま と め

浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓の調査は、当初目的とした城跡施設を検出すると共に、新たに弥生時代の墳墓の存在を確認し、多くの成果を得ることができた。

城跡関連施設としては柵列・建物跡を検出し、遺構の状況・立地等から物見櫓と判断される。建物等に伴う遺物がほとんどなく時期の確定はできないが、中世山城の一施設と判断される。周辺の山城としては、調査地の北約200mに浅後谷北城跡(城主不明)、同方向約700mには勝山城跡(城主：伝高屋治部左衛門)、南約500mには公庄城跡(城主：伝森忠左衛門)等の山城跡が丘陵上に点在する。今回検出した城跡施設も、これら中世山城と密接な関係にあったとみられる。

浅後谷南墳墓は、同年度に範囲確認を主眼に調査を実施した浅後谷南遺跡(調査地の南約100～200m)と、特に密接な関係であったと判断する。両遺跡の位置関係、同時期の遺構・遺物の存



第17図 浅後谷南墳墓埋葬主体部出土玉類実測図

在・内容等から、浅後谷南遺跡は集落であり、集落内の指導者層の墓が丘陵部に葬られたと判断する。今回検出した第1主体部は、同時期の丹後地域の墳墓の中でも墓壙規模において特に傑出している。副葬品・多量の朱の散布等の内容から、第1主体部の被葬者は眼下の福田川流域を統括した指導者層の有力な一人とみてよからう。

墳墓の時期としては、出土土器に明らかな時期差が認められず、弥生時代末期に位置付けられるものである。第1主体部に見る棺外側部への鉄器の供献は、古墳主体部の様相に通じるものがある。金谷墳墓群とほぼ同時期の、弥生時代終末期～古墳時代初頭とみてよからう。

なお、調査地点の尾根上部側には、調査地とほぼ同規模の平坦面が階段状に存在し、また、同丘陵の最高所には浅後谷南古墳が存在している。今回の調査成果から、この丘陵部には、弥生時代墳墓・古墳・中世山城などの施設が複合しながら、存在することが判明した。

(竹原一彦)

付表2 浅後谷南墳墓埋葬主体部一覽表

番号	墓 壙		木 棺		出 土 遺 物	備 考
	形態	規模(m)	形態	規模(m)		
1	二段墓壙	長 6.5 幅 4.4 深 1.7	舟形木棺	長 4.0 幅 1.55 深 0.7	棺内：勾玉5 小玉300~400 鈍1 環状鉄製品1 棺外：鉄剣2 甕破片 墓上：高杯破片	棺内底面に朱 玉は全てガラス製 破碎土器供献あり 墓上土器供献あり
2	二段墓壙	長 4.6 幅 3.1 深 1.5	舟形木棺	長 3.9 幅 1.4 深 0.7	棺内：鉄剣2 棺外：甕破片 墓上：	棺内底面に朱（部分） 破碎土器供献あり
3	二段墓壙	長 3.6 幅 2.0 深 0.6	割竹形木棺	長 2.6 幅 0.85 深 0.45	棺内： 棺外：甕破片 墓上：	破碎土器供献あり
4	二段墓壙	長 3.2 幅 1.8 深 0.8	箱形木棺	長 2.0 幅 0.5 深 0.4	棺内：勾玉1 棺外：甕破片 墓上：	玉はガラス製 破碎土器供献あり
5	二段墓壙	長 3.05 幅 (1.25) 深 0.7	割竹形木棺	長 2.0 幅 0.6 深 0.35	棺内： 棺外：甕破片 墓上：	一部調査地外 破碎土器供献あり
6	二段墓壙	長 3.7 幅 2.5 深 0.9	舟形木棺	長 2.3 幅 0.65 深 0.5	棺内：鉄剣1 棺外：壺・蓋・甕破片 墓上：	破碎土器供献あり
7	一段墓壙	長 3.1 幅 1.8 深 0.9	割竹形木棺	長 2.1 幅 0.65 深 0.45	棺内： 棺外：高杯破片 墓上：	破碎土器供献あり
8	一段墓壙	長 2.8 幅 1.4 深 0.8	割竹形木棺	長 2.0 幅 0.5 深 ?	棺内： 棺外：甕破片 墓上：	破碎土器供献あり
9	一段墓壙	長 1.4 幅 0.8 深 0.5	なし		なし	楕円形土壙墓

(2) 菩提城跡・菩提東古墳

菩提城跡は、京都府竹野郡弥栄町字吉沢小字菩提に所在している。今回の発掘調査は、国営農地吉沢団地の造成に伴って実施した。調査期間は、平成9年10月13日から平成10年1月23日までであり、調査面積は、約450m²である。

この城跡は、竹野川から約500m東側にある、吉沢集落のさらに東側の入り組んだ丘陵上に築かれた中世の城跡である。今回の調査地は、城跡が想定されている丘陵の主尾根から、舌状にのびる尾根先の小高い丘陵の南側半分である。また、この小高い丘陵の南側では、現地地形から判断しても南側の主尾根とは切り離されており、独立した丘陵のように見える。調査地周辺の遺跡として、北側にある丘陵上には茶カス古墳群が存在し、西側には吉沢城跡・家の山古墳群がある。また、調査地の北西側丘陵先端部には、菩提古墳が存在する。調査地の周辺には多くの古墳や山城が点在している(第18図)。

1. 調査の経過

調査地は、主尾根とは切り離された標高約93mの小高い丘陵で、頂部は平坦になっている。今回の調査は、丘陵南側半分以上を対象とした。ここは、『京都府遺跡地図』には中世の城跡と記載された地点である。東側と西側の斜面は、調査地内では一段の平坦地がある。南側は、主尾根と分断されているが、幅約1.2mの陸橋が存在する(第19・20図)。また、現地地形からは、調査区外だが、舌状の丘陵の北側斜面の急な斜面に4段の曲輪状の平坦地が確認できる。

現地作業は、樹木伐採終了後に調査範囲の平坦面と斜面に、幅約1.5mの試掘トレンチを設定し、掘削を開始した。試掘トレンチは、尾根筋に沿って1本、それに直交して2本を設定し、人力による掘削作業を実施した。その結果、頂部平坦面では、現地表面から約5cm掘り下げて、柱穴などの遺構を確認した。このため、調査範囲全体の面的調査を実施することになり、表土掘削を開始した。

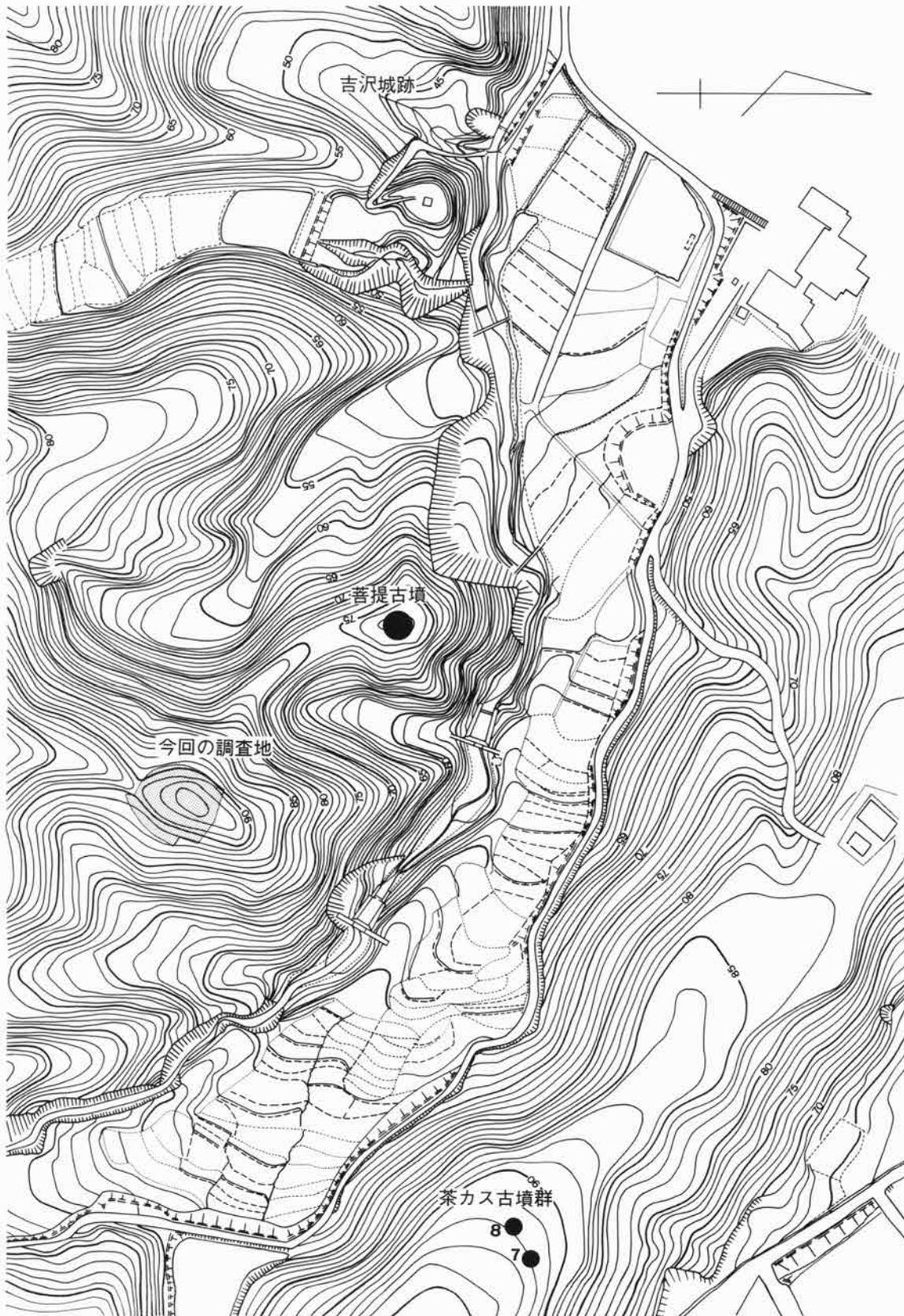
頂部平坦地の西半分では、約3～5cm掘り下げると、地山となる岩盤を検出した。柱穴などはその岩盤面に掘り込まれていた。平坦地の東半分では、約5cmを掘り下げると遺構を検出したが、それらは岩盤面に掘り込まれたものではなく、上層にある淡黄灰色粘質土に掘り込まれていた。

また、西側および東側斜面にある平坦地(テラス部分)では、地山面で古墳時代の遺構を検出した。そして、頂部平坦地(東半分)でも、地山面まで掘削した時点で古墳時代の遺構を確認した。頂部の下層や斜面の平坦地で確認した古墳時代の遺構は、埋葬施設4基と土坑1基などである。その結果、菩提城が築かれたこの丘陵上には、古墳が存在したことが判明した。このため、弥栄町教育委員会と協議して、下層の古墳時代の遺構に「菩提東古墳」の名称を与えた(第21図)。

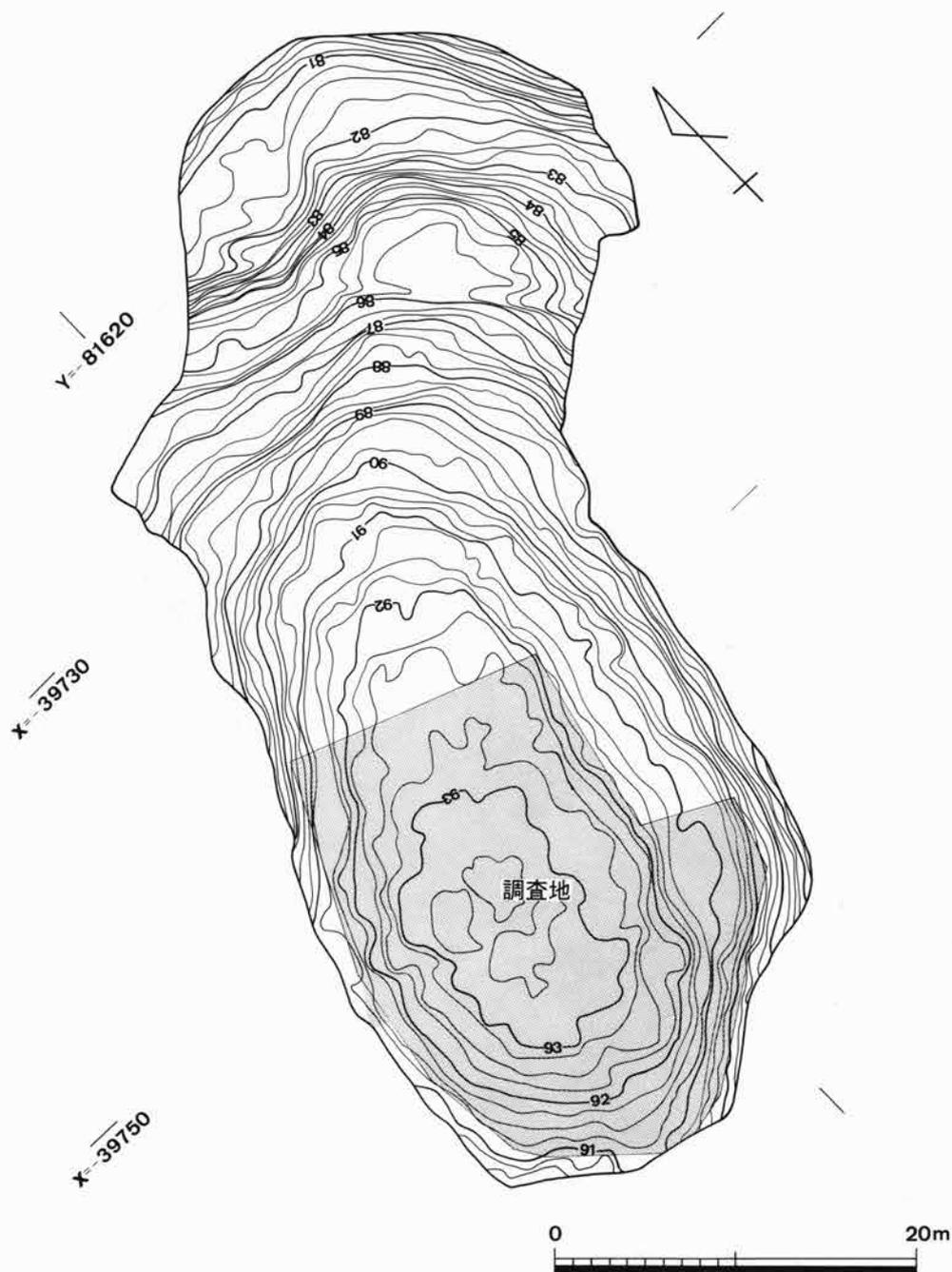


第18図 調査地及び周辺遺跡分布図(1/25,000)

- | | | | |
|---------------|-------------|------------|-------------|
| 1. 菩提城跡・菩提東古墳 | 2. 菩提古墳 | 3. 吉沢城跡 | 4. 新ヶ尾東古墳群 |
| 5. 新ヶ尾古墳群 | 6. 上野古墳群 | 7. スクモ塚古墳群 | 8. 下上野古墳 |
| 9. 茶カス古墳群 | 10. シミズ谷城跡 | 11. 堤城跡 | 12. 立山城跡 |
| 13. 溝谷古墳群 | 14. 太田古墳群 | 15. 丸山古墳 | 16. 奈具岡古墳群 |
| 17. 奈具岡北古墳群 | 18. 奈具岡南古墳群 | 19. 芋野城跡 | 20. 愛宕神社古墳群 |



第19図 遺跡周辺地形図(1/2,000)



第20図 調査前地形図(1/400)

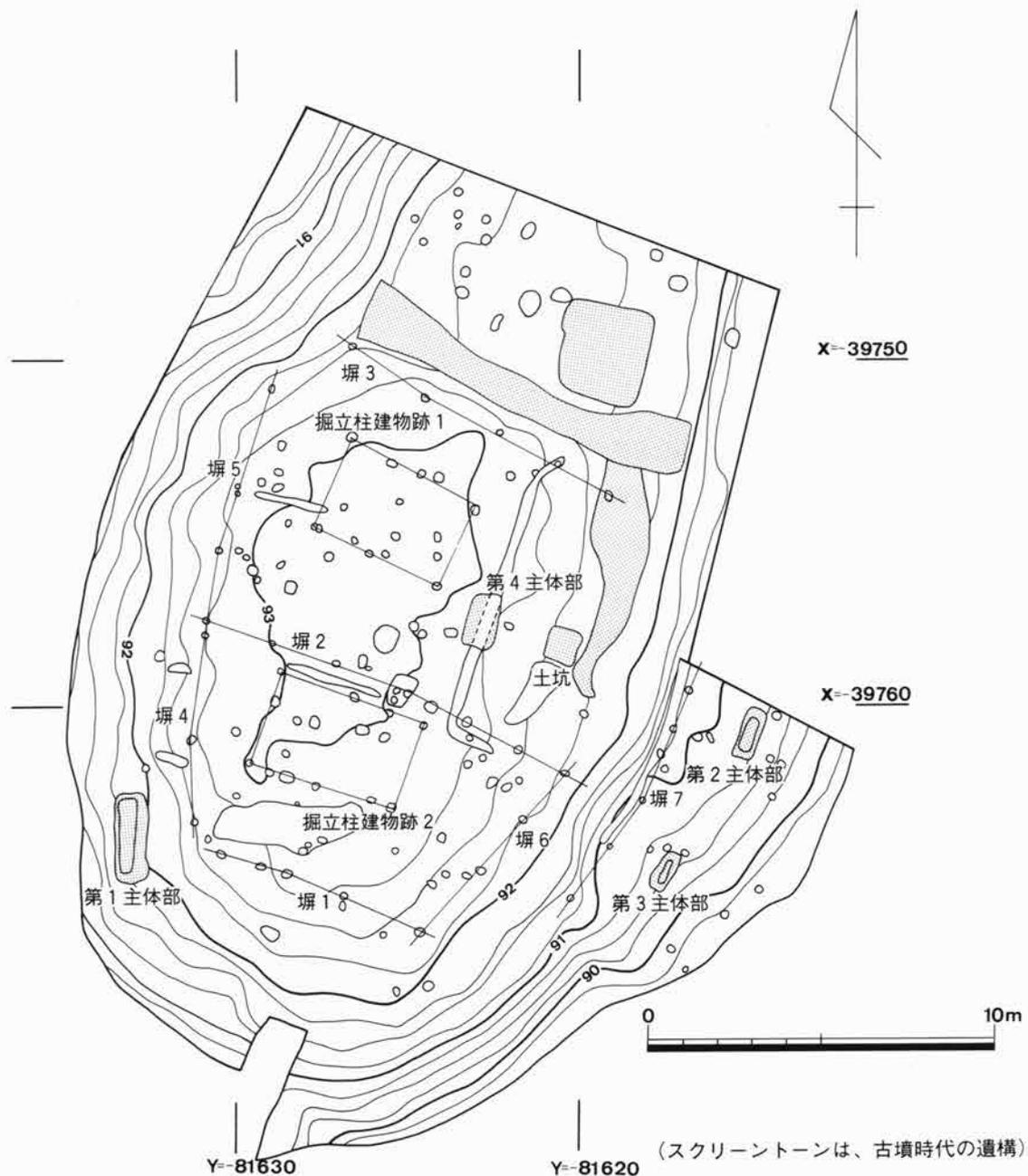
2. 調査の成果

(1) 菩提城跡の遺構(中世の遺構)

頂部平坦地で、径約15~20cmにわたる柱穴を122基検出した。また、東側テラスでも20基の柱穴を検出した。これらの柱穴のいくつかは、掘立柱建物跡や塀を構成するものである。建物跡は、東西棟の掘立柱建物跡が2棟である。塀は、それぞれの建物を区画し、囲むように配置されている。

① 掘立柱建物跡 1

調査区中央にある、長方形基壇状の高まりの北側部分にある。この建物は、尾根の主軸方向に対して、東西方向に建てられている。建物跡の規模は、1間×2間(2.8m×4.2m)を測る。



第21図 調査地遺構図(1/200)

②掘立柱建物跡 2

掘立柱建物跡 1 の南側部分に建てられた建物跡である。尾根の主軸に対して東西方向に建てられている。建物跡の規模は、1 間×2 間(2.7m×4.5m)である。この建物跡の柱列の方角や建物跡の規模などが、掘立柱建物跡 1 とほぼ一致するため、同時期に建てられたものと考えられる。

③堀 1～7

2 棟の掘立柱建物跡は、周囲を数列の堀によって区画されている。頂部平坦地において、堀を 6 列(堀 1～6)、東側のテラスで 1 列(堀 7)を検出した。堀 1～6 は、2 棟の掘立柱建物跡を区画し、周囲を囲むように建てられていたようである。また、堀 7 は、頂部平坦地から東側へ傾斜する斜面の裾部に、隣接して建てられている。その堀 7 と斜面の裾部の間には、幅約 10～15cm の

南北方向にのびる細長い小溝を検出した。

④その他の遺構

不定形な土坑や南北方向に長い「コ」の字状を呈する小溝と東西方向の短い小溝などを検出した。さらに、調査地の南側に幅約1.5mの陸橋らしきものがある。断面を確認すると、上層は両側の丘陵からの流土の堆積であったが、下層については、自然堆積とは考えにくく、人為的に埋められたようである。その堆積の中には、城跡の時期と同一と思われる土師皿などの土器片が数点出土した。このことから、南側の丘陵上に想定されている菩提城本体と今回の調査地の遺構とを結ぶ陸橋であったと推定される。

(2)菩提東古墳の遺構(古墳時代の遺構)

古墳時代の遺構は、頂部平坦地の東側半分の下層、西側斜面、東側テラスなどで検出した。墳丘頂部東側は、城跡の遺構によって削平され、古墳時代の遺構は破壊されている。

墳丘は、削平されていたり改変されているため、正確な規模・墳形については不明である。しかし、北側において尾根に直交する溝を確認していることから、古墳の墳形は方墳であったと考えられる。現状の規模は、南北が約20m・東西16mを測る。墳丘の高さは、東側のテラス面から現在の墳頂部までで約2mを測る。東側のテラスの平坦面は、最大幅で約5mである。また、北側の溝と重なった溝状遺構を北東側でも検出した。

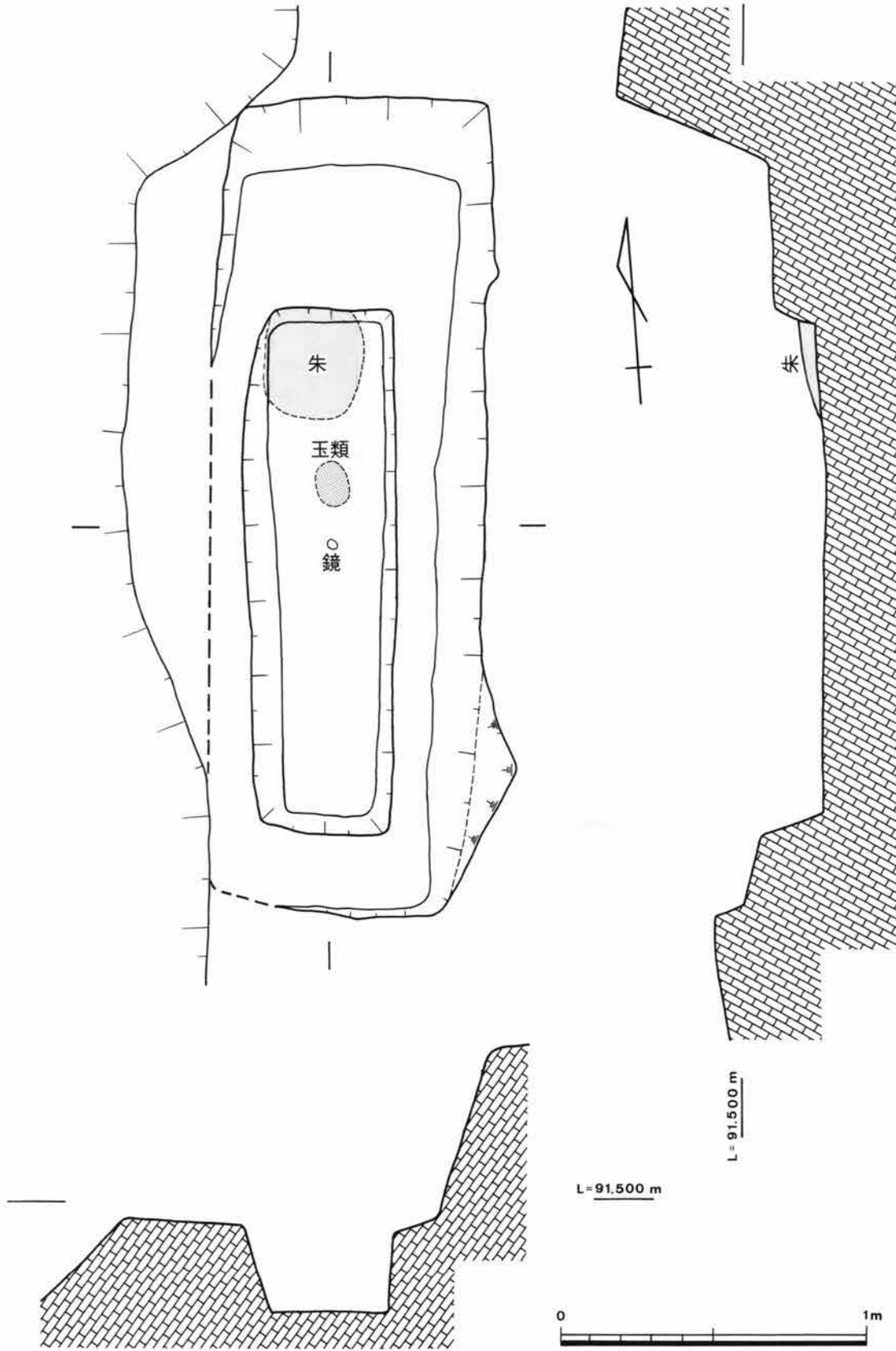
検出した遺構は、埋葬施設4基や土坑などである。埋葬施設は、頂部平坦地で破壊されたものが1基検出され、南西斜面で1基と東側テラスで2基を検出した。検出した順に、南西斜面の埋葬施設を第1主体部、東側テラスの北側にあるものを第2主体部、同テラスの南側を第3主体部、頂部平坦地の破壊されたものを第4主体部と名付けた。

①第1主体部

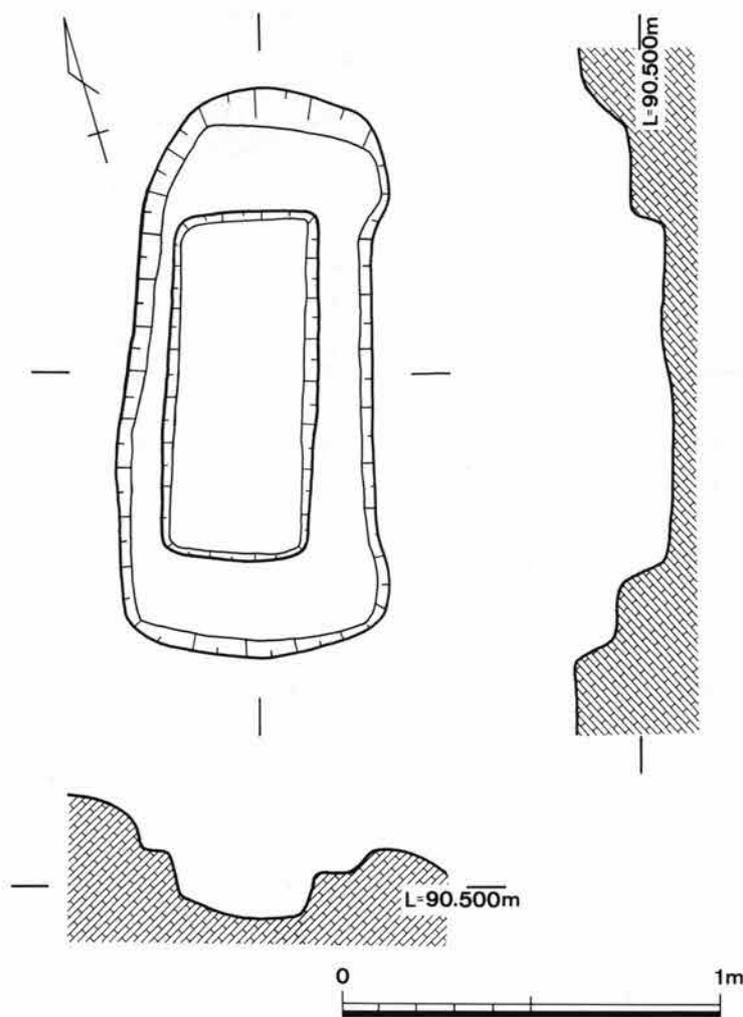
この埋葬施設は、丘陵の南西側の斜面を削り込み、平坦面をつくり、埋葬されている。埋葬形態は、二段墓壇で木棺直葬墓であったと想定されるが、木棺の痕跡は確認できない。規模は、上段の墓壇の長さが約2.7m・幅0.9m、深さは東側では約0.5mを測る。墓壇の西側は一部分が破壊されており、残存するところでは約5cmであった。下段の墓壇は、長さ約1.7m・幅約0.5m・深さ約0.3mである。棺内の北側には、朱が床面から約2～5cmの厚さで検出した。朱は、人頭

付表3 菩提東古墳検出主体部実測図

主体部	墓壇	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主軸	位置	遺物	備考
第1主体部	上段	約2.7	約0.9	約0.5	N	南西斜面	鏡・玉類	棺底北側に朱一部破壊
	下段	約1.7	約0.5	約0.3	(頭位N)			
第2主体部	上段	約1.5	約0.6	約0.05	N-20° -E	東側テラス	なし	
	下段	約1	約0.3	約0.12				
第3主体部	上段	約1.2	約0.6	約0.16	N-20° -E	東側テラス	なし	
	下段	約0.8	約0.25	約0.1				
第4主体部	上段	不明			N-10° -E	墳丘頂部	須恵器・甕片	一部削平で破壊
	下段	約1.1	約0.6	約0.15				



第22図 第1主体部実測図(1/20)



第23図 第2主体部実測図(1/20)

大ほどの広がりがある。また、その朱の堆積の底付近から、板状の滑石製勾玉が1点出土した。棺内中央北側では、管玉3点やガラス製小玉9点・滑石製小玉55点・琥珀玉4点が集中して出土した。玉類が集中して出土した地点からやや南側からは、銅製の小型鏡が鏡面を上にした状態で1枚出土した。玉類と鏡は遺体の首部分から胸部付近に置かれていたものと推定される。それ以外の遺物は出土しなかった。出土状況から埋葬遺体の頭位は北向きであったと思われる(第22図)。

副葬された玉類は、滑石を素材とする粗雑な作りのものが主体であり、古墳祭祀に用いられたという理解が一般的である。特に、離れて出土した板状の滑石製勾玉はその性

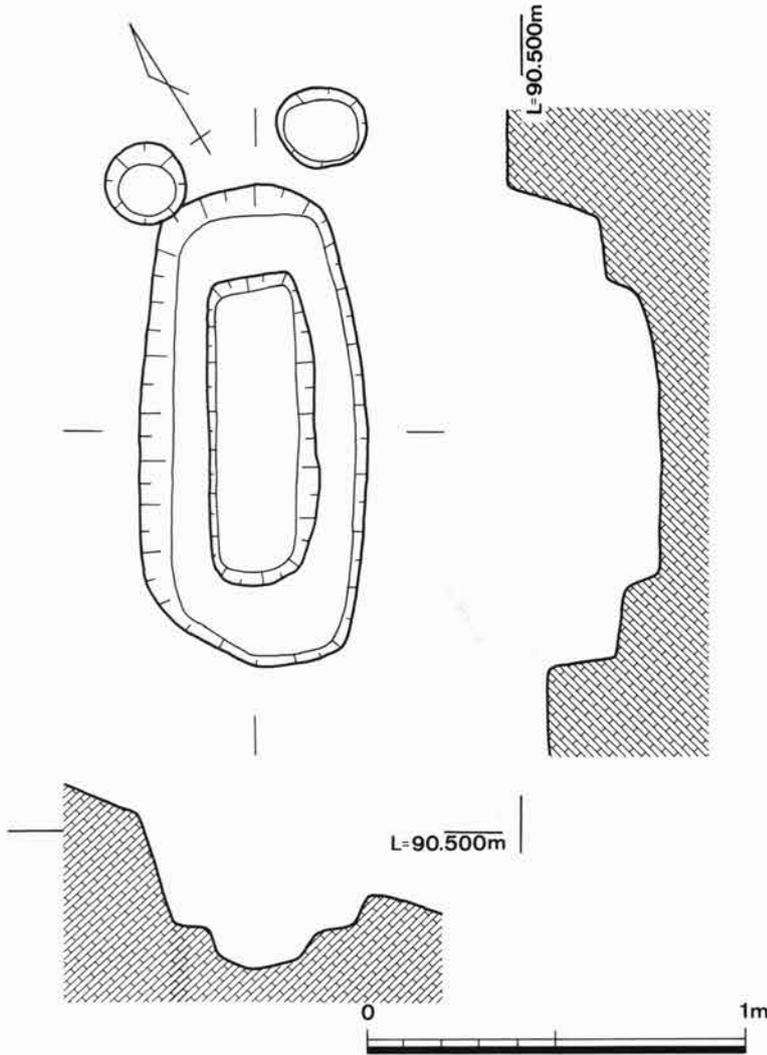
格が強い。したがって、これらを首飾りと見るには、若干の問題があるものの、玉類の中にガラス製のものや琥珀製のものがあることから、儀礼用のものであったとしても、装身具が転用された可能性も考慮せねばならないだろう。なお、これらの玉類に銹着して1点の鉄製品を検出しているが、用途が何か分からない。

②第2主体部

東側のテラスの北側部分に位置している。墓壙の主軸は、やや東に傾いた南北方向である。埋葬形態は、二段墓壙である。規模は、上段の墓壙は長さ約1.5m・幅約0.6m・深さ約5cmで、下段は長さ約1.0m・幅約0.3m・深さ約12cmである。墓壙は、第1主体部と比べると小規模である。この主体部から遺物は出土していない(第23図)。

③第3主体部

この墓壙も、東側テラスにあり、第2主体部の南側に位置している。墓壙の方向も同一方向である。墓壙の規模は小規模であるが、二段墓壙である。規模は、上段が長さ約1.2m・幅約0.6



第24図 第3主体部実測図(1/20)

m・深さ約16cmで、下段が長さ約0.8m・幅約0.25m・深さ約10cmである。この墓壙も遺物は認められない(第24図)。

④第4主体部

この墓壙は、城跡関連の遺構検出面から、約5～10cm掘り下げた地山面で検出した。しかし、墳頂部の東半分は後世の城跡関連の遺構などで破壊され、東側に傾斜している。そのため、墓壙は破壊された状態で検出した。墓壙は二段墓壙であったと思われるが、東側と南側が破壊され残存しないため上段の規模は不明である。下段となる墓壙の規模は、長さ約1.1m・幅約0.6m・深さ約15cmであった。墓壙内の埋土から、須恵器の甕破片が出土した(第25図)。

⑤土坑

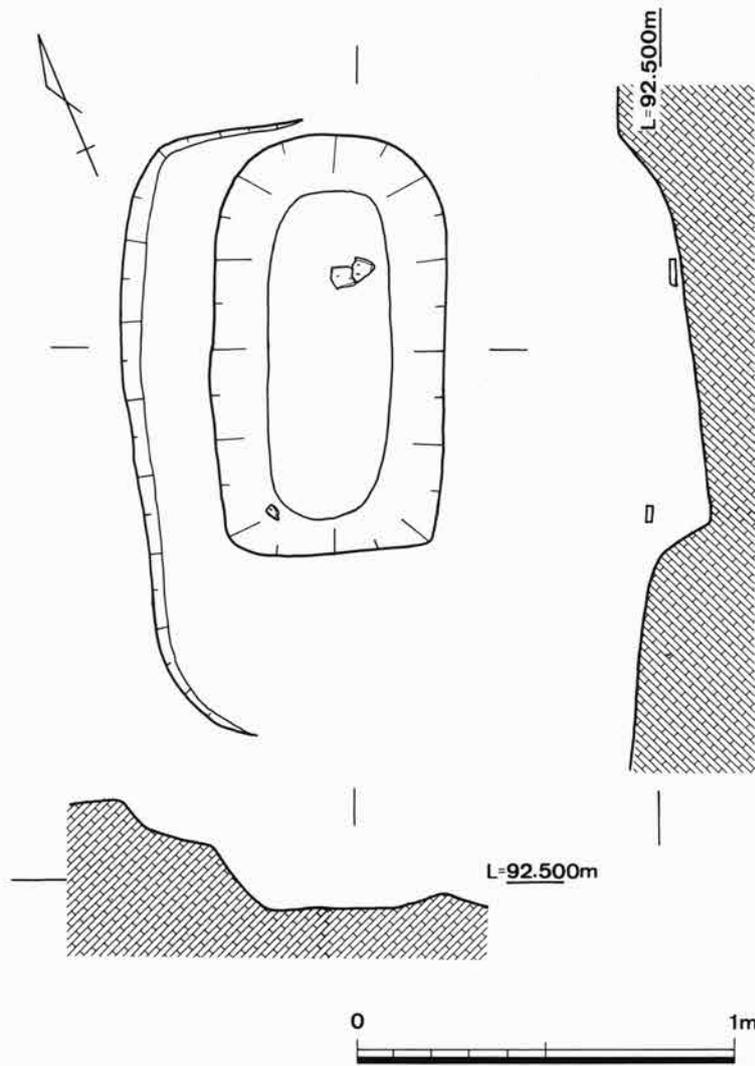
この土坑は、墳頂部の東側部分の古墳時代の遺構面で検出した。約1m四方の方形の土坑である。深さは、検出面から約20cmであったが、出土遺物はなかった。

4. 出土遺物

(1)菩提城跡の出土遺物

城跡の出土遺物(第26図)は、少量で、須恵器・土師器・陶磁器などの数点の土器片と鉄製の鋤先1点であった。土器の器種としては、須恵器の大型甕・土師質のすり鉢・土師器の小皿の破片などがある。1・2は、土師皿の底部である。3は、磁器碗の底部で色調は淡青緑色のものである。4は、須恵器の壺の口縁部分の破片である。5は、土師器の壺の口縁部分の破片である。6は、常滑焼きの大型甕の底部片である。同一個体と思われる体部片も出土したが接合はできなかった。7は鉄製の鋤先で、「U」字状を呈している。長さは、約29cmで、幅が鋤先部分で約14cmである。8は、砥石で2面が研ぎ面として使用されている。

(2)菩提東古墳の出土遺物



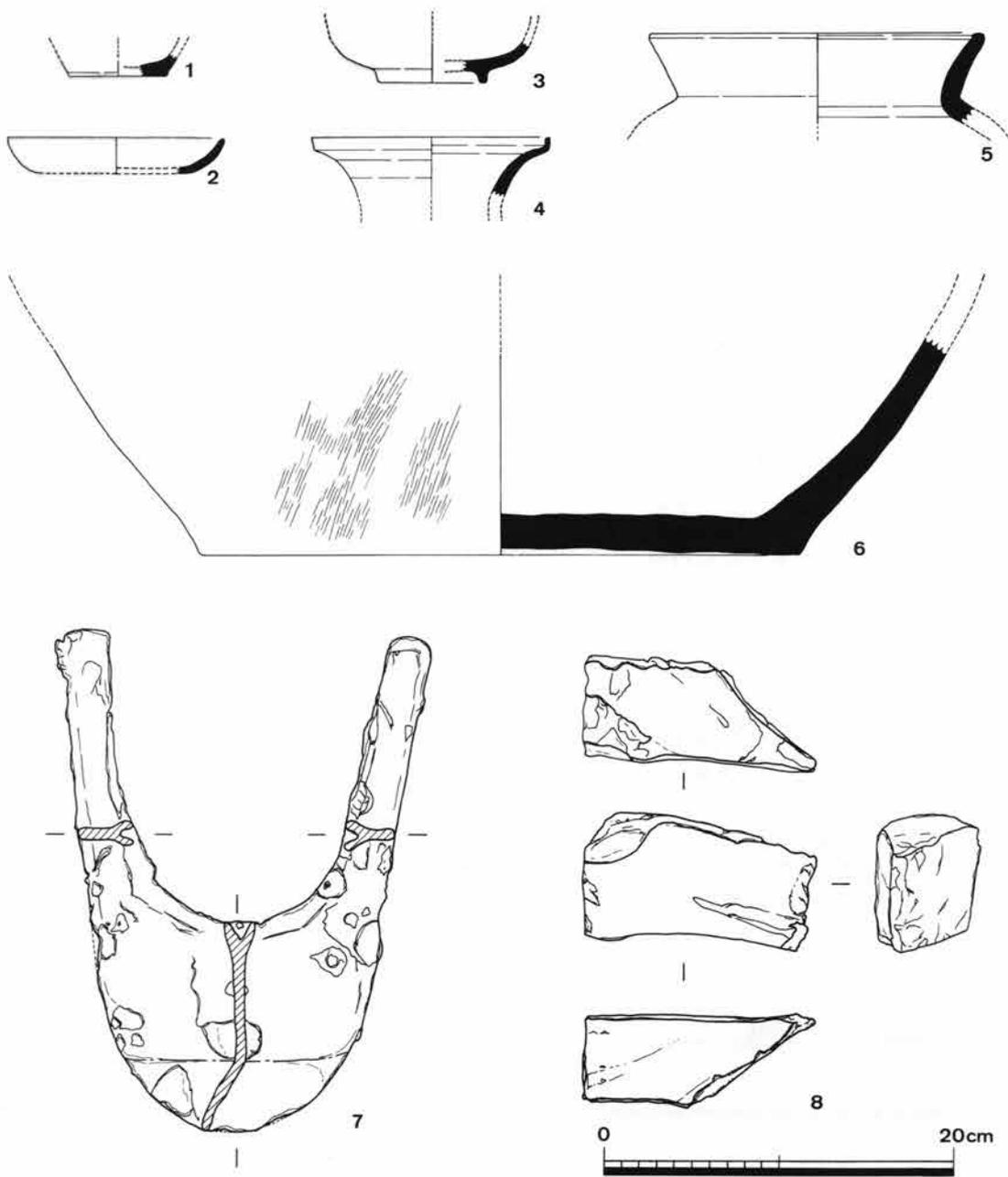
第25図 第4主体部実測図(1/20)

古墳時代の遺物は、南西斜面にある第1主体部からの出土したものがほとんどである。この第1主体部から出土した銅製の鏡は小型のもので、推定径は約4.6cmである。鏡は、1/3ほどが欠損し、鏡背の文様も錆で判別しにくいものであった。鏡背の文様は、外区に鋸歯文、内区に櫛歯文を部分的に確認するものの、鏡式については不明である(第27図)。また、玉類は、滑石製で板状の勾玉が1点出土している(第28図1)。この他に、緑色凝灰岩製の管玉3点(第28図2～4)が出土している。その内の2の管玉は、風化が激しく表面が粉状になっている。丹後地域では希少な遺物として、琥珀玉4点(第29図5～8)が出土している。

その原産地については、不明である。これらの他に、コバルトブルー(紺色)のガラス製小玉9点(第29図9～17)が出土しているが、大きさには個体差がある。また、滑石製小玉は総数で55点(第29図18～72)見られるが、サイズから大きく2つに分類することができる(第28・29図と付表4)。

5. ま と め

今回の調査は、当初、城跡の調査として発掘調査を開始した。しかし、調査を進めていくと、城跡に関する遺構(中世)のほかにも下層遺構として古墳時代の遺構があることが確認された。城跡の遺構は、頂部平坦面に多数の柱穴と不定形の土坑・小溝などを検出した。頂部の平坦地には、掘立柱建物と塀とが建てられていたようである。建物は、塀によって区画されており、建物の方向などにも規則性がみられる。しかし、平坦地の面積が狭く、建物の規模も小規模なものであった。出土遺物も土器などが少量である点から見ても、常駐するような施設ではなく、小規模なものであったと考えられる。特に、この菩提城跡からは、北側と西側の平地が一望できるので、見



第26図 出土遺物実測図(1/4)

張り台的な施設が想定されよう。また、調査地の南側には、陸橋が存在することから、城の本体はさらに南側に存在した可能性がある。

今回の調査の結果、城跡に関連する遺構については、出土した遺物はすべて遺構に伴わないが、平安時代末～鎌倉時代前期と思われる。ただし、山城の築造時期は、それらより下る可能性がある。詳細な時期の決定は、今後の課題としたい。また、山城に伴う小規模な見張り施設について、その役割と機能、城本体との位置関係などについて、検討をしていく必要がある。

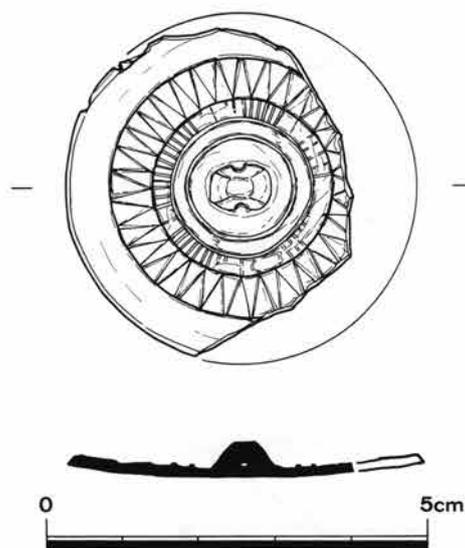
次に、今回の調査で新たに検出した古墳時代の遺構は、古墳の埋葬施設などであるため、「菩提東古墳」と名付けた。なお、調査地の尾根の先端部分には、菩提古墳が存在する。墳丘は、南

北方向に若干長い長方形墳と想定される。墳頂部は、中世の遺構によって、破壊または削平されていた。埋葬施設は、頂部の平坦地には少なく丘陵斜面や東側のテラス部分で3基検出している。また、中心となる埋葬施設は検出できなかった。おそらく、墳頂部は、後世に削られ破壊されたものと思われる。斜面やテラス部分で検出した埋葬施設は、周辺埋葬に当たるとと思われる。しかし、第1主体部は、大量の玉類や鏡が副葬されていたり、テラス部分より高い位置の墳丘斜面に墓壙が築かれている点からも、特異性をもった被葬者が葬られたものと思われ、この地域の有力者の墓であったと考えられる。これらの墓壙の埋葬時期は、第1主体部から出土した遺物の玉類のセット関係などから、古墳時代前期後半～中期初めのものと考えられる。

今回出土した鏡は、鋸歯文鏡と呼ばれる小型の鏡と思われるが、いままで出土した鏡の中では、類似するものが無く、大きさも最小であり、類似鏡や鏡式を検討中である。なお、時期がやや異なるが、類似した小型仿製鏡の出土例に、木津町城山遺跡^(注3)がある。

今回の調査で、中世の山城に関連する遺構のほかに、新たに古墳時代の遺構が確認されたことで、今後、この付近にもさらに古墳の存在が予想される。また、丘陵の先端に存在する菩提古墳との関連も検討する必要がある。

(村田和弘)

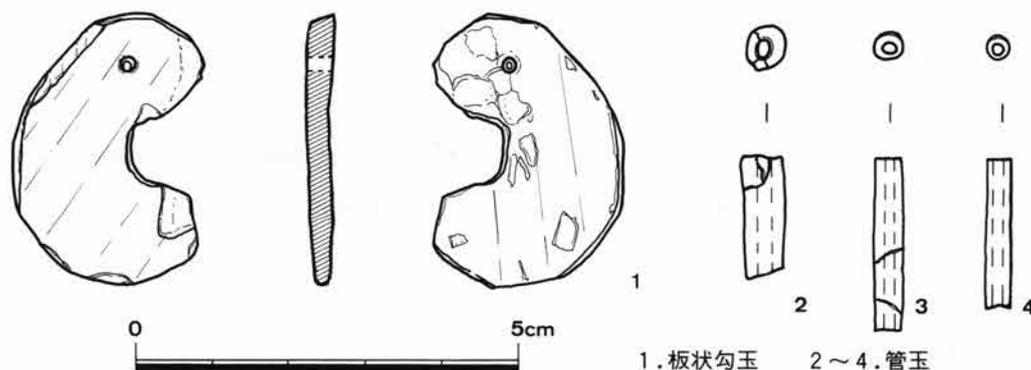


第27図 小型鏡実測図

注1 『京都府遺跡地図』 第1分冊(第2版) 京都府教育委員会 1988

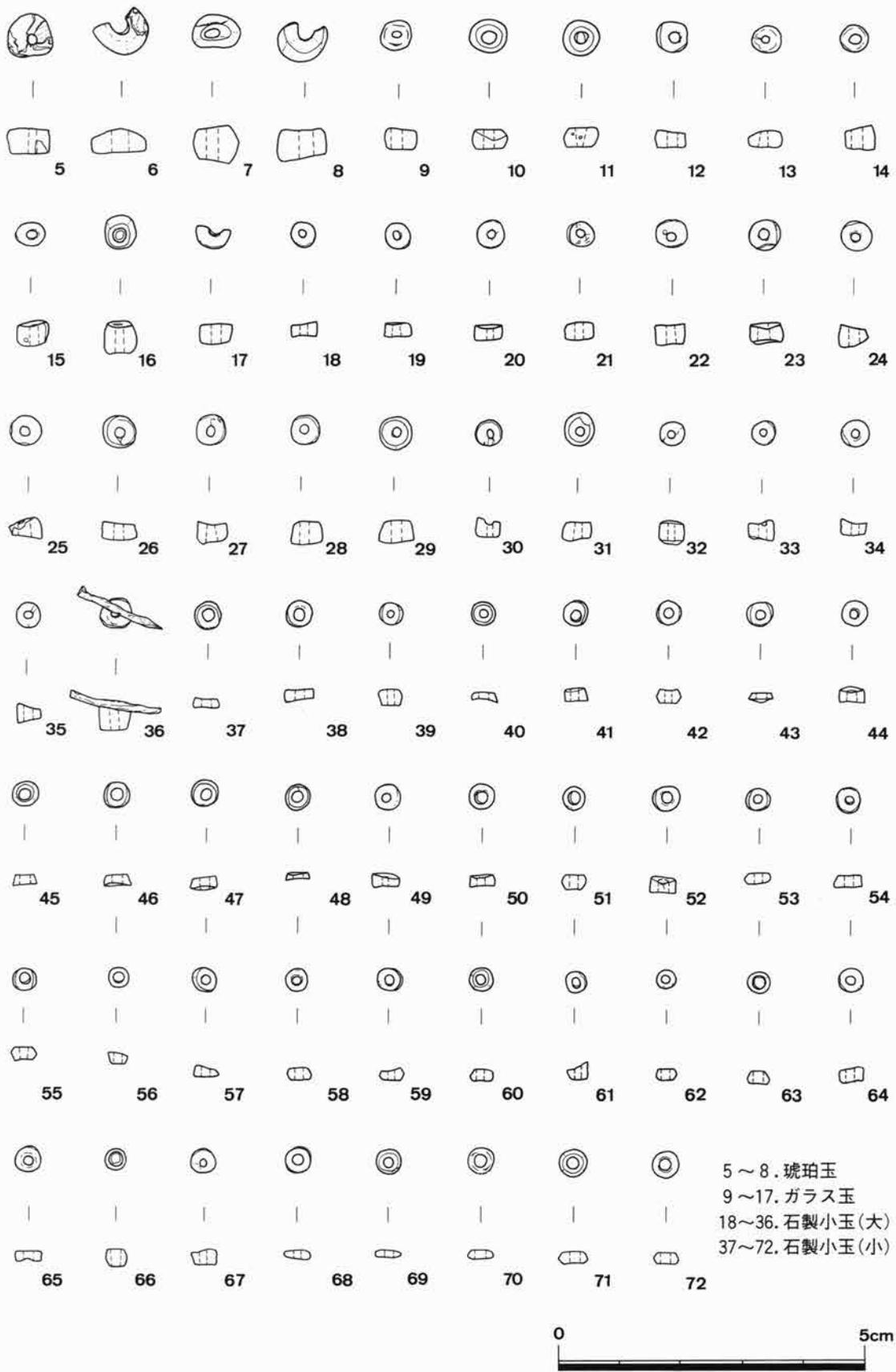
注2 『京都府弥栄町遺跡地図』(『京都府弥栄町文化財調査報告 第14集』 弥栄町教育委員会) 1998

注3 竪穴住居SB32出土素文鏡(径約4.4cm)
伊賀高弘「平成9年度発掘調査略報 26. 城山遺跡」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998



第28図 玉類実測図(1)

1. 板状勾玉 2~4. 管玉



第29図 玉類実測図(2)

付表4 菩提東古墳出土玉類観察表(単位cm)

	種類	長	径	材質	色調	備考		種類	長	径	材質	色調	備考
1	板状勾玉	3.55	厚0.3	滑石製	乳緑色	朱着	37	石製小玉	0.18	0.41	滑石製	白色	
2	管玉	1.7	0.6	凝灰岩製	白灰色	風化	38	石製小玉	0.2	0.5	滑石製	淡緑色	
3	管玉	2.3	0.4	凝灰岩製	淡緑色		39	石製小玉	0.25	0.4	滑石製	濃灰色	
4	管玉	2	0.3	凝灰岩製	淡緑色		40	石製小玉	0.2	0.39	滑石製	黒色	
5	琥珀玉	0.45	0.8	琥珀	茶褐色		41	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡灰色	
6	琥珀玉	0.4	0.9	琥珀	茶褐色	破損	42	石製小玉	0.2	0.4	不明	黒色	
7	琥珀玉	0.6	0.8	琥珀	茶褐色		43	石製小玉	0.16	0.4	滑石製	白色	
8	琥珀玉	0.53	0.8	琥珀	茶褐色	破損	44	石製小玉	0.25	0.4	滑石製	淡緑色	
9	ガラス小玉	0.35	0.5	アルカリ石灰	紺色		45	石製小玉	0.2	0.42	不明	白色	
10	ガラス小玉	0.3	0.6	アルカリ石灰	濃紺色		46	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	黒色	
11	ガラス小玉	0.32	0.6	アルカリ石灰	紺色		47	石製小玉	0.2	0.45	不明	白色	
12	ガラス小玉	0.3	0.5	アルカリ石灰	紺色		48	石製小玉	0.1	0.4	不明	白色	
13	ガラス小玉	0.25	0.45	アルカリ石灰	濃紺色		49	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡緑色	
14	ガラス小玉	0.4	0.45	アルカリ石灰	紺色		50	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡緑色	
15	ガラス小玉	0.4	0.5	アルカリ石灰	紺色		51	石製小玉	0.22	0.38	滑石製	黒色	
16	ガラス小玉	0.5	0.5	アルカリ石灰	紺色		52	石製小玉	0.3	0.45	滑石製	淡緑色	
17	ガラス小玉	0.3	0.55	アルカリ石灰	紺色	破損	53	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	黒色	
18	石製小玉	0.21	0.4	滑石製	黒色		54	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	黒色	
19	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡緑色		55	石製小玉	0.25	0.4	滑石製	濃灰色	
20	石製小玉	0.25	0.42	滑石製	淡緑色		56	石製小玉	0.2	0.3	滑石製	黒色	
21	石製小玉	0.2	0.45	滑石製	淡緑色		57	石製小玉	0.19	0.4	滑石製	黒色	
22	石製小玉	0.3	0.5	滑石製	淡緑色		58	石製小玉	0.2	0.35	滑石製	黒色	
23	石製小玉	0.31	0.5	滑石製	淡緑色		59	石製小玉	0.19	0.4	滑石製	黒色	
24	石製小玉	0.34	0.5	滑石製	淡緑色		60	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡緑色	
25	石製小玉	0.32	0.5	滑石製	淡緑色		61	石製小玉	0.29	0.35	滑石製	淡緑色	
26	石製小玉	0.3	0.5	滑石製	淡緑色		62	石製小玉	0.2	0.33	滑石製	淡緑色	
27	石製小玉	0.4	0.5	滑石製	淡緑色		63	石製小玉	0.2	0.38	滑石製	淡緑色	
28	石製小玉	0.4	0.48	滑石製	淡緑色		64	石製小玉	0.21	0.37	滑石製	淡緑色	
29	石製小玉	0.4	0.5	滑石製	淡緑色		65	石製小玉	0.2	0.4	滑石製	淡緑色	
30	石製小玉	0.4	0.3	滑石製	淡緑色		66	石製小玉	0.3	0.35	滑石製	淡緑色	
31	石製小玉	0.3	0.5	滑石製	淡緑色		67	石製小玉	0.22	0.43	滑石製	淡緑色	
32	石製小玉	0.4	0.4	滑石製	淡緑色		68	石製小玉	0.14	0.4	不明	白色	
33	石製小玉	0.35	0.4	滑石製	淡緑色		69	石製小玉	0.1	0.4	不明	白色	
34	石製小玉	0.3	0.44	滑石製	淡緑色		70	石製小玉	0.15	0.41	不明	白色	
35	石製小玉	0.31	0.4	滑石製	淡緑色		71	石製小玉	0.19	0.41	不明	白色	
36	石製小玉	0.41	0.5	滑石製	淡緑色	鉄片	72	石製小玉	0.2	0.4	不明	白色	

調査および整理作業に参加していただいた方は、以下のとおりである。(順不同・敬称略)

谷口勝江・平林秀夫・松村 仁・森野美智代・本城義晴・田村文代・河崎祐子・金保真由美・由良里枝・藤原敏子・尾崎二三代・金久真弓・村上五月・谷辻絹代・有田美恵子・伊熊佐知子・坪倉愛子・野口美乃・森秀雄・小国喜市郎・藤原多津子・岩佐正一・石井 清・石嶋文恵・石田寿子・嵯峨根清一・堀口百合子・永埜ヤス子・安田正夫・新井俊一・金久富美子・黒川花江・吉岡つや子・山本 絹・小林宏和・入江敏夫・上田辰巳・藤原悦子・増田英男・坪倉孝一・坪倉利恵子・藤原慶治・松本一夫・森 正雄・吉岡光明・田家フミ子・石河季夫・入江君子・山本 守・小倉志麻・坪倉初江・坪倉美代子・中島秀二・勝田浩章

2. 名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要 —長岡京跡左京第399次(7ANVKN-11・7ANVST-7)—

1. はじめに

中央自動車道西宮線(名神高速道路)の大阪茨木インターチェンジから京都南インターチェンジ間における慢性的な交通渋滞解消のため、日本道路公団では、走行車線の拡幅工事を行い、名神高速道路京都桂川パーキング・エリアの建設を計画した。本調査は、この名神高速道路京都桂川パーキング・エリア建設に伴う事前調査であり、日本道路公団大阪建設局の依頼を受けて実施した。

当センターでは、昭和63年度から、名神高速道路の拡幅に伴う発掘調査を行い、平成5年度からは名神高速道路京都桂川パーキング・エリア建設予定地内(P.A.工区)の調査を開始し、同年には、予定地内の本線拡幅部分について3,100㎡の発掘調査を行った。平成6年度には、同予定地内北東部分ほか11,250㎡、平成7年度には、北西部分14,880㎡、平成8年度には、7,000㎡を発掘調査し、随時調査概報を刊行してきた。

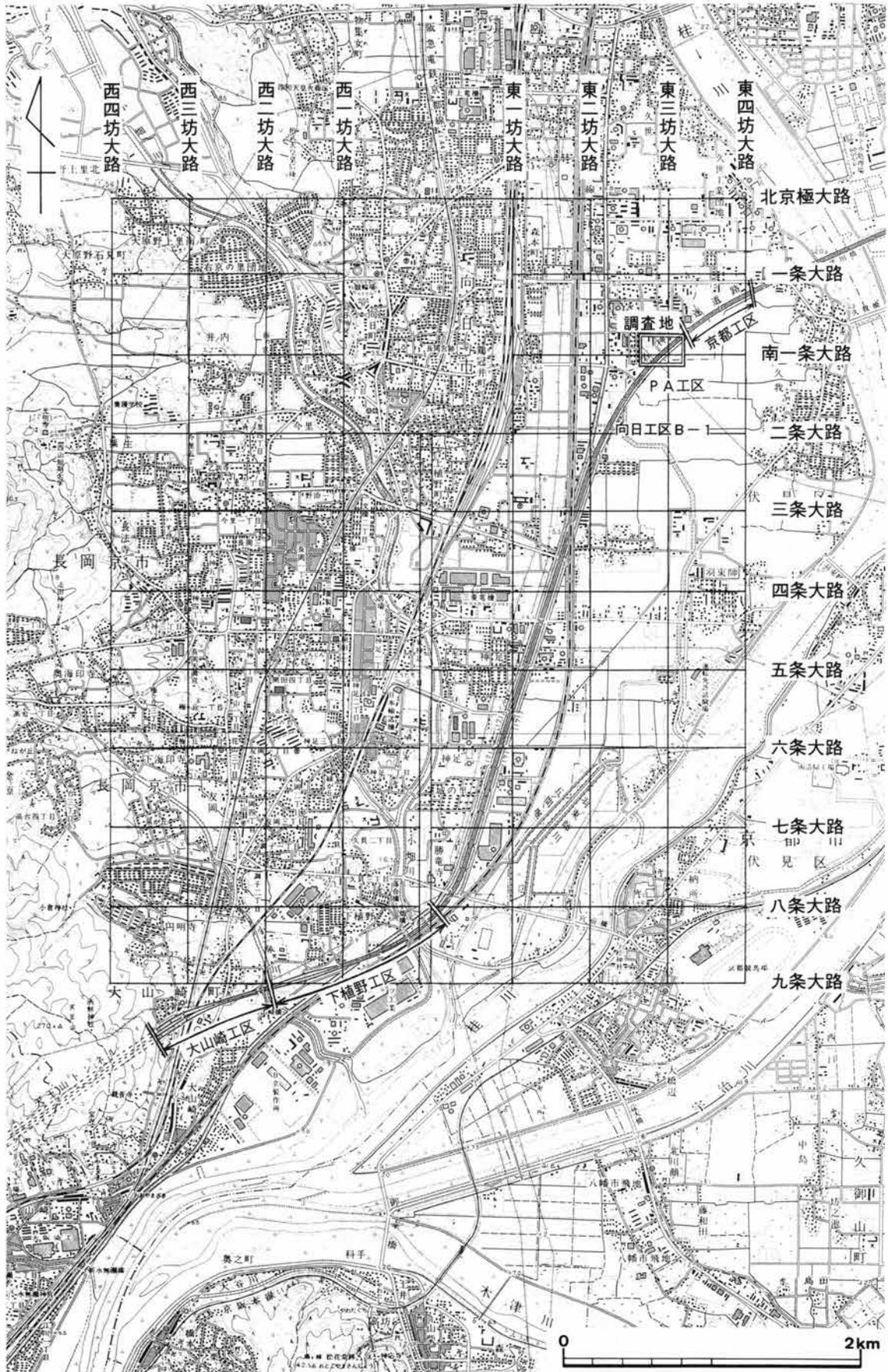
本年度の現地調査(B-6・B-7地区)はパーキング・エリア建設予定地内(P.A.工区)の南西の一部にあたる(第31図)。調査期間は、平成9年4月7日～平成9年10月16日である。調査に係る経費は、日本道路公団大阪建設局が負担した。

調査地名・長岡京の調査回数・面積・期間については、付表5に示した。検出した遺構の番号は、基本的に各調査区毎の連番としたが、条坊遺構や自然流路等、広域におよぶ同一遺構については、先行する調査における遺構番号を優先して記載し、今回調査時における遺構記録番号との対応のために、付表6を示した。また、条坊路および宅地の呼称は、パーキング・エリア建設予定地内(P.A.工区)の遺構記述の混乱を避けるため、基本的に旧来の条坊復原案に従い、適宜括弧内に山中 章氏による条坊復原案^(註1)の条坊路・町呼称を併記することとした。

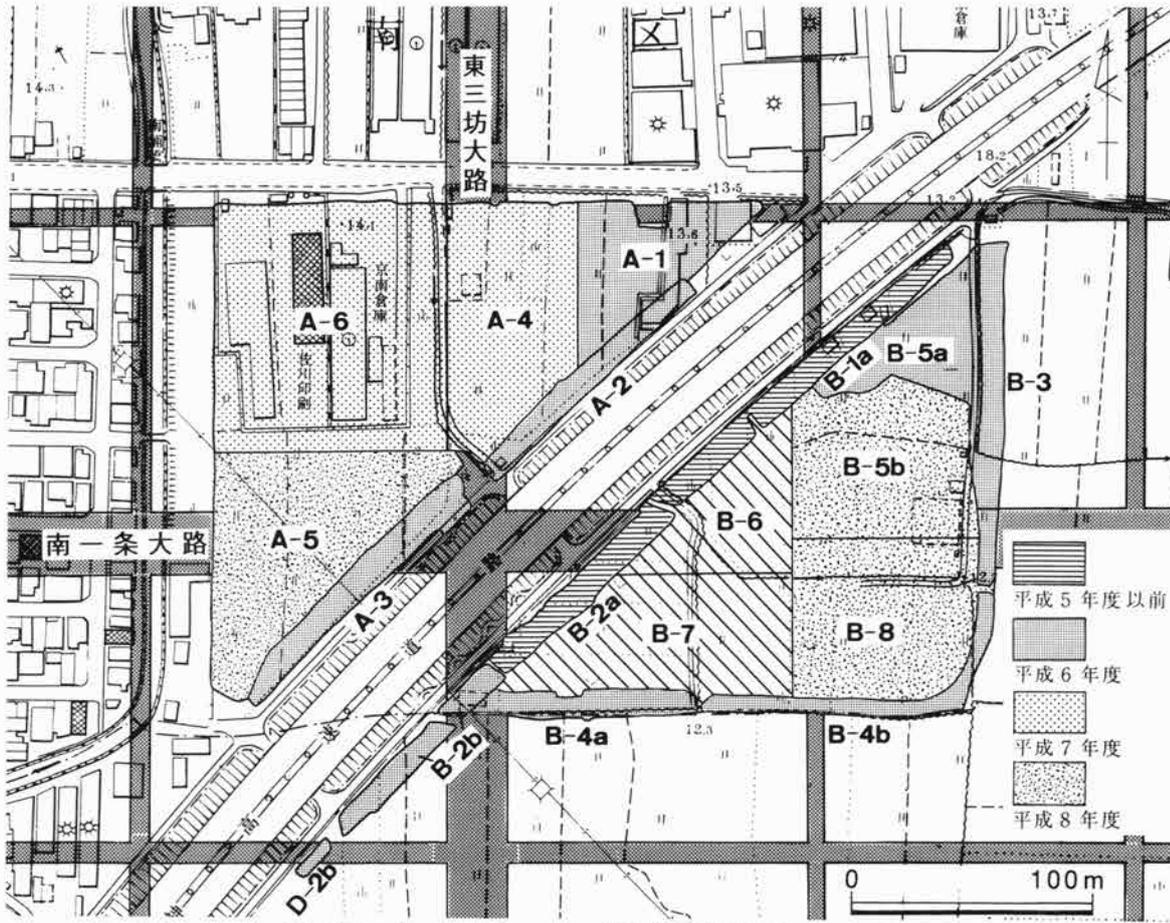
発掘調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第4係長平良泰久、同調査員小池寛・中川和哉・八木厚之・中村周平・野島 永が担当した。本概報は、野島 永・堀 大輔(京都大学大学院)が執筆、野島 永が編集を行った。図版作成には、堀 大輔の協力があつた。また、平安時代の銅印の理科学的分析の結果については、国立歴史民俗博物館永嶋正春先生に玉稿を賜り、付編として掲載した。先生のご厚情に感謝したい。

付表5 平成9年度名神高速道路関係遺跡調査一覧

工区	地区	回数	調査記号	所在地(字名)	推定遺構(遺跡)	面積(㎡)	開始	終了	担当者
桂川P A 工区	B-6	L399	7ANVKN-11	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京南一条四坊四町 南一条大路 東土川遺跡	2,470	H9.4.7	H9.10.16	八木 野島
	B-7	L399	7ANVST-7	南区久世東土川町 (金井田・正登)	左京二条四坊一町 東三坊大路 東土川遺跡	4,750	H9.4.7	H9.10.16	小池 中川 中村



第30図 調査地区位置図(長岡京全体図 1/40,000)



第31図 パーキング・エリア調査地区配置図(1/3,000)

調査にあたっては、日本道路公団・大山崎町教育委員会・長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会・(財)向日市埋蔵文化財センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所などの関係各機関の御協力をいただいた。^(注2)

2. 調査地周辺における長岡京期の調査

調査地は、パーキング・エリア建設予定地内の南西部の一区画であり、長岡京条坊復原案によれば、東三坊大路の東側に面しており、南一条大路(二条条間大路)と、その南北両宅地(左京南一条四坊四町(二条四坊二町)と二条四坊一町(二条四坊三町)にあたる。

南一条四坊四町では、左京第336次調査(A-1地区)・左京第329次調査(A-2地区)・左京第361次調査(A-4地区)・左京第303・332次調査(B-1地区)・左京第315次調査(B-2a地区)における先行調査がある(第31図)。A-1・A-2・A-4地区は、四町の宅地の北西部にあたり、宅地の北側1/2町を区画する掘立柱塀と、その内部に三面廂を持つ、身舎2間×5間の南北棟の掘立柱建物跡1棟、小形の掘立柱建物跡数棟を検出した。B-2a地区においては、四町の南辺に限る南一条大路北側溝S D33003を検出し、その北側に2棟の東西棟の掘立柱建物跡を検出した。^(注3)

また、二条四坊一町では、左京315次調査(B-2a地区)・同333次調査(B-4a・b地区)の先行調査がある。B-2a地区では、一町の東西1/4程の地点(西一行の計画線付近)で、三面廂を持つ

付表6 B-6・B-7地区遺構記録番号対応表

報告番号	時期	説明会資料	記録番号	備考
S D 315003	長岡京期		S D 516	東三坊大路東側溝
S B 315005	長岡京期	建物跡 2	S B 315005	掘立柱建物跡
S B 315006	長岡京期	建物跡 3	S B 315006	掘立柱建物跡
S B 315007	長岡京期	建物跡 4	S B 315007	掘立柱建物跡
S D 33002	長岡京期	南側溝	S D 502	南一条大路南側溝
S D 33003	長岡京期	北側溝	S D 501	南一条大路北側溝
S D 33304	奈良時代	溝 1	S D 601	奈良時代溝
S D 385601	古墳時代	溝 3	S D 604	古墳時代溝
S D 385602	古墳時代	溝 2	S D 605	古墳時代溝
S D 385606	古墳時代	溝 5	S D 603	古墳時代溝
S D 385611	古墳時代	溝 4	S D 603	古墳時代溝
S D 399015	中世?		S D 15	南北方向素掘溝
S D 399068	中世		S D 68	南北方向坪境溝
S D 399087	中世		S D 87	東西方向坪境溝
S B 399415	長岡京期		S B 415	掘立柱建物跡
S B 399417	平安時代	建物跡 1	S B 417	掘立柱建物跡
S B 399418	平安時代		S B 418	掘立柱建物跡
S B 399420	平安時代		S B 420	掘立柱建物跡
S E 399421	平安時代		S E 421	平安時代井戸
S D 399422	長岡京期		S D 422	一町町内溝
S D 399423	長岡京期?		S D 423	一町町内溝
S D 399424	長岡京期		S D 424	一町西辺町内溝
S E 399503	平安時代	井戸 1	S E 503	平安時代井戸
S K 399504	平安時代	土坑 1	S X 504	平安時代土坑
S K 399505	平安時代		S X 505	平安時代土坑
S K 399506	弥生時代		S X 506	弥生時代土坑
S B 399518	長岡京期	建物跡 5	S B 518	掘立柱建物跡
P 399520	平安時代		S P 520	須恵器甕出土
S K 399594	長岡京期	土坑 2	S X 594	土師器皿集積
S D 399599	平安時代		S D 599	鳥文緑釉陶器出土
S T 399602	弥生時代	周溝墓 1	S X 602	方形周溝墓
S D 399606	古墳時代以降		S D 606	風倒木痕?
S D 399607	弥生時代	周溝墓 2	S D 607	方形周溝墓
S D 399608	弥生時代		S X 608	方形周溝墓
S D 399609	弥生時代		S X 609	方形周溝墓
S D 399610	弥生時代	周溝墓 2	S X 610	方形周溝墓
S D 399611	弥生時代		S X 611	方形周溝墓

東西棟の掘立柱建物跡や並列する2棟の南北棟掘立柱建物跡などを検出した。B-4 a地区では、顕著な遺構は遺存しなかったが、B-4 b地区ではB-2 a地区同様、一町の東西1/4程の地点で、東三坊東側溝に面し、2間×5間の東西棟の掘立柱建物跡とその東側に井戸を検出した。^(註4)

3. 調査概要

(1) 中世の遺構(第32図)

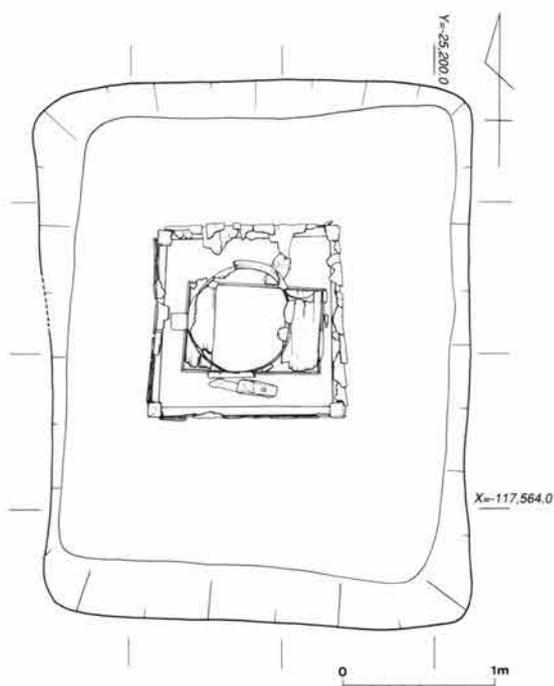
当該調査地区は、乙訓郡条里では、9条村田(12)里20・29・30坪に位置する。調査地の全域にわたって、素掘溝を多数検出している。昨年度調査を行ったB-5 b・B-8地区では、南一条大路南側溝S D 33002に平行して近世字境溝が検出されたが、本調査地では、北西に向きをかえ、南一条大路を横断して北上

するように蛇行する。調査地北側の字金井田は、29坪の北半と30坪の南辺にあたり、東西方向の坪境溝S D 399087を検出した。南北方向に蛇行する素掘溝を掘削した後に、おもに東西方向の素掘溝が掘削される。溝間に規格的な距離があるものとは思われない。南側の字正登では、調査地の東西中央に、南北方向の坪境溝S D 399068が掘削されており、西側20坪と東側29坪に分かれる。20坪では、東西方向の素掘溝群が多く検出された。P.A.工区A-6地区のように、5.5m^(註5)を単位とした南北方向の長地型地割りによると考えられる素掘溝とは様相を異にするようである。S D 399599からは、9世紀後葉頃の緑釉陶器片などが出土しており、東西方向の素掘溝の掘削開始時期が平安時代にまで遡る可能性を示している。29坪南半は、北西から南東方向に向かう溝により



第32図 B-6・B-7地区遺構図(中世～平安時代)(1/1,000)

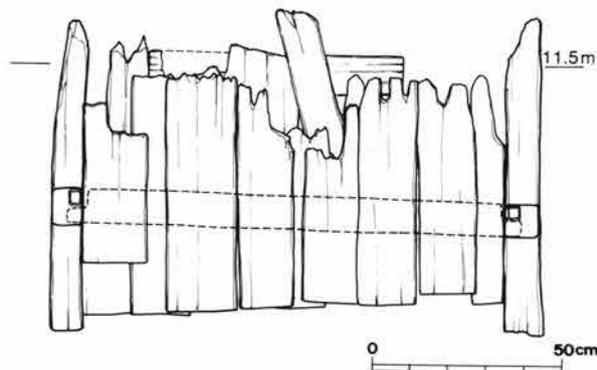
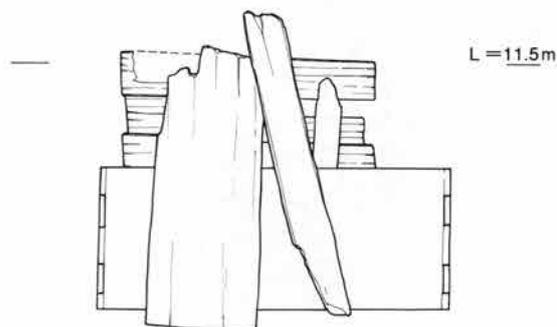
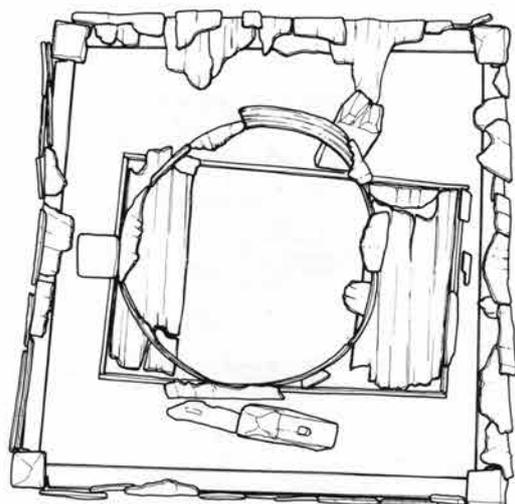
画されており、南西側には、南北・東西両方向の素掘溝がほぼ5m間隔で掘削される。概ね、南北方向の溝が埋没し、東西方向の素掘溝が掘削された後に、南北方向の素掘溝が再掘される。東西溝は東に行くに従って北偏し、南北溝は南に行くに従って東偏している。切り合い関係からみて、最初に掘削された南北方向の素掘溝からは楠葉型瓦器碗が出土しており、13世紀中葉に位置づけられる。なお、北東側には、素掘溝がほとんど検出されなかった。



第33図 井戸SE399421(1/50)

(2)平安時代の遺構(第32図)

井戸SE399421(第33・34図) 調査地の北西隅に位置しており、平安時代の掘立柱建物跡SB399518の北東で検出した。南北3.6m・東西2.8m



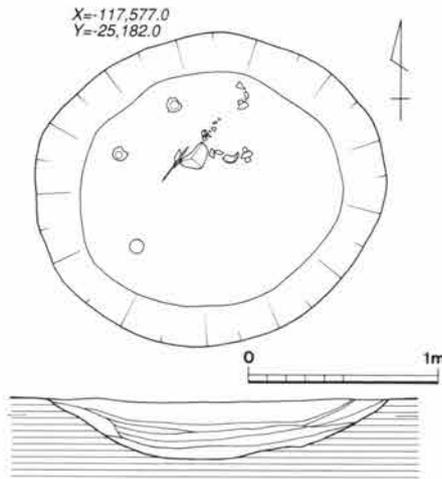
第34図 井戸 S E 399421 井戸側・井筒・水溜 (1/20)

程の長方形の掘形を持つ。深さは検出面から約1.5mで、その中央やや北側から、井戸側・井筒・水溜が出土した。井戸側は、縦板組隅柱横棧留め型式のもので、一辺が1.3m内外の規模を持つ。縦板材は、1.5~2cmの薄いものであるが、隙間なく並べられており、2つの縦板の間にさらにもう一枚の縦板を外側から被せるように丁寧に重ね合わされていた。また、隅柱や横棧も建築部材などを転用した痕跡はなく、横棧の杵組も精巧なものである。井戸内部には、井筒、水溜として転用された円形曲物と、底板と蓋を取り去った櫃が置かれていた。円形曲物は櫃の上に置かれており、曲物の置かれた部分以外は薄板材で覆われていた。櫃内での湧水を円形曲物に誘導させるためであろう。櫃の内部には、大甕の破片が敷かれており、湧水の際に泥土の混入を防ぐ工夫を施していたものとみられる。なお、曲物の北・西・南側には、井戸側隅柱よりやや大きな角材を打ち込んでおり、それによって、曲物を固定していたように見られる。井戸側の木組・横棧の杵組に比べれば、井戸内の水溜施設が案外、無造作であることから、曲物・櫃は当初の設備ではないと考えられる。おそらく、井戸内が土砂によって埋没したため、再度掘削して新しく水溜のための

曲物と櫃を設置したものと推測することができる。しかし、土層の堆積状況からは、再掘削の痕跡を得ることはできなかった。井戸掘形から、9世紀後葉頃の緑釉陶器(第44図5)などがみられ、井筒として利用された曲物内からは、K90型式前後の灰釉陶器や10世紀前葉の土師器(第44図1・3・7)、桃核などが出土した。

井戸 S E 399503(第35図) 調査地中央西よりの南辺で検出した土坑。南北3.3m・東西3.7mの円形掘形を持つ。井戸側などの木材は廃絶時に取り除かれたと思われ、井戸掘形も抜き取り土坑による掘削のため遺存しない。土師器・緑釉陶器・須恵器(第44図9~20)などが出土した。

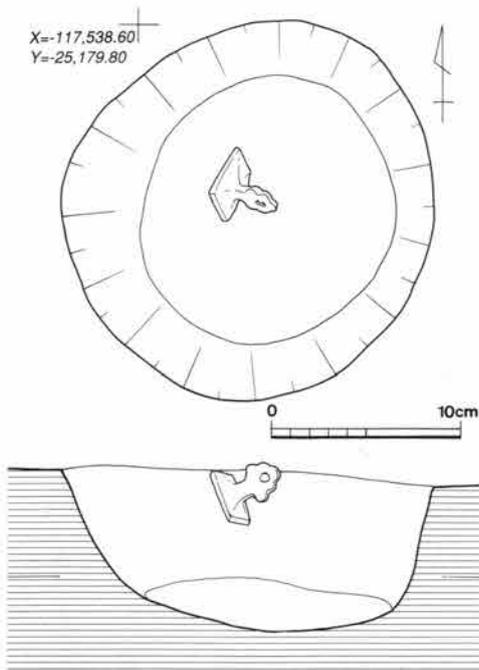
土坑 S K 399504(第36図) 調査地の北西、南一条大路南側溝 S D 33002の西端(s区)で、側溝のほぼ中央、側溝埋土を穿って設置された小土坑。直径20cm、検出面からの深さ9cm前後。暗褐色



第35図 井戸 S E 399503 (1/40 L=12.00m)

色砂質の埋土上層部、検出面付近で青銅製の印章が出土した。鈕を東南東、印面を西北西に向ける。鈕は水平に対して斜め30度ほどの仰角を持つように埋置されていた。周囲に有機物の遺存は認められなかったため、何らかの有機物の容器などに納められていた可能性は高いとは言えない。

土坑 S K 399505 S K 399504の東側に位置する。長軸5.5m・短軸2.6m、検出面からの深さ10cm前後の長楕円形の浅い土坑。南一条大路南側溝 S D 33002側溝心に長軸を合わせるように重複している。緑釉陶器碗片や須恵器底部片などが出土した。



第36図 土坑 S K 399504 (1/5 L=12.00m)

掘立柱建物跡 S B 399417 1間×3間の小規模な東西棟の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間4.1m・桁行1.8m。座標東で10度あまり北に振れる。

掘立柱建物跡 S B 399418 1間×3間の小規模な東西棟の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間3.0m・桁行1.84～2.24mと不揃いである。座標東で3度あまり南に振れる。

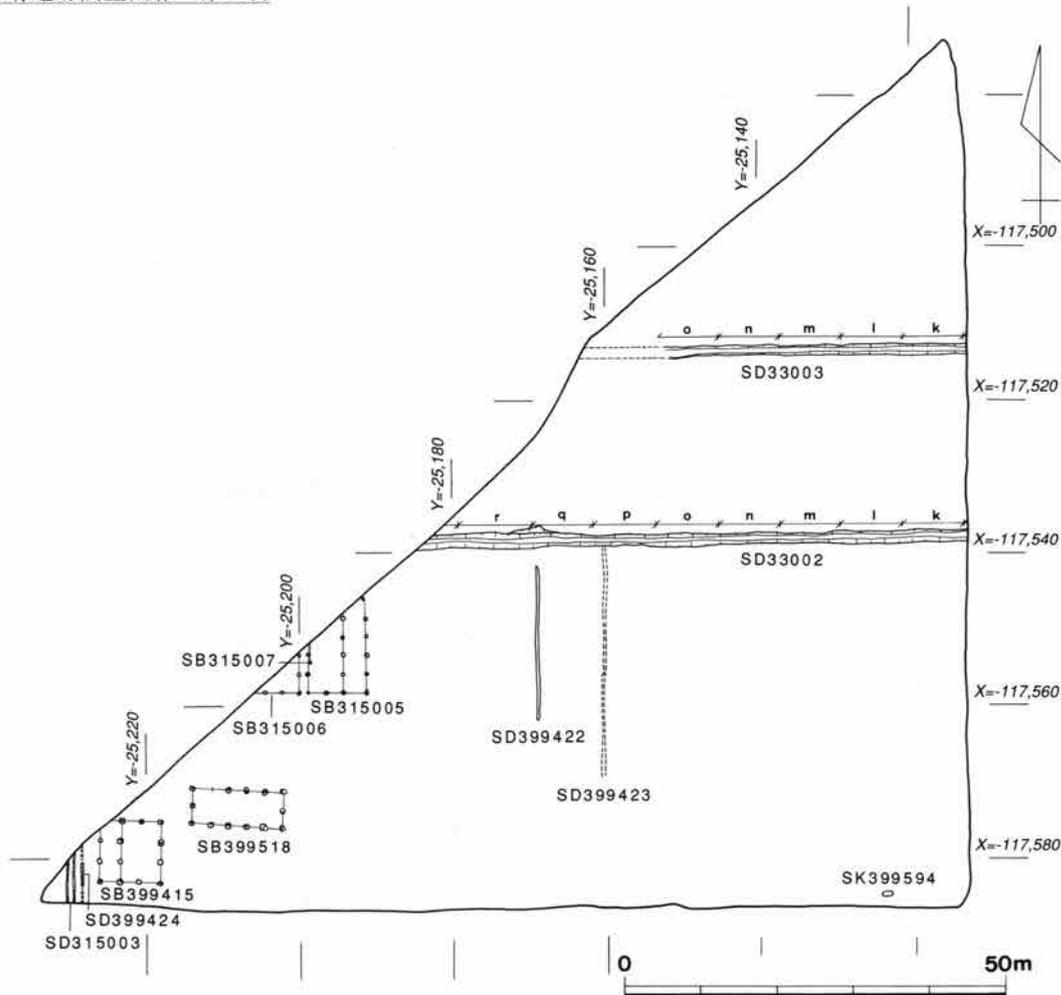
掘立柱建物跡 S B 399420 2間×4間の総柱の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間寸法は梁間3.2m・2.6m、桁行2.0～2.3m前後と長岡京期のものより不揃いである。北西隅の柱心はX=-117,551.760、Y=-25,193.040。柱穴から9世紀後葉～10世紀前葉頃の土器片が出土した。

(3)長岡京期の遺構(第37図)

a. 条坊関連遺構

条坊路関連遺構では、南一条大路の南北両側溝および、東四坊大路東側溝を検出した。

南一条大路北側溝 S D 33003 東西40m足らずを検出した。幅1.2～1.6m・深さ0.37～0.58mを測る。溝の掘形は掘削の浅い部分では、椀形に近く、深い部分では、断面逆台形状に掘削される(第38図参照)。基本的に側溝底面から、緑灰色～黄褐色の緻密な粘土層(下層1)、有機質を多く含む暗青灰色の粘土層(下層2)、灰黄褐色～褐色の砂質土層(上層)が堆積する。掘削の浅い椀形の掘形をもつ部分では、緑灰色～黄褐色の緻密な粘土層(下層1)の堆積は見られず、有機質を多く含む暗青灰色の粘土層(下層2)、灰黄褐色～褐色の土層(上層)のみになる。下層1・2から出土した土器群(第48・49図)と上層に一括して廃棄されたと考えられる土器群(第49・50図)があり、容易に弁別しうる出土状況であった(第39図上)。上層土器群は、標高11.72m以上の砂質土層に含まれる土器群である。n区付近(Y=-25,150.00付近)では、上下二群に分別できそうだが、

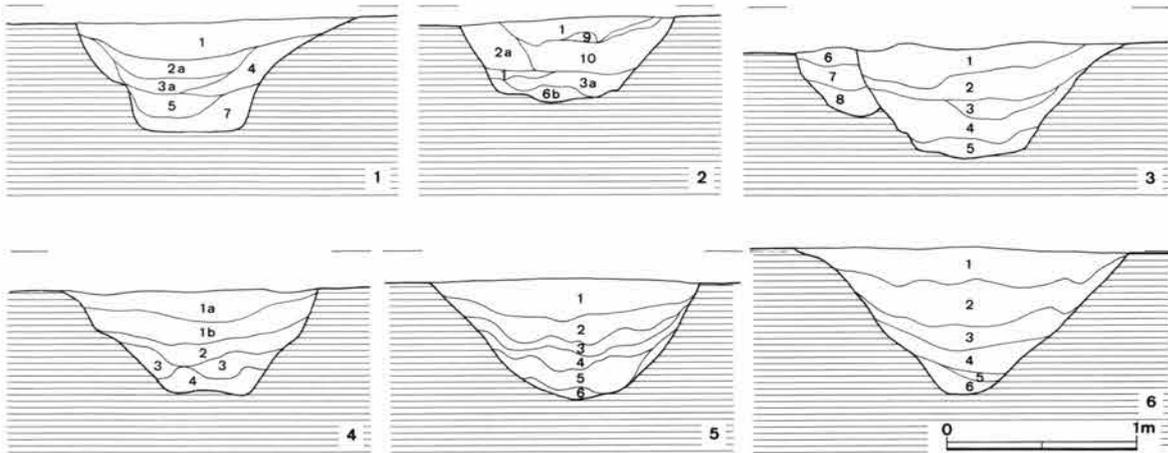


第37図 B-6・B-7地区遺構図(長岡京期 1/1,000)

土層および一括して投棄された状況が類似する。下層土器群は、標高11.70m以下の粘土層に含まれていた土器群である。溝心の座標は、調査地検出範囲の西部で、 $X=-117,513.78$ ($Y=-25,148.00$)、中央部で $X=-117,513.60$ ($Y=-25,140.0$)、東部で $X=-117,513.58$ ($Y=-25,120.0$)である。

南一条大路南側溝 S D 33002 東西70mにわたって検出した。幅1.2~2.2m・深さ0.5~0.7mを測る。調査地の東側、k・l区では、側溝の再掘削の状況が見られる(第38図3)。溝の位置は北側に30~40cm以上ずれるようである。埋土の堆積は周辺の土壌環境のためか、各地区でかなり異なる。再掘削後の溝心の座標は、調査地の検出範囲の、西部で $X=-117,538.70$ ($Y=-25,180.00$)、中央部で $X=-117,538.54$ ($Y=-25,148.00$)、東部で $X=-117,538.10$ ($Y=-25,120.00$)である。再掘削された側溝内から、土師器・須恵器・木筒・木器等が出土した(第51・54図)。再掘削された南側溝からは、検出面直下で平安時代の土器群が、下層の粘質土層から長岡京期の土器群が出土した(第51図)。検出面直下から出土した土器群を便宜的に上層出土遺物とする。また、q区床面から馬の下顎骨が一對出土した(図版34-2)。9世紀には側溝が完全に埋まらずに放置されていたと推察することができる。

南一条大路の路面遺構は削平のため、検出できなかったが、両側溝心心間の距離は、調査地の東部での側溝再掘削後の溝心、24.52m(約82.8尺) ($Y=-25,120.00$)、中央東側で24.82m(約83.9尺) ($Y=-25,140.00$)、中央部で24.76m(約83.6尺) ($Y=-25,148.00$)である。A-5地区で検出し



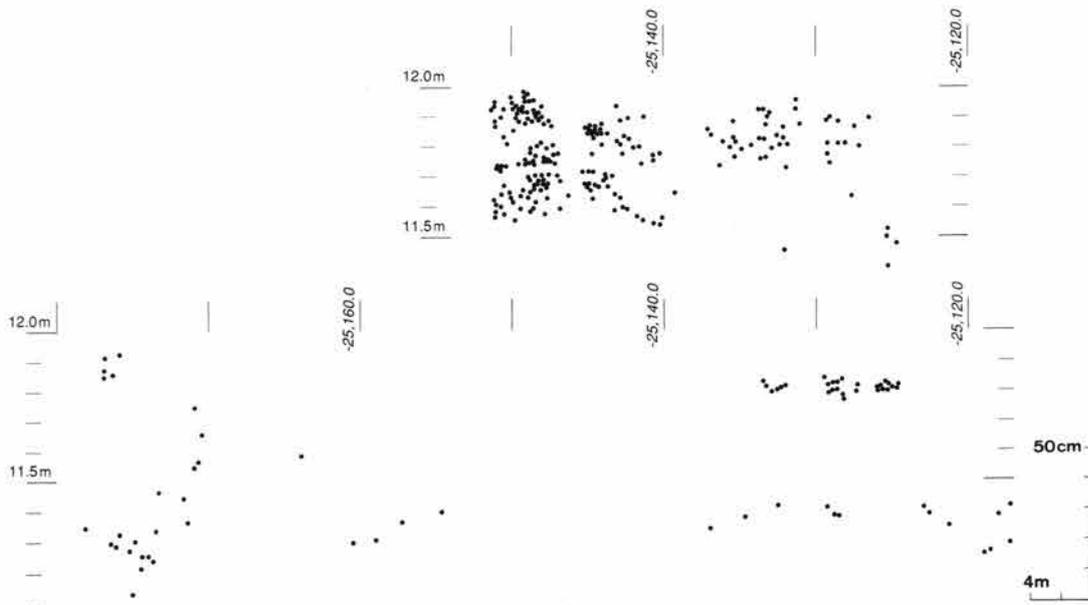
第38図 南一条大路両側溝断面図(1/40 L=12.00m)

北側溝SD33003(1: l区西壁 2: n区西壁)土層名

1. 灰褐色細砂土 2a. 灰褐色細砂+シルト 3a. 暗青灰色粘土 4. 暗灰色極細粒砂(+シルト) 5. 暗灰色+淡黄褐色粘土 6b. 濁緑灰色粘土+中粒砂(φ2%) 7. 黄褐色粘土 9. 黒灰色有機質土 10. 灰褐色砂+細粒砂

南側溝SD33002(3: l区西壁 4: n区西壁 5: p区西壁 6: r区西壁)土層名

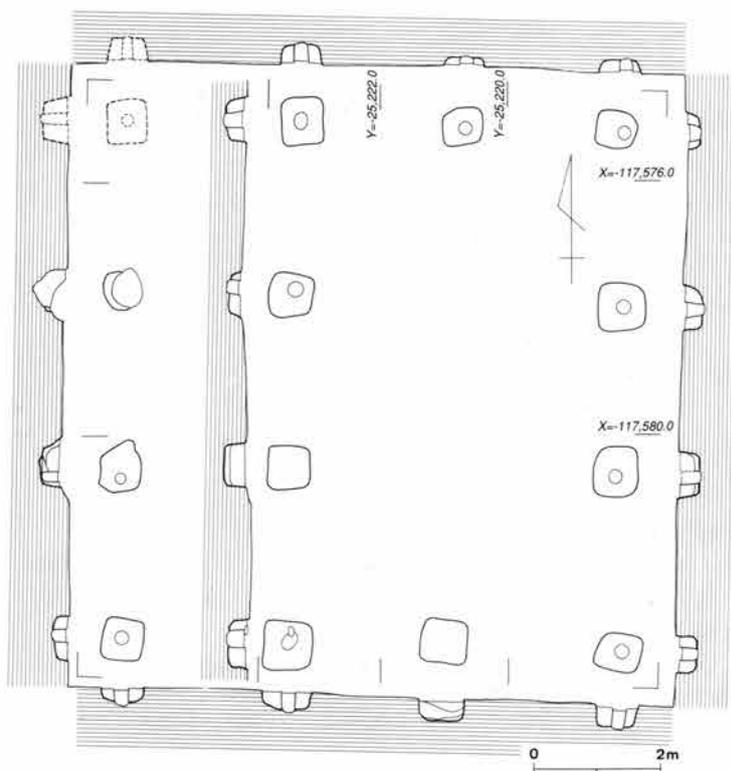
l区西壁(3): 1. 灰褐色砂土 2. 灰黄褐色粘質土 3. 暗灰色粘質土(砂多) 4. 暗灰色粘質土(シルト多)
 5. 濁緑灰色粘土 6. 灰褐色砂土 7. 灰黄褐色細砂土 8. 暗青灰色細砂土
 n区西壁(4): 1a. 濁灰色細粒砂+シルト 1b. 濁灰色シルト+粘土 2. 濁暗灰色シルト+粘土
 3. 濁暗緑灰色シルト+粘土 4. 緑灰色粘
 p区西壁(5): 1. 暗紫灰色砂土 2. 灰色砂(鉄分沈着) 3. 灰色粘土 4. 暗灰色粘土 5. 濃灰色粘土+砂
 6. 灰色粗粒砂
 r区西壁(6): 1. 黒褐色砂質土 2. 灰褐色粗砂 3. 灰色粗砂+粘土 4. 黒灰色粘土 5. 暗灰色粘土(含砂礫)
 6. 黒灰色砂土



第39図 南一条大路両側溝出土土器位置図(上. 北側溝SD33003 下. 南側溝SD33002)

た同大路両側溝心間距離は、25.05~25.15m(84~85尺)であり、東三坊以東では、南側溝再掘削後に大路路面幅が若干狭くなる。

東三坊大路東側溝SD315003 調査区南東端で南北4.6mを検出した。幅1.8m前後で、検出面での深さ10cm弱となる。検出部分の中央付近でY=-25,229.740(X=-117,584.00)。本調査区に北接するB-2a地区(左京第315次調査^(注6))においては、二条四坊一町の宅地外周の柵が認められたが、今回の調査では、検出し得なかった。本東側溝の東側1.4mには、南北3.4mにかけて側溝に並列



第40図 掘立柱建物跡 S B 399415(1/120 L=12.00m)

の身舎の南柱筋は南一条大路南側溝 S D 33002 溝心から 19.8m (約 67 尺) 南に配置される。身舎南東隅の柱心は X=-117,558.480、Y=-25,194.320 である。南西隅の柱心は X=-117,558.460、Y=-25,198.920 となる。また、長岡京左京第 315 次調査 (P. A. 工区 B-2 a 地区) において検出した北西隅柱心は X=-117,546.375、Y=-25,199.05、北東隅柱心は X=-117,546.40、Y=-25,194.40^(注 6) である。

掘立柱建物跡 S B 315006 S B 315005 の西に接する 2 間×5 間の南北棟の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間 1.8m (6 尺)、桁行は若干不揃いで、身舎の北側の 2 間が 1.66m (約 5.5 尺)、南側 3 間が 1.93m (約 6.5 尺) を測る。南妻柱筋は、南一条大路南側溝 S D 33002 溝心から 19.9m (約 67 尺) に配置する。北妻柱筋は S B 315005 の北妻柱筋とずれるが、南妻柱筋は揃えている。隅丸方形の柱穴掘形は一辺 40cm 前後、柱痕跡も直径約 10cm で S B 315005 とほぼ同規模である。ただし両者が接近しすぎるので、同時期に並存したとは考えにくく、同一の地割りによって配置されたとみる方が妥当であろう。南東隅の柱心は X=-117,558.50、Y=-25,200.60、南西隅柱心は、X=-117,558.475、Y=-25,204.65。また、長岡京左京第 315 次調査 (P. A. 工区 B-2 a 地区) において検出した北西隅柱心は X=-117,546.90、Y=-25,204.675、北東隅柱心は、X=-117,547.05、Y=-25,200.175 である。

掘立柱建物跡 S B 315007 S B 315006 と重複している。南と西に廂をもつ 2 間×3 間の東西棟の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間 1.92m (約 6.5 尺)、桁行 1.96m (約 6.5 尺) を測る。隅丸方形の柱穴掘形は一辺 40cm 前後、柱痕跡は 10cm 程に観察された。南廂柱筋は南一条大路南側溝 S D 33002 溝心から 15.9m (53.7 尺) に位置する。南東隅の廂柱心は、X=-117,554.60、Y=-25,198.680 である。長岡京左京第 315 次調査 (P. A. 工区 B-2 a 地区) において検出された身舎北東隅柱心は、X

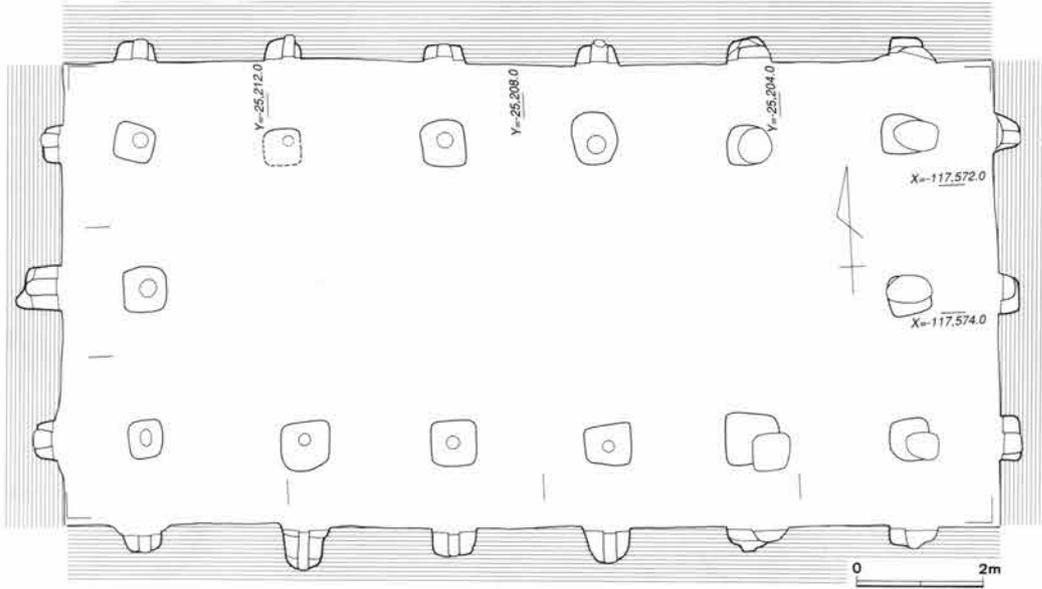
して掘削される幅 35cm 前後の溝 S D 399424 が掘削されていることが確認できた。

b. 南一条四坊四町内の遺構

長岡京期と考えられる建物・溝などの遺構を検出できなかった。

c. 二条四坊一町内の遺構

掘立柱建物跡 S B 315005 一町内の北西に位置する 2 間×5 間の身舎の東側に廂をもつ南北棟の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間 1.48m (5.0 尺)・桁行 1.95m (約 6.5 尺) である。東廂の出は、2.4m (8 尺) を測る。一辺 40cm 前後の隅丸方形の柱穴掘形をもち、柱痕跡は直径 10cm 内外である。S B 315005



第41図 掘立柱建物跡 S B 399518(1/120 L=12.00m)

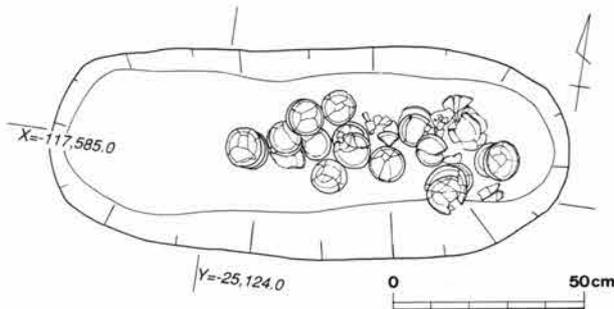
--117,547.00、Y=-25,198.50、西廂北柱心はX=-117,546.525、Y=-25,208.45、西廂南柱心は、X=-117,554.20、Y=-25,208.625である。

掘立柱建物跡 S B 399415(第40図) 2間×3間の身舎に西廂が付設される南北棟の小型の掘立柱建物跡。柱間寸法は梁間2.62m(約9尺)、桁行2.72m(9尺)を測る。柱穴掘形は一辺が60cm内外で、直径18cmほどの柱痕跡が認められた。身舎の北西隅の柱心はX=-117,575.060、Y=-25,223.260、北東隅の柱心は、X=-117,575.64、Y=-25,218.16、南東隅の柱心は、X=-117,583.40、Y=-25,218.20、西廂の南隅柱心はX=-117,583.14、Y=-25,226.10である。

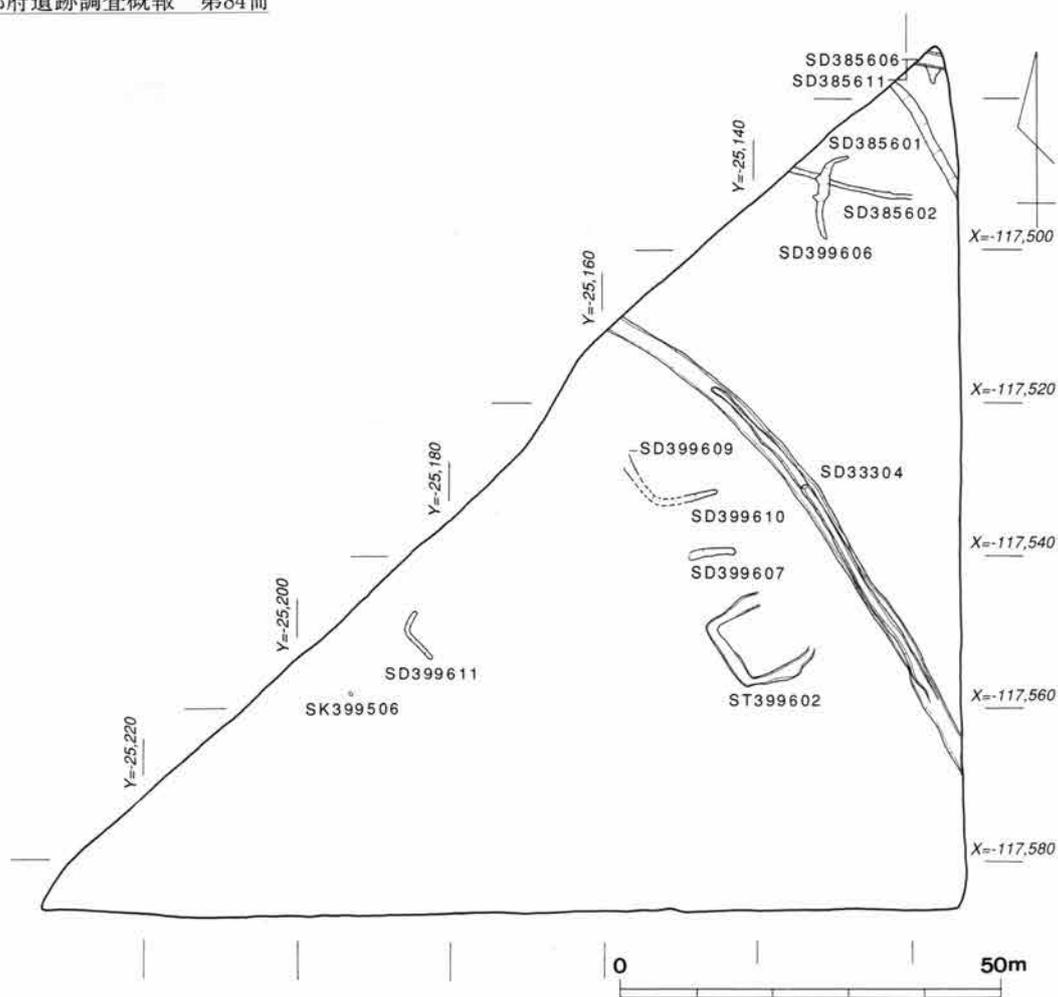
掘立柱建物跡 S B 399518(第41図) 2間×5間の廂のつかない東西棟の掘立柱建物跡。東妻柱筋は全て抜き取り痕が見られた。座標東で南に4度ほど振れる。柱間寸法は梁間2.34m(約8尺)、桁行2.42m(8尺)。柱穴掘形は一辺が70cm内外で、直径20cmほどの柱痕跡が認められた。身舎の北西隅の柱心はX=-117,570.66、Y=-25,214.08、南西隅の柱心はX=-117,575.34、Y=-25,214.22である。東妻柱筋の柱穴は、全て抜き取り痕によって、柱心の位置を確定できない。

土坑 S K 399594(第42図) 調査区の南東隅、一町の東辺中央付近で検出。長軸1.35m・短軸55cmの楕円形で、深さ10cm程の浅い土坑。中央から東半部にかけて土師器皿が27点以上集積し、遺棄されていた(第52図)。

溝 S D 399422 調査区中央で残存長約20mを検出。溝内からの出土遺物は皆無であるが、中世素掘溝との先後関係と、左京二条四坊一町(二条四坊三町)の宅地を東西に正確に2分の1に分割する位置にあることから、長岡京期に掘削されたものと考えられる。北端で、X=-117,541.86、Y=-25,169.24、南端でX=-117,561.84、Y=-25,169.10である。



第42図 土坑 S K 399594土師器出土状況(1/20)



第43図 B-6・B-7地区遺構図(奈良～弥生時代 1/1,000)

溝 S D 399423 調査区中央で残存長30mを検出。S D 399422同様、出土遺物は皆無であるが、中世素掘溝との先後関係や、S D 399422の東、約8.7m(約30尺)に並行して掘削されることから、長岡京期の可能性がある。北端で、X=-117,539.48、Y=-25,160.56、南端でX=-117,569.40、Y=-25,160.52である。S D 399422・399423を両側溝とした町内小路が付設されていた可能性もある。

(4)奈良・古墳時代の遺構(第43図)

溝 S D 33304 本調査地内で全長70mを検出した。調査区内を北西から南東に流下する流路である。幅2.6m、検出面からの最深距離0.5mを測る。2段に掘削される底面を持つ。最深部分では、暗灰色のシルトや粘土の堆積がみられ、流水に伴う埋没が考えられる。上半部分では、黄褐色系の砂質土層が堆積しており、人為的な埋土が行われたものとみられる。長岡京左京362・363次調査(B-6a・b地区)で検出したS D 362201が上流にあるとすれば、おおよそ全長300m足らずを検出したことになる。S D 362201では、T K 209型式以降の須恵器杯身が出土しており、今回の出土遺物と若干の時期差が認められるが、溝の幅や蛇行方向から、同じ溝と断定できる。

溝 S D 385601 調査区の北東隅、北西から蛇行しながら南東へ伸びる溝で、調査区内では、15mを検出した。幅1.2m・深さ50cm前後。断面は逆台形の掘形を呈する。下層では、粘土層・砂層が堆積しており、水流による堆積が認められる。前年度調査した長岡京左京第385次調査(B-

5b・B-8地区^(注8)で、この下流部分が検出されており、全長140mを越える。出土遺物から、古墳時代後期前半の埋没と考えられる。

溝S D 385602 調査区北東隅を西北西から東南東へ直線的に掘削される。調査区では、19m足らずを検出した。遺存状態は悪く、幅20～30cm前後、深さ10cm未満のため、遺物はほとんど出土しなかった。同様に前年度調査区(長岡京左京第385次調査(B-5b・B-8地区)を含めて、100mあまりを検出している。

溝S D 385606・溝S D 385611 調査区の北東隅でわずかに検出した。前年度の長岡京左京第385次調査(B-5b・B-8地区)において北西から東に約80mほど検出された古墳時代後期の溝。幅60～80cm、深さ25cm前後。逆台形に掘削される。S D 385606はS D 385611の埋没後に、それに沿うように、再掘削されている。

(5) 弥生時代の遺構(第43図)

方形周溝墓S T 399602 方形周溝墓の北・西・南辺の周溝の一部を検出した。西辺9.8m・南辺10.4mあまりになる。著しい削平のため、中心主体部は遺存しない。北辺周溝から弥生時代後期土器が出土した(第55図)。

方形周溝墓周溝S D 399607 調査区中央東半、南一条大路南側溝S D 33002南辺で検出した。残存長6.0m・幅80cmが遺存する。深さは6cm足らずで、出土遺物はほとんど見られなかったが、S T 399602周溝同様の埋土から、方形周溝墓周溝の一部と判断した。北側の掘形を南一条大路南側溝S D 33002南掘形が切り込んでおり、溝の底面幅は若干広くなる模様である。

方形周溝墓周溝S D 399609 調査区中央北半、北西から南東に、残存長2m・幅1.2m、深さ20cm足らずのわずかな溝を検出した。S T 399602西辺溝と並行することからも、方形周溝墓周溝残欠と見られる。遺物は出土していない。

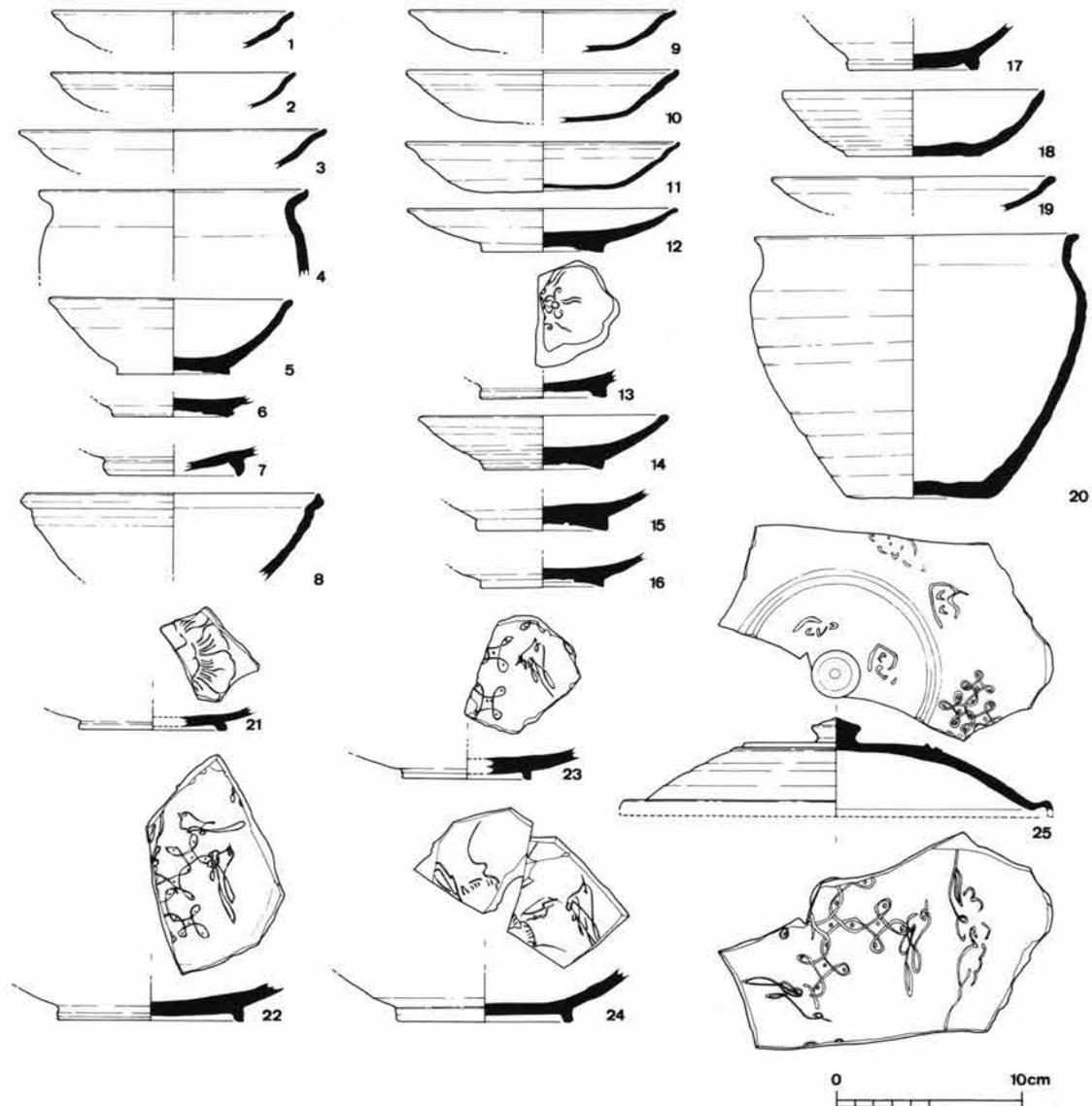
方形周溝墓周溝S D 399610 調査区中央、S D 399607の北側6mあまりの地点でS D 399607に並行する。残存長4.5m・幅60～80cm、深さ15cmに満たない。S D 399610とS D 399607を南北両辺とする方形周溝墓の可能性が考えられる。

方形周溝墓周溝S D 399611 調査区中央西半部分で検出した「く」の字に曲がる溝。残存長8mあまり、幅60cm前後、検出面からの深さ13cm前後を測る。南端から弥生土器出土。方形周溝墓の周溝残欠と考えられる。

4. 出土遺物(第44～55図・図版第36～42)

今回の調査で出土した遺物の総量は、整理用コンテナ・バッド70箱ほどである。

以下に特筆すべき遺物についてのみ、その概要を述べ、その他出土地点・法量などについては、観察表を参考にされたい。



第44図 B-6・B-7地区出土遺物1 (井戸S E 399421・井戸S E 399503・包含層他出土土器 1/4)

(1~8. S E 399421 9~20. S E 399503 24. S D 399599 21~23・25. 包含層)

- 1~3・9. 土師器碗 10・11. 土師器杯 4. 土師器甕 5・6・15・21~24. 緑釉陶器碗
 7. 灰釉陶器碗 8. 須恵器播鉢 12・13. 緑釉陶器皿 14. 無釉陶器皿 16・17. 無釉陶器碗
 18. 須恵器杯 19. 須恵器皿 20. 須恵器鉢 25. 緑釉陶器蓋

(1) 平安時代の遺物

平安時代に属する遺物は、その多くが井戸S E 399421およびS E 399503から出土したものと、B-7地区南西部包含層などから出土している。この他、南一条大路南側溝S D 33002上層から平安時代前期の遺物が出土している。9世紀後半から10世紀前葉頃の遺物が大半を占めており、印章と櫃の出土が特筆しうる。

土器(第44・51図) S E 399421出土土器には、土師器碗・甕・緑釉陶器碗・灰釉陶器碗・須恵器鉢(1~5)などがある。1・3・7・8は、井筒として利用された曲物内から出土しており、4・5は、井戸掘形から出土している。S E 399503出土土器には、土師器碗・杯・緑釉陶器皿・無釉陶器碗・皿・須恵器杯・皿・鉢(9~20)などがある。また、調査地南西部包含層から、陰刻



第45図B-6・B-7地区
出土遺物2
(1.土坑S K399504出土印章
2.溝S D399015出土丸軋)(1/2)

花文の緑釉陶器(21~25)が出土した。21は、底部内面に、脈がやや粗になった二重の花弁を刻するものであるが、その他はすべて特徴的な鳥文を刻する。多くは「井」字状の結紐文を1単位とし、それを上下左右に配置し、刻線で囲まれた部分に刺突を施す。さらにこれを留まり木とみため、周囲四方に一筆書きの簡略化した鳥文を配置させ、基本的な図案とする。一筆書きを特徴とし、鳥文以外は、その図案が何か判断するのが困難なほど、粗雑化した文様となる。本調査地に南接して行われた長岡京左京第333次調査(B-4地区)でも同様の緑釉陶器が数点出土している^(注9)。9世紀第3四半期を遡らないであろう。

このほか、南一条大路南側溝S D33002上層から平安時代の土器群が出土している(第51図1・3・5・7・8・11~19・21~24)。土師器杯・甕、無釉陶器皿・椀、緑釉陶器椀、須恵器杯・壺、黒色土器甕・皿などが出土した。9世紀には側溝が完全に埋まらずに放置されていた状況を推察することができる。

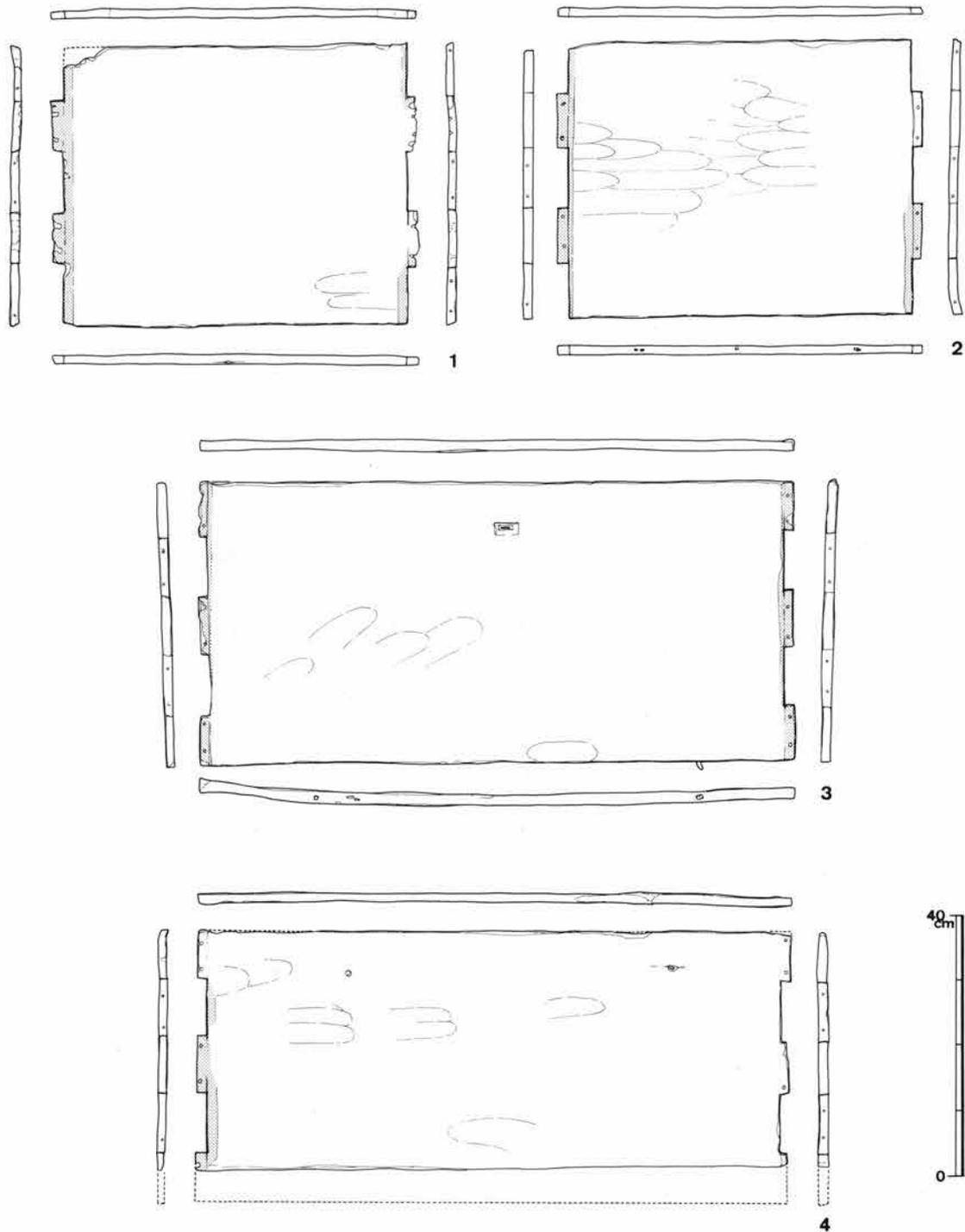
印章(第45図1) 方形有郭の印面に「福」を陽鑄する有孔蒼鈕の銅印。S K399504出土。鈕に平行する辺は、2.8~2.9cm、鈕に直交する辺は、2.6~2.7cmで、わずかに鈕方向に長い印面である。高さ3.25cm。鈕頭には花卉状の稜が5つ配されるが、輪郭の浅いものである。孔はやや偏って穿たれており、直径5mm程である。郭内に収まる「福」は整った字体で、鑄字の深さは最大3.0mm前後となる。先述したように、南一条大路南側溝S D33002上層から平安時代の土器群が出土しており、この銅印も、南側溝S D3302の埋め立て直後に埋置されたと思われる。貞観十年(868)の六月廿八日の太政官符(『類聚三代格』卷17)に、「而案公式令。唯有諸司之印。未見臣家之印。爰有勢諸家皆私鑄作、進官文外、皆踐僭印之」とあり、有勢の諸家は、「養老公式令」では公的には認められていなかった家印を鑄造して、公文書以外に使用していたことが分かる。

石製丸軋(第45図2) 調査地西端、南北方向素掘溝S D399015より出土。上下2.4cm・左右3.5cm、厚さ5mmを測る。有孔、暗灰色を呈する。2孔一組の潜り孔が3組穿たれる。中央上方の潜り孔の穿孔途中に表面を剥離させる。表面は成形時の細かい擦痕が残るが、半艶消し状態の丁寧な仕上げである。黒色系の石製銚具は「養老衣服令」にみる烏油腰帯の代用にあたるものとみられており、六位以下の使用とされる^(注10)。

櫃(第46・47図) 井戸S E399412出土。櫃は、前述したように、蓋と底板が取り外されており、側板四枚のみであった。スギの板目材を使用しており、長側板の表面の板目模様が美しい。四隅で5枚組に組み合わされており、組手の柄部には2つの木製目釘が打たれるが、腐朽が著しい。飾鋸の痕跡はない。黒漆による蔭切が側板組手の稜角に幅狭く施されている。

以下に各板材の状況について述べる。

東側短側板(第46図1) 長さ55.2cm・高さ42.8cm・厚さ1.6cm前後。表面からみて、左上の一



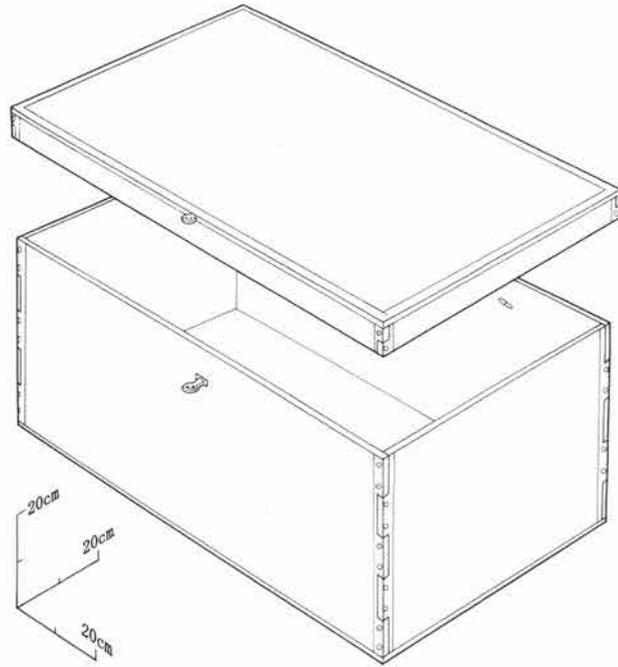
第46図 B-6・B-7地区出土遺物3 (井戸SE399421出土櫃)(1/10)

1.東側短側板 2.西側短側板 3.北側短側板 4.南側短側板

隅が欠損する。また、右側組手の柄部の腐食が著しい。蔭切の漆の痕跡は比較的明瞭ではあるが、表裏面の腐食が著しく、加工痕はほとんどみられない。わずかに表面右下部分に水平方向の鉋による削り痕がみられる。下端面の釘孔痕跡は確認できない。

西側短側板(第46図2) 長さ55.4cm・高さ42.2cm・厚さ1.5cm前後。ほぼ完存している。表面の左右端には、蔭切が明瞭に残るが、左側の蔭切は幅2.4cm前後、右側の蔭切は幅2.8cmと若干相違がある。左側に組み合わせる北側長側板の厚さが1.7cm前後であるのに対して、右側に組みあ

わされる南側長側板の厚さは1.2cm程しかない。そのため、西側短側板の左側組手の柄部の出も1.5～1.6cm、右側組手では、1.3～1.4cmとなっている。つまり、板材の厚さの差による左右不对称感を視覚的に解消するための工夫として蔭切の幅を意識的に増減させたものとみられる。表面には鉋による水平方向の削り痕が明瞭に看取される。『春日権現験記絵巻』などにみられる木工作業のように手斧ではつた痕を鉋で仕上げたのであろう。下端面には、5つの釘孔がある。左側に近接して2つ穿たれたものは3.5mm×3mm程の長方形、右側にも同様に2つ穿たれ、3.0×2.5mm程の長方形の釘孔痕跡が認められる。中央に遺存する釘孔は、板材の腐朽により、不明瞭であるが正方形に近いものであったようにみられる。

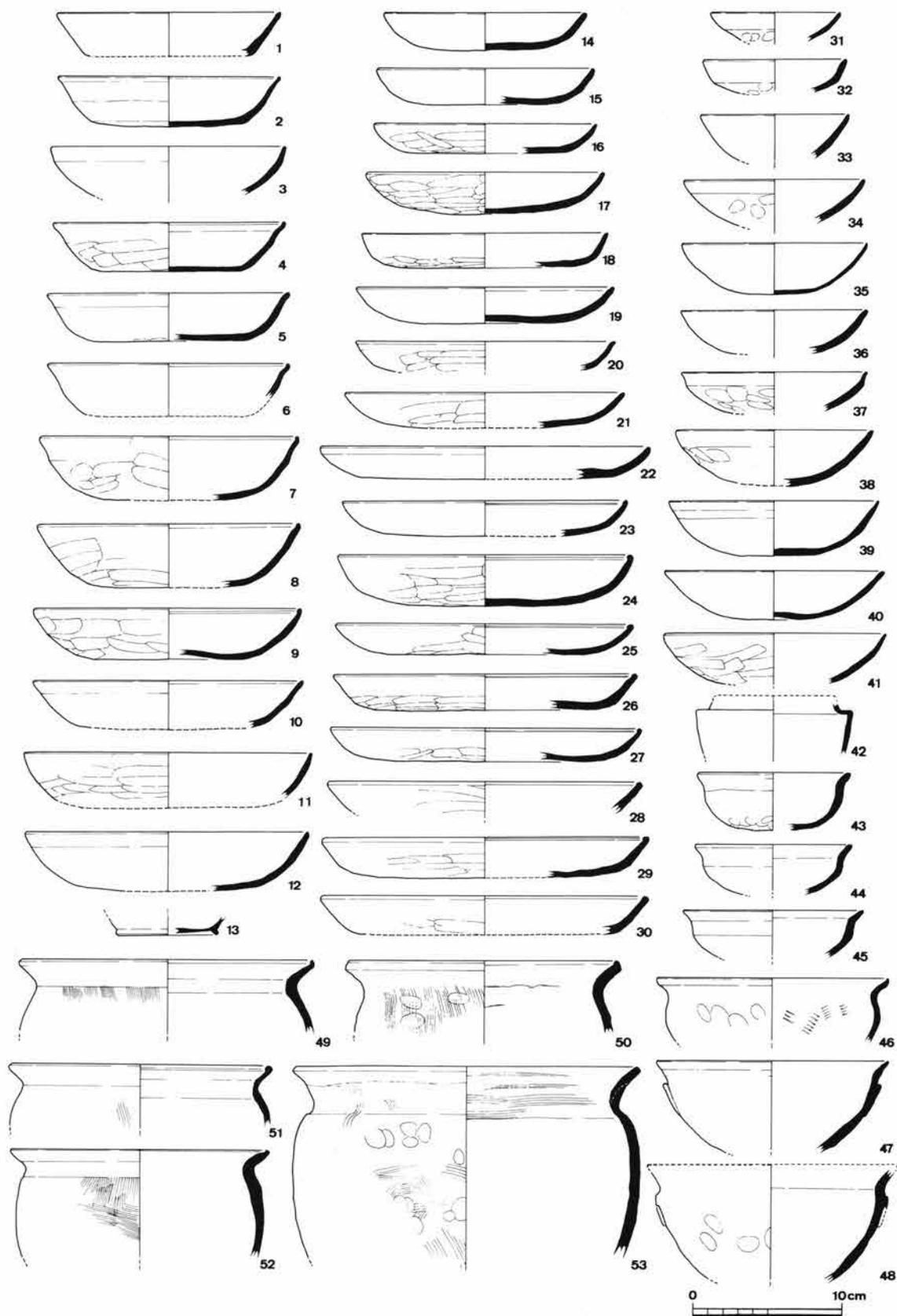


第47図 井戸S E 399421出土櫃復原想定図(約1/15)

北側長側板(第46図3) 長さ90.2cm・高さ43.6cm・厚さ1.7cm前後。ほぼ完存。蔭切は2cm前後と他よりも短くなる。上半中央に鑿子の弦を通すための壺金具をとりつけた長方形の孔がある。孔は横2.3cm・縦0.7cm前後で、その回りに長さ3.6cm・高さ1.8cmの方形座金をとりつけた圧痕が認められる。表面は右上がり方向の鉋の削り痕が認められるが、それほど顕著ではない。下端面には底板を打ちつけた釘が左右に遺存している。どちらも横断面が5.0mm×4.5mm前後の正方形に近い隅丸長方形の角釘である。

南側長側板(第46図4) 長さ90.1cm・高さ(残存長)36.6cm・厚さ1.1～1.6cm前後。下端部欠損。蔭切は右側では明瞭ではないが、左側では3.0cm前後の幅となる。上半部左右にひとつずつ、蓋を連繋するための壺金具をとりつけた円形孔がみられる。しかし座金や裏面の釘隠しの痕跡は認められなかった。表面の中央部分から左上にかけてわずかながら水平方向の鉋の削り痕が認められる。下端部が欠損しているため、底板との接合状況が不明である。

取り去られた蓋は壺金具の孔の位置が上端から5.0～6.0cmであることから、甲板の厚さ推定1.5cmを加算し、壺金具の連繋部を差し引けば、おおよそ、高さ7cm前後の被せ蓋造りとなる。四隅の組手はおそらく2枚組で、身同様、蔭切が施されてあったであろう。また、底板は側板の下端面を覆う平底造りで、長側の左右に2隻、短側の中央に1隻、計6隻の角釘が打ちつけられていたものとみられる。ただし、西側短側板の下端面には、他に小さな長方形の釘孔が2つずつみられたことから、底板の破損・脱落に伴い、修繕が行われた可能性がある。正倉院藏品と比べれば、長側と短側の比率はあまり変わらないが、長・短側長に対する深さの比率が最も大きい部類に入る。つまり、平面規模からすれば、深い櫃の部類に入るとみて良いであろう。



第48図 B-6・B-7地区出土遺物4(南一条大路北側溝S D33003下層出土土師器 1/4)

- 1~12. 杯A 13. 杯B 14~30. 皿A 31・32. 小形椀 33~36. 椀A 37. 椀D
 38~41. 椀A 42. 壺E 43~45. 壺C 46~48. 壺B 49~53. 甕A

(2)長岡京期の遺物

長岡京期の遺構では、南一条大路北側溝 S D33003の出土遺物が注目しうる。出土位置とその堆積状況から、下層の土器群と上層の土器群に分離することができ、長岡京期における2時期の土器資料を得ることができた。下層の土器群(第48図・第49図1～25)は側溝底面にある程度、有機質土層が堆積した後に廃棄され続けた状況を想定することができ、条路側溝掘削からある程度、時間を経て堆積し始めたものと思われる。一方、上層土器群(第49図26～49・第50図)は、側溝検出高とはほぼ同じレベルに集中しており、条路側溝が完全に埋没する際に意図的に廃棄された一括性の高い土器群と考えられる。また、南一条大路南側溝 S D33002でも、あきらかに粘質性の高い下層から出土した土器群(第51図4・6・9・10・20・25)と砂質～砂礫質の上層から出土した土器群(第51図1～3・5・7・8・11～19・21～24)に弁別できる。上層の土器群は、側溝検出面直下で出土したもので、平安時代前期に位置づけられる。9世紀には側溝が完全に埋まらずに放置されていた状況を推察することができる。

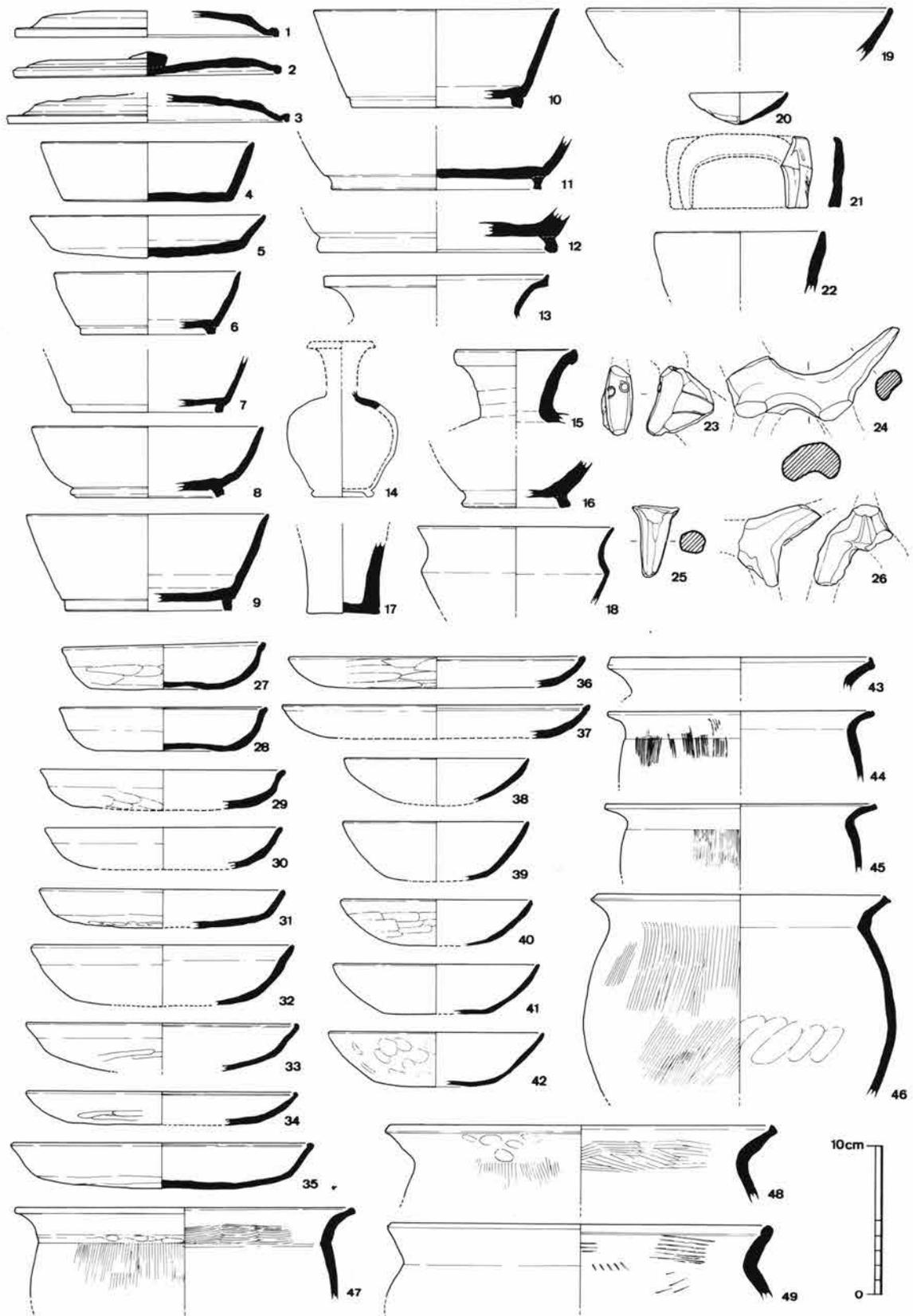
南一条大路北側溝 S D33003下層出土土器(第48図・第49図1～25) 土師器には、杯A・B、皿A、椀A・D、壺B・C・E、甕Aなどがある(第48図)。

杯Aには、口縁部が外側上方にのび、端部がわずかに外湾して内側に丸く巻き込むように肥厚するA形態^(注11)(2・4・6・7・8)がある。2は、底部から口縁部下半にしかヘラケズリを行なわない。4も口縁端部のナデによってケズリが端部にまで及ばない。7・8は、口縁端部までヘラケズリが及ぶc手法である。また、口縁部が内湾する弧を描くB形態(3・9・11・12)は、概ねc手法による。B形態の杯Aは、A形態を示すものよりもケズリの単位が広い傾向にある。さらに、口縁下半が内湾、上半が外湾して、肥厚せずに丸く収まるCa形態(長岡京左京第120次調査分類)(5・10)がみられる。杯B(13)は底部の細片が出土した。

皿Aは、口縁端部が丸く収まるもの(14～18・20～22)と内側に丸く巻き込むように肥厚し、端部内面に凹線状の段が形成されるもの(23～30)に大別される。痕跡的に端部内面に凹線状の段が形成されるもの(19)もある。19はe手法で、淡桃色の特徴的な色調である。A形態の口縁部をもつ26は、b'手法。B形態の口縁部をもつもの(14～18・21～25・27～30)は、多くがc手法による。16は、底部を平坦に削り、口縁部と底部が明瞭に分かれる。内・外面ともに淡桃色系の特徴的な色調である。口縁部下半は内湾するが、口縁端部が外反し、内傾する端面をもつもの(20)がある。杯Cに類似した特徴的なDa形態(長岡京左京第120次調査分類)。淡橙白色に近い色調を呈する。

椀Aにも、内湾する弧状の断面形をもつB形態^(注12)(33・35・38・39・41)と、口縁上半がわずかに外湾し、丸く収まるCa形態(長岡京左京第120次調査分類)(36・40)がある。41はc手法が明瞭である。

壺E(42)は、口縁端部が欠損するが、肩部から口縁部にかけての屈曲が明瞭で、胴部も直線的な形態を持つ。壺C(43～45)は、口縁直径10～12cm、椀状の体部と小さく外反する口縁部を持つ。壺BのC形態とされた小形品である。壺B(46～48)には、口縁部と胴部の境界が強く締まるもの(46)と、胴部上半が締まらず、椀状の体部をもつもの(47)、いわゆる墨書人面土器タイプで、底部型作りによって、底部と胴部の境界が屈曲するもの(48)がある。後二者は把手の形骸化したボ



第49図 B-6・B-7地区出土遺物5(南一条大路北側溝S D33003下層・上層出土土器類 1/4)

(1~25.下層出土須恵器・黒色土器・模造竈・土馬 26~49.上層出土土師器・土馬)

- 1~3. 杯B蓋 4. 杯A 5. 皿A 6~11. 杯B 12・16. 壺L 13・18. 壺H 14. 壺M
 15. 横瓶 17. 壺G 19. 黒色土器杯 20・21. 模造鍋・竈 22. 焼塩壺 23~26. 土馬
 27・28・30・32・33. 杯A 29. 杯C 31・34~37. 皿A 38~41. 椀A 42. 椀C 43~49. 甃A

タン状粘土を貼り付ける。

甕Aには、口縁端部が内側に丸く巻き込まれ、肥厚した形態を持つA形態(長岡京左京第120次調査分類)(51・52)と、上方につまみ上げられるB形態(同分類)(49・50)、粘土紐の接合によって強く外反する口縁部に端面をもつもの(53)がある。頸部の強いナデによって肩部の段が明瞭になる。内・外面とも赤褐色、硬質な焼成である。全て球形に近い丸底のものである。

須恵器には、杯A・B、杯B蓋、皿A、壺G・H・Lなどがある(第49図1～18)。長岡京左京第196次調査分類によると、杯Aには厚みのあるT形態(4)がある。杯B(6～12)には、H形態(6・9)、T形態(10)、N形態(8・11)がある。皿A(5)は、外湾するG形態である。壺L(12・16)は小形・大形のものがある。壺G・H(17・18)は遺存状況が悪く、表面は磨滅する。

このほか、黒色土器(19)、小形模造鍋(20)、小形模造竈(21)、焼塩壺Ga類(22)、土馬(23～25)などが出土した。土馬(23)の頭部は、楕円形の粘土板を頸部に挟み込んで成形する。目は、竹管による押捺。粘土紐の貼り付けによって手綱が表現されている。

南一条大路北側溝SD33003上層出土土器(第49図26～49・第50図) 土師器には、杯A・C、皿A、椀A、甕Aなどがある(第49図27～49)。

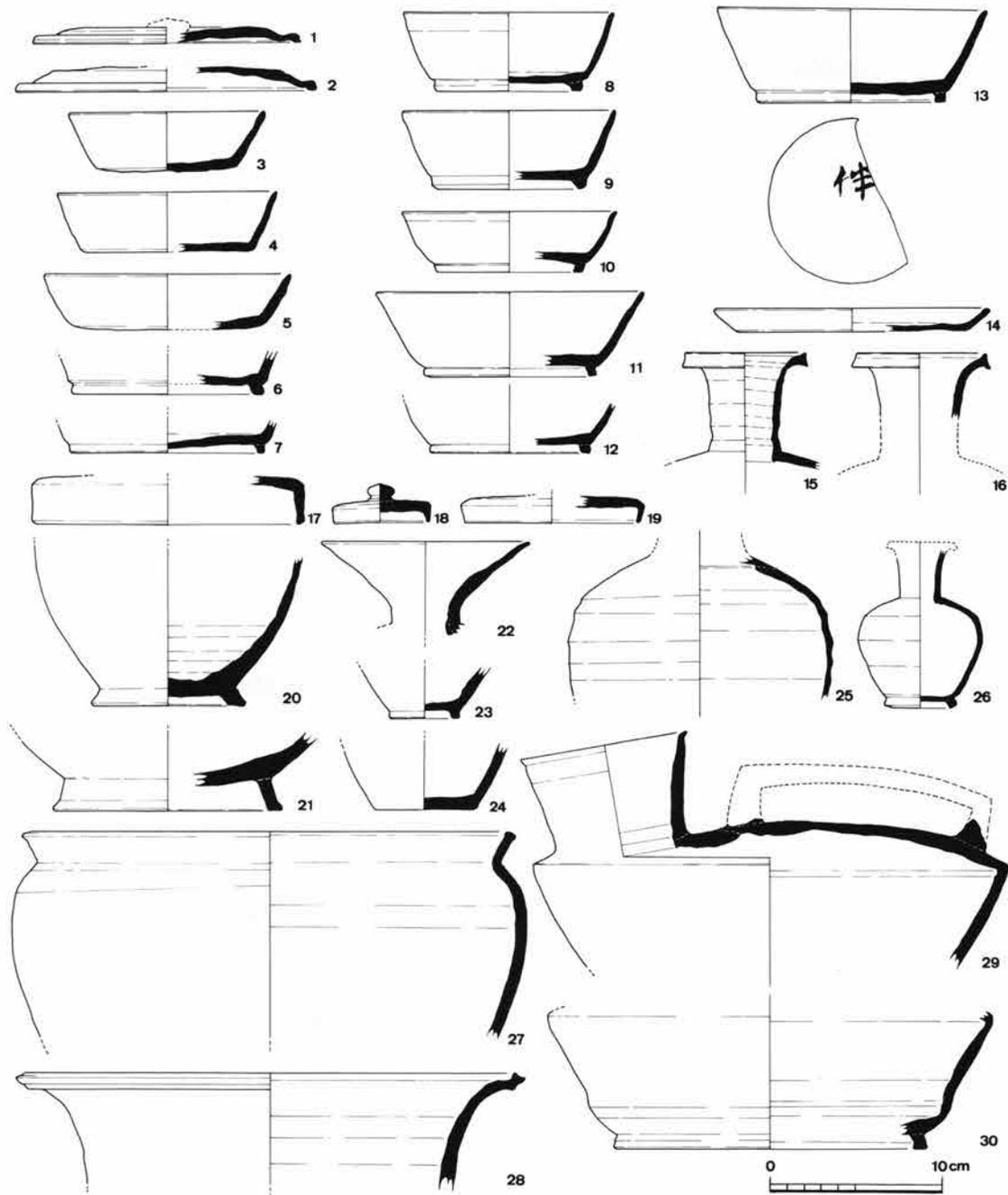
杯Aには、口縁部が外側上方にのび、端部がわずかに外湾して内側に肥厚するA形態(27・28・33)がある。27・28は、前代的な古相の形態を示しているが、端部の肥厚が著しく退化している。焼成が悪く、胎土も精良ではない。また、端部を外反させるか、内傾した端面を持つCa・Da形態(長岡京左京第120次調査分類)(30・32)がある。口縁部上半を強く外反させる杯C(29)がある。長岡京期に典型的なB形態c手法のものは見られない。

皿Aは、口縁部が外側上方にのび、端部が外湾して内側に明瞭に肥厚するA形態(35・37)と、口縁部が内湾する弧を描き、小さく肥厚して端部内面にわずかな段が形成されるB形態(34・36)に分かれる。35・37はb手法、34・36はc手法であり、形態差と調整手法に相関が窺われる。

椀Aは指頭圧痕のあるもの(42)、ヘラケズリの観察できるもの(40)があるが、概して磨滅が顕著で調整が明確に判断できない。底部から口縁部下半に指頭圧痕を残すe手法の椀Cもあるが、磨滅が著しい個体が多くヘラミガキの有無については確認できなかった。

甕Aも、口縁端部が内側に丸く巻き込まれ、肥厚した形態を持つA形態(長岡京左京第120次調査分類)は見られず、端部を巻き込まずに内側上方に突出させるB形態(43・48)やわずかに上方に突出させるC・E形態(44～48)が主流となる。また、口縁端部内側に凹線状のわずかな段のみとなるもの(49)がある。

須恵器には、杯A・B、杯B蓋、皿A、壺A蓋、壺L、鉢D、平瓶などがある(第50図)。杯Aには、長岡京左京第196次調査分類によるT形態(3・5)とH形態(4)がある。杯Bには、H形態(8・10・13)、K形態(9)、T形態(11)などがある。13の底部外面には、「伴」の墨書が見られた。皿A(14)もT形態である。壺A蓋には大形品(17)・中形品(19)・小形品(18)があり、17は、特に外面に暗緑色の自然釉が付着する優品である。壺Lは口頸部(15・16)と胴部(25)がある。このほか、漏斗状に広がる壺口縁(22)がある。鉢D(27)は、口径27.6cmの中形品。色調は明淡灰色

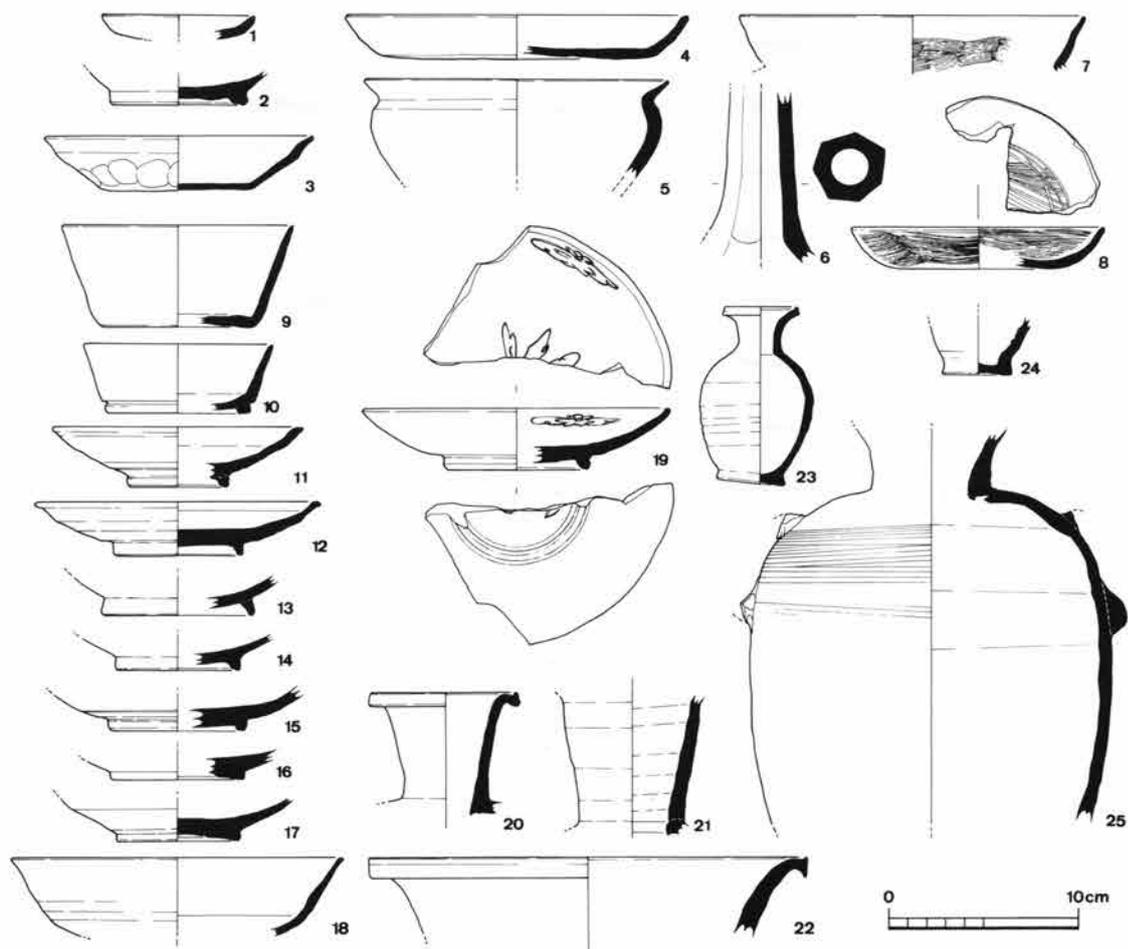


第50図 B-6・B-7地区出土遺物6(南一条大路北側溝SD33003上層出土須恵器 1/4)

- 1・2. 杯B蓋 3～5. 杯A 6～13. 杯B 14. 皿A 15・16・20・25. 壺L
 17～19. 壺A蓋 20～24. 壺 26. 壺M 27. 鉢D 28. 甕A 29・30. 平瓶

を呈し、焼成不良。甕A(28)は、口径28.6cmの中形品。口縁部の外傾する端面は強いナデによって凹面を作る。外面に暗緑色の自然釉が付着する。平瓶(29・30)には肩部最大径が30cm足らずの大形品が2点ある。暗緑色系の自然釉が付着する。

南一条大路南側溝SD33002下層出土土器(第51図4・6・9・10・20・25) 多くは、側溝床面近くに投棄された遺物である。土師器皿A、高杯、須恵器碗A、杯B、壺L・Nなどがある。杯A(4)は、弧状に内湾するB形態。b手法か。高杯(6)は柱状部のみであり、7面取りに復原できる。芯棒に粘土を巻き上げるb手法。碗A(9)は、直線的な口縁を持つT形態。杯B(10)は、



第51図 B-6・B-7地区出土遺物7(南一条大路南側溝SD33002出土土器 1/4)

(4・6・9・10・20・25.下層出土土器 1~3・5・7・8・11~19・21~24.上層出土土器)

- 1.土師器皿 2.土師器椀 3.土師器杯 4.土師器皿A 5.土師器鉢 6.土師器高杯
 7.黒色土器甕 8.黒色土器皿 9.須恵器椀A 10.須恵器杯B 11・12・19.無釉陶器皿
 13・14.無釉陶器椀 15~18.緑釉陶器椀 20.須恵器壺L 21.須恵器壺頸部 22.須恵器甕
 23・24.須恵器壺M 25.須恵器壺N

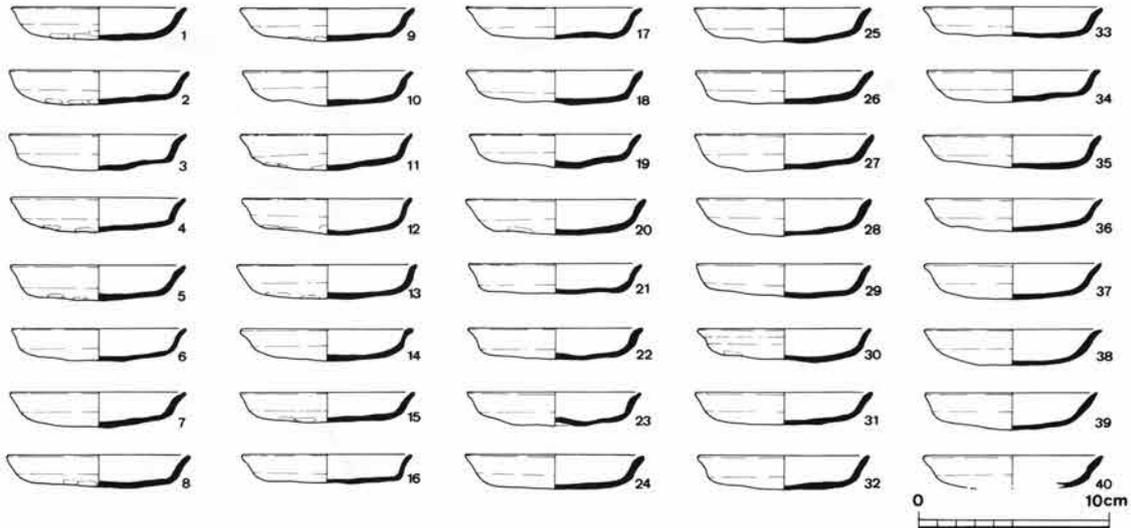
外湾するG形態。壺L(20)は、口頸部のみである。口縁部端部の外反・屈曲が著しい。壺N(25)は、口縁部・底部を欠損する。口縁部は強く外反する。胴部は卵形に近く丸みを帯びており、内湾しながら平底の底部に続く類例の少ない器形を持つ。南側溝の西端、r区側溝底面から出土。

土坑SK399594出土土器(第52図) 皿C(1~40)があり、口径1/5以上の個体40点を図化した。すべてe手法で、39は口縁部が外反せず、そのまま立ち上がる。40は、やや軟質に仕上がる。

(野島 永)

瓦塼(第53図) 出土した瓦磚類の中から、特徴的なものについて述べたい。

第53図1はいわゆる久米寺式の軒平瓦(奈文研6561型式)で、本来6重弧文に○×のスタンプと指頭によるひねりを加えるものである。南一条大路南側溝SD33002出土。凹面は粗いヨコナデを施し、ナデが及ばない部分には布目と粘土板の合わせ目(S)が観察される。重弧文の間隔からすると、6561標式例より一回り小さなものである。焼成は堅緻で青灰色を呈し、胎土は精良である。これまでは久米寺をはじめとした飛鳥の諸寺院、藤原宮、平城宮、興福寺、植槻寺と、大阪

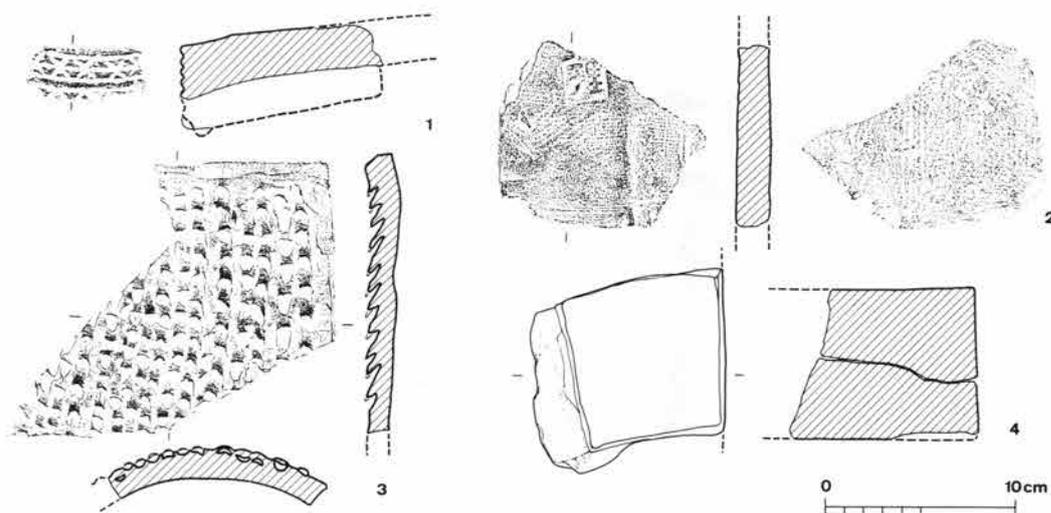


第52図 B-6・B-7地区出土遺物8 (S K399594出土土師器 1/4)
1~40.土師器皿C

府河内寺でのみ出土が知られていた。顎部の形態は通常、段顎で、河内寺例のみ曲線顎に作るが、本例は通例のごとく段顎と思われる。だとすれば、藤原宮に供給されたものが、平城宮を経て長岡宮にもたらされた可能性も考えられるが、宮域から離れた当地で出土する理由は分からない。

2は平瓦片である。南一条大路南側溝S D33002出土。焼成は堅緻で灰色を呈し、胎土には径3~5mmほどの細礫を若干含む。凸面には縦位の縄叩きが残りに、離れ砂が認められる。凹面には布目と糸切り痕が残りに、粗いヨコナデを施した後、縦位置に「理」字の刻印を押す。この刻印は平城宮分類の「理」iと同印である。^(注13) 両端を欠損しているため、広端、狭端のいずれを上としているかは不明である。「修」・「理」の刻印瓦は、平城京では専ら宮の大垣や宮内築地で出土し、長岡京でも同様の施設で再利用されていることが指摘されているが、その点で、1の久米寺式軒平瓦もまた、藤原宮で同様の出土傾向を示すことは注目して良からう。^(注14) つまり、第53図1と2の遺物は別々に当地にもたらされたわけではなく、ともに長岡宮某所に葺かれていたものが一括して運ばれてきたものではなかろうか。^(注15)

3は、南一条大路S D33003から出土したもので、平瓦とすれば、狭端側の隅角部分の破片である。凸面は平滑にナデた後、端縁・側縁を縁取るようにユビナデし、ペン先状に斜めに切断した直径7mm前後の竹管状工具で、一面に刺突を施す。刺突は、広端側から凸面に対して30~50度前後の角度で縦方向に連続して施され、1列ごとにペン先状工具の切断面を上下反転させる。凹面は全面に回転利用の強いヨコナデを施し、狭端縁をヘラケズリする。このヨコナデは、瓦よりも須恵器の製作技術に類する。布目・模骨痕・叩き目など、瓦特有の具体的な製作技法を窺わせる痕跡は一切認められないが、凹面のヨコナデが回転利用であることからして、粘土円筒の分割によるものと推察される。焼成は堅緻で暗青灰色を呈し、胎土は極めて精良である。同様に凸面に斜孔を施す瓦は、長岡京東二坊大路西側溝(二条大路(三条条間小路)交差点)から出土している。^(注16) 厚手の丸瓦で、凹面にはやや粗い布目と糸切り痕が観察される。断面長方形の棒を斜めに切断した工具を用い、3列ごとに刺突の向きを約90度変えているなど、細部に差異が認められるが、基



第53図 B-6・B-7地区出土遺物9(南一条大路両側溝S D33003・S D33002出土瓦磚 1/4)
1・2・4.南一条大路南側溝SD33002出土瓦磚 3.南一条大路北側溝S D33003出土瓦

本的には凸面にペン先状工具によって斜孔を連続刺突し、かつ、列単位で刺突方向を変えていく作業に強い類似性を窺うことができる。このほか、渤海上京龍泉府からも類例が出土している^(注18)。

4は磚である。南一条大路南側溝S D33002出土。厚さ8.0cm。焼成が悪く、やや軟質であるため、磨耗によって表面調整などは不明である。淡灰褐色を呈し、胎土は精良である。ほぼ二等分割するように割れて出土したことから、何らかの目的で搬入され、加工されたと思われる。

調査区からはこの他、軒平瓦・平瓦・丸瓦が出土しているが、軒丸瓦はない。軒平瓦は瓦当を欠き、顎部も剥離しているものであるが、剥離の状況から段顎を有していたものと思われ、概ね8世紀前半より以前の所産と考えられる。

(堀 大輔)

木簡(第54図1・2) 2点の木簡(1・2)は、ともに南一条大路南側溝S D33002から出土。南一条大路南側溝は長岡京期に再度掘削されており、新しく掘削された側溝の下層に位置する。1は、k区西端最下層(標高11.220m)、2は、1区東端下層(標高11.332m)から出土した。

1・是是是是是□□是

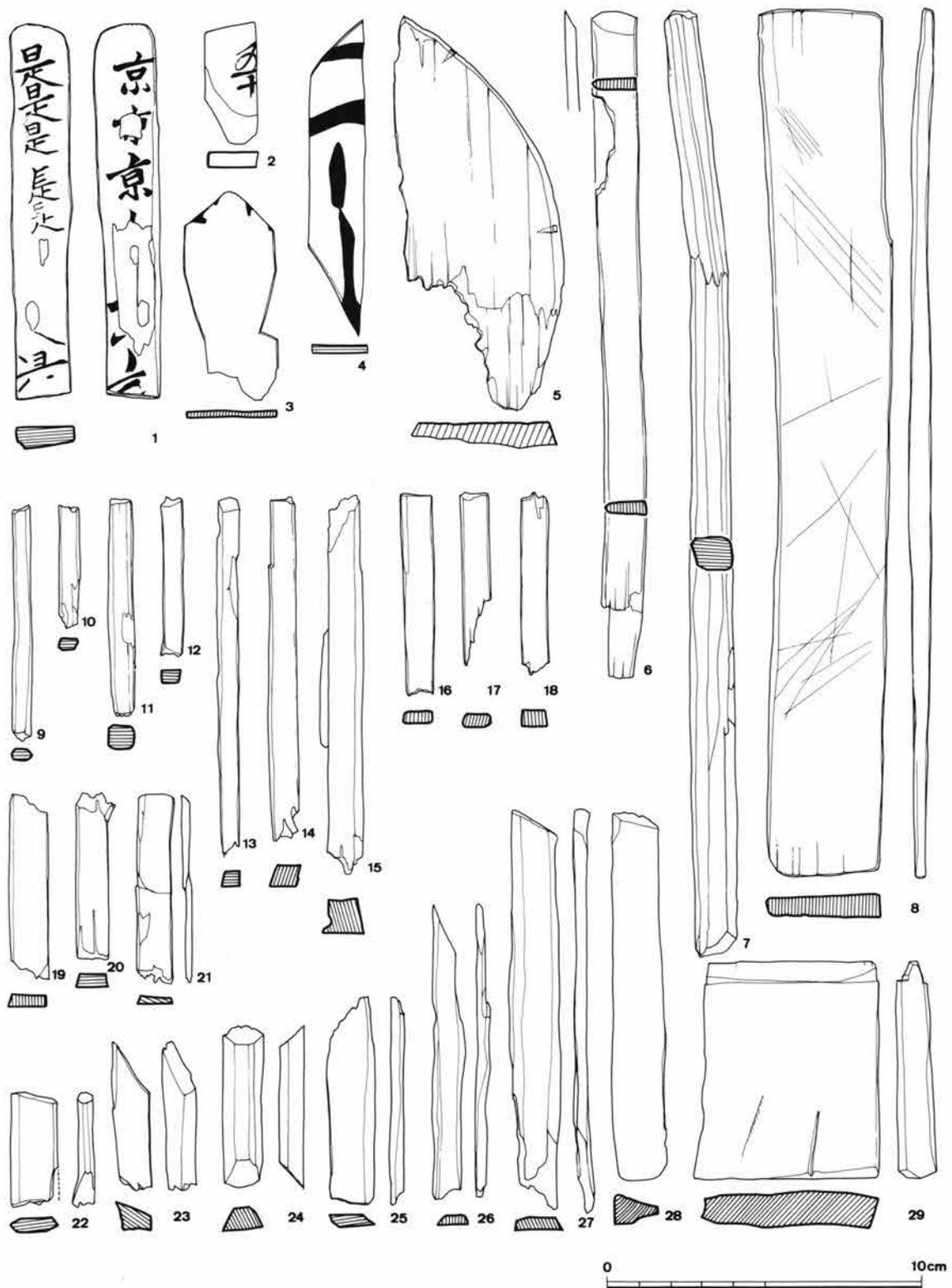
・京京京□京京 (121)×20×07mm 板目 081

表裏にそれぞれ「是」、「京」字を一列に書いた習書木簡である。上下端が折損しているため型式を確定できないが、遺存部分は短冊形を呈する。「是」と「京」とは筆の太さが異なり、あるいは別筆かと思われる。また、「京」は字の全体が分かるものが少ないが、三字目は字体を変えて「京」に作り、その四画目の運筆も一字目と異なる。長岡京左京第120次調査S D12028で、同じように一列に「・□□ 是是是」とした習書木簡が出土しているが、本例の方が繊細な字体である。

2 五十□ (40)×(17)×05mm 081

圭頭のものと思われる。下端は黒く焦げ、本例はその焼け残りの部分である。「五」の運筆は、長岡京期では珍しい。長岡京左京第22次調査S D1301でも、「五十」の墨書例がある。

人形(第54図3・4) 3は、残存長6.7cm・頭部長4.5cm。頭部幅2.9cm。顔を墨描きしない。



第54図 B-6・B-7地区出土遺物10(南一条大路両側溝S D33003・S D33002出土木器 1/2)
 (1~28.南一条大路南側溝S D33002出土木簡・木製品 29.南一条大路北側溝S D33003出土木製品)
 1・2.木簡 3・4.人形 5.円形曲物底板 6・7.棒状加工品 8.木筒状加工品
 9~13.箸状木製品 14~21.棒状加工品 22~29.加工材

顔の上方からL字状に頸の切り欠きを行うBタイプのもので、延暦八年以降に主流となる型式である。^(注19)南一条大路南側溝S D33002 n区最下層出土。4は、人形の顔側辺部である。墨描きによる顔の表現がみられる。残存長9.9cm。肩部以下が欠損しているが、全長50cmを超える大形品であろう。南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。

曲物(第54図5) 直径18cm前後に復原される底板。厚さ7mm。側縁2か所に底板面に平行して6mm前後の木釘孔が穿たれる。側縁は斜めに切り落とされ、留底に作る。2つの木釘孔は復原しうる底板の中心に対して43°ほど隔たることから、全周で8つの木釘が打たれていたものとみられる。南一条大路南側溝S D33002 l区下層出土。

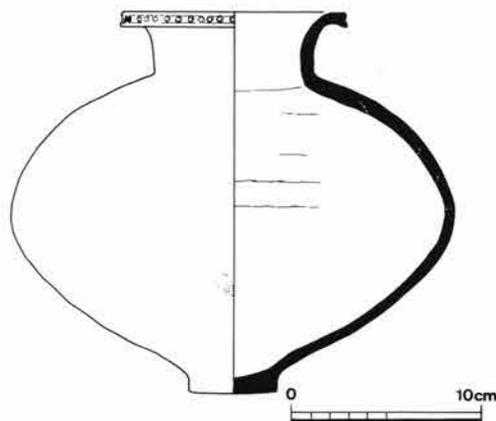
木製品(第54図6～8) 6は、残存長21.4cm・幅1.3cm、厚さ4mm前後を測る。上端は、刀子で弧状に成形される。表面には墨痕がみられるが、文字にはならない。南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。7は、残存長29.9cm、上半で折れて出土した。一辺1.0～1.4cmの隅丸方形の棒状木製品。隅角は鋭利な刀子で面取りが施されている。上・下端とも折損。南一条大路南側溝S D33002 r区下層出土。8は、木筒状木製品。全長27.5cm・上端幅4.0cm・下端幅3.5cm。上端はキリ+ケズリによって成形。表面には直線の非常に鋭利な刃物痕がみられる。南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。

箸・箸状木製品(第54図9～13) 一辺6～8mm前後の断面規矩形の棒状木製品。9～11は、隅角の丁寧な面取りが行われることから箸と判断した。9は、面取りによって断面が楕円形に近いものとなる。12・13は隅角の面取りが行われない。全て上・下端は折損。9・11は南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。10・12・13は同m区下層出土。

加工木(第54図14～29) 14・15は、断面平行四辺形に近い。側面四面とも刀子で切り裂いたようである。14は、南一条大路南側溝S D33002m区、15は同k区下層出土。16～18は、断面長方形で、16・17は隅角を面取りする。籌木か。16～18は南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。19～25は、上端をキリ・オリ・ケズリで切断・成形。22・25・28はキリ+オリ、23・24・26・27はキリ、24は上下端を鋭利な刃物で切断する。29は直角に切り込み、そこから斜めに切り込んで切断、ケズリによる成形する。22～24・26・27・28は、南一条大路南側溝S D33002 k区下層出土。25は同n区下層、27は同l区下層、29は南一条大路北側溝S D33003 p区下層出土。

(3) 弥生時代の遺物

弥生土器(第55図) 方形周溝墓S T399602北辺周溝より出土。口縁端面は、凹線一条に竹管による刺突を施す。剥離のため、調整は不明瞭であるが、ハケ後ナデ消す。上半部は内面に接合痕が観察できる。底部は円盤充填か。色調は乳褐色。後期後半のものである。

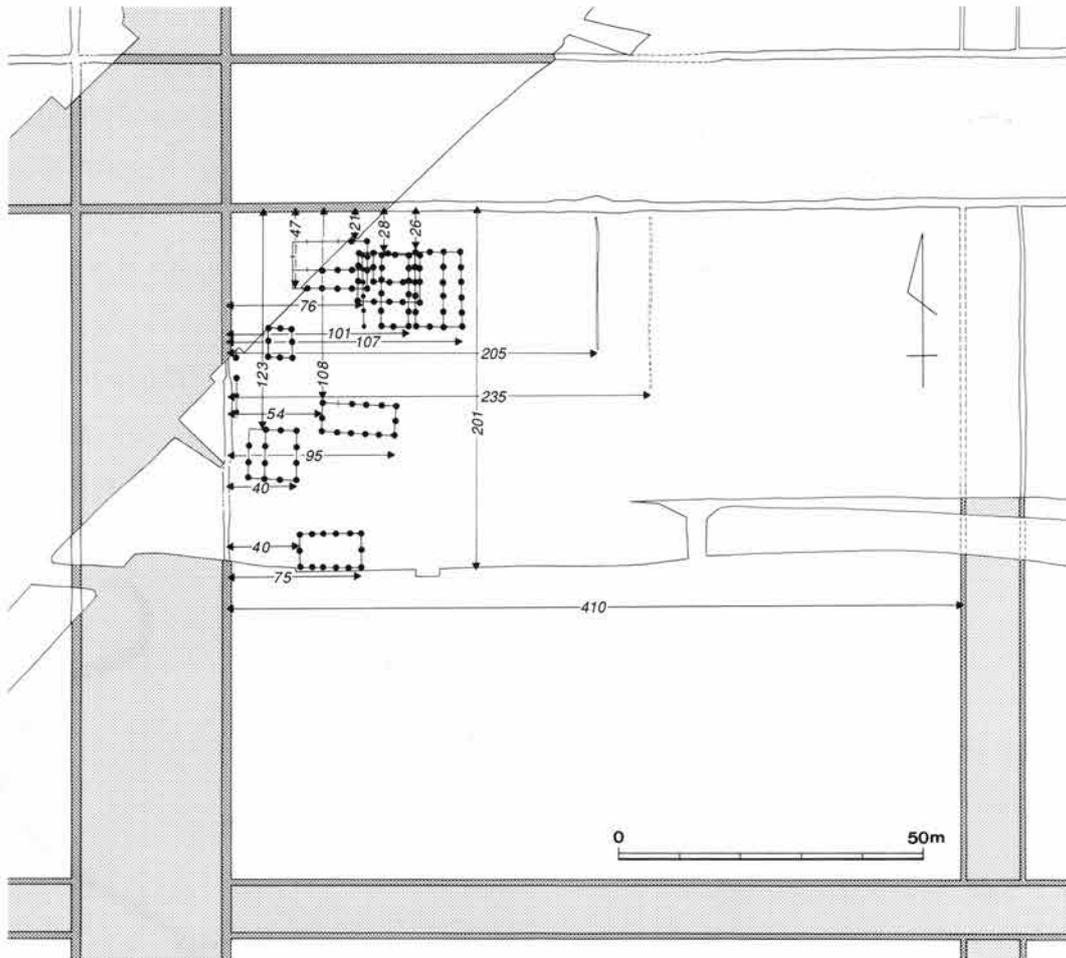


第55図 B-6・B-7出土遺物11
方形周溝墓S T399602出土土器 1/4

5.ま と め

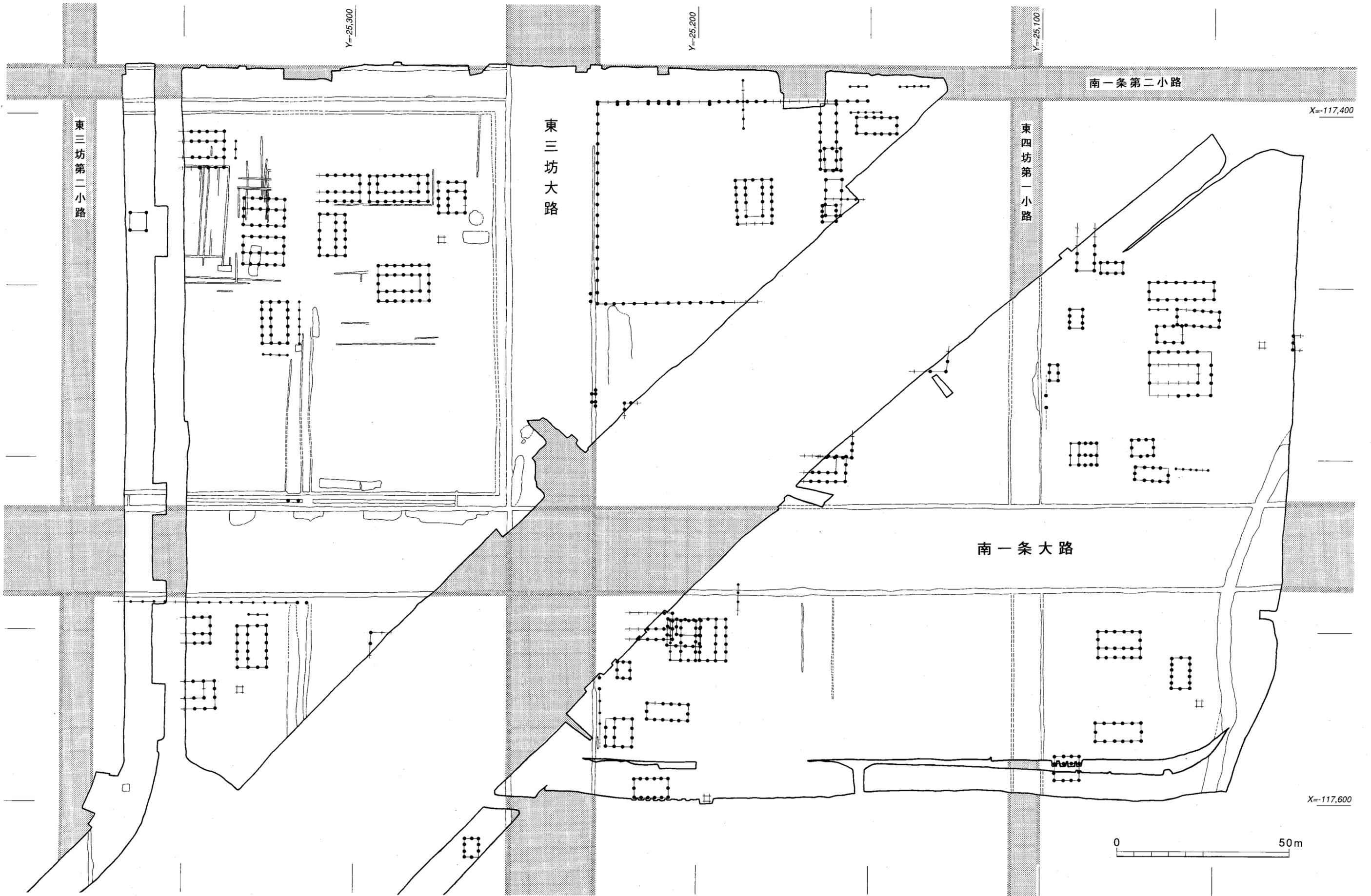
今回の長岡京左京第399次調査(B-6・B-7区)は、名神京都桂川パーキング・エリア調査地(P.A.工区)における最終調査区であり、これをもって全ての発掘調査を完了することとなった。最終段階まで不明であった左京二条四坊一町(二条四坊三町)の規模と宅地利用が判明した。

本調査区では、左京二条四坊一町の北半部分を調査したことになる(第56図)。一町の東西は、東三坊大路東側溝 S D315003が、Y=-25,230.10(X=-117,570.00)、南一条四坊五町西辺で検出された東四坊坊間第1小路西側溝 S D385553が、その南端でY=-25,108.68(X=-117,512.0)であることから、側溝心々間で121.42m(410尺)を得る。両側溝の内側5尺に宅地外郭築垣が存在したとすれば、宅地の東西幅は400尺となる。また、一町の南北は、南一条大路南側溝 S D33002の1点、X=-117,538.70(Y=-25,180.00)と、二条三坊十六町南辺西端2か所で検出した二条条間第1小路北側溝(S D33103(X=-117,649.00)・S D26713(X=-117,648.70)から、推定110.30~110.00m(約372尺)を得ることができる。宅地の南北幅は東西幅に比べて著しく短いことがわかる。南一条大路の北側の宅地で、宅地の南北幅が条路側溝心々間で400尺に計画される点とも異なる。しかし、二条三坊十六町の北辺西側の南一条大路南側溝 S D33002(X=-117,539.7(Y=-

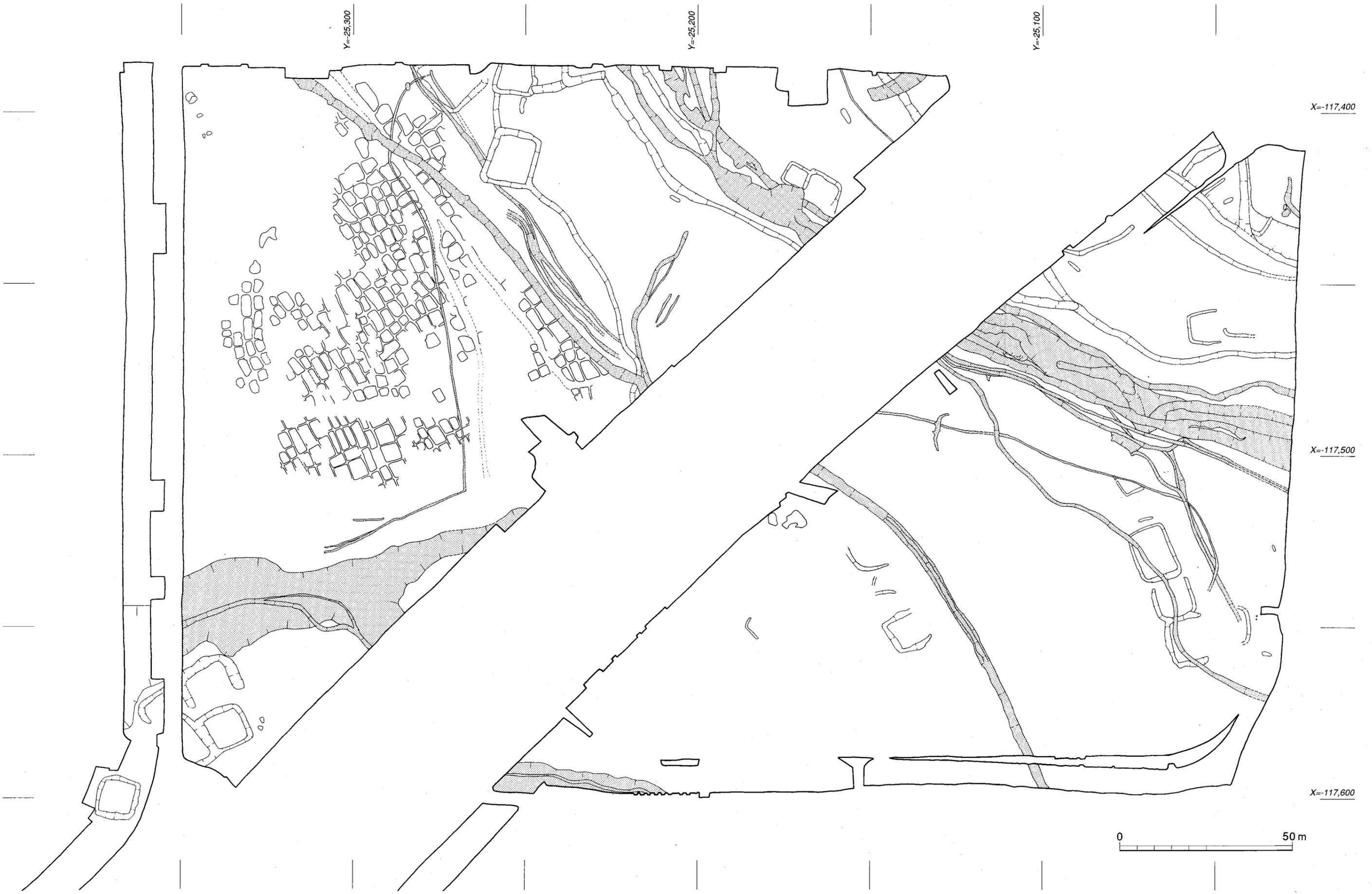


第56図 長岡京左京二条四坊一町建物配置図(1/1,250)

(南一条大路(二条条間大路)南側溝と、二条条間第一小路(二条条間南小路)南側溝の側溝心々間距離を400尺と仮定して作図。)



第57図 名神京都桂川パーキング・エリア予定地内遺構図(1) 長岡京期(1/1,000)



第58図 名神京都桂川パーキング・エリア予定地内遺構図(2) 奈良~弥生時代(1/1,000)
 (スクリーンは、古墳時代以降の遺構を示す。)

25,346.5))と、二条三坊十五町北辺西側の二条条間第1小路南側溝S D33104(X=-117,658.3)の側溝心々間距離が118.6m(約400尺)であることを重視すれば、南一条大路南側溝から南へ400尺の地点に二条条間第1小路南側溝を設定し、北側に反転して30尺側溝幅を確保したと想定できよう。^(注25)

四坊一町の宅地内の南北溝S D399422は、東三坊大路東側溝S D315003から60.86m(205尺)に位置し、東西1/2町に正確に位置する。一町の宅地の東側半分には長岡京期の遺構がほとんど検出し得なかったことからすれば、東西1/2の南北溝S D399422と、その東30尺にある南北溝S D399423を両側溝とする町内小路を想定することもできよう。

南北1/2町の地点付近には、宅地を区画する施設等のないことが確認されていることから、^(注26)一町の宅地の西側半分は1/2町規模で占有された可能性がある。しかし名神京都桂川パーキング・エリアの調査において、1/2町規模で占有されたと考えられる二条三坊十六町西半や二条四坊八町西半の宅地では、ともに二字型の建物配列に脇屋の建物が付随しており、いわば二字型+L字型という建物配列の、^(注27)中心的建物群が検出されているが(第57図)、今回の一町の西側半分の宅地では、そのような建物配列は認められなかった。B-6・B-7地区の南北に位置するB-2a地区のS B315004とB-4a地区のS B33301は、建物の中軸をほぼ合わせるように配置されるが、距離が遠く、二字型の建物配列を想定するには躊躇する。また、S B399415北妻柱筋とS B399518南側柱筋を揃えるが、真東西方向からかなりずれる。それ以外は建物配列の基準を見だし難く、ましてや5丈・10丈を単位とした四行八門制による建物配置を推定することはできない。^(注28)

また、南一条大路北側溝S D33003から、長岡京期の2時期の土器群が出土した。特に長岡京期では、土師器供膳具において口縁部が弧状に内湾するB形態、c手法が主流となるが、上層出土の土師器杯にA形態、b手法のものが目立つ。上層出土土器群は、側溝検出面から-20cmほどに包含されており、側溝廃絶時に一括して投棄された、長岡京廃都時の廃棄土器群の一例とみたい。

長岡京廃都後、9世紀後半の櫃や特徴的な陰刻花文の緑釉硬陶の資料を得た。南一条大路南側溝S D33002では、上層に同時期の土器群が投棄されていた。平安時代の土器群が検出された範囲は、近世字界溝に重複しており、条里再施工後も、条坊地割が遺存し続けたことを示している。おそらく有孔蒼鈕の銅印も、この遺存地割を意識して、埋置されたと思われる。遺存地割としての側溝を埋め立てた際の地鎮、あるいは買地・結界の目的をもって埋納されたものかもしれない。長岡京期の遺構に平安時代の土器が投棄される類例(宮第178次調査井戸S E17805・左京第162次調査二条条間大路(新二条大路)S D16202・右京第29次井戸S E2907・右京第246次調査井戸S E24601)からみても、9世紀後半から10世紀前葉に旧都の遺構を埋め立てたことが知られる。貞観四(862)年十月十五日太政官符案(『平安遺文』第134号)から想定される乙訓郡条里制の再施行と^(注30)無関係ではあるまいが、本調査区における平安時代の遺物群は、一般集落には見られないものが多く、貴族層の荘園の可能性も示唆しうる。

一方、弥生時代では、名神京都桂川パーキング・エリアの調査では、初めて後期後半の方形周溝墓を検出し、本調査地の墓域が弥生時代中期中葉から後期後半まで営まれた可能性がある。

(野島 永)

- 注1 山中 章「古代条坊制論」(『考古学研究』第38巻第4号 考古学研究会) 1992
- 注2 國下多美樹・高橋照彦・樋口隆康・清水みき・永嶋正春・百瀬正恒・山中 章の各氏には、本調査および出土遺物に関する御指導・御教示をいただいた。記して感謝したい。
また、平成9年度の発掘調査に参加していただいた方は、次の通りである。
魚津知克・小川友和・岡田圭司・岡田友和・尾田洋子・窪田瑞恵・倉西雅子・曾根 茂・高畑健・林 基光・藤薮勝則・堀 大輔・松野元宏・山本晃代(以上、調査補助員)荒川仁佳子・串田香奈子・関口睦美・田村重野・高橋文子・伊達優子・内藤チエ・長尾美恵子・中村美也・波岸初美・西村敏子・西村美智子・長谷川マチ子・村上優美子・安田裕貴子・米澤裕子(以上、整理員)。
- 注3 岩松 保ほか「(1)長岡京跡左京第336次 PA工区A-1地区(7ANVK-4)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、石尾政信「(2)長岡京跡左京第329次 PA工区A-2地区(7ANVK-3)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996、戸原和人ほか「2. 名神高速道路関係遺跡 平成7年度発掘調査概要-長岡京跡左京第361・362・363次(7ANVK-6・7・8)-」(『京都府遺跡調査概報』第74冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997、中川和哉ほか「(2)長岡京跡左京第303・314・315次 PA工区(7ANVK・WSS-4地区)」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注4 注3中川和哉ほか前掲文献、中川和哉ほか「(6)長岡京跡左京第333次 PA工区B-4地区(7ANVST-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注5 山中 章「長岡京跡上層の中世小溝群について」(『条里制研究』第4号 条里制研究会) 1988
- 注6 注3中川和哉ほか前掲文献
- 注7 注3戸原和人ほか前掲文献
- 注8 野島 永・岩松 保「名神高速道路関係遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第78冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 注9 中川和哉ほか「(6)長岡京跡左京第333次 PA工区B-4地区(7ANVST-5)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995、なお、緑釉陶器については、百瀬正恒氏にご教示いただいた。記して感謝したい。
- 注10 木村泰彦「長岡京の銚具」(中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢』Ⅱ) 1992。なお、溝S D399015を含め、南北方向の素掘溝からは、平安時代前期の土器が出土することから、本例を平安時代の遺物としたが、潜り孔タイプの石製銚具(丸柄)の使用が長岡京期に遡ることから、長岡京期ではないとは言えない。
- 注11 土師器・須恵器の器種名および、土師器杯・皿の口縁部形態(A・B形態)、調整手法については、次の文献を参考にした。
小笠原好彦・西 弘海・吉田恵二「Ⅳ-3.土器」(『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 奈良国立文化財研究所学報第26冊 奈良国立文化財研究所) 1976
田辺征夫・安田龍太郎・巽淳一郎「Ⅳ-4.土器」(『平城宮発掘調査報告』Ⅺ 奈良国立文化財研究所30周年記念学報第40冊 奈良国立文化財研究所) 1982
百瀬正恒「長岡京の土器」(中山修一先生喜寿記念事業会編『長岡京古文化論叢』) 1986
なお、土師器の口縁部端部の細分形態については長岡京左京第120次調査分類、須恵器杯の形態分類については長岡京左京第196次調査分類による。
秋山浩三・亀割 均・清水みき・山中 章「13 長岡京跡左京第120次(7ANFZN-2地区)～二条大路、東二坊第一小路、東二坊坊間小路交差点～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第18集

- 向日市教育委員会) 1986 pp.106-108
- 國下多美樹・秋山浩三「5 長岡京跡左京第196・214次(7ANEGZ-1・2地区)～東二坊大路・二条大路交差点、左京二条三坊四町、左京三条三坊一町、鶏冠井清水遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1992 pp.84-85
- 注12 國下多美樹「IV-2.長岡京期の諸問題～長岡京期土器の供給体制」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第45集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1997
- 注13 森 郁夫「平城宮の文字瓦」(『研究論集』VI 奈良国立文化財研究所) 1980
- 注14 山中 章「長岡宮の造営と瓦」(『長岡京古瓦聚成』向日市埋蔵文化財調査報告書第20集 向日市教育委員会) 1987
- 注15 大脇 潔「屋瓦と製作地」(『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』II 奈良国立文化財研究所学報第31冊 奈良国立文化財研究所) 1978、花谷 浩「寺の瓦作りと宮の瓦作り」(『考古学研究』第40巻第2号 考古学研究会) 1993
- 注16 秋山浩三・國下多美樹ほか「5 長岡京跡左京第196・214次(7ANEGZ-1・2地区)～東二坊大路・二条大路交差点、左京二条三坊四町、左京三条三坊一町、鶏冠井清水遺跡～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第34集 (財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会) 1992 第79図 遺物番号582
- 注17 実見に際しては、(財)向日市埋蔵文化財センター 國下多美樹氏に便宜を図っていただいた。記して感謝したい。
- 注18 東亜考古学会『東京城』東方考古学叢刊第5冊 1939
- 注19 山中 章・清水みき「11 長岡京跡左京第51次(7ANESH-4地区)～左京二条二坊六町～発掘調査概要」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第7集 向日市教育委員会) 1981
- 注20 注3 中川和哉ほか前掲文献
- 注21 注8 野島 永・岩松 保前掲文献
- 注22 石尾政信「(1)長岡京跡左京第241・267・268次 向日工区(7ANFWD-2.XKM-2.XYT.WIR-2.WSS-2地区)」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992、竹井治雄「(7)長岡京跡左京第331次 PA工区B-2b・D-2b地区(7ANVST-4)」(『京都府遺跡調査概報』第69冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 注23 野島 永「長岡京の大規模宅地一名桂川パーキング・エリアの調査から」(『京都府埋蔵文化財情報』第68号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注24 注8 野島 永・岩松 保前掲文献
- 注25 岩松 保氏は近年、長岡京の条坊計画を復原する論考で、宮城に面した部分は385尺間隔の基準線を割り付け、小路幅は基準線の両側または片側から割り取り、大路幅を別個に加える「大路付加型モデル」を提唱している。未発表だが、ご教示頂いた(「長岡京条坊計画；再論－大路付加型モデルの場合」(『(仮称)大阪大学文学部考古学研究室10周年記念論集』大阪大学文学部考古学研究室)近刊予定)。本調査区の調査結果からは、南北400尺間隔の基準線を割り付け、東西小路幅は基準線の片側から割り取り、東西大路幅を別個に加える計画を想定しうる。
- 注26 注9 中川和哉ほか前掲文献
- 注27 注8 野島 永・岩松 保前掲文献
- 注28 注23野島 永前掲文献
- 注29 原 秀樹「旧都長岡京における平安時代の開発」(杉山信三先生米寿記念論集刊行会編『杉山信三先

生米寿記念論集「平安京歴史研究」) 1993

注30 山中 章「長岡京廃都以後の土地利用」(『向日市文化資料館研究紀要』第2・3号 向日市文化資料館) 1987・1988、山中 章「長岡京東北部の条坊と条里」(条里制研究会編『空から見た古代遺跡と条里』 大明堂) 1977

第7表 長岡京跡左京第399次出土土器観察表

図	番号	出土遺構 (位置)	記録 番号	分類	器種	口径	器高	残存	色調	焼成	調整	備考
44	1	SE399421 (曲物内)		土師器	椀	13	(2.0)	1/5	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	堅緻	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	残存状態悪い
	2	SE399421		土師器	椀	13.2	(2.0)	1/4	(外)灰褐色 (内)灰褐色	堅緻	(外)指痕+ナデ (内)ナデ	
	3	SE399421 (曲物内)		土師器	椀	16.5	(2.1)	1/5	(外)黒色 (内)明黒褐色	堅緻	(外)ナデ (内)指痕+ナデ	煤orタール状 の付着物
	4	SE399421 (掘形内)		土師器	甕	14.5	(4.5)	1/5	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	堅緻	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	外面粗いハケ
	5	SE399421 (掘形内)		緑釉陶器	椀	13	4.2	1/1	(外)淡灰褐色 (内)明灰褐色	堅緻	(外)ミガキ (内)ナデ	削り出し高台 ・軟陶釉着良
	6	SE399421 (井筒内)		緑釉陶器 ?	椀		(1.15)	不明	(外)黒色 (内)暗灰黒色	堅緻	(外.内)回転ナデ	圏線高台.硬 陶
	7	SE399421 (井筒内)		灰釉陶器	椀		(1.6)	1/4	(外)明灰色 (内)明灰色	堅緻	(外.内)ナデ	三日月高台
	8	SE399421 (井筒内)		須恵器	播鉢	8.7	(4.4)	1/5	(外)淡灰色 (内)淡灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	全形不明
	9	SE399503	土器3	土師器	椀	12.4	(2.25)	2/3	(外)暗灰褐色 (内)暗灰褐色	堅緻	(外)指痕 (内)指痕+ナデ	
	10	SE399503	土器2	土師器	杯	14.6	(4.7)	2/3	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	堅緻	(外)ナデ+指痕 (内)指痕+ナデ	煤付着
	11	SE399503	土器4	土師器	杯	14.6	2.65	1/1	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	堅緻	(外)ナデ+指痕 (内)ヨコナデ	
	12	SE399503	土器5	緑釉陶器	皿	14.6	2.3	1/2	(外)暗緑灰色 (内)暗灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	全面施釉.硬 陶
	13	SE399503		緑釉陶器	皿		(1.5)	1/4	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	軟質	(外.内)ナデ	全面施釉.陰 刻花纹.軟陶
	14	SE399503		無釉陶器	皿	13.6	2.95	不明	(外)灰色 (内)灰色	堅緻	(外)回転ケズリ+ ナデ (内)ナデ	転用碗の可能 性.硬陶
	15	SE399503	土器6	緑釉陶器	椀		(2.2)	不明	(外)暗黄灰色 (内)灰褐色	堅緻	(外)ミガキ (内)ナデ	粗い削り圏線 高台.軟陶
	16	SE399503 (5~6層)		無釉陶器	椀		(1.8)	2/3	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	堅緻	(外)ミガキ (内)ナデ	圏線高台.硬 陶
	17	SE399503		無釉陶器	椀		(2.95)	2/3	(外)暗灰色 (内)暗灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	高台繊維状圧 痕.硬陶
	18	SE399503	土器1	須恵器	杯	14	3.6	2/3	(外)灰褐色 (内)灰褐色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	19	SE399503		須恵器	皿	15.1	(1.8)	1/5	(外)明灰色 (内)明灰色	やや 軟質	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	20	SE399503		須恵器	鉢	17.6	14.3	1/1	(外)灰褐色 (内)灰褐色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	
	21	包含層		緑釉陶器	椀		(8.0)	底部 1/5	(外)淡灰緑色 (内)淡灰緑色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	貼り付け高台 硬陶
	22	包含層		緑釉陶器	椀		(2.0)	底部 1/2	(外)淡灰緑色 (内)淡灰緑色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
	23	包含層		緑釉陶器	椀		(1.7)	底部 1/3	(外)淡灰緑色 (内)淡灰緑色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
	24	SD399599		緑釉陶器	椀		(2.6)	底部 1/2	(外)淡灰緑色 (内)淡灰緑色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
	25	包含層		緑釉陶器	蓋	13	5.35	1/3	(外)淡灰緑色 (内)淡灰緑色	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
48	1	SD33003 (n区下層)	土器160	土師器	杯A	14.9	(2.9)	1/8	(外.内)明黒 灰褐色	良好	(外)ケズリ+ナデ (内)ヨコナデ	
	2	SD33003 (o区下層)	土器201	土師器	杯A	14.8	(3.35)	1/2	(外.内)乳褐 色一部赤褐色	軟質	(外)ケズリ+強い ヨコナデ(内)ナデ	b' 手法

名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要

48	3	SD33003 (n区下層)		土師器	杯A	15.8	(3.25)	1/8	(外,内)淡灰褐色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c'手法
	4	SD33003 (1区下層)	土器117	土師器	杯A	15.4	3.2	1/3	(外)橙白色 (内)淡橙白色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	5	SD33003 (o区下層)	土器186	土師器	杯A	16.2	3.2	1/8		良好	(外)磨滅+指痕 (口縁)ヨコナデ	f手法?
	6	SD33003 (n区下層)	土器171	土師器	杯A	16	(1.9)	1/8	(外,内)暗赤灰褐色	良好	(外,内)ナデ (口縁)ヨコナデ	
	7	SD33003 (o区下層)	土器152	土師器	杯A	17.2	4.2	1/3	(外)明赤褐色 (内)暗灰褐色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	8	SD33003 (n区下層)	土器171	土師器	杯A	19.4	(4.2)	1/3	(外)淡黄褐色 (内)明赤褐色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	9	SD33003 (n区下層)	土器167	土師器	杯A	17.8	3.5	1/4	(外)淡黄褐色 (内)茶褐色	やや良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	10	SD33003 (n区下層)	土器165	土師器	杯A	18.1	(3.1)	1/3	(外,内)明黄灰褐色	軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	11	SD33003 (n区下層)	土器163	土師器	杯A	19.2	(3.0)	1/6	(外)橙色 (内)橙白色	良好	(外)ナデ+ケズリ (内)ナデ	c手法
	12	SD33003 (n区下層)		土師器	杯A	19	(4.0)	1/5	(外,内)褐色	軟質	(外)指痕+ケズリ (内)ナデ	c手法
	13	SD33003 (n区下層)	土器150	土師器	杯B		(1.2)	1/4	(外)赤褐色 (内)淡褐色	やや軟質	(外,内)ナデ?	磨滅不明瞭
	14	SD33003 (n区下層)	土器164	土師器	皿A	13.5	2.45	1/3	(外)淡黄橙色 (内)浅黄橙色	やや軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	磨滅不明瞭 c手法?
	15	SD33003 (o区下層)	土器208	土師器	皿A	14.4	2.4	1/6	(外)明赤褐色 (内)暗黄褐色	良好	(内)ナデ (口縁)強いナデ	磨滅不明瞭 c手法?
	16	SD33003 (o区下層)	土器180	土師器	皿A	14.8	2	1/6	(外,内)淡桃色	良好	(外)ナデ+ケズリ (内)ナデ	I群? c手法
	17	SD33003 (1区下層)	土器118	土師器	皿A	15.7	2.9	9/10	(外)淡明褐色 (内)淡明褐色	やや軟質	(外)ケズリ (内)工具+ナデ	c手法
	18	SD33003 (o区下層)		土師器	皿A	16.5	2.3	1/5	(外,内)乳白褐色	良好	(外)ナデ+ケズリ (内)ナデ	b手法
	19	SD33003 (n区下層)	土器159	土師器	皿A	17.2	2.4	1/3	(外)淡桃色 (内)淡黄桃色	軟質	(外)指痕 (内)ナデ	e手法
	20	SD33003 (o区下層)	土器128	土師器	皿A	17.2	(1.9)	1/6	(外,内)淡橙白色	良好	(外)回転ナデ+ケズリ (内)回転ナデ	c手法
	21	SD33003 (n区下層)	土器155	土師器	皿A	18.6	2.4	1/3	(外)明黄灰色 (内)明赤灰色	軟質	(外)ケズリ+指痕 未調整(内)ナデ	c手法
	22	SD33003 (o区下層)	土器175	土師器	皿A	22	2.1	1/6	(外,内)明黒灰褐色	良好	(外)ケズリ+ナデ か(内)ナデ	c'手法
	23	SD33003 (n区下層)	土器163	土師器	皿A	19	(2.2)	1/6	(外,内)暗橙色	良好	(外)ケズリか (内)ナデか	c手法
	24	SD33003 (o区下層)	土器186	土師器	皿A	19.8	3.5	1/4	(外)橙白色 (内)白褐色	良好	(外)ケズリ(内)回転ナデ+ナデ	c手法
	25	SD33003 (o区下層)	土器196	土師器	皿A	19.7	2.2	1/10	(外)淡橙褐色 (内)明橙褐色	やや軟質	(外)ケズリ (内)指痕+ナデ	c手法
	26	SD33003 (o区下層)	土器179	土師器	皿A	20.1	2.4	1/3	(外,内)明赤灰褐色	良好	(外)ナデ+ケズリ+ 未調整(内)ナデ	b'手法?
	27	SD33003 (o区下層)	土器175	土師器	皿A	20.9	2.2	1/8	(外,内)橙褐色	良好	(外)ケズリ+指痕 (内)ヨコナデ	c手法
	28	SD33003 (n区下層)	土器171	土師器	皿A	20.9	(1.95)	1/8	(外,内)乳白色	良好	(外)ケズリ+ナデ (内)ヨコナデ	c手法
	29	SD33003 (o区下層)	土器201	土師器	皿A	21.4	2.8	1/10	(外,内)淡橙褐色	良好	(外)指痕+ケズリ (内)ヨコナデ	c手法
	30	SD33003 (m区下層)		土師器	皿A	11.6	(2.6)	1/16	(外,内)淡灰褐色	良好	(外)ケズリ+ナデ+ ケズリ(内)ナデ	b'手法
	31	SD33003 (o区下層)	土器133	土師器	椀	8.6	(1.7)	1/6	(外)明褐色 (内)灰褐色	軟質	(外)ナデ+指痕 (内)ナデ	e手法
	32	SD33003 (o区下層)		土師器	椀	9.6	(2.2)	1/6	(外,内)明褐色	やや軟質	(外)指痕+ナデ (内)ナデ	e手法
	33	SD33003 (o区下層)		土師器	椀A	9.8	(3.1)	1/4	(外,内)暗黄灰褐色	良好	不明瞭	c手法
	34	SD33003 (o区下層)	土器175	土師器	椀A	12.0	(3.0)	1/6	(外,内)明赤灰褐色	良好	(外)指痕+ケズリ (内)ナデ	c手法
	35	SD33003 (n区下層)	土器149	土師器	椀A	12.4	3.35	1/4	(外,内)淡乳褐色	やや軟質	(外)ナデ+指痕 (内)ナデ	不明瞭 c手法?
	36	SD33003 (o区下層)	土器181	土師器	椀A	12.4	(2.9)	1/3	(外,内)淡褐色	軟質	(外)磨滅 (内)ヨコナデ	e→c手法

48	37	SD33003 (o区下層)		土師器	椀D	12.4	(2.7)	1/5	(外)淡赤褐色 (内)淡褐色	良好	(外)指痕+ナデ (内)ヨコナデ	
	38	SD33003 (o区下層)	土器185	土師器	椀A	13.0	3.7	2/3	(外,内)橙白 色~橙	良好	(外)指痕(内口縁) ヨコナデ	e手法
	39	SD33003 (o区下層)	土器186	土師器	椀A	14.0	3.6	1/4	(外)明赤灰色 (内)明黄灰色	良好	(外)指痕+ケズリ+ 未調整	e→c手法
	40	SD33003 (n区下層)	土器165	土師器	椀A	14.6	3.25	1/3	(外,内)赤灰 褐色	良好	(外)指痕+ケズリ (内)ナデ	e→c手法?
	41	SD33003 (n区下層)		土師器	椀A	14.9	(3.4)	1/2	(外,内)赤茶 褐色	やや 軟質	(外)ナデ+ケズリ (内)ナデ	c手法
	42	SD33003 (n区下層)	土器149	土師器	壺E			1/6	(外,内)赤褐 色	やや 軟質		磨滅の為調整 不明
	43	SD33003 (o区下層)	土器203	土師器	壺C	10.0	3.9	3/10	(外,内)淡明 褐色	やや 軟質	(外)指痕 (内)強いナデ	
	44	SD33003 (n区下層)	土器160	土師器	壺C	10.4	(3.4)	1/6	(外内)明黄灰 色	やや 軟質	(外)指痕か (口縁)ナデ	
	45	SD33003 (o区下層)	土器198	土師器	壺C	12.0	(3.1)	1/8	(外)橙色 (内)橙白色	軟質	(口縁)ナデ	
	46	SD33003 (k区下層)		土師器	壺B	15.6	(4.2)	1/5	(外,内)白っ ぽい淡褐色	やや 軟質	(外)ナデ (内)ハケ目+ナデ	
	47	SD33003 (o区下層)	土器190	土師器	壺B	15.4	(7.0)	1/6	(外)明赤褐色 (内)黄灰褐色	やや 軟質	(外内)指痕+ナデ (口縁)強いナデ	
	48	SD33003 (n区下層)	土器149	土師器	壺B		(6.3)	1/3	(外)橙灰褐色 (内)灰褐色	軟質	(外)指痕 (内)ナデ	
	49	SD33003 (n区下層)	土器210	土師器	甕A	19.6	(4.9)	1/6	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	やや 軟質	(外)ナデ+ハケ (内)ナデ+ケズリ	
	50	SD33003 (o区下層)	土器192	土師器	甕A	18.4	(4.8)		(外)暗茶褐色 (内)淡黒褐色	良好	(外)ハケ目 (内)強いナデ	
	51	SD33003 (n区下層)	土器161	土師器	甕A	27.0	(4.0)	1/4	(外)茶灰褐色 (内)明黄灰色	良好	(外)ヨコナデ+ハ ケ	内面磨滅
	52	SD33003 (n区下層)	土器164	土師器	甕A	17.2	(7.3)	1/4	(外,内)明黒 灰褐色	良好	(外)ハケ+ナデ (内)ナデ	
	53	SD33003 (o区下層)	土器196	土師器	甕A	22.7	(13.1)	1/8	(外)明赤褐色 (内)黒赤褐色	やや 軟質	(外)ハケ+ナデ+指 痕(内)ナデ+ハケ	
49	1	SD33003 (n区下層)	土器154	須恵器	杯B 蓋	17.4	(1.7)	1/6	(外)明灰色 (内)灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	2	SD33003 (o区下層)	土器190	須恵器	杯B 蓋	17.2	1.6	1/3	(外)淡明灰色 (内)淡明灰色	やや 軟質	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	3	SD33003 (n区下層)		須恵器	杯B 蓋	18.6	(1.8)	1/4	(外)淡青灰色 (内)淡青灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	4	SD33003 (n区下層)	土器365	須恵器	杯A	14.0	3.9	3/4	(外)紫灰色 (内)明紫灰色	堅緻	(外)ナデ+ケズリ (内)回転ナデ	
	5	SD33003 (o区下層)	土器191	須恵器	皿A	15.3	2.9	1/2	(外)淡灰色 (内)淡灰色	やや 軟質	(外)回転ナデ (内)ヨコナデ	
	6	SD33003 (n区下層)	土器165	須恵器	杯B	12.3	4.1	1/6	(外)明灰色 (内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	7	SD33003 (m区下層)	土器312	須恵器	杯B		(3.4)	1/8	(外)灰色 (内)灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	8	SD33003 (n区下層)	土器162	須恵器	杯B	15.2	4.7	1/3	(外)暗灰色 (内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	9	SD33003 (n区下層)	土器365	須恵器	杯B	15.9	6.3	1/3	(外)灰色 (内)淡灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	10	SD33003 (n区下層)	土器160	須恵器	杯B	16.2	6.4	1/3	(外)暗灰色 (内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	11	SD33003 (o区下層)	土器197	須恵器	杯B		(3.5)	1/8	(外)明青灰色 (内)明青灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	12	SD33003 (p区下層)		須恵器	壺L		(2.3)	1/12	(外)灰白色 (内)灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	13	SD33003 (k区下層)		須恵器	壺H	14.8	(3.7)	1/6	(外)明灰色 (内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	14	SD33003 (k区下層)		須恵器	壺M		(6.8)	3/4	(外)灰白色 (内)不明	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	15	SD33003 (o区下層)	土器174	須恵器	横瓶	7.8	(4.85)	不明	(外)明灰色 (内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	16	SD33003 (o区下層)	土器193	須恵器	壺L		(3.2)	5/8	(外)淡灰色 (内)淡紫灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	17	SD33003 (n区下層)	土器172	須恵器	壺G		(4.3)	1/8	(外)淡黒灰色 (内)明灰色	やや 軟質	(外,内)不明	

名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要

49	18	SD33003 (n区下層)	土器168	須恵器	壺H	12.8	(4.8)	1/3	(外)明灰色 (内)明灰色	軟質	(外)ナデ (内)ナデ	磨滅不明瞭
	19	SD33003 (o区下層)	土器206	黒色土器	杯	19.6	(3.5)	1/8	(外)淡黒色 (内)暗茶褐色	やや軟質	(外)ナデ+ケズリ+ ミガキ(内)ナデ	
	20	SD33003 (n区下層)		模造品	鍋	6.5	2.0	9/10	(外)淡褐色 (内)淡赤褐色	良好	手づくね	
	21	SD33003 (n区下層)	土器167	模造品	竈		4.6	1/10	(外)淡赤褐色 (内)淡赤褐色	良好	(外)ナデ (内)ナデ	
	22	SD33003 (o区下層)	土器208	製塩土器	焼塩壺	11.1	(4.0)	1/6	(外)赤灰褐色 (内)乳白色	良好	(外)指痕 (内)指痕	
	23	SD33003 (n区下層)		土馬	頭			1/6	淡赤褐色	やや軟質	手づくね	
	24	SD33003 (n区下層)	土器168	土馬	胴			1/2	淡赤褐色	やや軟質	手づくね	
	25	SD33003 (o区下層)	土器206	土馬	足			不明	淡褐色	やや軟質	手づくね	
	26	SD33003 (o区上層)		土馬	胴			1/4	淡乳赤褐色	やや軟質	手づくね	
	27	SD33003 (n区上層)		土師器	杯A	13.2	3.1	9/10	(外)明橙褐色 (内)明橙褐色	やや軟質	(外)ケズリ+ナデ (内)工具調整	b'手法
	28	SD33003 (o区上層)	土器6	土師器	杯A	13.4	3.0	1/8	(外)濁淡褐色 (内)濁橙褐色	軟質	(外,内)工具調整+ ヨコナデ指痕	磨滅不明瞭 b手法
	29	SD33003 (o区上層)	土器143	土師器	杯C	16.0	(2.55)	1/3	(外)暗~黒褐色 (内)暗褐色	軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	b'手法
	30	SD33003 (k区上層)		土師器	杯A	15.6	(2.6)	1/9	(外,内)淡橙 灰褐色	やや軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	b手法
	31	SD33003 (o区上層)	土器123	土師器	皿A	15.7	(2.6)	1/8	(外)淡明褐色 (内)淡明褐色	やや軟質	(外)指痕 (内)ナデ	磨滅不明瞭 f手法
	32	SD33003 (o区上層)	土器8	土師器	杯A	17.2	(4.0)	1/2	(外)暗茶灰色 (内)暗赤灰色	軟質	(口縁)ナデ	磨滅不明瞭 c or b手法
	33	SD33003 (1区上層)		土師器	杯A	17.9	(3.15)	1/3	(外,内)明灰 褐色	やや軟質	(外)ケズリ+ナデ (内)ナデ	b手法
	34	SD33003 (o区上層)	土器145	土師器	皿A	17.7	2.24	1/6	(外)淡乳褐色 (内)淡乳褐色	やや軟質	(内)ナデ (口縁)ヨコナデ	磨滅不明瞭 c or c'手法
	35	SD33003 (m区上層)		土師器	皿A	19.3	3.0	1/2	(外)淡明褐色 (内)淡明褐色	軟質	(外)ケズリ+ヨコ ナデ(内)ナデ	b手法
	36	SD33003 (o区上層)		土師器	皿A	19.4	(2.0)	1/8	(外)暗赤灰褐色 (内)黒灰色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	37	SD33003 (o区上層)	土器9	土師器	皿A	20.2	(2.2)	1/6	(外)暗黄灰色 (内)橙褐色	良好	(外)ケズリ+ナデ (内)ナデ	b手法
	38	SD33003 (o区上層)		土師器	椀A	12.1	(2.85)	1/6	(外,内)淡赤 灰褐色	軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	磨滅不明瞭 c手法?
	39	SD33003 (o区上層)	土器5	土師器	椀A	12.2	(3.85)	1/5	(外)明灰褐色 (内)明灰褐色	軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	磨滅不明瞭 e→c手法?
	40	SD33003 (上層)	土器112	土師器	椀A	12.6	3.05	1/4	(外)淡褐色 (内)淡褐色	良好	(外)ケズリ (内)ナデ	c手法
	41	SD33003 (o区上層)	土器10	土師器	椀A	13.4	(3.3)	1/3	(外)橙白色 (内)橙色	やや軟質	(外)ケズリ? (内)ナデ?	磨滅不明瞭 c手法?
	42	SD33003 (o区上層)	土器24	土師器	椀C	14.2	3.6	1/4	(外)淡褐色 (内)淡赤褐色	良好	(外,内)指痕	e手法,ヘラ ミガキ不明瞭
	43	SD33003 (o区上層)	土器2	土師器	甕A	17.2	(2.1)	1/12	(外)明黒灰色 (内)明灰褐色	やや軟質	(外)ナデ+指痕 (内)ナデ	
	44	SD33003 (o区上層)	土器90	土師器	甕A	17.6	(4.65)	1/6	(外)赤褐色 (内)黒色	良好	(外)指痕+タテハ ケ(内)ナデ	煤付着
	45	SD33003 (1区上層)		土師器	甕A	17.8	(4.3)	1/4	(外)淡赤褐色 (内)淡赤褐色	良好	(外)指痕+タテハ ケ(内)ナデ	煤付着
	46	SD33003 (o区上層)	土器22	土師器	甕A	18.8	(13.4)	1/4	(外)黒褐色 (内)暗褐色	やや軟質	(外)タテハケ+ナ デ(内)指痕+ナデ	
	47	SD33003 (o区上層)	土器3	土師器	甕A	22.2	(6.25)	不明	(外)暗灰褐色 (内)暗灰褐色	良好	(外)タテハケ (内)ナデ	
	48	SD33003 (n区上層)	土器43	土師器	甕A	25.2	(5.0)	1/16	(外)乳褐色 (内)乳褐色	良好	(外)タテハケ (内)ヨコナデ	
	49	SD33003 (上層)	土器113	土師器	甕A	25	(5.1)	不明	(外)淡赤褐色 (内)淡赤褐色	良好	(内)ハケ+ナデ (内口縁)ヨコハケ	煤付着
50	1	SD33003 (上層)	土器103	須恵器	杯B 蓋	15.7	(0.95)	1/5	(外,内)淡灰 白色	やや軟質	(外,内)回転ナデ	
	2	SD33003 (n区上層)		須恵器	杯B 蓋	17.6	(1.25)	1/6	(外,内)明灰 色	堅緻	(外,内)回転ナデ	

50	3	SD33003(n区上層)		須恵器	杯A	11.4	3.4	1/6	(外,内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ(底面)ヘラ切り	
	4	SD33003(m区上層)	土器37	須恵器	杯A	12.7	3.6	2/5	(外)淡濁灰色(内)濃濁灰色	堅緻	(外,内)工具調整+回転ナデ	
	5	SD33003(o区上層)	土器127	須恵器	杯A	14.3	3.4	1/8	(外,内)淡明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ(口縁)ヨコナデ	
	6	SD33003(n区上層)	土器53	須恵器	杯B		(2.3)	1/4	(外,内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	7	SD33003(n区上層)	土器31	須恵器	杯B		(1.6)	1/2	(外,内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	8	SD33003(o区上層)		須恵器	杯B	12.2	4.65	1/3	(外,内)灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	9	SD33003(n区上層)	土器53	須恵器	杯B	12.4	4.5	1/3	(外,内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ(底面)未調整	
	10	SD33003(o区上層)		須恵器	杯B	12.6	(3.6)	1/4	(外)暗灰色(内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	11	SD33003(n区上層)		須恵器	杯B	15.6	4.95	1/3	(外,内)暗灰白色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	12	SD33003(o区上層)	土器27	須恵器	杯B		(2.75)	1/4	(外,内)灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	13	SD33003(n区上層)	土器39	須恵器	杯B	15.5	5.7	1/2	(外,内)淡青灰色	堅緻	(外,内)工具調整+回転ナデ	
	14	SD33003(m区上層)	土器45	須恵器	皿A	15.2	1.4	1/5	(外,内)暗乳白色	軟質	(外,内)回転ナデ	
	15	SD33003(m区上層)	土器60	須恵器	壺L	7.1	(6.6)	1/12	(外)灰色(内)淡灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	16	SD33003(o区上層)	土器28	須恵器	壺L	7.5	(3.6)	7/8	(外)暗濃灰色(内)淡緑灰色	堅緻	(外,内)工具調整+回転ナデ	
	17	SD33003(1区上層)	土器86	須恵器	壺A蓋	15.1	(2.8)	1/10	(外,内)灰色(施釉)濁緑色	堅緻	(外,内)工具調整+回転ナデ	自然釉
	18	SD33003(o区上層)	土器21	須恵器	壺A蓋	5.4	2.4	3/5	(外)淡灰色(内)暗灰色	堅緻	(外)回転ナデ(内)回転ナデ	
	19	SD33003(o区上層)	土器13	須恵器	壺A蓋	10	(1.6)	1/5	(外)暗灰色(内)淡青灰色	堅緻	(外)ナデ+回転ナデ(内)ヨコナデ	
	20	SD33003(n区上層)	土器52	須恵器	壺		(8.9)	1/4	(外)明黒灰色(内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	21	SD33003(o区上層)		須恵器	壺A?		(4.5)	1/3	(外)暗灰色(内)灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	22	SD33003(n区上層)		須恵器	壺	12	(5.5)	不明	(外,内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ(口縁)ヨコナデ	
	23	SD33003(o区上層)		須恵器	壺		(2.65)	底部1/2	(外)暗灰色(内)灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	24	SD33003(n区上層)	土器52	須恵器	壺		(8.9)	不明	(外)明黒灰色(内)明灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	25	SD33003(o区上層)	土器18	須恵器	壺L		(15.5)	不明	(外)明灰白色(内)淡青灰色	堅緻	(外)ケズリ+ナデ(内)回転ナデ	
	26	SD33003(o区上層)	土器384	須恵器	壺M		(9.1)	3/4	(外)灰色~灰白色(内)灰色	堅緻	(外,内)回転ナデ	
	27	SD33003(上層)	土器113	須恵器	鉢D	27.6	(12.2)	1/10	(外,内)明淡灰色	やや軟質	(外,内)回転ナデ	
	28	SD33003(m区上層)	土器68	須恵器	甕A	28.6	(6.6)	不明	(外)淡緑灰色(内)灰白色	堅緻	(外,内)回転ナデ(口縁)ヨコナデ	自然釉
	29	SD33003(o区上層)		須恵器	平瓶	9.7	(6.9)	1/3	(外)暗灰色(内)明灰色	堅緻	(外)ナデ+回転ケズリ	自然釉
	30	SD33003(n区上層)		須恵器	平瓶		(7.8)	1/3	(外)暗灰色(内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ+ナデ(内)回転ナデ	自然釉
51	1	SD33002(p区上層)		土師器	皿	8.0	(1.25)	1/4	(外,内)淡灰褐色	やや軟質	(外)指痕+ナデ(内)ナデ	
	2	SD33002(1区上層)	土器7~10	土師器	碗		(1.8)	不明	(外)淡黄褐色(内)淡乳褐色	やや軟質	(外,内)磨減激しく不明	削り出し高台
	3	SD33002(r区上層)	土器33	土師器	杯	14.0	2.9	1/4	(外)橙色(内)淡橙白色	やや軟質	(外)ヨコナデ+指痕(内)ヨコナデ	e手法
	4	SD33002(r区下層)	土器72	土師器	皿A	17.7	2.4	1/8	(外)暗淡褐色(内)淡橙褐色	良好	(外)ナデ+ケズリ+指痕(内)ナデ	
	5	SD33002(n区上層)		土師器	鉢	15.9	(5.3)	1/6	(外)明黒灰褐色、明褐色(内)明赤灰色	良好	(外)ナデ+指痕(内)ハケ+ナデか	

名神高速道路関係遺跡平成9年度発掘調査概要

51	6	SD33002 (o区下層)		土師器	高杯		(9.0)	1/4	(外.内)橙白色	良好	(脚部)ケズリ	高杯b手法
	7	SD33002 (1区上層)	土器25 ~30	黒色土器 A	甕	18.0	(2.5)	不明	(外)暗黒褐色 (内)暗黒灰色	良好	(外)ナデ+指痕 (内)ナデ+ハケ	
	8	SD33002 (o区上層)		黒色土器 B	皿	13.2	(2.2)	1/6	(外.内)暗黒 灰色	良好	(外)ミガキ (内)同心円ミガキ	
	9	SD33002 (r区下層)		須恵器	碗A	12.1	5.3	1/10	(外.内)灰白 色	良好	(外)回転ナデ+ケ ズリ(内)ナデ	
	10	SD33002 (o区下層)		須恵器	杯B	9.9	3.1	1/3	(外.内)明灰 色	堅緻	(外)回転ケズリ+ ナデ(内)ナデ	墨痕跡?
	11	SD33002 (1区上層)	土器23	無釉陶器	皿	13.0	3.2	1/8	(外.内)暗灰 色	堅緻	(外)ナデ+回転ケ ズリ(内)ナデ	貼り付け高台 硬陶
	12	SD33002 (1区上層)	土器6	無釉陶器	皿	14.8	2.8	1/3	(外)暗灰~灰 色(内)明灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
	13	SD33002 (q区上層)		無釉陶器	碗		(2.1)	1/3	(外)淡灰褐色 (内)明灰色	堅緻	(外.内)回転ナデ	貼り付け高台 硬陶
	14	SD33002 (p区上層)		無釉陶器	碗		(1.65)	1/3	(外.内)明灰 色	堅緻	(外)回転ナデ+ケ ズリ(内)回転ナデ	削り出し高台 硬陶
	15	SD33002 (q区上層)		緑釉陶器	碗		(1.9)	1/4	(外)明灰褐色 (施釉部内外 面は緑灰色)	やや 軟質	(外)ケズリ (内)ナデ	削り出し高台 軟陶
	16	SD33002 (1区上層)	土器25 ~30	緑釉陶器	碗		(1.6)	1/3	(外.内)淡褐 色(施釉部は 淡緑色)	堅緻	(外)回転ケズリ (内)回転ナデ	蛇の目高台 軟陶
	17	SD33002 (1区上層)	土器2	緑釉陶器	碗		(2.1)	1/4	(外)淡黒灰 (内)淡黒灰色	堅緻	(外)ナデ+回転ケ ズリ(内)ナデ	削り出し蛇の 目高台. 軟陶
	18	SD33002 (1区上層)	土器7~ 10	緑釉陶器	碗	17.5	(4.1)	1/6	(外.内)淡乳 黄緑色	やや 軟質	(外)ミガキ (内)回転ナデ	硬陶
	19	SD33002 (1区上層)	土器7~ 10	無釉陶器	皿	16.1	3.28	1/4	(外.内)やや 暗めの灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)ミガキ+ナデ	硬陶
	20	SD33002 (r区下層)	土器59	須恵器	壺L	7.5	(6.6)	不明	(外.内)淡青 灰色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	
	21	SD33002 (p区上層)		須恵器	壺頸 部		(7.3)	不明	(外)黒灰色 (内)淡灰色	堅緻	(外.内)回転ナデ	
	22	SD33002 (1区上層)	土器17 ~19	須恵器	甕	23.0	(3.9)	1/12	(外)淡赤灰色 (内)淡灰褐色	堅緻	(外.内)回転ナデ (口縁)ヨコナデ	
	23	SD33002 (r区上層)	土器35	須恵器	壺	3.8	9.4	1/1	(外)明灰色 (内)不明	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	底部糸切り痕
	24	SD33002 (1区上層)		須恵器	壺		(2.95)	不明	(外.内)明灰 色	堅緻	(外)回転ナデ (内)回転ナデ	底部糸切り痕
	25	SD33002 (r区下層)	土器 7071	須恵器	壺N		(20.7)	3/8	(外)暗紫灰色 (内)淡紫灰色	堅緻	(外)回転ナデ+カ キ目(内)回転ナデ	
52	1	SX399594	土器1	土師器	皿C	9	1.75	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡赤灰色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	2	SX399594	土器1	土師器	皿C	9.4	1.8	1/1	(外.内)淡灰 褐色	やや 軟質	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	3	SX399594		土師器	皿C	9.2	1.9	1/1	(外.内)淡灰 褐色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	4	SX399594		土師器	皿C	9.1	1.75	1/1	(外)暗褐色 (内)明灰褐色	やや 軟質	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	5	SX399594		土師器	皿C	9.1	1.85	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡赤灰色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	6	SX399594	土器2 3	土師器	皿C	9.1	2.2	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	7	SX399594	土器2 3	土師器	皿C	9.15	1.9	1/1	(外)淡灰褐色 (内)明灰褐色	やや 軟質	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	8	SX399594	土器4	土師器	皿C	9.5	1.7	1/1	(外)淡灰褐色 (内)明褐色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法
	9	SX399594	土器4 5	土師器	皿C	9.1	1.75	1/1	(外.内)淡灰 褐色	良好	(外.内)指痕+ナデ (口縁)ヨコナデ	e手法
	10	SX399594	土器4 5	土師器	皿C	8.9	1.85	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外.内)指痕+ナデ (口縁)ヨコナデ	e手法
	11	SX399594	土器5	土師器	皿C	9.0	1.9	1/1	(外.内)淡灰 褐色	良好	(外.内)指痕+ナデ (口縁)ヨコナデ	e手法
	12	SX399594	土器5	土師器	皿C	8.9	1.85	1/1	(外.内)淡灰 褐色	良好	(外.内)指痕+ナデ (口縁)ヨコナデ	e手法
	13	SX399594	土器6	土師器	皿C	9.5	1.78	1/1	(外.内)淡灰 褐色	良好	(外)指痕+不定ナ デ(内)指痕+ナデ	e手法

52	14	SX 399594	土器 7	土師器	ⅢC	9.0	1.7	1/2	(外,内)淡灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ (口縁)ヨコナデ	e 手法
	15	SX 399594	土器 7	土師器	ⅢC	9.1	1.65	1/1	(外,内)淡赤灰褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	16	SX 399594	土器 9	土師器	ⅢC	8.9	1.45	1/1	(外)淡灰褐色 (内)明褐色	やや軟質	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	17	SX 399594	土器 9	土師器	ⅢC	9.2	1.65	1/1	(外,内)淡灰褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	18	SX 399594	土器10	土師器	ⅢC	9.2	1.85	1/1	(外)明黄灰褐色 (内)明褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	19	SX 399594	土器10	土師器	ⅢC	9.0	1.8	1/1	(外)淡黄褐色 (内)淡黄灰色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	20	SX 399594	土器10	土師器	ⅢC	9.4	1.85	1/1	(外)淡灰褐色 (内)暗黄褐色	やや軟質	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	21	SX 399594	土器13	土師器	ⅢC	9.1	1.6	1/1	(外,内)暗黄灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	22	SX 399594	土器12	土師器	ⅢC	9.2	1.7	1/1	(外,内)淡黄褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	23	SX 399594	土器13	土師器	ⅢC	9.1	1.8	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡黄灰色	良好	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	24	SX 399594	土器13	土師器	ⅢC	9.3	1.75	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡黄灰色	良好	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	25	SX 399594	土器14	土師器	ⅢC	9.2	1.85	1/1	(外,内)暗黄灰褐色	やや軟質	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	26	SX 399594	土器15	土師器	ⅢC	9.2	1.75	1/1	(外)淡赤灰色 (内)淡赤褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	27	SX 399594	土器15	土師器	ⅢC	9.3	1.9	1/1	(外)赤灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	28	SX 399594	土器16	土師器	ⅢC	9.1	1.9	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	29	SX 399594	土器16	土師器	ⅢC	9.1	1.75	1/1	(外,内)淡灰褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	30	SX 399594	土器17	土師器	ⅢC	9	1.8	1/2	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	31	SX 399594	土器17	土師器	ⅢC	9.2	1.75	1/2	(外)淡灰褐色 (内)淡褐色	やや軟質	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	32	SX 399594	土器18	土師器	ⅢC	8.9	1.75	1/1	(外,内)淡灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	33	SX 399594	土器18	土師器	ⅢC	9.3	1.6	1/1	(外)淡灰褐色 (内)淡灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	34	SX 399594	土器18	土師器	ⅢC	9.1	1.75	1/1	(外,内)明褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	35	SX 399594	土器18	土師器	ⅢC	9.3	1.75	1/1	(外,内)明褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	36	SX 399594	土器19	土師器	ⅢC	9.2	1.65	1/2	(外,内)淡灰褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	37	SX 399594	土器19	土師器	ⅢC	9.2	1.85	1/4	(外)淡灰褐色 (内)淡褐色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	38	SX 399594	土器 7	土師器	ⅢC	9.3	1.9	1/1	(外,内)淡赤灰色	良好	(外,内)指痕+ナデ	e 手法
	39	SX 399594	土器 8	土師器	ⅢC	9	1.95	1/1	(外)淡灰褐色 (内)明褐色	良好	(外)指痕+不定ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
	40	SX 399594		土師器	ⅢC	9.4	1.65	1/5	(外,内)淡灰褐色	やや軟質	(外)指痕+ナデ (内)指痕+ナデ	e 手法
55	1	ST399602	土器 1	弥生土器	広口壺	11.6	20.3	1/8	(外,内)乳褐色	良好	(外)ハケ(内)ナデ	底部円盤充填

凡例 「指痕」は指頭圧痕、器全体の1/8以下は残存率不明とした。

長岡京跡出土の銅印「福」の素材について

国立歴史民俗博物館 永嶋正春

1. はじめに

標記の資料は、平成9年度に行われた長岡京跡左京第399次調査において土坑S K399504から出土したものであり、形態的な特徴から10～11世紀のものと考えられている。今回、発掘担当者である(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターの了解が得られ、歴博に於いて、非破壊的な手法による調査を実施することができた。X線透過検査、蛍光X線分析、密度測定などである。これらの調査結果は、歴博が継続して行ってきた全国的な古代印の集成作業のなかでも生かすことになるが、とりあえず結果の概要をまとめてみたのでここに報告する。

2. 調査結果

X線透過像については、4方向について作成した。X線フィルム上に正立させたもの、すなわち鈕の頭頂部から印面を見込んだもの、この位置で偏あるいは旁側を上方にあげて斜め位置にしたもの、鈕部を側方から見込んだものの4方向である。結果は別添えのX線フィルムの通りである。なお使用した装置は、歴博第3調査室に設置しているX線透過検査システムであり、撮影距離は1m、撮影条件は適宜選択している。X線像について若干の所見を加えるとすれば、とりあえず次の3点があげられよう。

1. 「福」の字体や字画配置、字画線の太さなどについて、より鮮明な情報が得られたこと。

*印面の資料現況は、土と錆とによって字画細部の様子が分かりにくくなっている。

2. 鈕孔は真円であり、鈕孔の周縁部には顕著な錆の生成が認められる。

3. 資料全体にわたって、細かな鬆が認められる。印面部は厚さが薄いため、X線像としてはより顕著に鬆を確認することができる。

蛍光X線分析(波長分散型装置)で見た場合、本銅印の素材は銅、鉛、ヒ素からなる3元系の青銅である。他に、本来の素材に伴う汚れた成分として、スズ、銀、アンチモン、ビスマス、亜鉛などが確認されている。鉄とチタンのピークはかなり目立って存在するが、付着する土(粘土)に多くを起因すると考えられるので、とりあえず不純物としての扱いから除外したい。軽元素としては、カリウム、カルシウム、ケイ素、アルミニウムなどが検出されているが、恐らくこれらの大半は付着の土によるものであろう。なおリンと思われる小さなピークも確認できるが、他元素の高次のピークも重なるため、積極的にその存在を断定することは困難である。

古代の銅印素材は、銅・スズ・ヒ素・鉛(銅・スズ・鉛・ヒ素)系、銅・鉛・ヒ素系、銅・ヒ素系の3系統の青銅質に大別されるが、本銅印の素材はこの内のひとつに該当する。

密度の測定は比重法で行った。資料を純水中に垂下し、その前後の質量を測定することで密度

を算出したわけであるが、資料表面が錆と土とで覆われているため、予想以上に小さな値となった。

ちなみに、

資料の質量(風乾時) : 18.2120 g (資料体積 : 3.649cm³)

資料の密度 : 4.99 g/cm³

今までの数多くの測定例で見て、どんなに密度の小さいものでも 6 g/cm³以上ではあったので、本印の数値はやはり小さすぎるものと言えよう。錆と土とに影響された見かけの数値と考えてよい。しかしながら、本資料には細かい鬆が多く存在することは前述した通りであり、したがって極端に大きな数値、例えば 8 g/cm³などには成りようはずがない。他例の諸状況を勘案すると概ね 6 g/cm³台に納まるのではないだろうか。

3. お わ り に

以上が今回の調査結果の概要である。これらに加え、細部にわたる資料写真等も撮影済みなので、もし本報告等の機会があれば、それらをも掲げた上で結果の紹介ができればと考えている。

3. 第二京阪自動車道関係遺跡 平成9年度発掘調査概要

1. はじめに

第二京阪自動車道は、京阪間の新たな広域幹線ネットワークの形成を目的として計画されている総延長約30kmにわたる自動車専用道路である。本自動車道建設に先立ち発掘調査の対象となる埋蔵文化財包蔵地は、これまでに京都府内で9遺跡が確認されており、当調査研究センターでは、建設省並びに日本道路公団の依頼を受け、昭和63年度以来、継続してその調査を実施している^(註1)。

平成9年度における本事業に係る発掘調査事業は、日本道路公団の依頼を受けて、内里八丁遺跡(八幡市)及び佐山遺跡(久御山町)を対象として実施した。

内里八丁遺跡は、弥生時代～鎌倉時代にわたる時期の大規模な複合遺跡で、八幡市の北東部、木津川によって形成された沖積平野に立地する。当遺跡の発掘調査は、広大な調査対象地をA～Gの7地区に分け、昭和63年度以来、継続して実施してきた。これまでにA～D・G地区及びF地区の北半部の調査が完了しており(G地区は、京都府京都文化博物館が調査を実施)、平成9年度は残るF地区の南半部(約3,000m²)とE地区(約1,000m²)の調査を実施した。

佐山遺跡は、久御山町の南半部、木津川の北岸に位置する。この遺跡の調査は、今年度から着手した。しかし一帯は、近年の開発による地形変化が著しく、不明な点が多くあり、調査計画を立案する上で多くの問題点を抱えていた。このため、まず今年度は、道路予定地内における遺構・遺物の有無並びにその広がり等を確認する目的で2次にわたる試掘調査を実施した。第1次試掘調査は、まず道路予定地内において、従来から埋蔵文化財包蔵地(佐山遺跡)と認識されていた部位を対象として実施し、遺構・遺物の有無を確認した。その結果、本概報でも記すように、弥生時代後期から平安時代に至る時期の遺構・遺物が密な状態で確認された。このため、この成果をもとに日本道路公団・建設省・京都府教育庁指導部文化財保護課等の関係機関と協議を行ったところ、さらに広範囲に試掘トレンチを入れ、遺跡の広がり等の確認を目的とする第2次の試掘調査を行うこととなった。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長奥村清一郎、同主査調査員古瀬誠三、同調査員森下 衛、柴 暁彦、調査第4係調査員岩松 保が担当し、多くの調査補助員・整理員^(註2)の協力を得て実施した。また、調査期間中は、京都府教育委員会、京都府山城教育局、京都府山城郷土資料館、八幡市教育委員会、久御山町教育委員会などの関係諸機関から、多大な協力をいただいた。

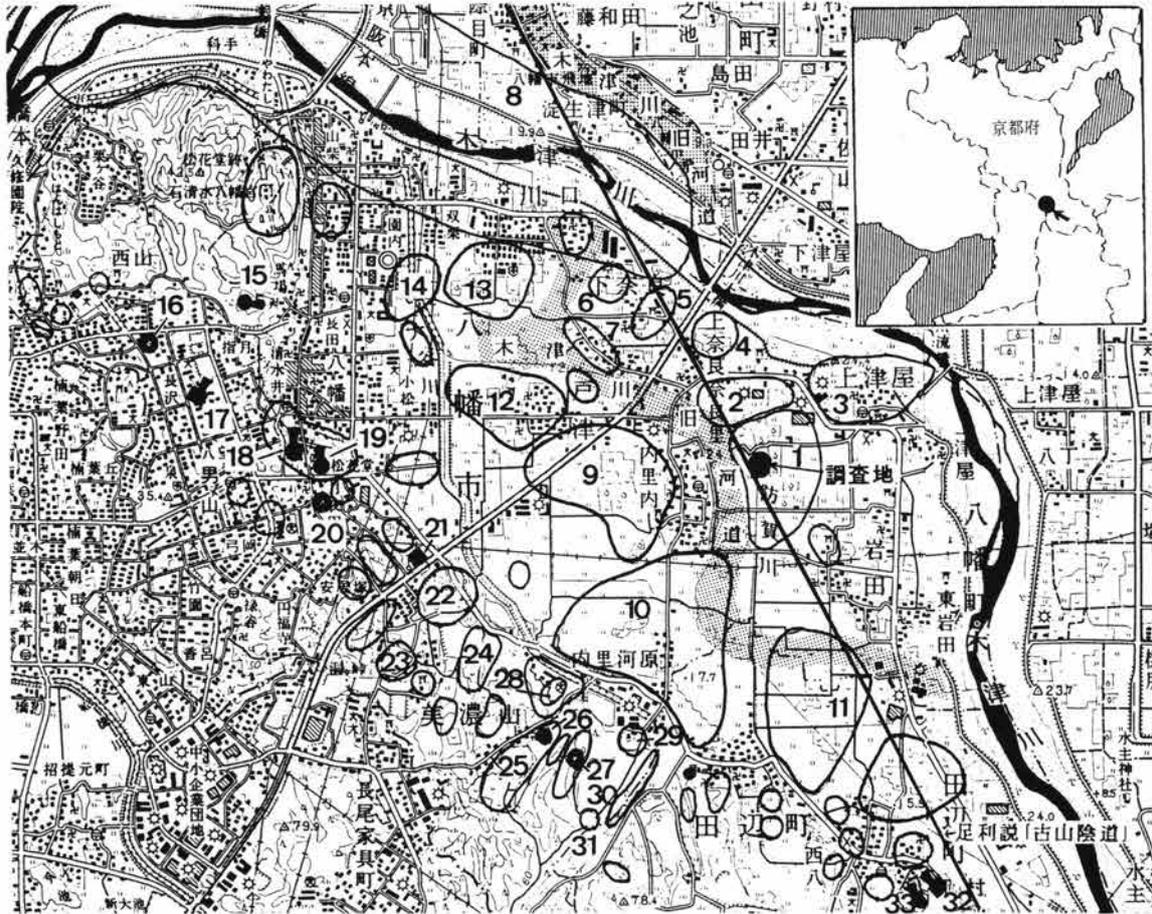
なお、今年度の調査は、日本道路公団の依頼に基づいて実施したものであり、これに係る経費は同公団が負担された。また、本書は、調査を担当した各調査員が、分担執筆した。

(1) 内里八丁遺跡

1. はじめに

第二京阪自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡の発掘調査は、先述のように、昭和63年度から順次進めており、平成9年度の発掘調査は、E地区(約1,000m²)及びF地区の南半部(約3,000m²)を対象として(第60図の黒塗り部)、平成9年4月15日から平成10年3月10日までの間に実施した。

内里八丁遺跡は、八幡市内里日向堂ほかに所在する。ここは、八幡市の北東部、石清水八幡宮の鎮座する男山丘陵からは東方約3.5kmに位置する(第59図)。現在、一带は木津川西岸の沖積平野が広がり、比較的平坦な水田地帯としての景観をなしている。しかし、地形を微細に観察する



第59図 調査地位置図(1/50,000)

- | | | | | |
|------------|------------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 内里八丁遺跡 | 2. 上奈良遺跡 | 3. 上津屋遺跡 | 4. 上奈良北遺跡 | 5. 出垣内遺跡 |
| 6. 下奈良遺跡 | 8. 木津川河床遺跡 | 9. 内里五丁遺跡 | 10. 新田遺跡 | 11. 魚田遺跡 |
| 12. 戸津遺跡 | 13. 河口扇遺跡 | 14. 嶋遺跡 | 15. 石不動遺跡 | 16. 西山廃寺 |
| 17. 茶臼山遺跡 | 18. 西車塚遺跡 | 19. 東車塚古墳 | 20. 志水廃寺 | 21. ヒル塚古墳 |
| 22. 幸水遺跡 | 23. 西ノ口遺跡 | 24. 金右衛門垣内遺跡 | 25. 本郷遺跡 | 26. 王塚古墳 |
| 27. 美濃山廃寺 | 28. 狐谷横穴群 | 29. 女谷横穴群 | 30. 荒坂横穴群 | 31. 荒坂遺跡 |
| 32. 大住車塚古墳 | 33. 大住南塚古墳 | | | |

と、周辺には木津川の支流だったと思われる旧河道の痕跡や、その両岸に形成された自然堤防状の微高地などが随所に認められ、かつては比較的起伏に富んだ地形をなしていたことが想像される。

そして、内里八丁遺跡も、こうした自然堤防状の微高地の一つ、現在の上奈良集落から岩田集落を結ぶように広がる微高地上に立地していることも確認することができる。^(注3)



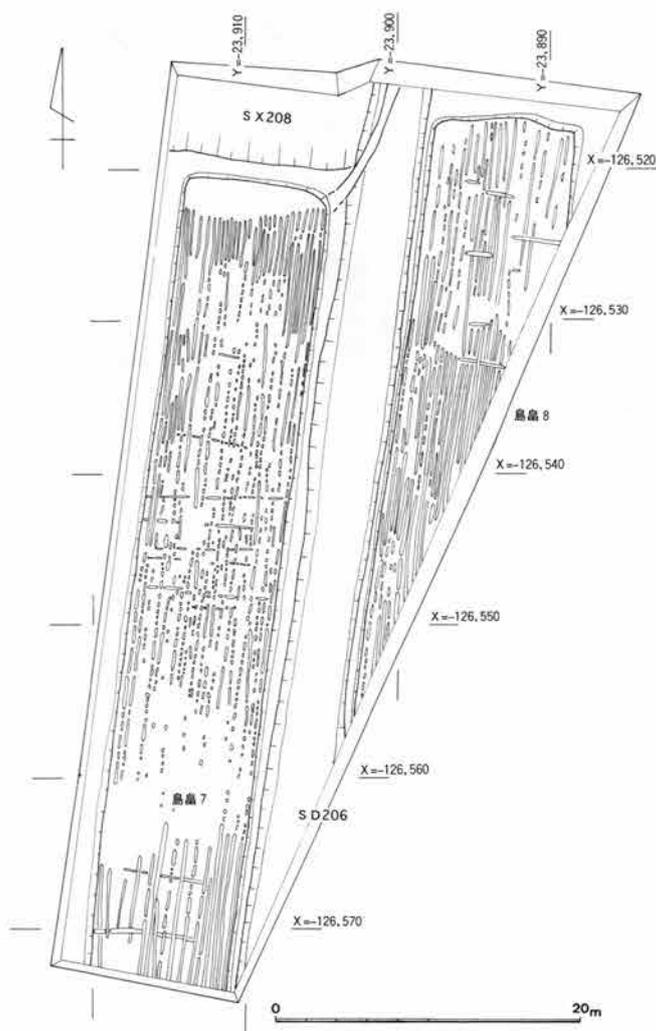
第60図 調査区配置図

内里八丁遺跡の立地するこの自然堤防の形成に大きく関わったのは、遺跡の西側を南北に流れる木津川旧河道である(第59図に網掛け部で示した)。この旧河道は、岩田集落の南東部で現在の木津川から分岐して西流した後、北へ流れを変え、内里集落の東辺(内里八丁遺跡の西辺)を北流するものである。その後は、上奈良集落の南方で再び西へ流れ、戸津集落の北方でそのまま西流するものと、北へ流れるものとに分岐する。なお、この流路は、古代の久世郡・綴喜郡の郡境に相当していたとされ(特に、戸津集落の北方からそのまま西流する旧流路)、遺跡の立地する自然堤防を形成して以後、平安時代頃までは、これが木津川本流だった可能性が高い。

なお、内里八丁遺跡の過去の調査では、弥生時代後期～古墳時代初頭の集落跡や水田跡、古墳時代中期後半～後期初頭の集落跡、飛鳥時代～平安時代の掘立柱建物跡群、鎌倉時代以降に形成された^(注4)島畠などが検出されている。このうち、奈良～平安時代の遺構・遺物に関しては、遺跡の北方にある上奈良・下奈良の地を中心に所在したとされる『延喜式』記載の「奈良園」と関連が考えられるほか、奈良時代には「古山陰道」がこの近傍を^(注5)通っていたとの説もあり、これに関連した^(注6)何らかの公的施設との関連も想定されている。特に、今回報告しているE地区の調査では、「古山陰道」ではないかと考えられる古代の道路状遺構を検出しており、本遺跡と「古山陰道」との関連はより一層注目されることとなった。

2. 調査成果

平成9年度の調査では、E地区で4面・F地区で6面の遺構面を確認した。時期的には、弥生時代後期～鎌倉時代にわたる。これらを時期別に整理すると、弥生時代後期後半、弥生時代後期終末～古墳時代前期、古墳時代中期後半、古墳時代後期～飛鳥時代、奈良時代～平安時代前期、



第61図 E地区第1遺構面遺構配置図

こうした島島は、これまでの調査でも検出しており、13世紀後半～14世紀を中心として造成されたものと考えられる。なお、その造成に際しては、一帯に広がる広範囲な微高地上で、島島部分を残してその周囲を掘り下げ、これによって出た土砂を島島部分に盛り上げている。このため、島島部以外では、下層遺構面はこの際に大幅な削平を受け、多くの場合遺存していない。一方、島島の上面では、南北方向を主体とする素掘溝群を検出した。耕作に伴う畝溝の痕跡を考えている。各溝は、幅15～30cmで、その多くは作物の特性を示しているのか、数メートルおきに深くなる部分を認めた。また、島島7の北東隅から北東方向に向って畔の痕跡と思える土質の変化が確認された(幅約0.6m)。2つの島島の間では、幅約4mの南北溝(S D 206)を検出した。島島の造成によって作られた低部の排水に係わるものと思われる。なお、島島の北側は、沼ないしは溝をなすように大きく下がっていく状況が認められた(S X 208)。

付表8 E地区第2遺構面掘立柱建物跡一覧

遺構番号	形態	規模(南北×東西)	主軸
S B 212	総柱建物(張床)	3間(5.4m)×1間(2.4m)以上	N-8° -E
S B 213	総柱建物(張床)	4間(8m)×1間(2.3m)以上	N-8° -E
S B 214	総柱建物(張床)	3間(7.7m)×1間(2.1m)以上	N-6° -E

平安時代中期～後期、平安時代末葉、鎌倉時代以降に分けてとらえることができる。以下、調査区毎に時代を追って調査成果の概略を記す。なお、E地区については、第4遺構面の下層にさらに弥生時代後期後半頃の水田跡(第5遺構面)の存在が確認されたが、関係機関との協議の結果、これに関しては平成10年度に改めて調査を行うこととなった。

(1) E地区の調査成果

①検出遺構

a. 鎌倉時代以降(第1遺構面)

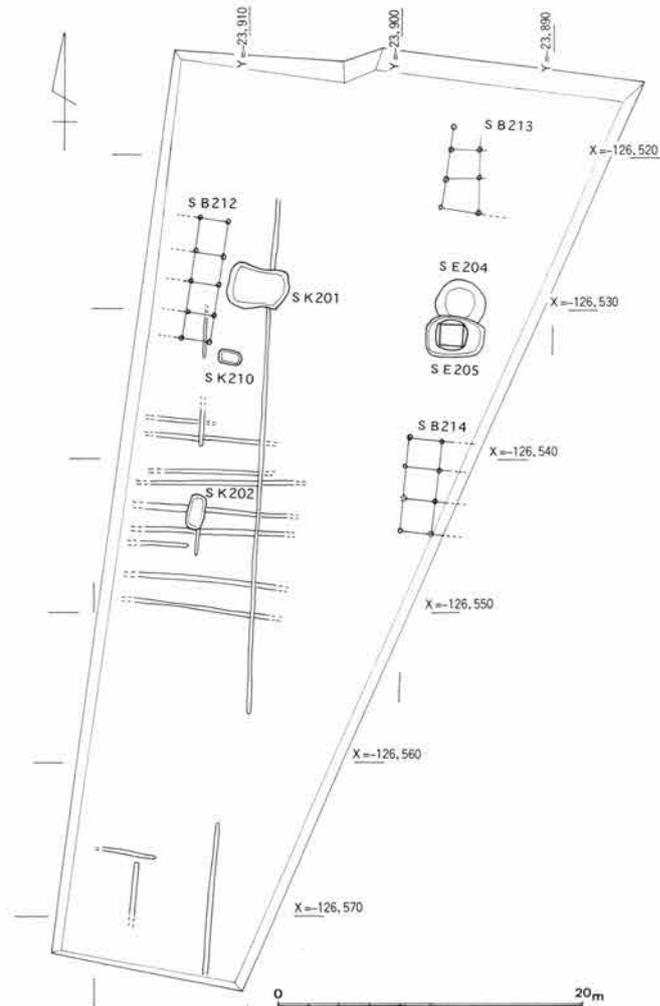
E地区の調査では、まず第1遺構面の遺構として島島を2基確認した(島島7・8)。いずれも、調査区外へのびており、全体の規模は不明だが、その形態は南北に細長い長方形をなし、幅はともに13m前後を測る(長さは50m以上)。

b. 平安時代末(第2遺構面)

第2遺構面では、平安時代末頃(11世紀後半～12世紀)の遺構を検出した。主な検出遺構には、

掘立柱建物跡3棟、井戸2基、土坑3基がある。

掘立柱建物跡(S B 212~214)は、後世の削平により遺存状況が悪いことや、大半が調査区外へのびていることなどから、いずれも全体の規模は確認できていない(付表8)。土坑(S K 201・202・210)では、S K 201がS B 212の東側に接して検出したもので、この建物の廃絶に伴って設けられたものと考えている。井戸(S E 204・205)は、調査区の東辺寄りで2基が重複して検出された。S E 204は、S E 205に南側半分を大きく切られ、直径約2.5mに復元される掘形を確認したに過ぎない^(注7)。これに対しS E 205は、やはり直径約2.5mの円形の掘形をもち、その内側に一辺約1.2mの方形に蒸籠組み



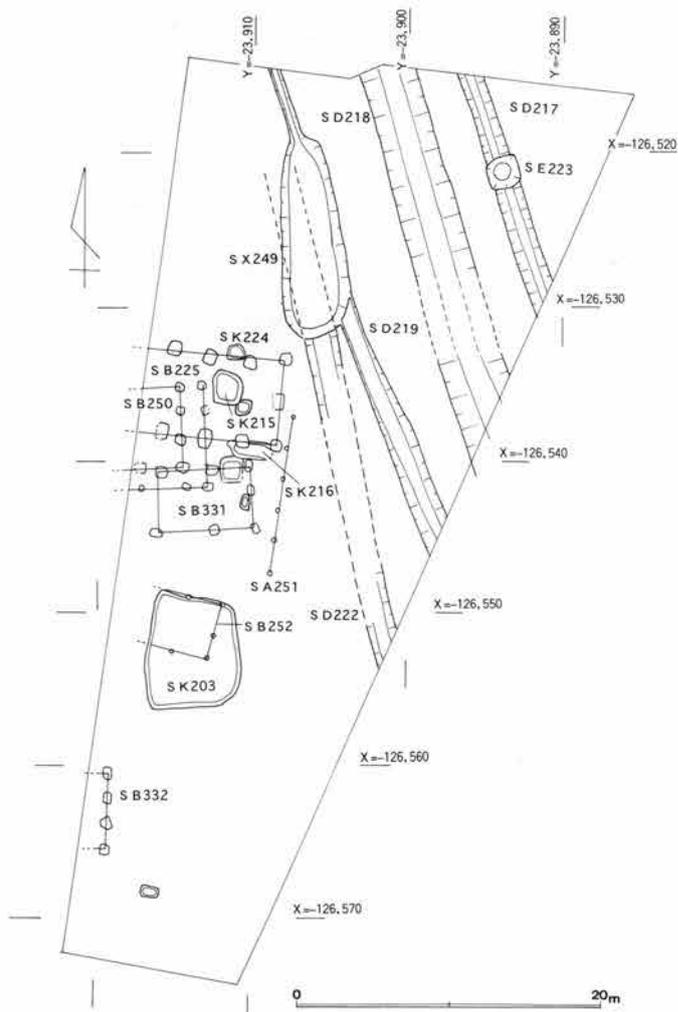
第62図 E地区第2遺構面平面図

された井戸枠が残る。検出面から約1.8mが遺存していた。

c. 奈良時代～平安時代前期(第3遺構面)

第3遺構面で検出した遺構は、東半部の南北溝4条(道路状遺構を構成)及び井戸1基と、西半部の柱穴群(掘立柱建物跡6棟、柵列1条を復元)及び土坑5基がある。

南北溝(S D 217~219・222)は、いずれも北北西-南南東(N-20~24°-W)にのびる。うち、S D 219は池状遺構(S X 249)に流入し、S D 222はこれを切つてのびている。ただし、S D 222は遺存状況が悪く、十分な確認はできていない。溝幅は、S D 217・S D 219が約1.5m、S D 218が約4m、S D 222が約2mを測る。このうち、S D 217とS D 219は規模やその断面形が類似し、出土遺物も8世紀中葉～9世紀前半のものが出土する。また、両溝は、心々間で約12mを測り、平行してのびることから、明らかにセット関係にあるものと考えられ、道路状遺構の側溝を構成していたものと判断している。このことを示すように調査区の西半部で確認した多くの柱穴は、道路面をなす調査区の東半部へは及んでおらず、道路が廃絶して以降に設けられた井戸(S E 223)が溝に重複して確認されているにすぎない。なお、東側側溝に相当するS D 217は北側のD地区でもその延長部を確認しており、総延長約150m以上を確認したこととなる。



第63図 E地区第3遺構面平面図

S D 218とS D 222に関しても、一部は平行してのびる(溝の肩間の距離は5~6m)ことから同様に道路状遺構の可能性を考えることができる。しかし、両者には規模に差異が認められるほか、S D 222が調査区北端近くで大きく削平されるなど不明瞭な点を多々残しており、その位置付けは今後の課題とせざるをえない。なお、S D 218からは9世紀後半~10世紀前半頃の遺物が出土しており、この両者がともに道路遺構を示すものであれば、奈良時代中葉~平安時代初頭に幅12mで設けられた道路が、平安時代前期に規模を縮小して造り変えられたこととなる。S E 223は、S D 217が埋没した後に穿たれたもので、9世紀後半頃の遺物が出土している。深さ約1.3mが遺存し、井戸枠は下半部に径約1mの丸太材をくり貫いたものを据え、上半部は幅約0.2mの板材を縦に置き、一辺約1.2m

の方形に組まれたものであった。

一方、調査区西半部では、多数の柱穴を検出した。このうち、現在までに掘立柱建物跡5棟(付表9)を復元している。建物跡は、その主軸や柱掘形の形状などから、北に向かって僅かに西方へ振るもの(S B 250・331)や、東へ振るもの(S B 225・332)、東へ大きく振るもの(S B 252)などに分けられる。これらの所属時期を明確に示す遺物は出土しなかったが、これまでの周辺での調査成果から、概ね、S B 250・S B 331が奈良時代中葉~後半頃(8世紀中葉)、S B 225・S B 332が奈良時代後半~平安時代初頭頃(8世紀後半~9世紀初頭)、S B 252が平安時代中期(10

付表9 E地区第3遺構面掘立柱建物跡等一覧

遺構番号	形態	規模(南北×東西)	主軸	備考
S B 225	東西棟建物	2間(5.4m)×3間(7.2m)以上	N-4°-E	
S B 250	南北棟建物か	3間(5.4m)以上×2間(2.7m)	N-3°-W	庇付東西棟建物か
S B 252	東西棟建物か	2間(3.9m)以上×1間(2m)	N-15°-E	
S B 331	東西棟建物	2間(4m)以上×2間(6.2m)	N-3°-W	
S B 332	南北棟建物か	3間(4.8m)以上×-	N-2°-E	
S A 251	南北柵列	5間(10.3m)	N-8°-E	

世紀頃)に属するものと判断している。うち、S B 250は、南北棟建物と理解しているが、東辺及び南辺に沿って約1~1.5m離れたところに柱列が認められ、廂

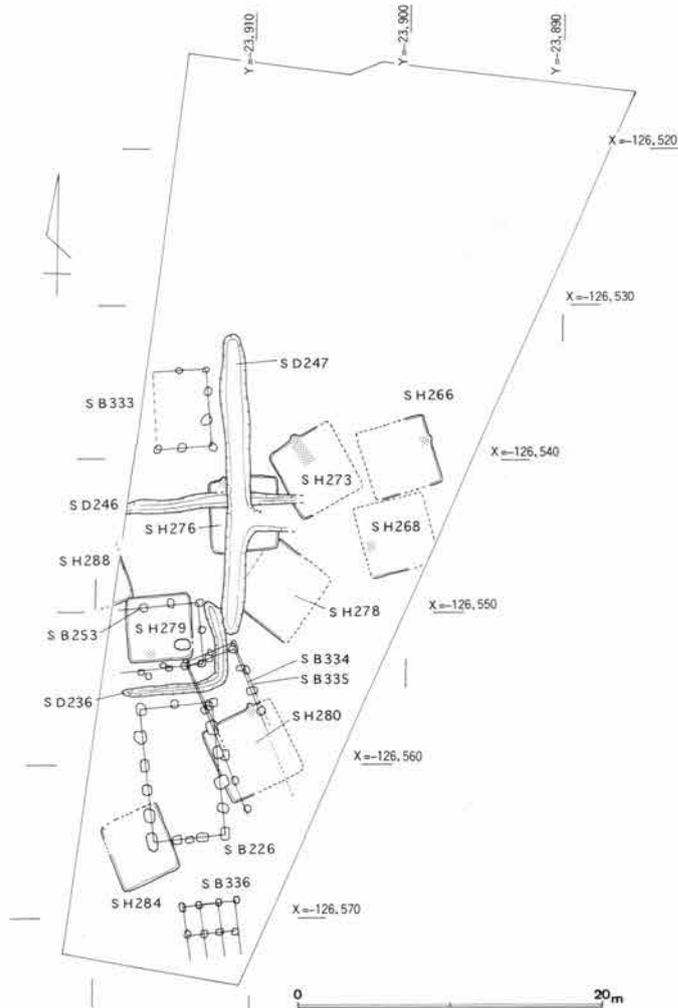
の可能性もある。この場合、東西棟建物の可能性が高くなる。S B 225は2間×3間以上の東西棟で、柱間は2.1m、柱掘形は一辺1m以上の大型の建物跡である。

土坑5基のうち、特にS K 203は南北約7m・東西約6.5mの隅丸長方形をなし、深さ約0.2mが遺存していた。埋土は、灰や焼土が混在し、ブロック状のまとまりをなして8世紀中葉～9世紀初頭の土器類が包含されていた。土器類は、須恵器杯身・杯蓋や土師器皿など供膳形態のものが主体をなすが、中には多くの製塩土器が含まれていた。なお、先に道路状遺構の側溝と考えたS D 219埋土から出土した遺物も、S K 203出土遺物とほぼ共通する内容をもつ。

d. 飛鳥時代後半～奈良時代初頭(第4遺構面-1)

E地区の第4遺構面では、弥生時代終末～飛鳥時代にわたる時期の遺構が極めて密な状態で検出された。このうち、飛鳥時代後半の遺構としては、現在のところ、掘立柱建物跡6棟、溝3条を確認している。

掘立柱建物跡(付表10)は、その主軸から北に向かって5～6°西へ振るもの(S B 226・253・333・336)と、同じく20°前後振るもの(S B 334・335)の2者がある。前者は南北に連なって存在し、S B 226は、東西2間、南北5間の大型の南北棟建物。その北側のS B 253は、南北2間、東西2間以上の東西棟建物と考えられる。さらにその北側にはS B 333があり、S B 226の南側には総柱建物で倉庫と考えられるS B 336がある。なお、これらのうちS B 253については、その南東部で、建物の周囲を巡るように溝(S D 236)が確認されており、特異な性格を有した建物であった可能性も考えられる。一方、後者で



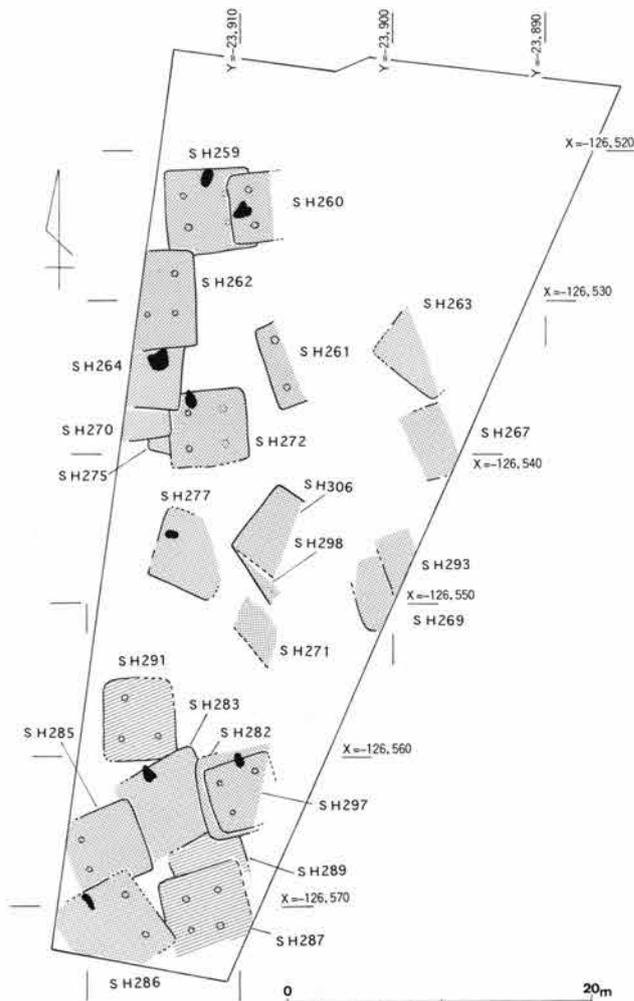
第64図 E地区第4遺構面平面図(1)

付表10 E地区第4遺構面飛鳥時代掘立柱建物跡一覧

遺構番号	形態	規模(南北×東西)	主軸
S B 226	南北棟建物	5間(8.8m)×2間(4.8m)	N-6°-W
S B 253	東西棟建物	2間(4m)×2間(4.2m)以上	N-5°-W
S B 333	南北棟建物	3間(5m)×2間(3.5m)	N-5°-W
S B 334	南北棟建物	6間(8.6m)以上×2間(3.3m)	N-20°-W
S B 335	南北棟建物	2間(3.4m)以上×2間(3.3m)	N-24°-W
S B 336	総柱建物(倉庫)	1間(1.8m)以上×2間(3.6m)	N-6°-W

付表11 E地区飛鳥時代竪穴式住居跡一覧

遺構番号	形態	規模(単位m)	竈	主軸
S H 266	方形	4.6(南北)×4.5(東西)以上	東辺	N-18° -W
S H 268	方形	—	西辺	N-16° -W
S H 273	方形	4.5(南北)×—	北辺	N-39° -W
S H 276	方形	4.8(南北)×4.5(東西)	—	N-3° -W
S H 278	方形	5(南北)×5(東西)以上	北西隅	N-60° -W
S H 279	方形	4.5(南北)×4.3(東西)	南辺	N-4° -W
S H 280	方形	5.2(南北)×—	北辺	N-22° -W
S H 284	方形	4.7(南北)×4.2(東西)	—	N-22° -W
S H 288	方形	—	—	N-17° -W



第65図 E地区第4遺構面平面図(2)

は S B 334が、東西 2 間、南北 6 間以上の長大な建物に復元される。また、S B 335としたものは、S B 334の北辺及び北辺から 2 間分の柱穴に、立替えの痕跡が認められたことから復元したものである。

南北溝 S D 247と東西溝 S D 246は、調査区中央やや西寄りで検出した。両者は、途中で交差し、前者が後者を切る。出土遺物から、S D 247は 7 世紀末～8 世紀前半頃、S D 246は 7 世紀後半頃に属すと考えている。なお、S D 246からは土馬も出土した。

e. 飛鳥時代前半(第4遺構面-2)

飛鳥時代前半に位置づけている遺構には、竪穴式住居跡 9 基がある(付表 11)。いずれも一辺 4.5～5 m の方形をなす。全体に遺存状況は悪く、深さ 5～10cm 程度が残っているに過ぎないものが多い。また、S H 280 など、竈が良好に確認できた例もあるが、多くの場合、これらに重複する柱穴などによって削平されていた。

これら竪穴式住居跡から出土する遺物は決して多くはないが、7 世紀中頃を主体とするものと判断している。ただし、全てが同一時期に併存していたものではなく、その主軸方位などからみて 2～3 時期に細分されると思われるが、詳細は、現在整理中である。

f. 古墳時代中期後半～後期(第4遺構面-3)

この時期の遺構としては、竪穴式住居跡を 21 基(付表 12)確認した。ただし、遺構の重複が多く、明確に輪郭等を確認できなかったものも多くあり、本来はさらに数が多かったものと思われる。確認できたものでは、一辺 5～6 m 程度の隅丸方形をなすものが多い。また、重複する遺構が多いため、竈が確認できないものや、焼土塊が壁際に認められるにすぎないものも多い。

無論、これら全ての住居跡が同一時期に併存していたとは考えられない。重複関係などからみると少なくとも3～5時期にわたるものが混在するようであり、出土遺物等をもて5世紀末から6世紀前半頃までのものが存在する。ただし、現状では十分な整理が行えておらず、時期別の住居の分布状況並びに北側のD地区で検出したほぼ同時期の住居跡を含めた集落の変遷の解明等については今後の課題としておきたい。

g. 弥生時代終末～古墳時代初頭(第4遺構面-4)

この時期の竪穴式住居跡は、調査区南辺付近で3基を確認したにとどまる(付表13)。また、上述の古墳時代中期・飛鳥時代の各遺構と重複して存在するため、削平が著しい。このため、唯一、SH291が一辺5m前後の隅丸方形をなすことを確認できたほかは、規模・形態は明らかにできなかった。

②出土遺物

遺物は、現在、整理中のため、詳細に関しては後日改めて報告することとし、ここでは主要なものを部分的に提示し、その概略を報告するにとどめた。

a. 平安時代末葉(第66図)

この時期の遺物に関しては、土坑SK201及びSE205から出土したものの一部を図示した。概ね、11世紀末葉～12世紀初頭頃に位置づけられると考えている。

1～8は、SK201から出土したもので、9・10が、SE204から出土したものである。1は、土師器小皿。2は土師器椀で、口縁部は二段にナデ調整を施す。3～8は、瓦器椀である。破片が多いが、その形態や暗文の状況から、11世紀末葉～12世紀初頭頃に位置づけられるものと考えている。

SE204出土の瓦器椀(9・10)も、遺存状況はやや悪いが、その形態や暗文の状況はSK201出土品に類似しており、ほぼ同時期に属すと考えられる。

b. 奈良時代中頃～平安時代(第67・68図)

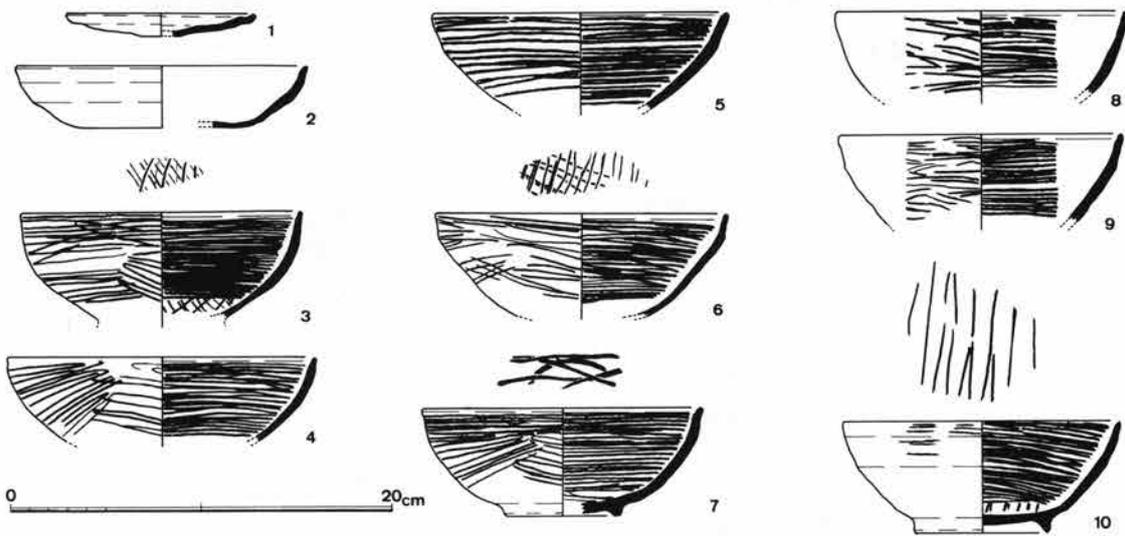
この時期の遺物に関しては、SK203・SD218・SX249から出土したものの一部を図示した。

付表12 E地区古墳時代竪穴式住居跡住居一覧

遺構番号	形態	規模(単位m)	竈	主軸
SH259	方形	5.5(南北)×5.6	北辺	N-5° W
SH260	〃	4.5(南北)×—	西辺	N-7° W
SH261	〃	5.5(南北)×—	—	N-20° W
SH262	〃	6.5(南北)×—	北辺	N-4° W
SH263	〃	5.2(南北)×—	—	N-50° W
SH264	〃	—	—	N-5° W
SH267	〃	4.8(南北)×—	—	—
SH269	〃	—	西辺	—
SH270	〃	—	—	—
SH271	〃	—	—	—
SH272	〃	5(南北)×5.1(東西)	北辺	N-5° W
SH275	〃	—	—	—
SH277	〃	4.6(南北)×—	西辺	N-15° W
SH282	〃	5.5(南北)×—	—	N-15° W
SH283	〃	5.5(南北)×—	北辺	N-25° W
SH285	〃	4.9(南北)×—	北辺	N-8° W
SH286	〃	5.5(南北)×—	北辺	N-35° W
SH293	〃	—	—	—
SH297	〃	4.4(南北)×4.5(東西)	北辺	N-18° W
SH298	〃	—	—	—
SH306	〃	5.2(南北)×—	北辺	N-60° W

付表13 E地区弥生時代竪穴式住居跡一覧

遺構番号	形態	規模(単位m)	主軸
SH287	隅丸方形?	—	—
SH289	隅丸方形?	—	—
SH291	隅丸方形	5.3(南北)×4.8(東西)	N-2° W

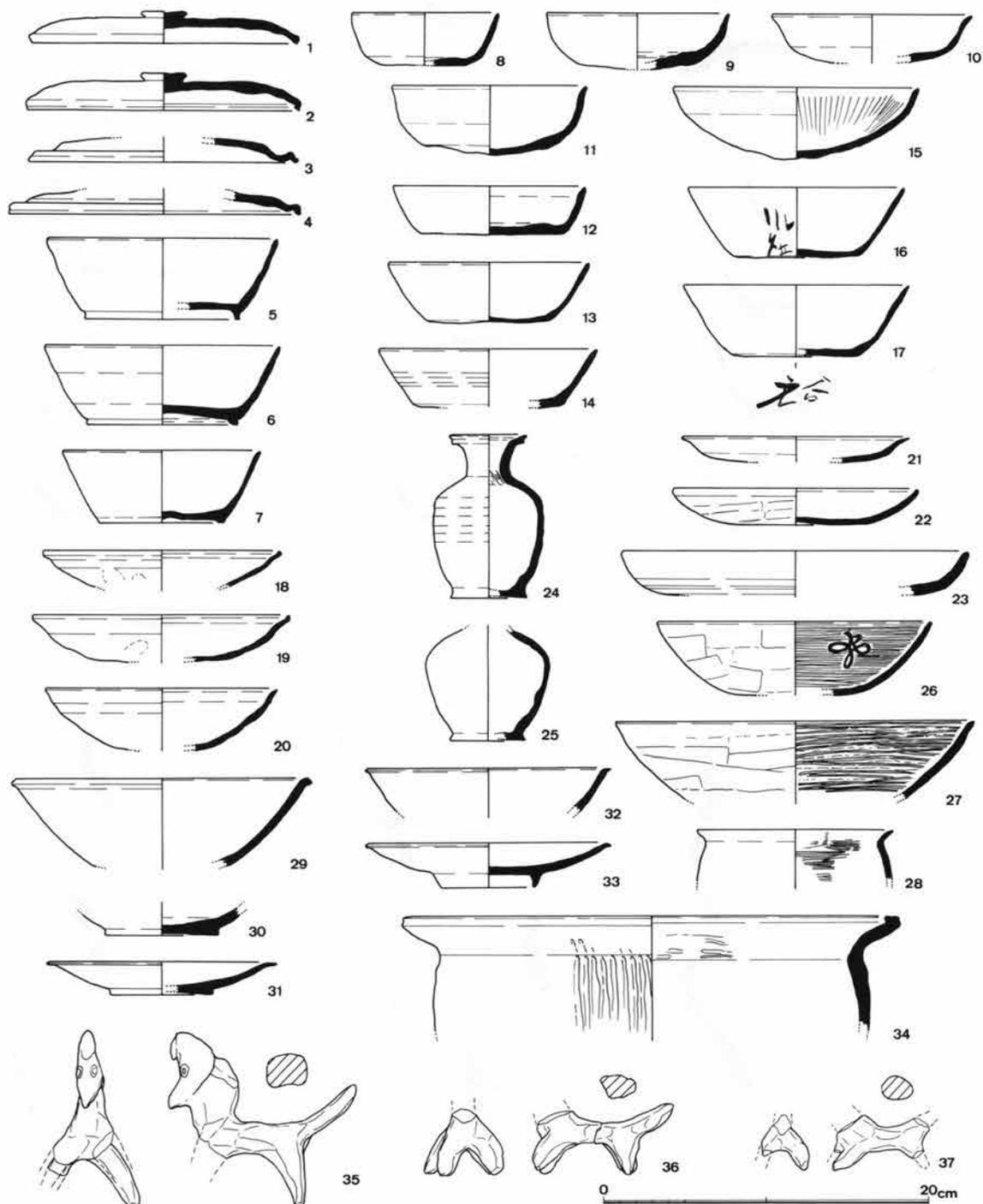


第66図 出土遺物実測図(1)

概ね、9世紀後半～10世紀初頭を主体とするもの(S D 218出土遺物)、8世紀後半を主体とするもの(S K 203・S X 249)の2者である。

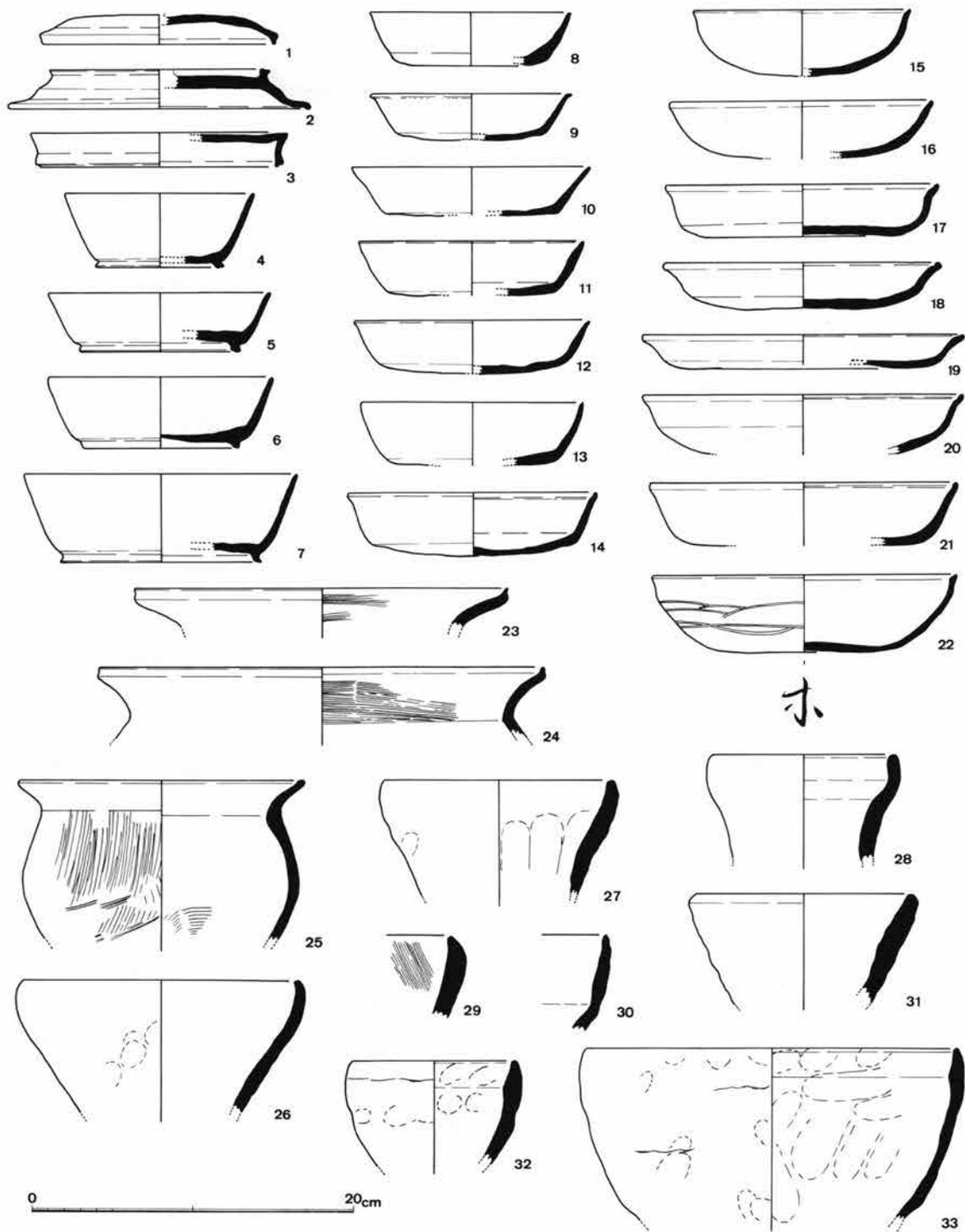
S D 218出土遺物(第67図) 1～4は須恵器杯蓋。1・2は天井部からなだらかに下がり口縁部へ至るもので、3・4は口縁端部付近で屈曲するものである。5～7は高台を付す須恵器杯身。いずれも高台は底部外周に付される。8～11・15は、一見、古相を呈する土器群である。8～11は須恵器杯身、15は土師器杯であるが、7世紀後半～8世紀初頭に属すと考えられる。S D 218は、周辺の土砂を削って埋めたらしく、埋土中にはこの時期の土器を比較的多く含む。12～14・16・17は高台の無い須恵器杯身である。うち、16・17は墨書土器で、16は体部外面に、17は底部外面に墨書が認められる。文字は、17が「福」と読めるものの、16については不明である。24・25は須恵器小壺で、底部に糸切り痕を認める。18・19は土師器杯、21～23は土師器皿である。24は口径21cmに復元される大型品である。20は土師器椀。丸みのある体部と外反気味の口縁部とからなる。26・27は黒色土器杯である。いずれも内面を黒色化するB類に属す。28は黒色土器の鉢である。29～31は緑釉陶器である。29は椀の口縁部、30は同底部片で、31は平高台をもつ皿である。32・33は灰釉陶器。32は椀の口縁部片、33は三日月高台を付す皿である。34は土師器甕。強く外反する口縁部は端部を折り返す。35～37は土馬である。35は、両方の前足を欠くが、器高11cm前後に復元される。36・37はさらに小型品で、36は頭部を欠き、37は体部の一部分を残すのみである。

S K 203出土遺物(第68図) 1～3は須恵器蓋である。1は杯蓋で、平らな天井部からなだらかに口縁部へいたるもの、2はいわゆる環状突帯を付すもの、3は口縁部が垂下する壺の蓋である。4～7は高台を付す須恵器杯身、8～14は高台の無い須恵器杯身である。15～22には土師器皿・杯を示した。15は丸味のある体部にわずかに外側へつまみだす口縁端部をもつ杯。16は緩やかに屈曲して立ち上がった口縁部の端部付近にわずかに段をなす杯、17～21は口縁端部付近を一旦強く外反させたのち、端部を折り返しておわる杯・皿である。22はその形態から7世紀中葉頃に属す杯と考えられるものである。S K 203に重複してこの時期の竪穴式住居が存在しており、



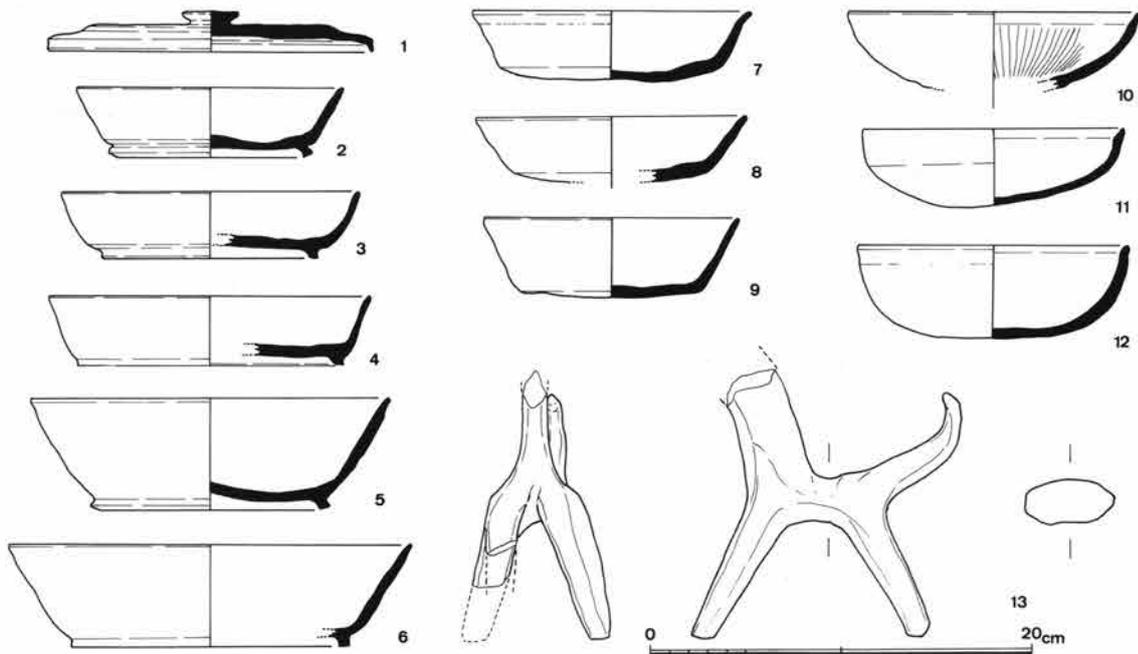
第67図 出土遺物実測図(2)

本来はここから出土すべきものが混入したと考えている。底部に「木」ではないかと思われる墨書が認められる。23・24は土師器甕、25は土師器鉢である。23・24は口縁端部を上方へつまみ上げるもので、25は折り返す。26～33は製塩土器である。形態から、口縁付近が一旦開いたあと内湾するもの(26～28：山中分類の内湾型 b)、内湾しつつ体部から口縁部へ至るもの(30・32・33：山中分類の内湾型 a)、直線的に口縁部が延びるもの(29・31：山中分類の直向型)の三者に分かれる。



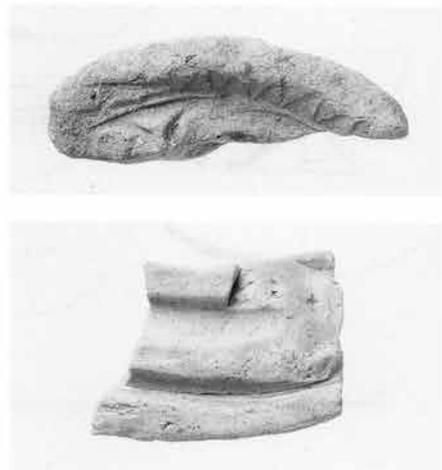
第68図 出土遺物実測図(3)

S X 249出土遺物(第69図) 1は須恵器杯蓋、2～6は高台を付す須恵器杯身である。うち2は、高台の形態などから、ここに示した中では古相を呈するものと考えられる。このほかには、3・4のように浅身のもの、5・6のように深身のものがある。7～9は高台の無い須恵器杯身、10～12は土師器杯である。13は土馬である。頭部及び右側の前・後足を欠くが、遺存高約14cmを測る。馬具等の表現は認められない。



第69図 出土遺物実測図(4)

古瓦類(第70図) 調査では、ここに示した土器類のほかに、わずかながら古瓦類の出土を認めた(コンテナ1箱程度)。その多くは細片となった平瓦であるが、これらは製作技法から大きく2群に分類される。一方は、凸面に縦方向の縄叩きを施す一枚作りのもので出土資料の8割近くを占める。もう一方は、桶巻き作りで凸面の叩きをナデ消すタイプのもので、資料中の2割程度を占める。同様の傾向は、過去の調査でも確認され、うち前者の平瓦は、8世紀中頃～後半に比定しており、過去にD地区で出土した平城宮式の軒丸瓦に伴うと考えて^(注9)いる。しかし、後者の平瓦に関しては、その製作手法の

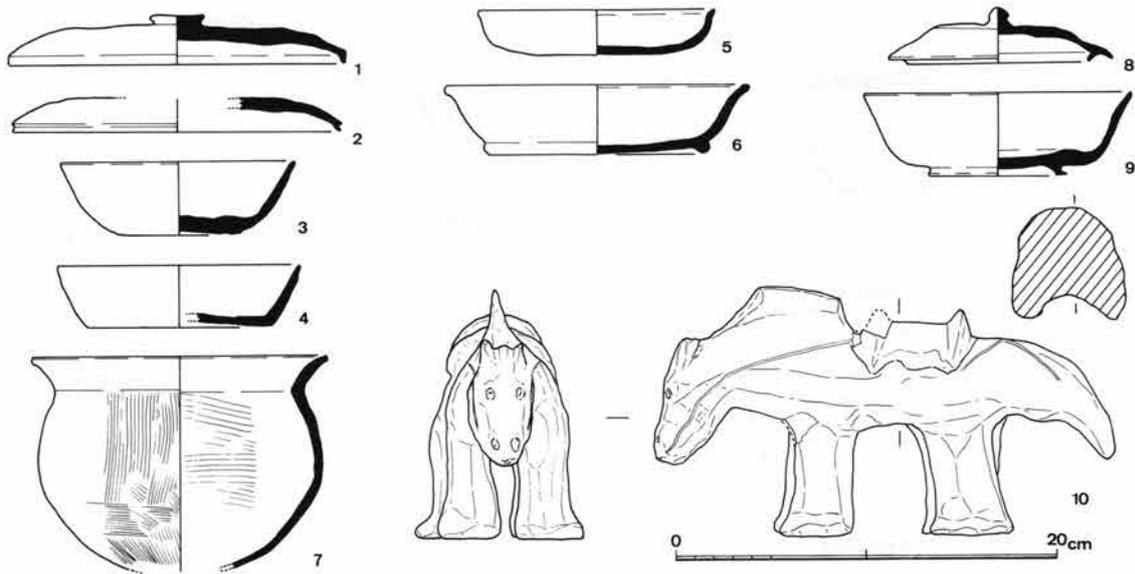


第70図 出土遺物(古瓦)

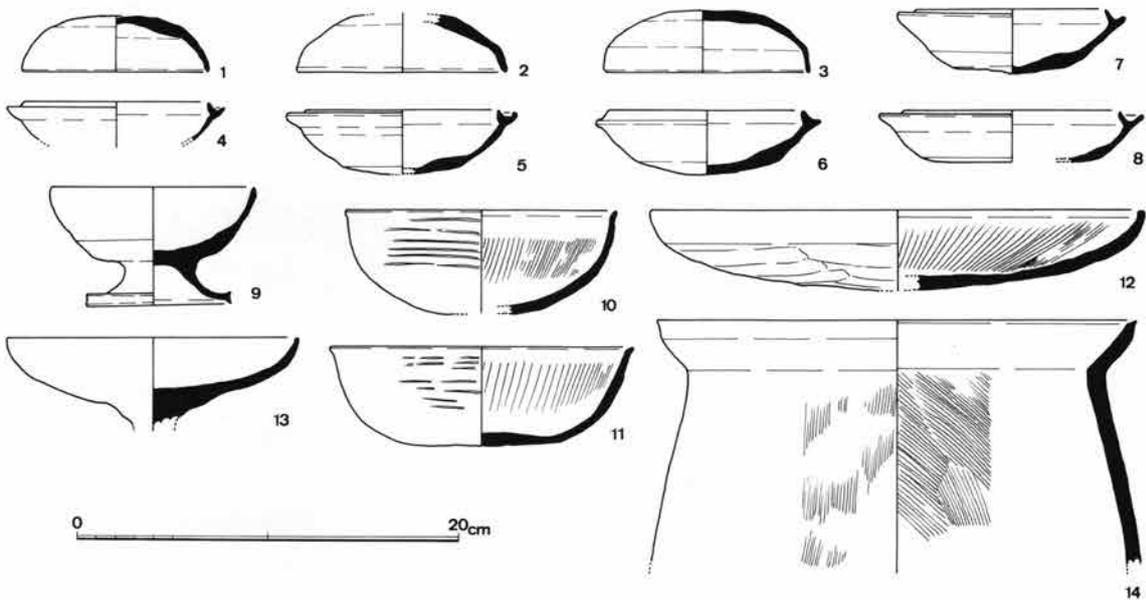
特徴から7世紀後半～8世紀初頭頃のものとして推測されるものの、不明な点が多かった。こうした中、今回の調査では、上記の平瓦に加え、周縁に面違い鋸歯文、内区に複弁蓮華文を配する軒丸瓦の破片が1点(第70図上; S D218の埋土中から)、三重弧文の軒平瓦の破片1点(第70図下; S K203埋土中から)が出土した。両者は7世紀後半～末頃のものと考えられ、凸面をナデ消すタイプの平瓦に伴うと考えられる。

c. 飛鳥時代～奈良時代前期

この時期の遺物に関しては、溝S D246・S D247及び竪穴式住居跡群から出土したもののなかから主なものを図示した(第71・72図)。現状では前者に7世紀末葉～8世紀初頭頃、後者に7世紀中頃の年代を与えている。



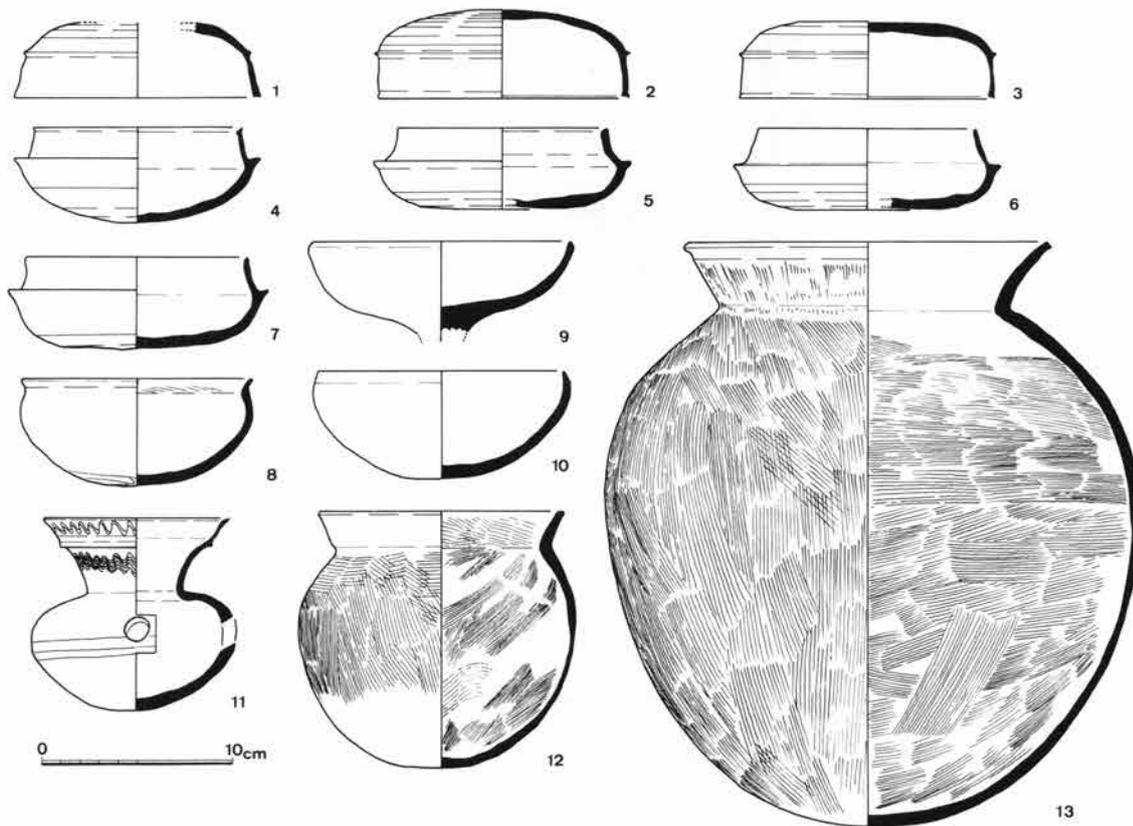
第71図 出土遺物実測図(5)



第72図 出土遺物実測図(6)

S D 246・S D 247出土遺物(第71図) 1～7がS D 247、8～10がS D 246からそれぞれ出土したものである。1・2は、須恵器杯蓋である。平らな天井部からなだらかに下がり、口縁部へ至る。3・4は高台の無い須恵器杯身、5・6は土師器杯身である。6は磨滅のため調整及び暗文は確認できない。7は土師器鉢で、球状の体部と「く」の字状に外反する口縁部からなる。8は須恵器杯蓋、9は須恵器杯身である。8は口径11.8cmを測り、口縁部内面にかえりを付すもので、9は底部に高台を付す。10は土馬である。鞍・手綱・鬣等、非常に細かな表現がなされている。ほぼ完形に復原されたが、胴部と脚部が分離した状態で出土した。

竪穴式住居跡群出土遺物(第72図) 1～3は須恵器杯蓋で、口径10～11cmを測るものである。4～8は須恵器杯身。4～7は口径10cm前後、8は11cmを測る。9は須恵器高杯である。10・11



第73図 出土遺物実測図(7)

は土師器杯、12は同皿である。13は土師器高杯である。14は土師器甕である。口縁部が内椀気味に立ち上がるもので、いわゆる近江型と呼ばれるタイプに属す。

d. 古墳時代中期後半～後期

この時期の遺物は、竪穴式住居跡群から出土したものの一部を図示した(第73図)。ここに示したものは、概ね5世紀後半～6世紀初頭に位置付けられるが、報告できなかった遺物中には、6世紀前半頃のものを含んでいる。なお、7～13はS H 283の床面から出土した一括資料である。

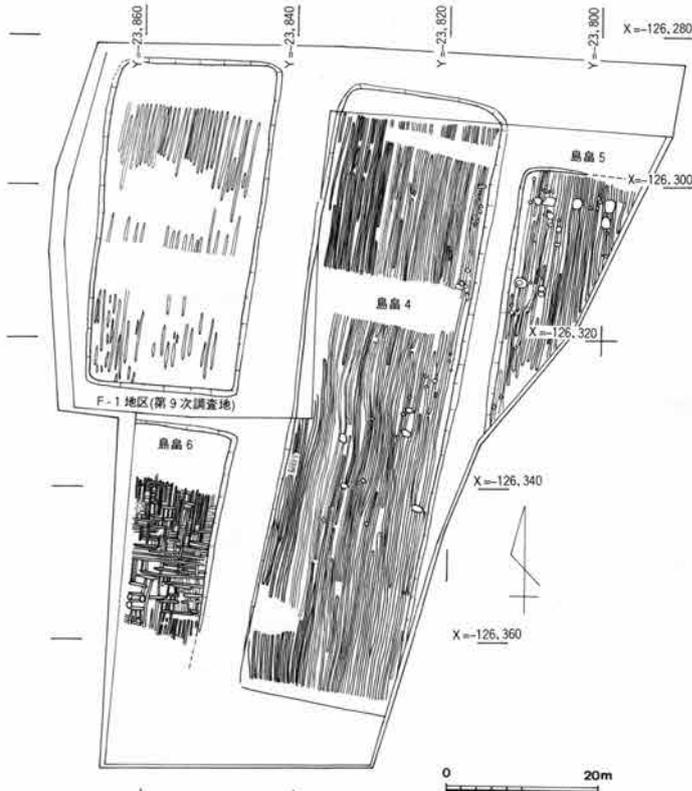
1～3は須恵器杯蓋。口縁部と天井部の境には突帯状の稜線が巡り、口縁端部には内傾する凹面をもつ。4～7は須恵器杯身。口縁部の立ち上がりは高く、杯部には内傾する面をもつもの(4・5)、丸く終わるもの(6・7)がある。9は土師器高杯、8・10は土師器杯である。8は口縁部を外反させ、10は口縁部が内椀するものである。11は須恵器甕である。12は土師器鉢。13は土師器甕。口縁端部は外側へわずかにつまみだされ、上外方に面をなす。

(2) F地区の調査成果

① 検出遺構

a. 鎌倉時代以降(第1遺構面)

F地区の調査でも、第1遺構面の遺構として、まず、鳥島を3基検出した(鳥島4～6)。うち、



第74図 F地区第1遺構面平面図



第75図 F地区第2遺構面平面図

島島4は、調査区中央で確認したものであり、南北約80m・東西約21mを測る。島島5・6は、大半が調査区外へ延びており、全体の規模は不明である。各島島上では、一面に南北方向(N-8°-E)に延びる素掘溝群を検出した(溝幅15~30cm)。島島の痕跡を示す畝溝と考えている。これら畝溝は、細かな川砂が堆積しているものが多く、大半が川の氾濫によって埋没したものであると思われる。

b. 平安時代末葉(第2遺構面)

第2遺構面でも、一面で素掘溝群(幅15~30cm)を検出した(ただし、先の島島が造成された際に、これ以外の部分は大幅な削平を受けており、遺構が検出されたのは島島部分に限られた)。島島が形成される以前に、当地で行われていた島島の痕跡を示す畝溝と考えている。溝の大半は南北方向に延びるが、第1面の畝溝とは方向を異にする(ほぼ正南北に沿うものからやや西へ振る)ものが認められる。こうした方向の違いは、周辺の地割りの変化を反映していると考えられ、時代を経るに従って、西へ振った地割りから、ほぼ正南北に沿う地割り、さらには8度前後東へ振った地割りへと変遷したものと判断している。時期的には、12世紀後半~13世紀頃のものとして判断している。

c. 平安時代前期~中期(第3

遺構面)

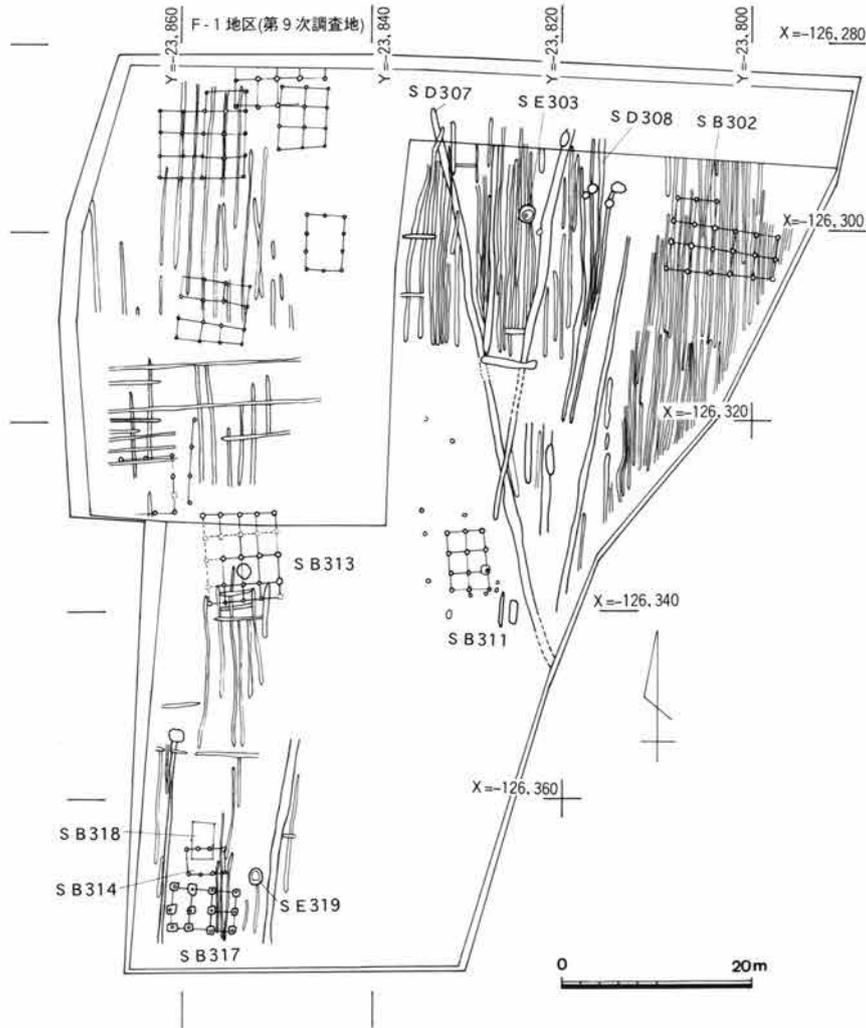
第3遺構面では、掘立柱建物跡6棟、井戸3基、溝2条などを検出した。

掘立柱建物跡(S B 302・311・313・314・317・318)は、昨年度のF地区北西部の調査成果を合わせると、当該地区で計14棟を確認したこととなる。概ね、10世紀後半～11世紀初頭のものが主体をなし、3間×3間以上の主屋1棟に2間×3間の附属建物1棟がセットをなす。今回検出したもののうちでは、S B 313とS B 311がこれに相当する。なお、S B 317は2間×3間の東西棟の総柱建物で、柱掘形は方形をなす。他が径30cm程度の円形の柱掘形を呈することと明らかに異なり、奈良時代後半～

平安時代初頭のもの

と判断する(付表14)。井戸3基(S E 303・312・319)のうち、S E 303は、直径約2.2mを測る素掘りの井戸で、深さは約2.1mである。出土遺物には、土師器皿・瓦器椀・黒色土器などがあり、11世紀頃のものと考えられる。

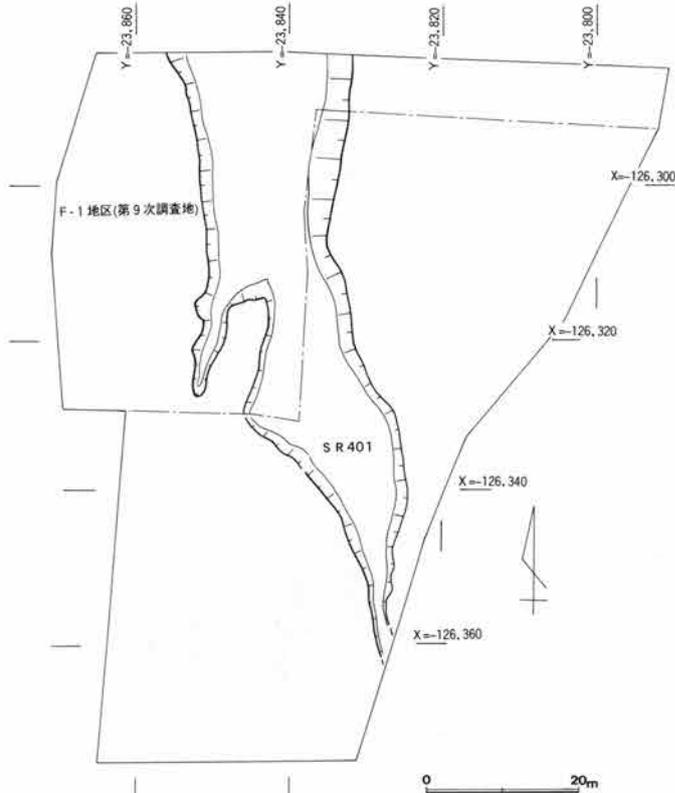
溝では、S D 307が、幅約1.3m・深さ約0.4mを測り、北西-南東方向(N-20°-W)にのびるもので、総延長約50m分を検出した。出土遺物から、9世紀末～10世紀初頭頃のも



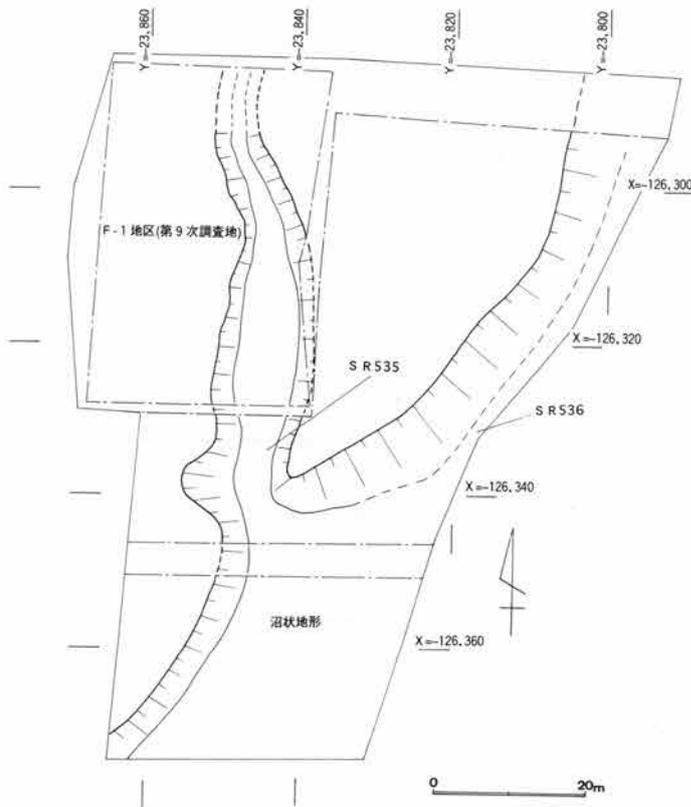
第76図 F地区第3遺構面平面図

付表14 F地区第3遺構面掘立柱建物跡一覧

遺構番号	形態	規模(南北×東西)	主軸	備考
S B 302	東西棟総柱建物	2間(4.6m)×5間(10.9m)	N-9°-E	北西隅に張出あり
S B 311	南北棟総柱建物(倉庫か)	3間(6m)×2間(4m)	N-4°-W	
S B 313	南北棟総柱建物(張床)	4間(8.8m)×4間(7.5m)	N-4°-W	
S B 314	東西棟建物	1間(2.8m)×3間(3.7m)	N-2°-W	
S B 317	東西棟総柱建物(倉庫)	2間(4.2m)×3間(6.6m)	N-4°-E	
S B 318	南北棟建物	3間(3.8m)×2間(2.2m)	N-2°-E	



第77図 F地区第4遺構面平面図



第78図 F地区第5遺構面平面図

のと考えられる。その方向は、先のE地区で検出した道路状遺構にほぼ平行し、道路状遺構想定位置から東方へ約110mの距離を隔てる。ここでは、道路に沿う地域に形成された地割りに関するものと想定している。一方、S D 308は、ほぼ南北方向にのびるものであり、本地区の第2遺構面の素掘溝群に沿った方向を示している。時期的には11世紀後半頃に属すと考えている。なお、本遺構面でも、わずかながら素掘溝群を検出している。その方向はほぼ座標の南北に沿うものが多く、一部に西へ振るものが認められた。

d. 古墳時代後期～飛鳥時代(第4遺構面)

この時期の遺構としては、第4遺構面で検出した流路跡(S R 401)がある。調査区を北西から南東方向に流れるもので、幅約5～20m、深さは最も深いところで約1mを測る。遺物は極めて少なく、6世紀末～7世紀頃の須恵器片がわずかに出土したにとどまる。その検出状況から、後述する流路跡(S R 535)が埋没していた最終段階のものと判断している。

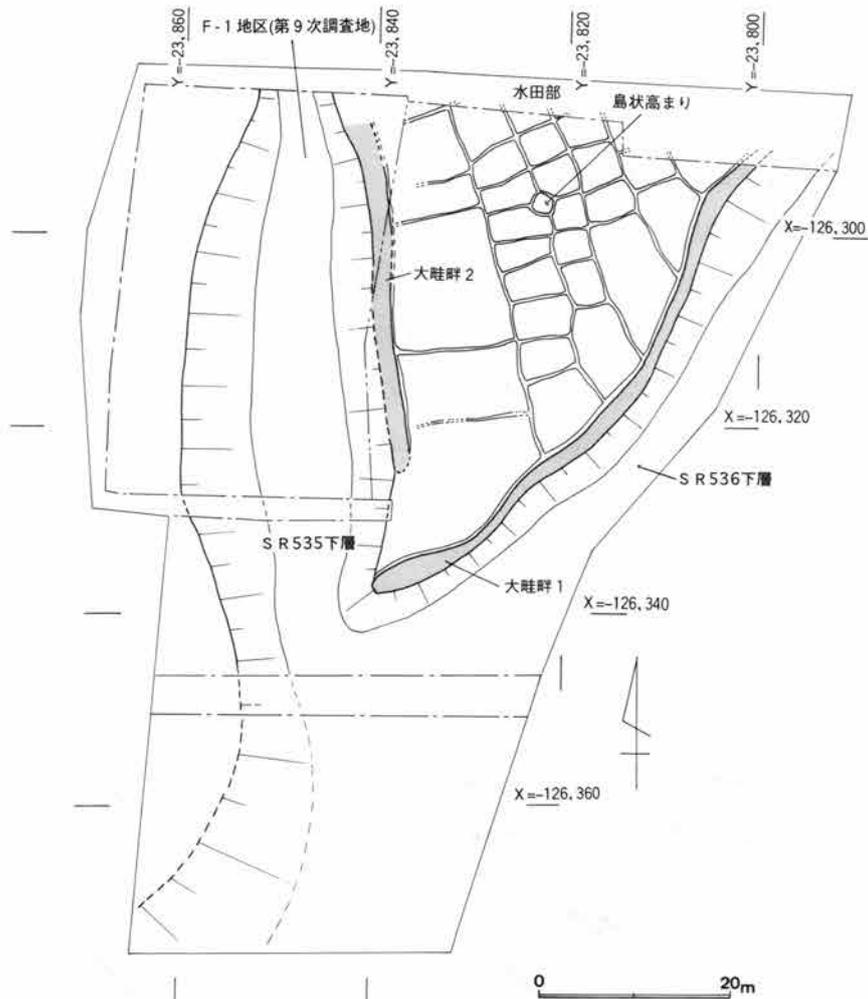
e. 弥生時代後期終末～古墳時代前期(第5遺構面)

この時期の遺構には、2条の流路跡とこれが合流して形成する沼状地形がある。すなわち、調査区の西辺部を南北に流れる流路跡(S R 535)と東辺部を北東から南西方向に流れる流路跡(S R 536)が、調査区中央付近

で合流し、南半部で沼状となる。SR536は西側の肩部を確認したにとどまるが、SR535は幅約5m・深さ約1.5mを測り、沼状部分は、深さ約2m以上・幅20m以上となる。埋土中からは弥生時代後期終末～古墳時代前期に属する土器や木製品が出土した。

f. 弥生時代後期後半(第6遺構面)

第6遺構面の状況としては、第5遺構面で検出した流路並びに沼状地形は、その幅に多少の増減はあるものの、ほぼ同一地点の下層に存在し、SR535



第79図 F地区第6遺構面平面図

下層とSR536下層に囲まれた調査区北東部の舌状に延びる微高地上に水田が形成されているというものである。水田面直上には厚さ3～5cmの洪水砂が一面に認められ、水田は廃棄された段階の状況を良好に残していた。このため、水田面では稲株痕と従来認識されている径3～5cmの砂が充満した穴や足跡などが多数認められた。水田は、その東西両側にある流路に対して、幅約1m・高さ約20～40cmの大畦畔(大畦畔1・2)を堤防状に造り、これに囲まれた平坦面を幅20～30cmの小畦畔で小区画に区切ることによって形成される。水田跡は、大小合わせ26面を確認したが、これらを構成する畦畔をみると、東西畔に対して南北畔はわずかながら規模が大きく、またしっかり造られている。水田の区画をみても、南北畔は比較的まっすぐ通るのに対して、東西畔は水田毎に独立するものが多い。こうしたことから、これらは、まず南北方向に長い区画が設定された後、これから枝分かれする東西畔を造ることによって水田小区画を設けていったものと考えられる。なお、調査では、南北に長い区画を東西に6列分確認しているが、その最も西側に位置する一列分は、区画も大きく、畔が途切れる部分もある。廃棄段階で小区画の水田が形成されていなかった(休耕されていた)可能性や、洪水が西側から来たために、これによって小区画が崩壊した可能性などが考えられる。なお、この部分では、検出した水田面も非常に凹凸が激しく、

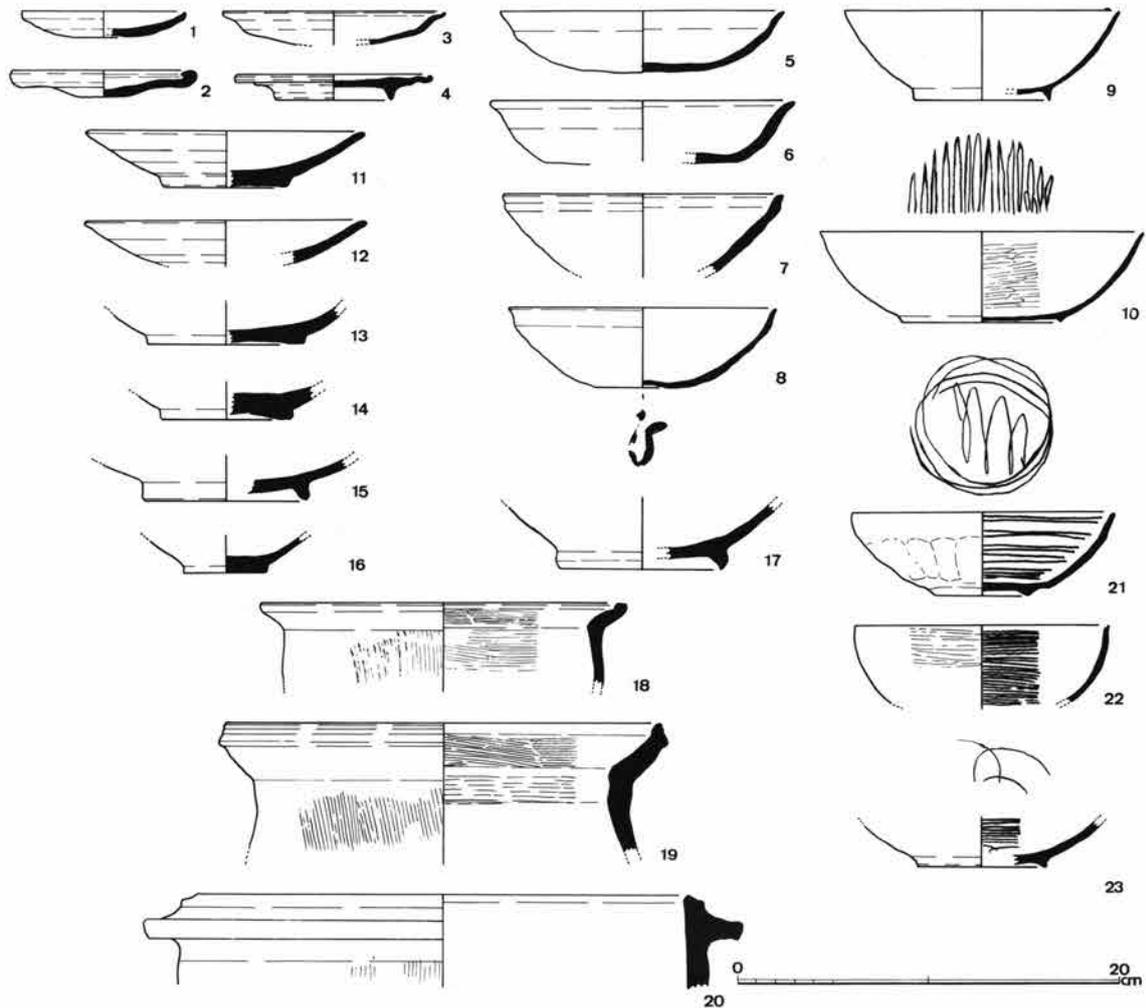
稲株痕も密度が低い。

②出土遺物

a. 平安時代～鎌倉時代

この時期の遺物としては、包含層及びS D307から出土したもののなかから主なものを示した。包含層からの出土遺物には、時期的に9世紀後半～13世紀にわたるものが認められる。一方、S D307は、E地区で確認した道路状遺構の方向と近似した方向性をもつもので、道路に規制されたその周辺の地割りに関すると考えている。その時期は、9世紀後半～10世紀初頭頃と考えられる。

包含層出土遺物(第80図) 1～4は土師器皿である。1～3は小皿で、2はいわゆるコースター形をなす。4は台付き皿である。5・6は土師器杯である。いずれも外反する口縁部を有す。7・8は土師器碗である。丸みのある体部と外反する口縁部からなる。うち、8は底部外面に墨書を認めるが、記号状をなし、意味は不明である。9・10は黒色土器碗である。両者ともB類に属す。11～17は緑釉・灰釉陶器である。11～16は緑釉陶器の皿ないしは碗、17は灰釉陶器の碗である。18・19は土師器甕、20は土師器羽釜である。18は短く外反する口縁部の端部を内側へ折り



第80図 出土遺物実測図(8)

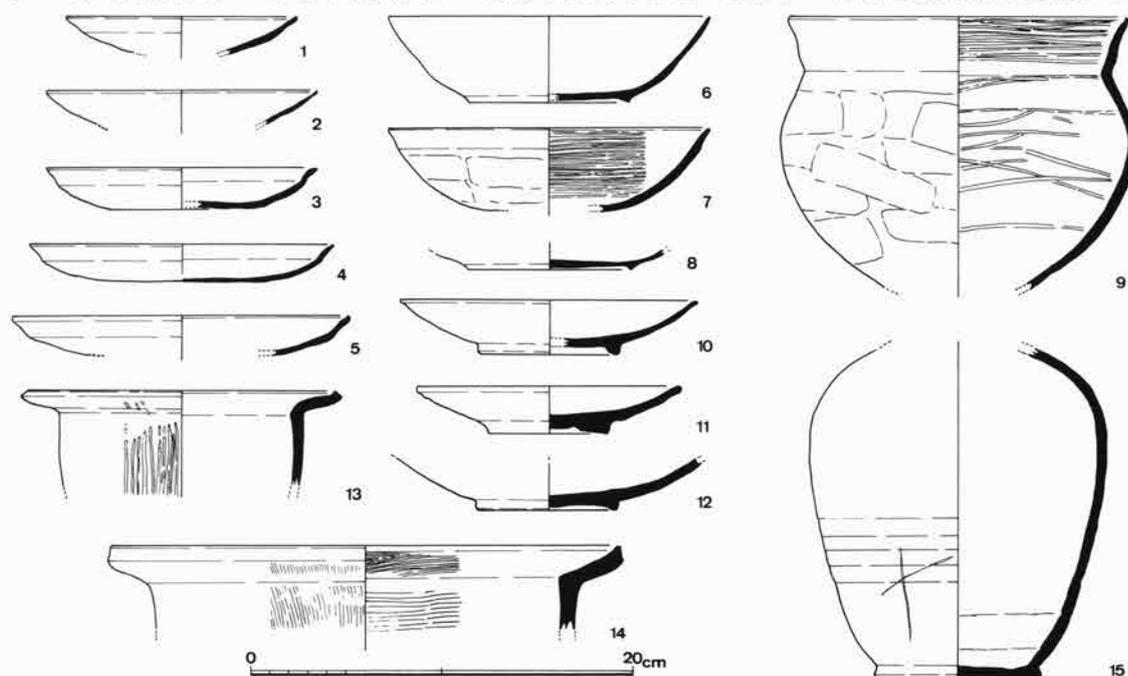
返すもの、19は、くの字状に外反する口縁端部が上方へつまみ上げられるものである。21～23は瓦器椀である。21は断面三角形の小さな高台を付し、外面にはヘラミガキは観察されず、内面のヘラミガキも粗く、22・23に対し新相を呈する。

S D 307出土遺物(第81図) 1・2は土師器杯、3～5は同皿である。6～9は黒色土器で、6・8は椀、7は杯、9は鉢である。いずれも内面のみを黒色とするB類に属する。10～12は緑釉陶器皿である。13・14は土師器甕。13は強く外反したあと内側へ折り返す口縁部を有し、体部外面には縦方向に粗いハケ目を施す。14は、くの字状に外反したあと上方へかるくつまみ上げる口縁部を有す。15は須恵器壺である。底部は平底で、糸切り痕を残す。

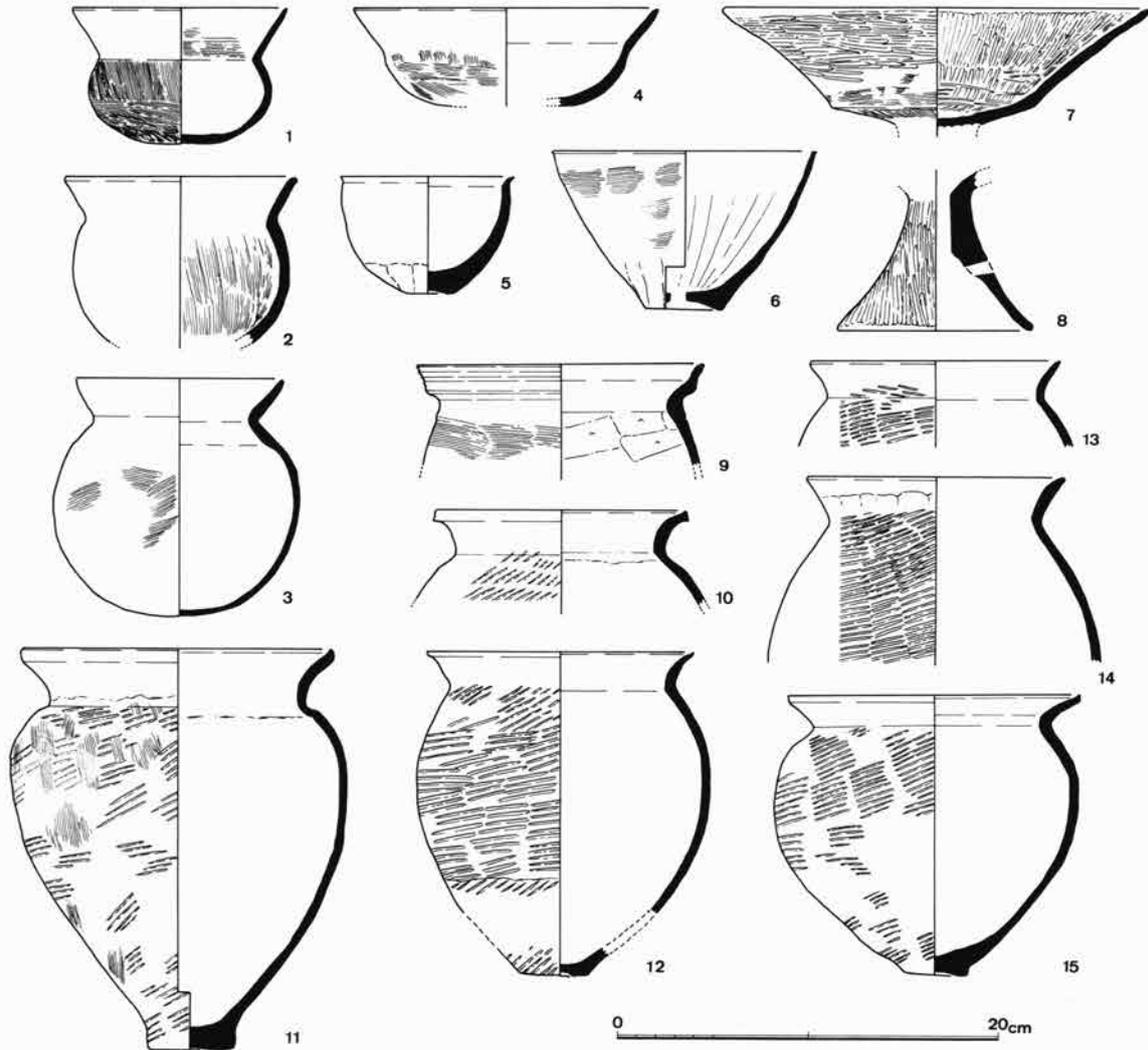
b. 弥生時代後期末葉～古墳時代前期(第82・83図)

この時期の遺物としては、S R 535から出土したものの中から主なものを図示した。昨年度(平成8年度)の調査では、洪水砂等を目安に、この埋土を分層し、遺物の取り上げを行なったが、今年度の調査地では、十分にそれができていない。このため、本来は3層(S R 535で2層、S R 535下層で1層)に区分すべき遺物(弥生時代後期後半・同末葉～古墳時代初頭、古墳時代前期)を、ここでは一括して報告することとなる。

1は小型丸底壺である。やや偏球状の体部に、外反して直線的に上外方へ立ち上がる口縁部を有す。2～5は鉢である。2・3は球形の体部にくの字状に外反する口縁部を有すもの、4は浅身の体部に、大きく外反する口縁部を有すもの、5は平底の体部からわずかに外反する口縁部を有すものである。6は、平底の底部に穿孔したいわゆる甌と考えられるものである。7は高杯の杯部、8は器台の脚部である。7は、明瞭な稜をなして屈曲し、大きく外反して立ち上がる口縁部を有すものである。9～22は甕である。9はいわゆる丹後方面によくみられる複合口縁を有すもので、体部外面にハケ目、同内面にヘラ削りを施す。10～15は、いわゆる弥生時代後期からの



第81図 出土遺物実測図(9)



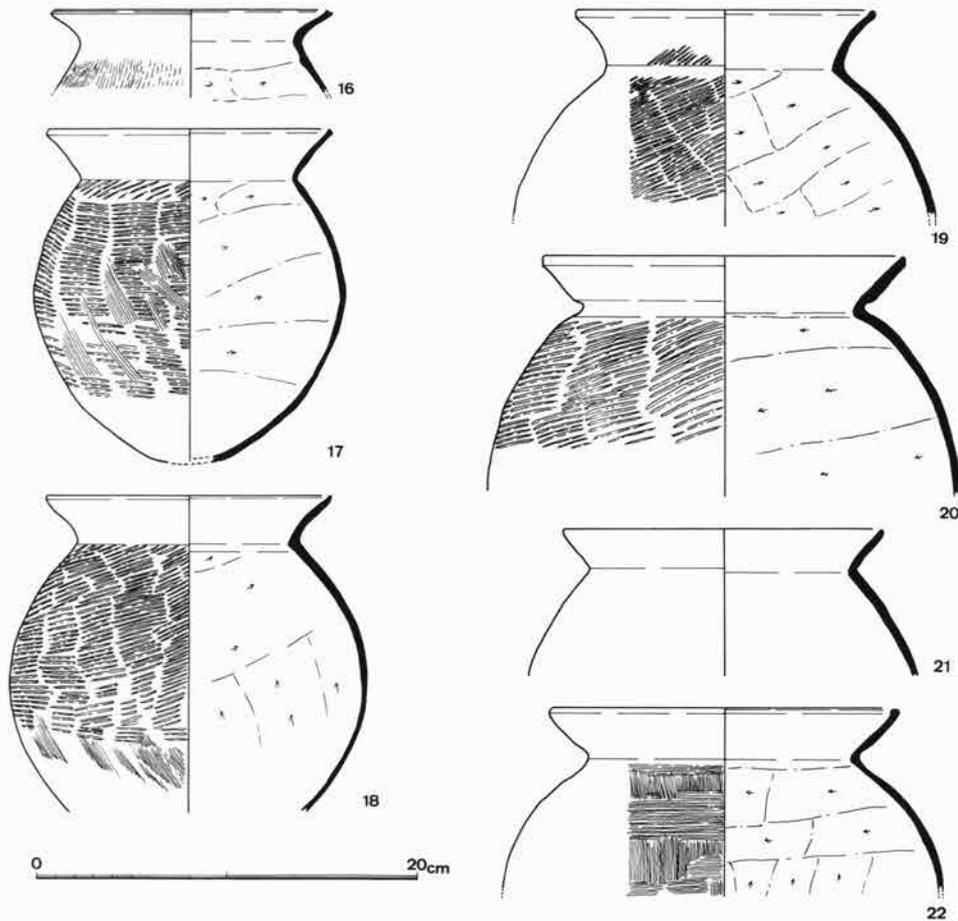
第82図 出土遺物実測図(10)

伝統的な甕とされるもので、平底で短く外反する口縁部からなり、体部外面には粗い叩きを施す。うち、11は突出気味の底部を有する点でやや古相を呈するのに対し、15などは球形近くに張った体部と上方へつまみあげる口縁端部を有し新相を呈する。16~22は、いわゆる庄内甕及び布留甕とされるものである。うち、17~20がいわゆる庄内甕とされるものに属すもので、つまみ上げておわる口縁端部を有し、体部外面に細かな叩き、内面にヘラ削りを施すものである。底部が遺存しているものは少ないが、17のように尖底気味になると思われる。一方、いわゆる布留甕に属するのは16・21・22で、球形に近い体部と内側に肥厚させた口縁端部を有し、体部外面にハケ目調整を施すものである。なお、図示したものでは、明らかに他地域産の土器と判断されるものは、確認していない。

3. ま と め

以上が、平成9年度発掘調査の概略である。詳細な整理・検討は、今後さらに行う予定であるが、ここでは、時代を追って簡単にその概略をまとめておきたい。

弥生時代後期後半 F地区で弥生時代後期後半の水田跡を確認した。しかも、この水田跡は洪



第83図 出土遺物実測図(11)

水によって埋没したもので良好に遺存しており、水田面では稲株痕が多数確認された。なお、同様な水田跡は過去の調査でもA・B地区で検出している。

弥生時代終末～古墳時代 この時期の遺構としては、E地区で弥生時代終末の竪穴式住居跡3基、古墳時代中期後半～後期の竪穴式住居跡21基を検出したのをはじめ、F地区で流路跡を検出した。この時期の竪穴式住居跡群に関しては、同時期のものが北側のD・C地区にわたって広がっていることを確認しており、これらを含めると、弥生時代終末及び古墳時代中期後半～後期ともに、それぞれ30基以上の住居跡が、南北に100m以上の広がりをもって分布していたこととなる。無論、すべて同一時期に存在したのとは考えられないが、当遺跡において、この時期、大規模な集落が形成されていたことは間違いない。

飛鳥時代 E地区の第4遺構面では、飛鳥時代の竪穴式住居跡や掘立柱建物跡なども確認した。このうち、7世紀中葉に属する竪穴式住居跡は、調査区の南側へ展開する集落跡の一部を確認したのと考えられる。一方、7世紀後半～末葉の掘立柱建物跡については、過去の調査で広範囲に広がりをみせることが明らかとなっている。しかも、この時期の遺構・遺物に関しては、長期間継続する当遺跡において、一つの重要な画期に相当していたようである。それは、(1)規模の大きな掘立柱建物跡が出現する、(2)C地区で昨年確認した小鍛冶関連の遺構が認められる、(3)出土遺物に古瓦が認められる(今回確認した軒丸瓦や軒平瓦、さらに桶巻き造りで凸面の叩き痕

をナデ消すタイプの平瓦など)などから類推されるもので、この時期を画期として、単なる集落から、豪族居館ないしは公的な施設へ、その性格に変化が生じた可能性が考えられるのである。

奈良時代～平安時代前期 この時期の遺構の中で最も注目される成果としては、やはりE地区で確認した道路状遺構をあげることができる。道路状遺構は、奈良時代中頃～平安時代前期にわたって機能したものと考えられ、E地区東半部を南南東-北北西の方向に通っていた(調査では、幅5～6mの平安時代前期～中期の道路遺構ではないかと考えられる遺構も検出したが、こちらは、道路状遺構と判断するには未だ確証を欠く)。道幅約12mを測り、その規模は当時の幹線道路に匹敵する。足利健亮氏は、当地付近を古山陰道が通過していたとの説を提唱しており、本道路遺構がこの古山陰道であった可能性は極めて高いと判断している。ただし、これに関しては幾つかの不確定要素も存在する。まず指摘されるのは、足利説自体の当否である。足利説の発表以来、そのルート上に巨椋池・桂川・宇治川・木津川の合流点があり、こうした低湿地に古代幹線道路は設置されないといった説が大方を占めている^(注10)。また一方では、今回検出した道路状遺構の位置が問題となる。詳細に道路状遺構の検出位置と足利説のルートを比べると、道路状遺構が、足利説のルートからは大きく東方へずれてしまうこと、その方向性も、足利説が北に向って西に25°～30°振るのに対し、道路状遺構は20～24°の振れとなる(北側のD地区分を含めると、10°前後の振れとなる部分もある)という問題が生じるのである。さらに、近年全国各地で確認されている古代幹道の多くが、7世紀後半～末葉頃には設置されているとの報告があるのに対し、今回の道路状遺構が8世紀中頃までしか遡ることができない点も大きな問題といえるだろう。こうした問題点に関して、現状では明確な回答を用意できていないわけではない。ただ、道路状遺構が東方へ振っている点に関しては、遺跡の西側に存在する旧流路がその路線上を大きく浸食してきたためにこれを避ける形で東へ迂回したとも考えられる^(注11)。また、道路状遺構の時期的な問題に関しては、同様に旧流路との関係で、当初は検出地点より西方に設けられていたものが、後に東方へ造り変えられた可能性もあるだろう。こうした点を含め、今後さらに検討を進めていきたいと考えている。

平安時代中期～鎌倉時代 この時期の遺構としては、E地区・F地区ともに、掘立柱建物跡が20～30mの間隔をおいて、数か所に分布していた状況を確認した。その状況は、古代末から中世初頭の一般集落の典型的な状況を示しているものと判断される。そして鎌倉時代になると、E・F地区ともに、鳥島が造成されはじめたようで、以後、徐々に現在のような景観へと変遷していったものと思われる。

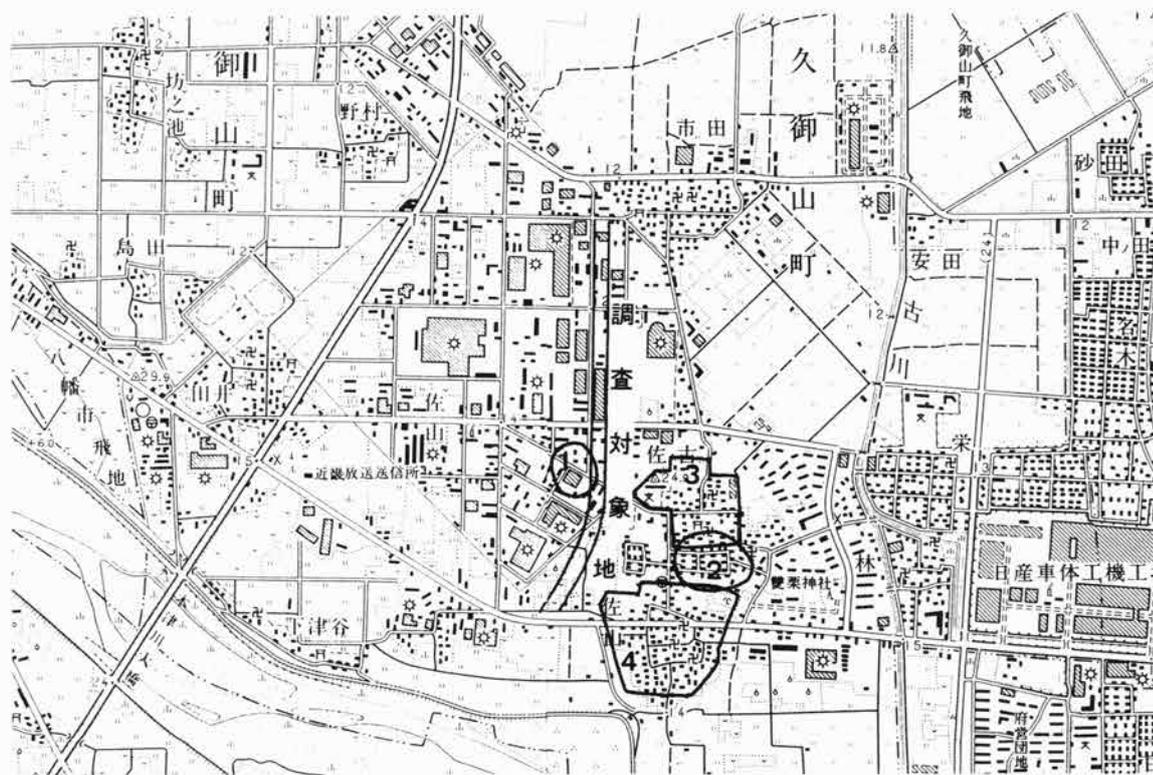
(森下 衛)

(2) 佐山遺跡試掘調査

1. はじめに

佐山遺跡は、京都府久世郡久御山町佐山ほかに所在する。山城盆地の南半部を北流する木津川は、久御山町付近で流れを大きく西方へ振り、宇治川・桂川との合流点へと向かう。佐山遺跡は、この屈曲点付近の北岸に形成された自然堤防状の微高地上に立地する。しかし、当地は、その北側には旧巨椋池の干拓地が広がるなど、山城盆地内では最も低地部に位置し、これまで古代・原始に遡る遺跡の存在に関しては疑問視する傾向もあった。しかも一帯は、昭和初期に飛行場が建設されるとともに、第二次大戦後にはその跡地に工業団地が造成されるなど地形の改変が著しく、遺跡の存在を含め、その具体像(その範囲や所属時期など)について、不明な点が多々存在した。

今回の調査は、第二京阪自動車道路建設に先立って実施したものであるが、上記のとおり、佐山遺跡に関しては不明な点が多くあり、調査対象範囲等が十分に把握できないなど、今後の調査計画を検討する上で大きな支障をきたしていた。このため、建設省・日本道路公団・京都府教育庁文化財保護課等の関係機関による協議が行われ、平成9年度の事業として、遺跡の範囲やその内容等を確認するための試掘調査を行うこととなった。

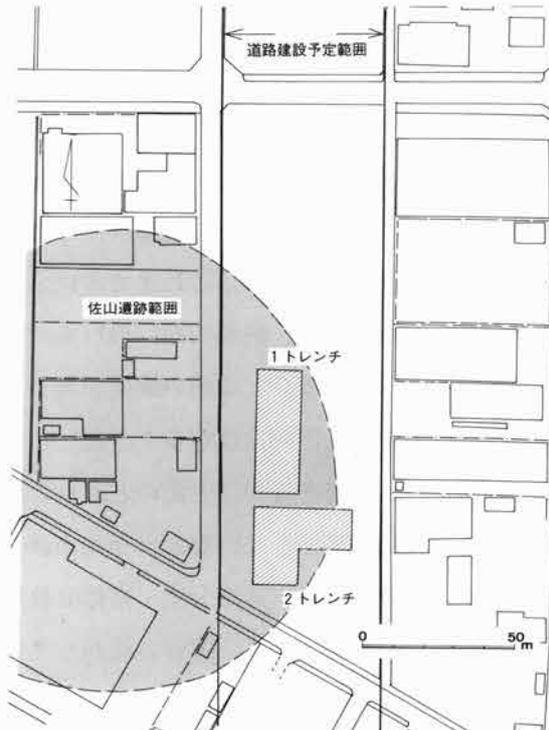


第84図 調査地位置図(1/25,000)

1. 佐山遺跡 2. 遺物散布地 3. 佐古環濠集落 4. 佐山環濠集落

2. 調査の概要

試掘調査は、2期にわけて実施した。まず、道路予定地内において従来から佐山遺跡と認識されてきた範囲に限り、遺構・遺物の有無を確認する目的で、平成9年5月27日から同年7月30日



第85図 第1・2トレンチ配置図

までの間に実施した(第1・2トレンチ;第1次試掘調査)。その結果は、後述するように調査地内において弥生時代後期から平安時代にわたる時期の遺構・遺物が出土し、しかもそれが試掘範囲を越え、広範囲に広がっていることが確認された。

こうした試掘調査の経過を受け、建設省・日本道路公団・京都府教育庁文化財保護課等の関係機関で協議が行われた結果、引き続き広範囲にわたる試掘調査を行い、遺跡の範囲を確定し、今後の調査計画を検討することとなった。これに伴う第2次試掘調査は、平成9年10月21日から同年12月16日までの間に実施した。調査では、道路予定地内において、佐山遺跡の範囲を確定し、さらに他の遺跡の有無などの確認を

付表15 佐山遺跡第1・2トレンチ検出遺構一覧

遺構番号	遺構名	規模・形態	時期	
S H01	竪穴式住居跡	一辺約5mの方形	弥生時代後期末 ～古墳時代前期	
S H02	〃	一辺5m前後の方形か		
S H03	〃	一辺約6mの方形		
S H05	〃	一辺約3mの方形		
S H07	〃	一辺約5mの方形		
S H08	〃	一辺約5mの方形		
S D01	溝	幅約1mの南北溝		
S D02	〃	幅約1.5mでL字に屈曲		
S D04	〃	幅約0.6mの南北溝		
S D05	〃	幅約0.6mの東西溝		
S D06	〃	幅約0.7mの南北溝		
S K02	土坑	約1m×約1.2mの楕円形		
S K03	〃	約1m×約1.2mの楕円形		
S X01	不明遺構	土器溜め(竪穴式住居の一部か)	古墳時代後期	
S X02	〃	土器溜め(竪穴式住居の一部か)		
S H04	竪穴式住居跡	不明		
S H06	〃	一辺約5mの方形		
S K01	土坑	長楕円形		
S B01	掘立柱建物跡	四面庇建物の北西隅付近か		平安時代前期
S D03	溝	幅約1mの南北溝		平安時代末

目的として、13か所に試掘トレンチ(第3～15トレンチ)を入れた。

(1)第1・2トレンチの調査概要(第1次試掘調査)

調査では、試掘対象地内の北半部に第1トレンチを、南半部に第2トレンチを設けた。ともに、土層の堆積状況及び遺構・遺物の有無を確認しつつ重機による掘り下げを行ったところ、工業団地造成・飛行場建設などに伴う厚さ約1.5mの盛り土を含む約2.5mの土砂を除去した標高11.5

m付近で、暗青灰色ないしは暗黄褐色土が現われ、この上面で弥生時代後期～鎌倉時代初頭頃の遺構・遺物を確認した。なお、調査面積は第1・2トレンチ合わせて約1,000m²である。

①主な検出遺構

主な検出遺構には、弥生時代後期後半～平安時代にわたる時期の竪穴式住居跡・土坑・溝・掘立柱建物跡などがある(付表15)。また、図示していないが、このほかに鎌倉時代初頭頃の素掘溝群(幅30cm程度)も多数検出された。なお、調査の性格上、各遺構は完掘していない。このため、各遺構の所属時期などについては、今後本格的な調査が行われた際に変更される可能性もある。

弥生時代後期後半～古墳時代前期の検出遺構は、第1トレンチ北端から第2トレンチ南端まで密に分布していた。佐山遺跡の営まれた中心時期を示していると思われる。遺構には、竪穴式住居跡6基をはじめ溝や土坑などがあり、この時期の集落跡が確認されたこととなる。ただ、第2トレンチ南端付近では、この時期の墳墓(古墳)を区画する溝(周溝)ではないかと思われるL字状に折れ曲がる溝(SD02)も確認しており、集落跡の南側に、墓域が広がっている可能性もある。

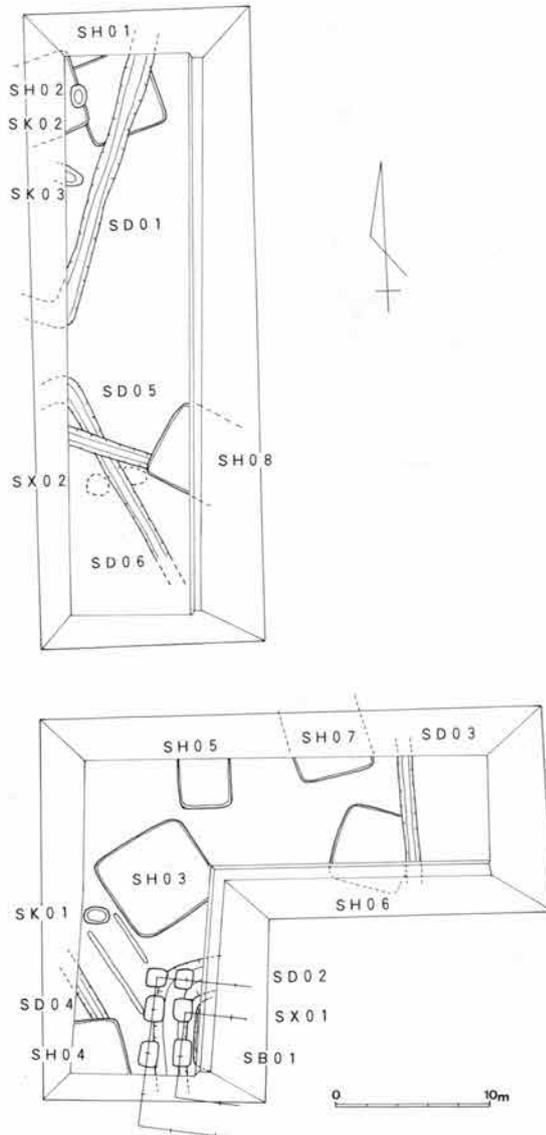
古墳時代後期(6世紀中頃)の遺構は第2トレンチ南端付近で検出した。竪穴式住居跡2基(SH04・06)及び土坑1基(SK01)が確認されたもので、調査区の南側に展開する集落跡の一画を確認したのであると思われる。

平安時代の遺構は、第2トレンチ南端で検出した掘立柱建物跡(SB01)やその東端付近で検出した南北溝(SD03)である。SB01は、四面庇の東西棟建物(主軸はほぼ真北を向く)として復元しているが、大半が調査区外へのびていることや、遺存状況も悪く、全容は不明といわざるをえない。包含層中から9世紀頃の須恵器や灰釉陶器の破片が出土しており、この頃に属するものと考えている。一方、SD03は平安時代後期～鎌倉時代(12～13世紀)に属するものである。第1・2トレンチともに、この頃の素掘溝群を検出しており、一帯が畝地として利用されていたことを示している。SD03はこうしたなかでの土地区画に関するものと考えられる。

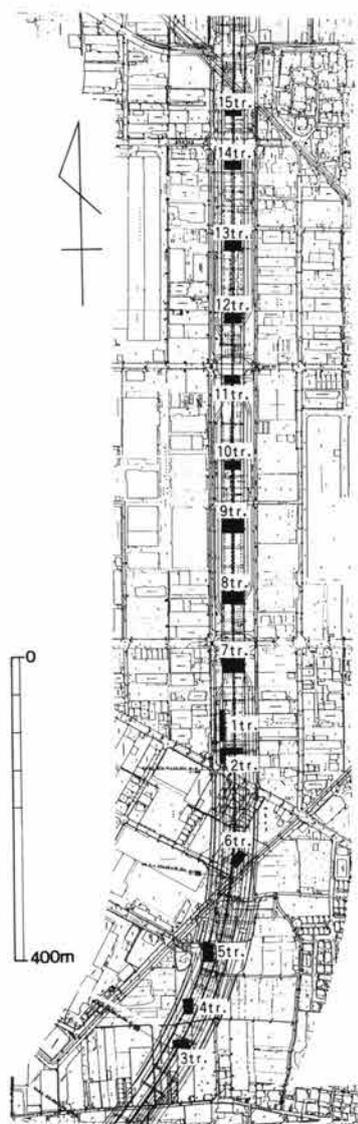
②小結

以上、第1・2トレンチにおける試掘調査の成果をまとめると、以下のとおりである。

- (1)現地地表下約2.5mと非常に深いが、ここに



第86図 第1・2トレンチ主要遺構配置図



第87図 試掘トレンチ配置図

弥生時代後期～鎌倉時代初頭までの遺構・遺物の存在することを確認した。

(2)また、こうした遺構の分布状況から、遺跡は従来認識されてきた佐山遺跡の範囲におさまるものではなく、調査範囲の北側や南側に広範囲に広がる可能性が極めて高いと考えられた。

(森下 衛)

(2) 第3～15トレンチの調査概要(第2次試掘調査)

第1・2トレンチの調査成果を基に、佐山遺跡の範囲確認を目的として、第二京阪自動車道路建設予定地内総長約1.4km間に13か所の試掘トレンチを設定した(第87図)。各調査トレンチは、第1次試掘調査の第1・2トレンチのNo.を継いで、南から北に第3～15トレンチと称することとした。

第2次試掘調査の13トレンチは、第3～5トレンチは久御山工業団地の南に広がる水田地帯にあり、第6～15トレンチは久御山工業団地内に位置している。工業団地は旧飛行場上に造成されたため現地表下にはコンクリートと造成土が1～2mの厚さに盛り土されており、その下位には暗灰色系の粘土や砂混じり土が20～50cmの厚さで堆積している、昭和初期までの水田耕作土と判断された。この耕作土の下位には、すべての試掘トレンチで、砂層・シルト層・粘土層が1～3mにわたって堆積しており、木津川および旧巨椋池の影響下で堆積した土層と判断される。

①各トレンチの概要

第3トレンチ 水田耕作土および床土下1.5mで地山と判断される淡黄灰色粘土を確認した。この上位では、第4トレンチの平安～中世の素掘溝を検出した層位に対応する層位を確認したが、このトレンチでは遺構を確認できなかった。これらの遺構面より上位の土層は、木津川の後背湿地における堆積層と判断され、弥生から近世にいたる土器の小片が出土している。

第4トレンチ(図版第58-1) このトレンチでは三面にわたって南北方向の素掘溝群を検出した。これらの素掘溝群は、出土遺物から平安～中世の時期のものと判断される。これより上位の堆積層には、染め付けの小片が混じり、近世以後の後背湿地の堆積層と判断される。

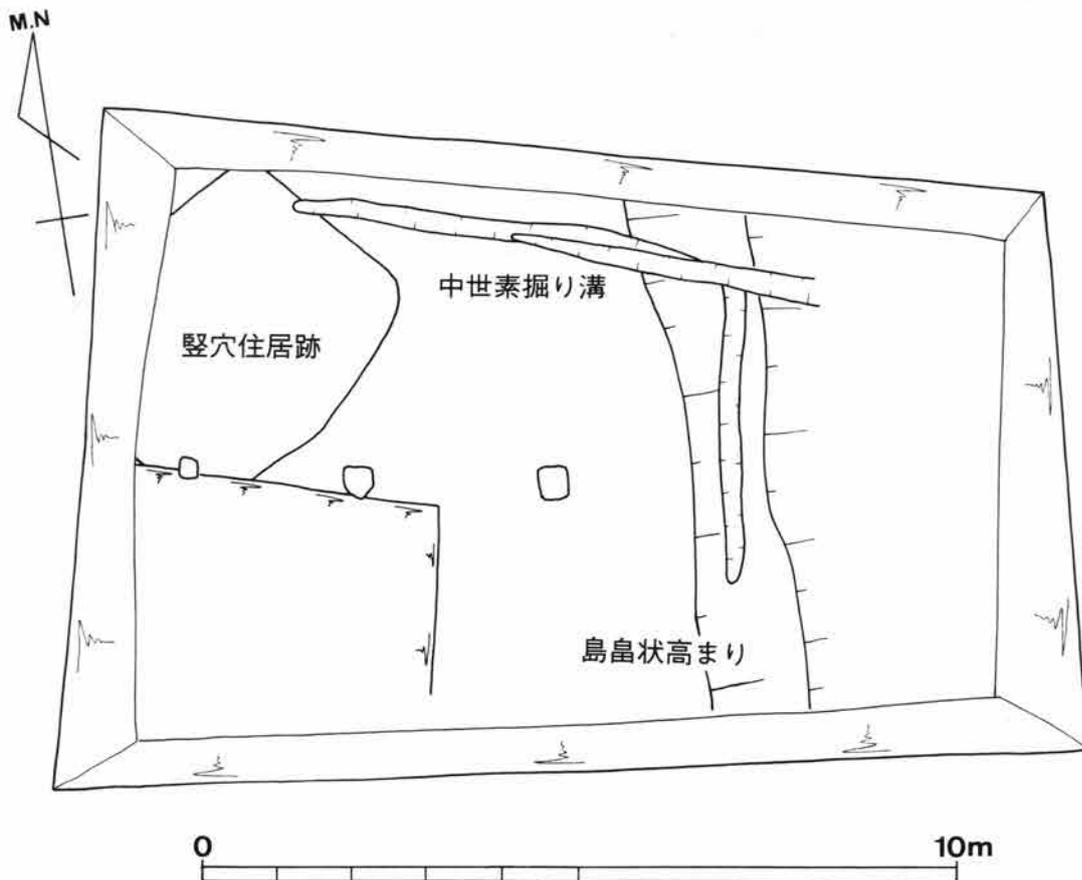
第5トレンチ(図版第58-2・3) 第3・4トレンチと同じく、約1mにわたる後背湿地における堆積土の下位で地山と判断される黄褐色粘質土を確認した。標高は11.8m近辺である。この地山面の約30cm下位で、弥生中期の壺をほぼ完形で横位に検出した。周囲の精査を繰り返したが、湧き水のため、土色や土質の違いを確認できなかった。出土した状況より、何らかの遺構に伴うものと判断され、周辺に同時期の遺構が分布するものと推定される。この他、一条の溝を検出した。

第6 トレンチ このトレンチより北は久御山工業団地内の調査で、現地表下に厚く造成土が盛られている。約1mの造成土を取り除き、そこから約3.5mの深度、標高9.4mまでの掘削を行ったが、地山と判断される土層は確認できなかった。造成土下には4層に分層できる1m弱の砂層があり、その下位は青灰色砂と青灰色粘土が互層になって厚く堆積していた。これらは、流れを有した河川内で堆積した土層と判断され、木津川本流もしくはその支流の痕跡と考えられる。現地表に見える条里型地割りがこの近辺で乱れていることから、ある時期の流路が存在したことが推定されており、このトレンチの知見と合致する。この流路内堆積土からは中世段階と考えられる土師器が出土している。

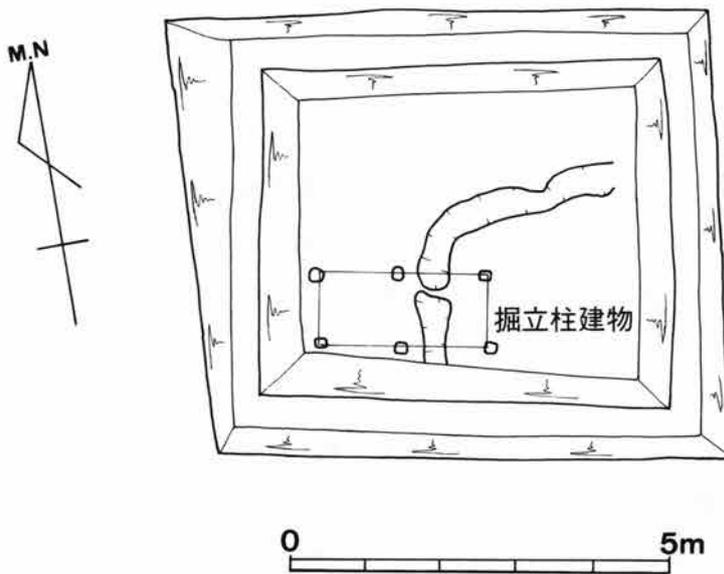
第7 トレンチ(第88図、図版第59-1・2・3) 旧地表面下約1.5m、標高11.4mで、中世段階の島島状の段差と素掘溝、古墳時代の竪穴式住居跡、時期不明の柱穴群、地震痕跡(噴砂)を確認した。第1次試掘調査で確認した佐山遺跡と一連の遺構群と判断される。

第8 トレンチ 約2mの造成土下に暗灰色土が約1mにわたって堆積し、その下約2.5mにわたって淡青灰色～灰色の粘土層が厚く堆積している。地山と判断される土層は第7トレンチの古墳時代竪穴式住居跡を検出した標高よりも約3m下位で確認しており、古墳時代集落の北側は急激に下る谷状の地形をなしていたものと推測される。この谷に堆積した粘土層中からは弥生土器片とともに瓦器片が出土しており、中世以降の湿地堆積層と判断される。

第9 トレンチ 現地表下3.4m下、標高10.3mより下位で地山と判断される粘土層を確認した。



第88図 第7トレンチ検出遺構平面図



第89図 第14トレンチ検出遺構平面図

上位の層中からは弥生から中世までの土器の細片が少量ながら出土しているが、遺構は確認できなかった。第10トレンチでは同程度の標高で中世の素掘溝を検出している。

第10トレンチ(図版第60-1) 厚さ約1.6mの造成土の下約1.7mで、中世遺物の包含層とその下面で南北方向の素掘溝群を検出した。また断面観察で、島畠状の段差を確認した。

第11トレンチ(図版第60-2)

標高9.4mで地山と判断される土層を確認したが、それより上位約2.5mは湿地内の堆積土と判断されるものであった。堆積土中からは、瓦器片や中国製陶磁器片が出土しており、中世以後に堆積した層と判断される。遺構は確認できなかった。

第12トレンチ 第11トレンチとほぼ同じ様相で、地表下約1.6mの造成土の下に、中世の遺物を含む厚さ約2.2mの湿地内堆積層を確認しただけで、遺構面を形成しているような層序は全く確認できなかった。

第13トレンチ 地表下1.6mの盛土の下で、弥生～中世の遺物を含む湿地内堆積層を確認したが、遺構および遺構面を形成する層序は全く確認できなかった。

第14トレンチ(第89図) 地表下1.9m、標高10.4mで、弥生～古墳時代の土器を多量に包含する暗茶褐色土層(厚さ約30cm)が分布し、この上面で、中世の掘立柱建物跡、溝等を検出した。この包含層の下面では、弥生時代と判断される柱穴・溝等を確認し、このトレンチの周辺に遺跡が分布していることが明らかとなった。

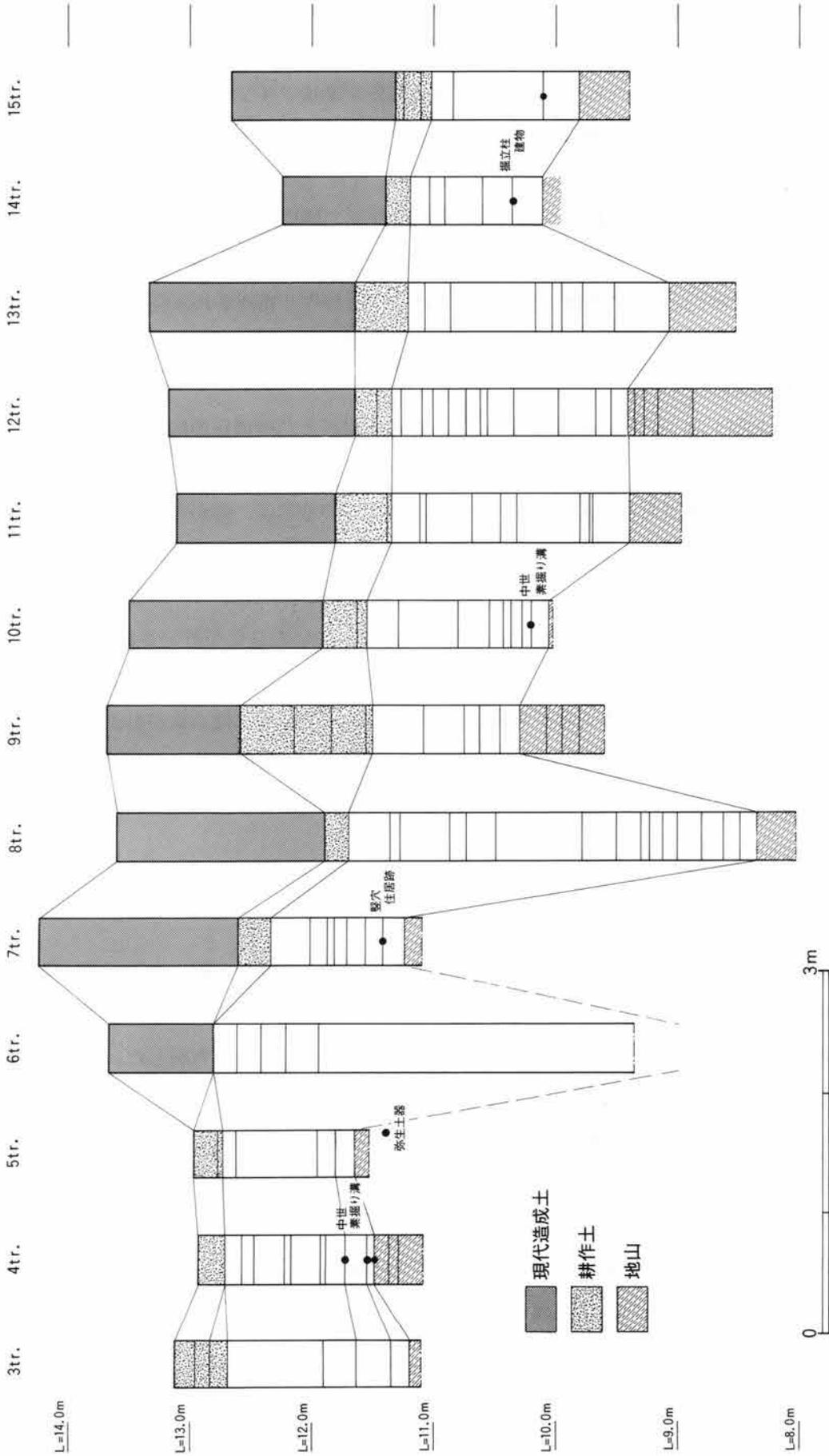
第15トレンチ(図版第60-3) 第14トレンチとほぼ同じ標高で、弥生土器を埋土に含む土坑・溝・竪穴式住居跡状の土色の違いを認めた。またこれらと同一レベルで、東半部では、弥生土器を比較的多く包含する黒褐色土層を確認した。これらのことから、第14トレンチで確認した集落跡がこのトレンチ付近まで広がっているものと推測される。

②小結

以上、各試掘トレンチの様相を概述したが、これらをまとめると、

(1)何らかの、遺構を確認あるいはその存在が予想されるものは、第4・5トレンチと第7トレンチ、第10トレンチ、第14・15トレンチで、それ以外のトレンチでは、湿地状の堆積や流路と判断される土層が厚く堆積しており、遺物の出土は認められるものの遺構は確認できなかった。

(2)第7トレンチでは、竪穴式住居跡や柱穴群を確認した。このトレンチは第1次試掘調査の



第90図 調査トレンチ土層柱状図(第2次試掘調査分)

第1・2トレンチの北隣に位置しており、従来から認知されている佐山遺跡の範囲がこのトレンチより北側にまで及んでいることが判明した。

(3)第5トレンチで検出した弥生土器壺は、遺構自体を確認できなかったため、その性格は不明であるが、出土した状況から推測すると、溝や土坑中に埋納されていたものと考えられ、周辺に広く遺跡が包蔵されていることが推定される。

(4)第10トレンチでは中世素掘溝や島畠状の遺構を断面で確認したが、集落跡に関連するような遺構は確認できなかった。

(5)第14トレンチでは、中世の掘立柱建物跡や溝、弥生時代と判断される柱穴・土坑・溝などを確認し、この集落跡と一連のものと考えられる土坑・竪穴式住居跡状の土色の違いが第15トレンチで確認できた。

第90図は各試掘トレンチの土層柱状図である。この土層図と試掘調査の結果を総合すると、

(1)現況の地形を見ると、久御山工業団地は周囲の水田よりも一段と高くなっているが、これは飛行場の建設や工業団地の造成によるもので、それ以前の地形は、南から北に向けて、緩やかに下る地形をなしていた。

(2)条里型地割りの乱れと第6トレンチの旧流路とが合致したことから、ある時期の木津川本流または支流が南から北に流れて巨椋池に直接に入り込んでいたことが推定される。そのため、大きくは南から北に下る地形を呈しながらも、第8トレンチでは湿地状の厚い堆積土層を確認したように、所々に沼状の窪地や流路が複雑に入り組んで、その合間に微高地が形成されていた。

(3)試掘調査で遺構を確認したのは第4・7・10・14トレンチ周辺であるが、そのベースとなる面は、隣接するトレンチよりもやや高い微高地上に位置しており、概ね標高10m以上に分布している。

5. ま と め

2次にわたる試掘調査の結果、佐山遺跡は弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期、平安時代前期に営まれた集落跡で、中世以後には島畠が作られて畑地として利用されていたこと、分布の範囲は従来考えられていた範囲よりも広い範囲で捉えられることが判明した。佐山遺跡以外に、新たな遺跡も見つかった。佐山遺跡の南約400mの第4・5トレンチ周辺には弥生時代の集落跡が分布しており、北側約700mの第14・15トレンチ周辺には弥生・古墳時代と中世段階の集落跡が分布していることが明らかとなった。京都府教育委員会と久御山町教育委員会との協議の結果、第4・5トレンチで確認した遺跡は佐山尼垣内(さやまあまがいと)遺跡、第14・15トレンチで確認した遺跡は市田齊当坊(いちださいとうぼう)遺跡と命名された。

(岩松 保)

- 注1 これまでに、当調査研究センターが実施した第二京阪自動車道路建設に先立つ内里八丁遺跡発掘調査の概要は、以下の文献で報告している。
- 「第二京阪道路関係遺跡昭和63年度・平成元年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第38冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990
- 「第二京阪道路関係遺跡平成2年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第41冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1991
- 「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第46冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 「第二京阪道路関係遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第51冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 「京都南道路関係遺跡平成4年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第56冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 「京都南道路関係遺跡平成5年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第61冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 「第二京阪自動道関係遺跡平成6年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第67冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996
- 「第二京阪自動道関係遺跡平成7年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第73冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1997
- 「第二京阪自動道関係遺跡平成8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第78冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注2 調査参加者(調査補助員・整理員)は以下のとおり。
- 奥平廣子・福田玲子・辻井和子・栃木道代・森田千代子・与十田節子・坪内達雄・細山田章子・西脇夏海・小川正志・長谷川洋・上田真一郎・榊原貴子・高橋あかね・菅谷友一・坂本薫・村山和幸・本多伯舟・小荒尚幸・川嶋聡子・永田優子・東 政江・山崎美智子・木下 亮・宮本美紀・米本雅一・木本陽子・尾田 孝・石橋紘二・山道祐美子・梶本祥史・山本健一・中村美也・灘井貴博
- 注3 一帯の地理学的及び歴史地理学的環境の把握に関しては、下記の文献を参考としている。ただし、遺跡の立地等の把握については、多分に私見を交えている。
- 中塚 良「木津川下流域の表層地質と遺跡立地—八幡木津川河床遺跡・新田遺跡を例に一」(『京都考古』第33号 京都考古刊行会) 1984
- 鳥居治夫『山城国久世郡・綴喜郡・相楽郡に於ける条里の考察』 1986
- 注4 これまでの調査報告では、「島畑」と表記していたが、「島島」に改めたい。
- 注5 『延喜式』卷三十九 内膳司
- 注6 足利健亮『日本古代地理研究』 1985
- 注7 平成10年度調査において、最終的に底部まで掘り下げたところ、底に曲物を置いていることが確認された。
- 注8 山中 章「古代宮都の「製塩」土器小考」(『平安京歴史研究』杉山信三先生米寿記念論集刊行会) 1993
- 注9 平成6・7年度のD地区の調査で、平城宮跡の6134c型式に近似する軒丸瓦などが出土している。
- 注10 足利説の古山陰道復原ルート(現八幡市～乙訓付近)に対しての否定的な見解を示している主なもの

のに以下の文献がある。

小林 清「長岡京造営の基準点」(『長岡京の新研究 全』比叡書房) 1985

中山修一「木津川流路の変遷」『京都家政短期大学研究紀要』第12集 1973

高橋美久二「長岡京と水陸の便」『長岡京古文化論叢Ⅱ』 1985

注11 遺跡の西側を流れる旧流路と復原古山陰道との関連に関しては、すでに足利健亮氏が注6文献中で指摘されている。今回検出した道路遺構が復原ルートに対して東へ振っていることがこれに関係しているとの指摘も足利氏の御教示による。

注12 これに関係して、本遺跡A地区の調査で検出している7世紀末葉～8世紀初頭頃に位置づけられる2条の溝の存在は注目される。15～18mの間隔をもってややハの字状に延びるが、道路遺構の側溝と考えることもできる要素を有している。なお、この点に関しては、以下の文献で村田和弘氏も注目している。

村田和弘「古山陰道の遺構考証—南山城地域の遺跡から—」(『京都府文化財論集』第3集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1996

注13 『久御山町史』 久御山町 1968. 図15

版 图

図版第1 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓

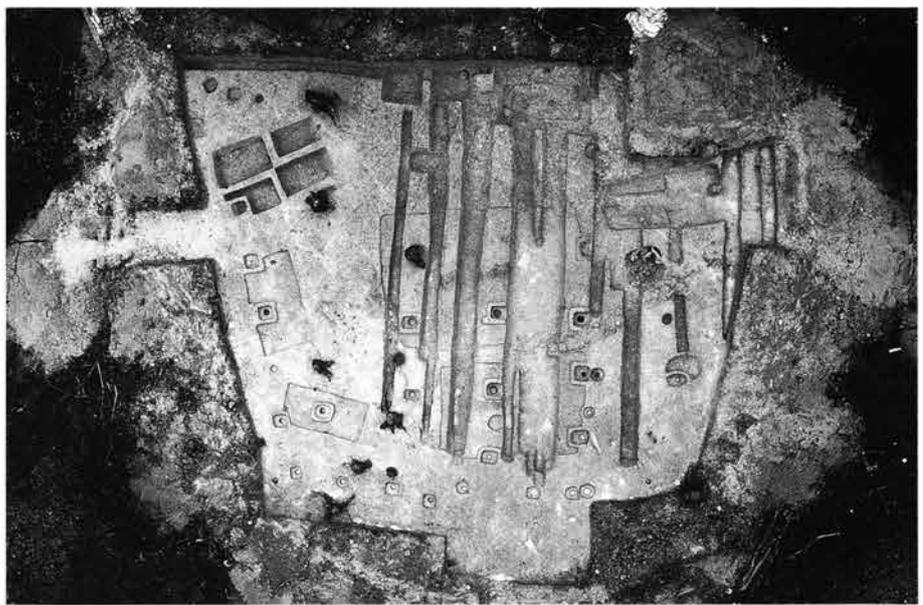
(1)調査前全景（北東から）



(2)調査地遠景（南東から）



(3)浅後谷南城跡（左上が北）





(1)柱穴P 2・P 5 (北西から)



(2)柱穴P 1 鉄製庖丁出土状況
(北東から)



(3)近世墓 (北東から)

(1)浅後谷南墳墓・浅後谷南遺跡
(右山裾) 遠景(北西から)



(2)弥生墳墓全景(北東から)



(3)第1主体部調査風景
(北から)





(1)第1主体部埋土断面(北から)

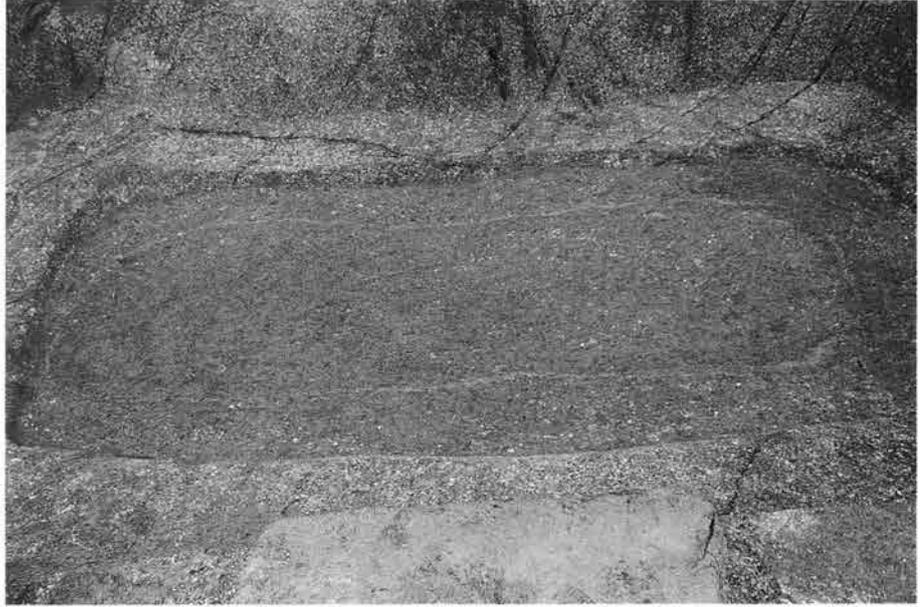


(2)第1主体部埋土横断面
(南東から)

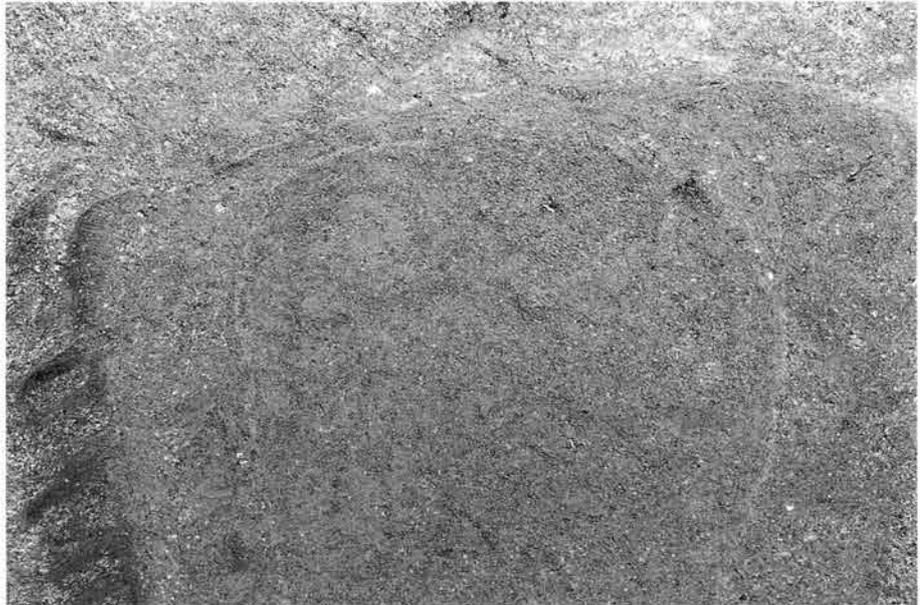


(3)第1主体部棺痕跡検出作業風景
(北から)

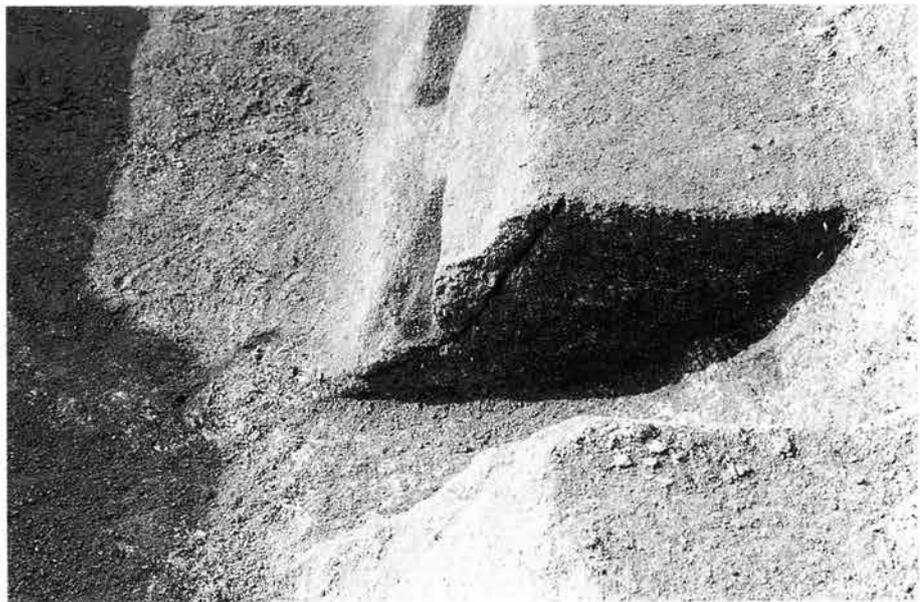
(1)第1主体部棺痕跡
(南西から)



(2)第1主体部西小口棺痕跡
(北西から)



(3)第1主体部北東長側部
断ち割り断面 (南東から)





(1)第1主体部全景（北西から）



(2)第1主体部全景（北西から）



(3)第1主体部完掘全景（北西から）

(1)第1主体部棺内全景
(南西から)

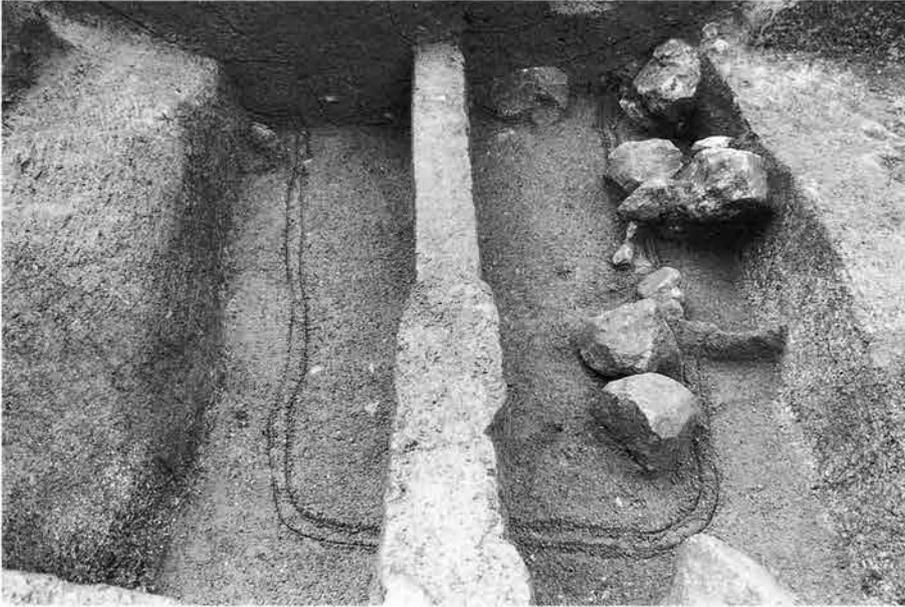


(2)第1主体部遺物出土状況
(南西から)



(3)第1主体部遺物出土状況
(北西から)





(1)第2 主体部棺痕跡検出状況
(南東から)



(2)第2 主体部木棺痕跡
及び埋土断面(西から)



(3)第2 主体部木棺痕跡検出状況
(南西から)



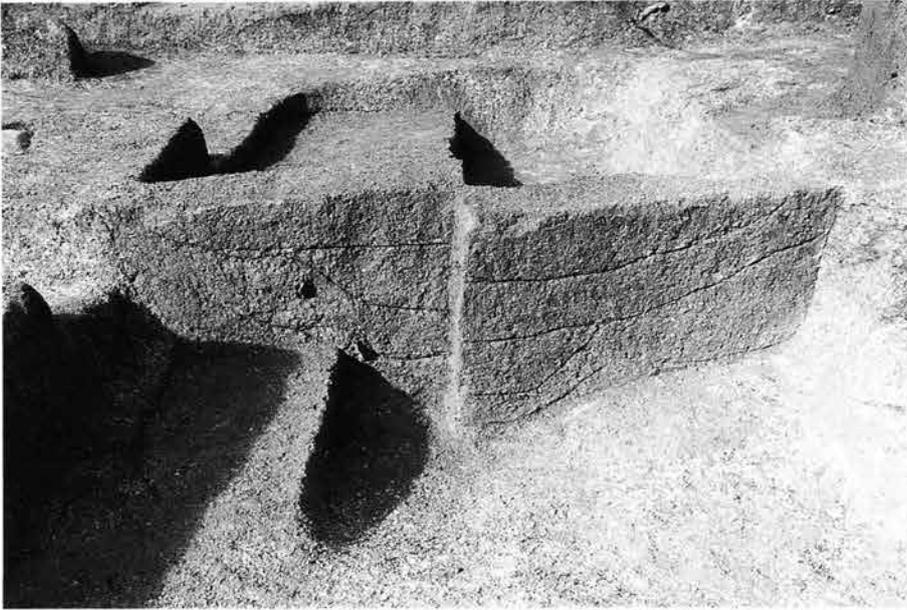
(1)第2 主体部全景 (南東から)



(2)第2 主体部全景 (南西から)



(3)第2 主体部遺物出土状況
(南西から)



(1)第3主体部埋土横断面
(南東から)



(2)第3主体部全景 (南東から)

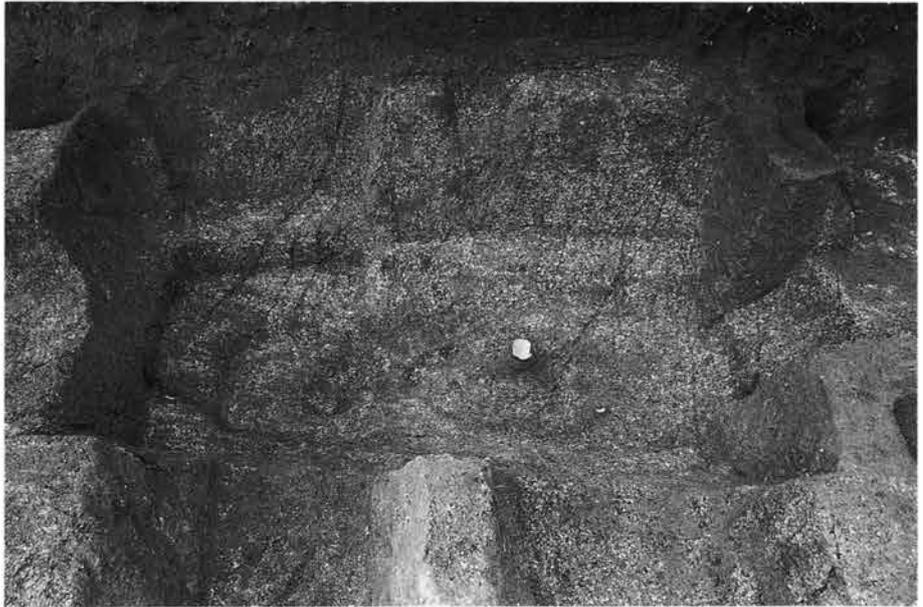


(3)第3主体部遺物出土状況
(北東から)

(1)第4主体部埋土横断面
(南東から)



(2)第4主体部全景 (南西から)



(3)第4主体部遺物出土状況
(北西から)



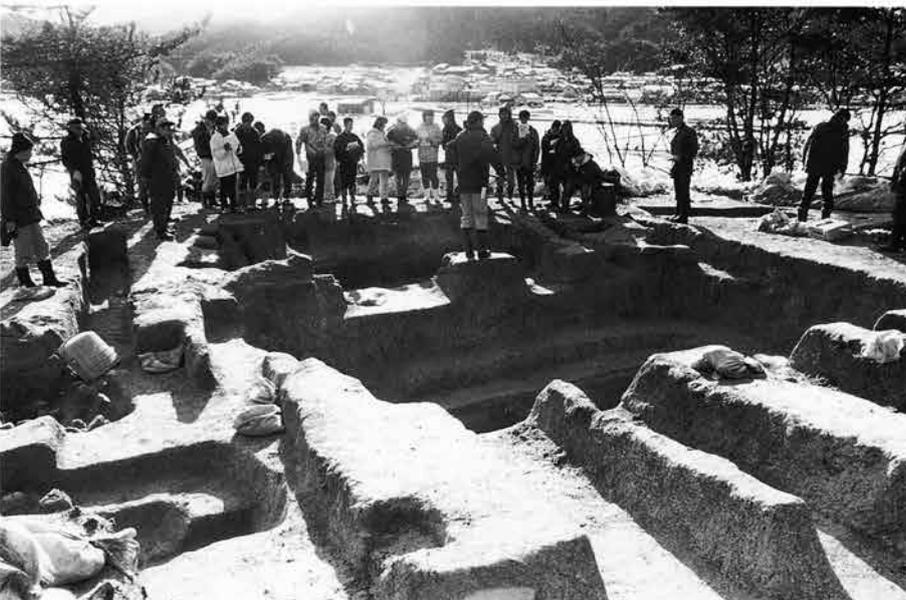
図版第12 浅後谷南城跡・浅後谷南墳墓



(1)第5 主体部全景（北西から）



(2)第5 主体部全景（南西から）



(3)現地説明会風景（北東から）

(1)第6主体部全景（東から）



(2)第6主体部遺物出土状況
（北から）



(3)第6主体部埋土内
土器出土状況





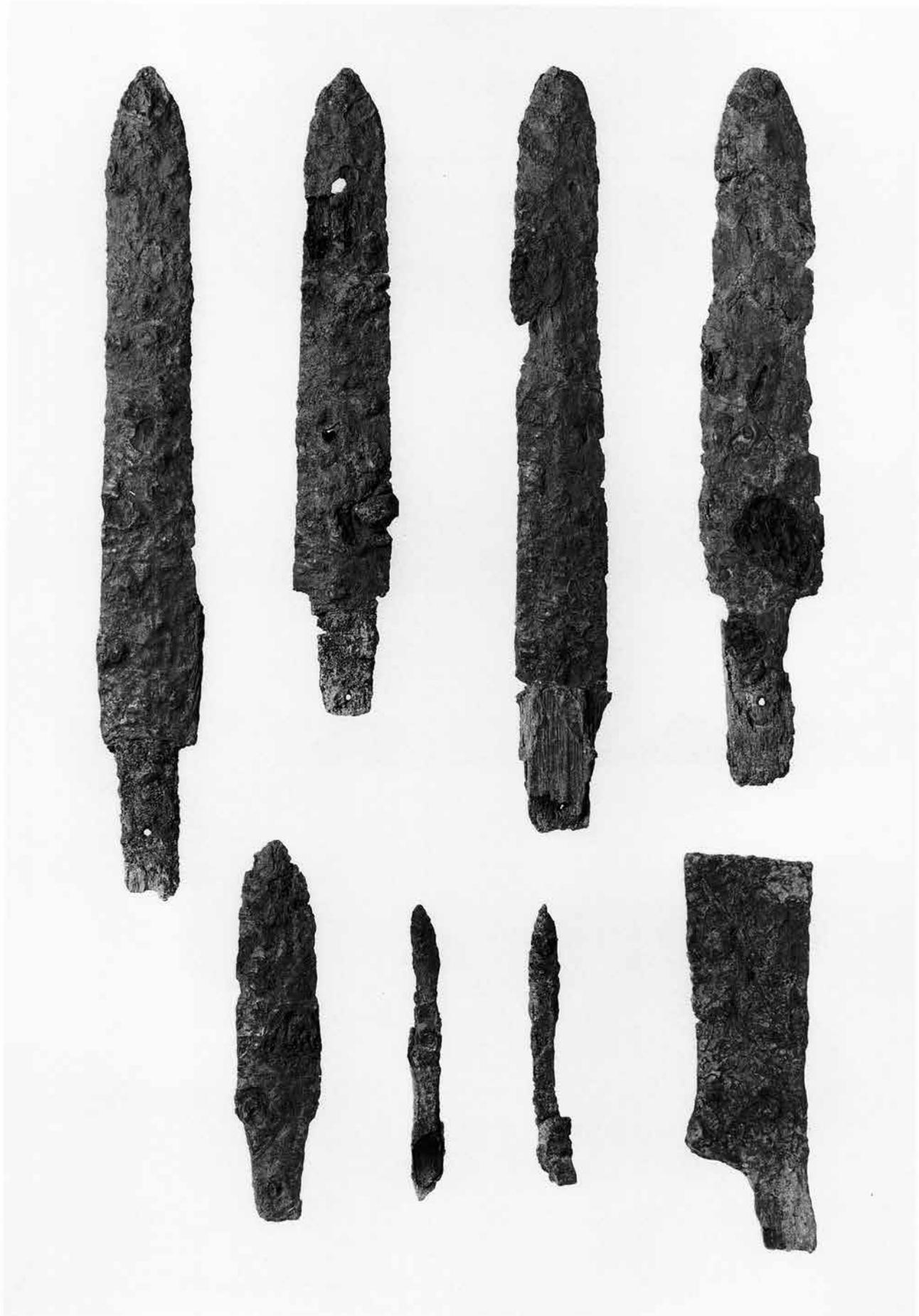
(1)第7主体部全景（東から）



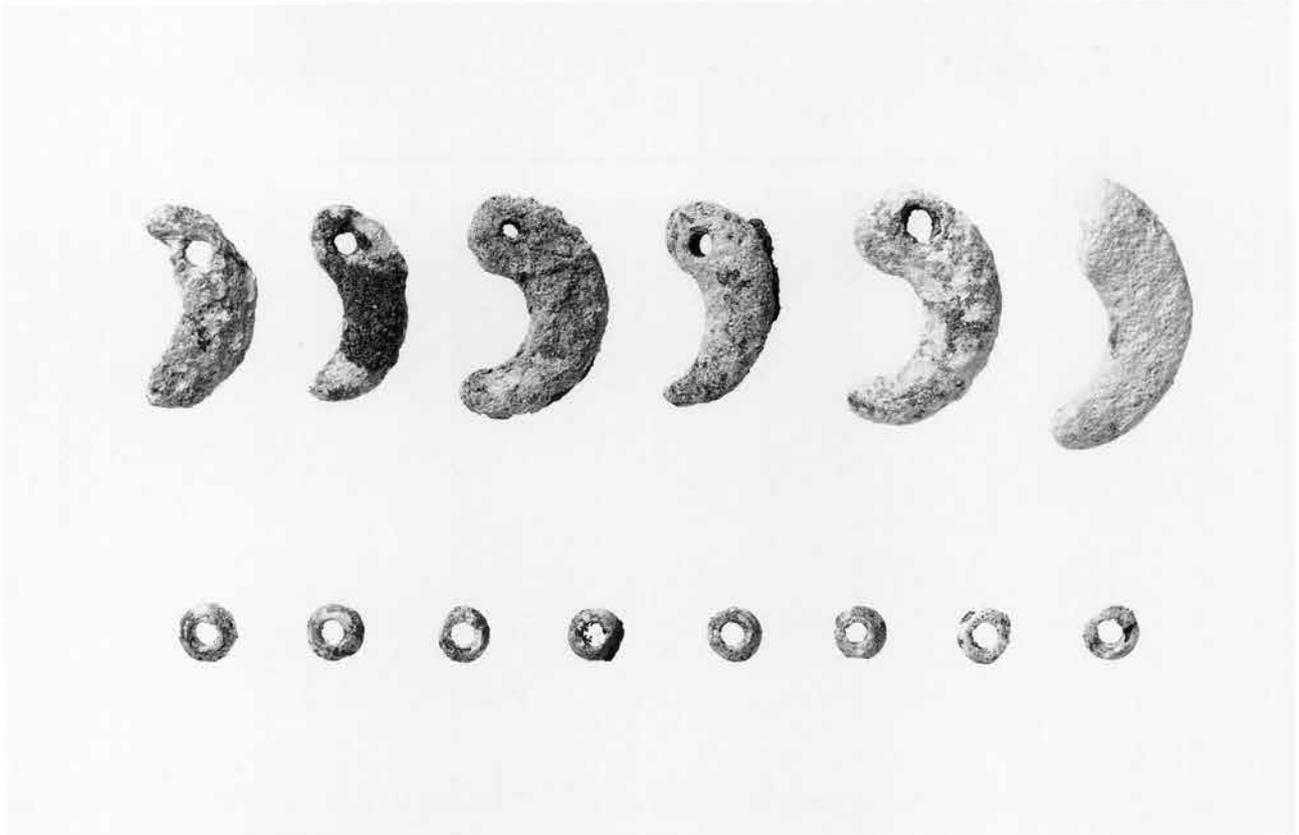
(2)第8主体部全景（南西から）



(3)第9主体部全景（南西から）



浅後谷南墳墓・城跡出土鉄製品



(1)第1主体部出土玉類



(2)墳墓埋葬主体部出土土器

(1)調査地全景（右が北）



(2)調査地全景（下が北）



(3)樹木伐採後の調査地
（南から）





(1)樹木伐採後の調査地西側
(南から)



(2)頂部平坦地試掘状況 (南から)



(3)東側斜面表土掘削作業
(南から)



(1)頂部平坦地北側遺構検出状況
(北西から)



(2)頂部平坦地東側遺構検出状況
(北西から)



(3)遺構検出状況(北から)



(1)「コ」の字状溝完掘状況
(南から)



(2)頂部平坦地ピット完掘状況
(南西から)



(3)東側テラス部分遺構検出作業
(北から)

(1)鉄器出土状況(1) (東から)



(2)鉄器出土状況(2) (南から)



(3)第1主体部棺内掘り下げ作業
(北東から)





(1) 棺内遺物出土状況 (西から)



(2) 第1主体部全景 (北西から)



(3) 第1主体部全景 (南から)

(1)第1 主体部完掘状況
(南から)

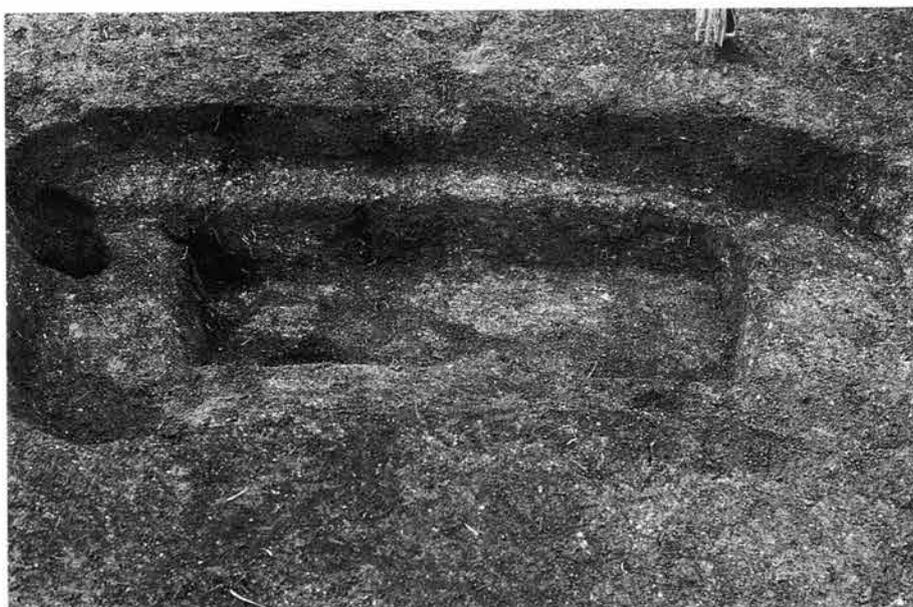


(2)東側テラス部分全景
(北東から)



(3)第2 主体部遠景 (西から)





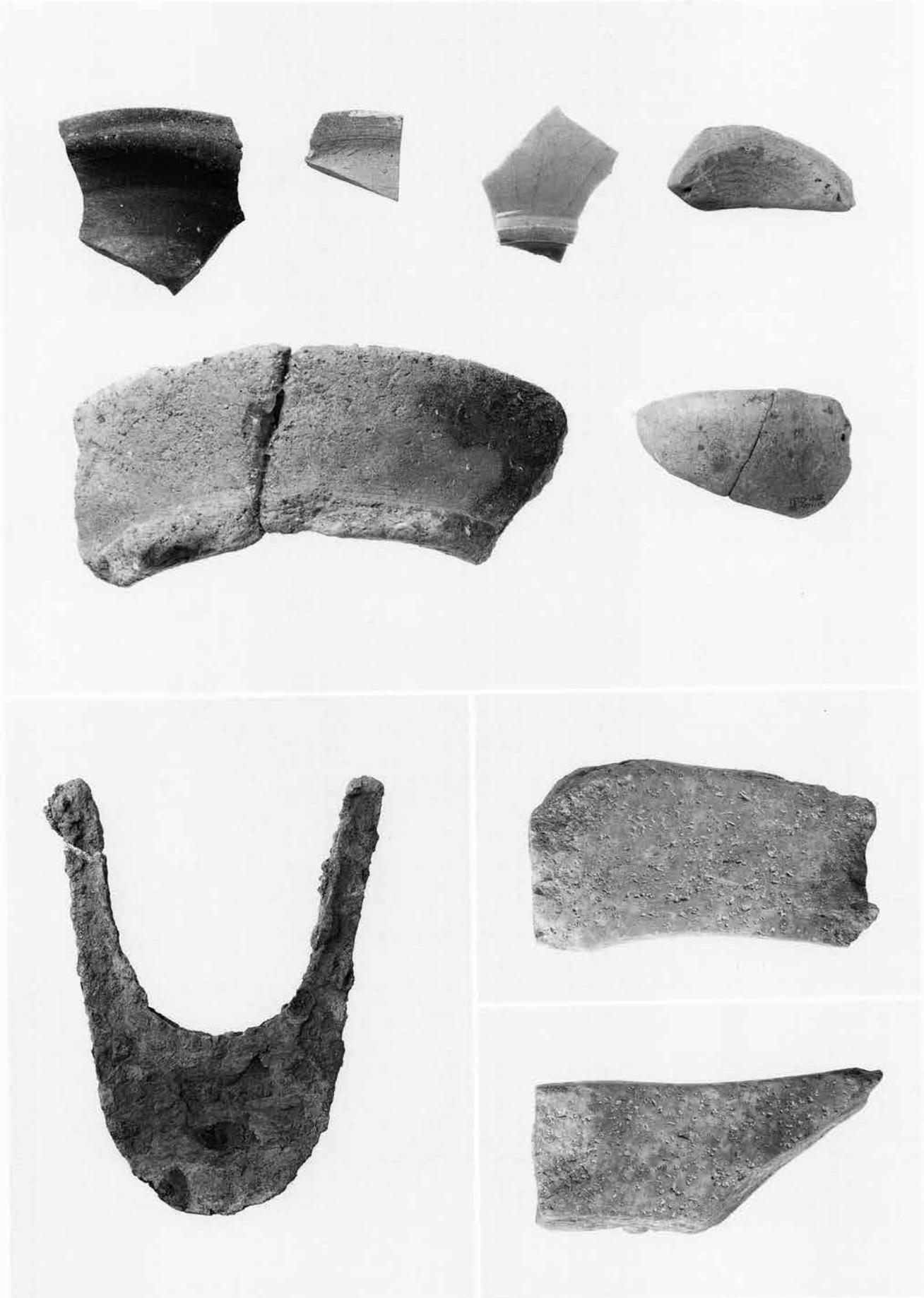
(1)第2主体部完掘状況(東から)



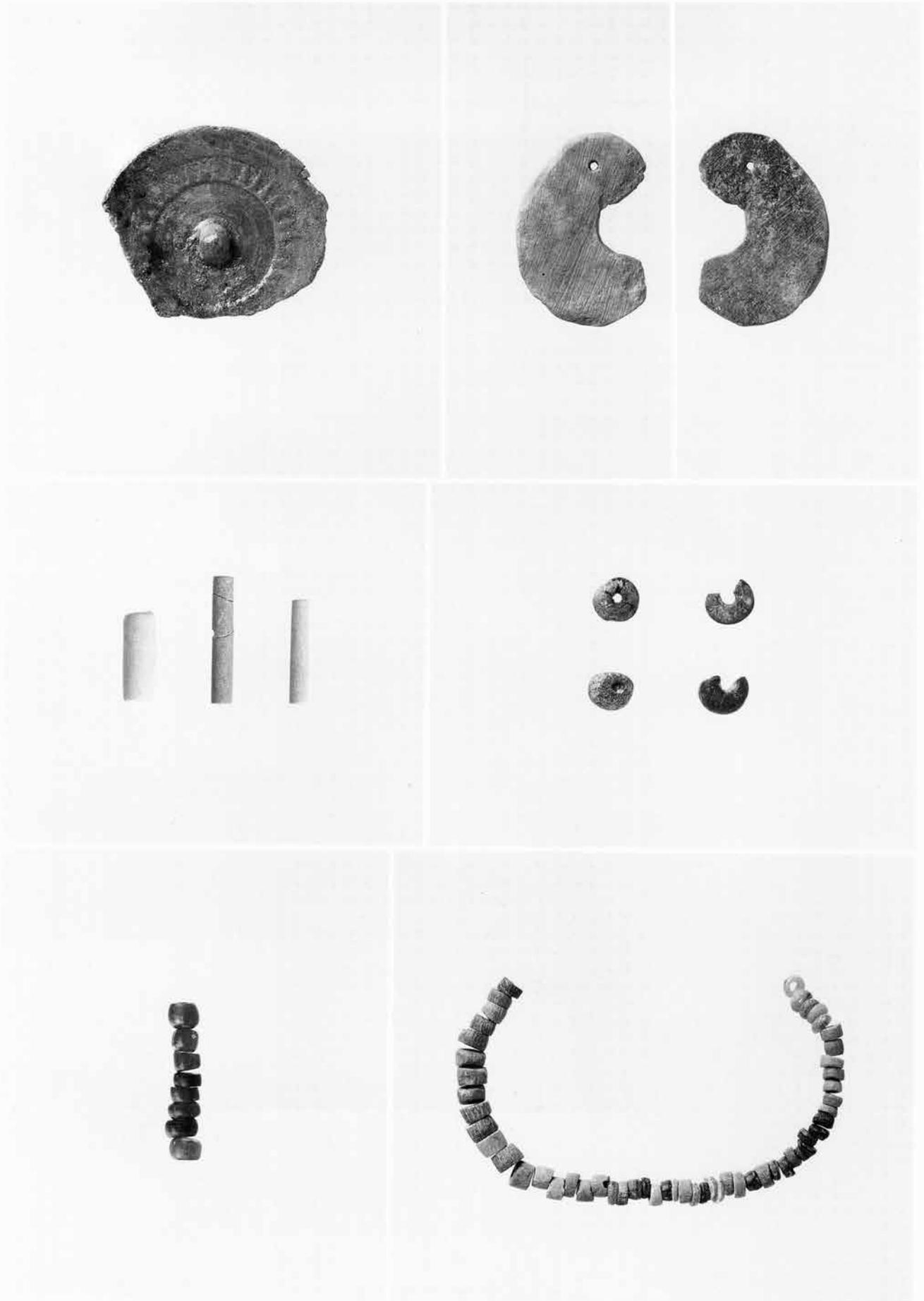
(2)第3主体部遠景(南東から)



(3)第3主体部完掘状況(東から)



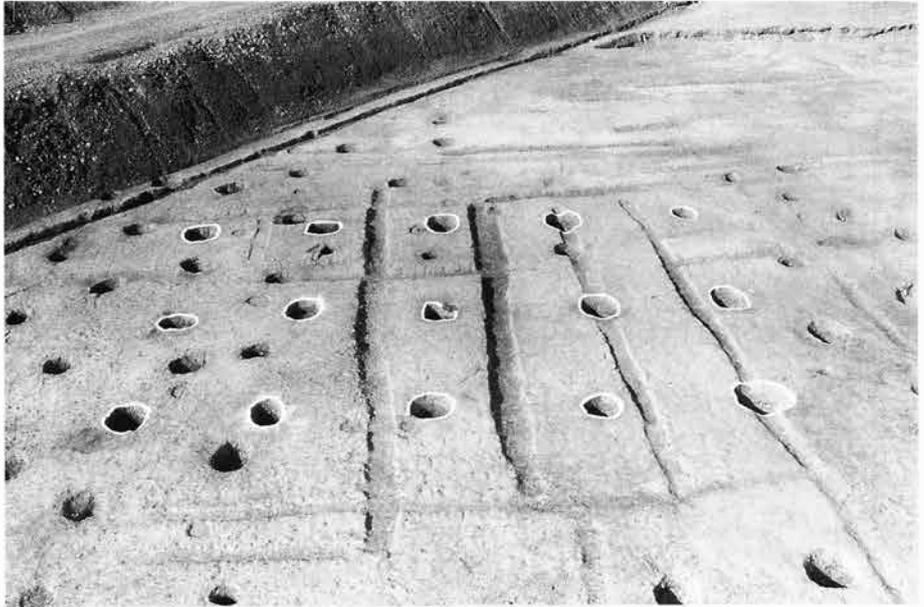
菩提城跡関連出土遺物



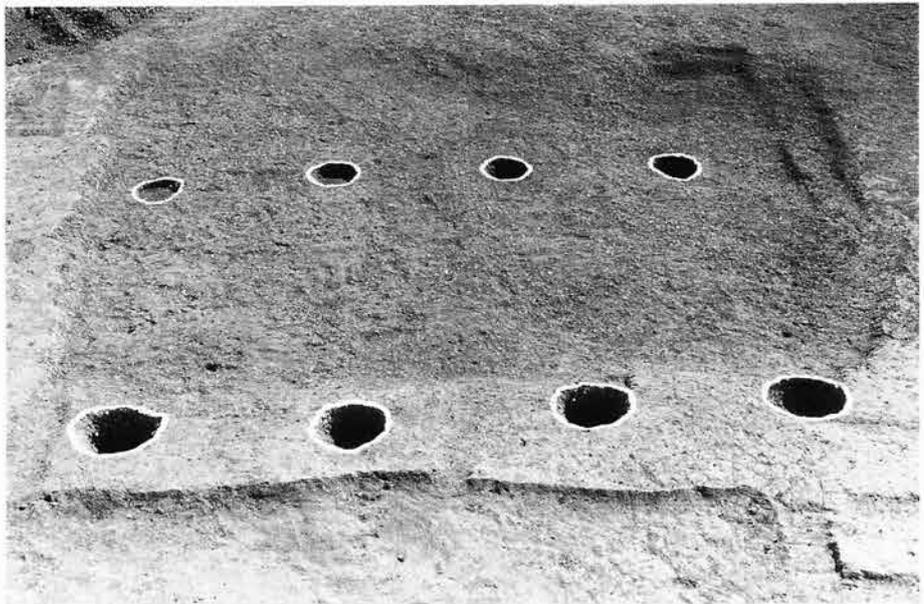
菩提東古墳第1主体部出土遺物



(1) B-6・B-7 地区
中世遺構検出状況 (東から)



(2) B-7 地区
S B399420 (南から)



(3) B-7 地区
S B399418 (北から)



(1)B-6地区 柱穴520
(北から)



(2)B-6地区 土坑S K399504
印章出土状況(西から)



(3)B-6地区 土坑S K399504
印章出土状況(東から)



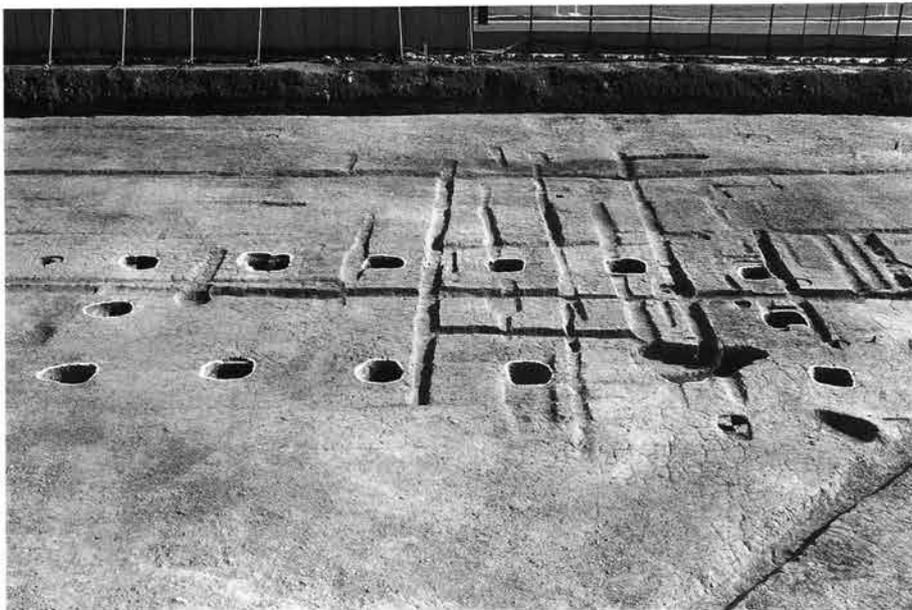
(1) B-7地区 井戸 S E 399421
井戸側・井筒 (南西から)



(2) B-7地区 井戸 S E 399421
井戸側除去中 (北東から)



(3) B-7地区 井戸 S E 399421
水溜 (櫃) 出土状況
(北西から)



(1)B-7地区 掘立柱建物跡
S B399518 (北から)



(2)B-7地区 掘立柱建物跡
S B399415 (東から)



(3)B-7地区 土坑S K399594
土師器皿C出土状況 (南から)

図版第31 長岡京跡左京第399次

(1) B-6 地区南一条大路北側溝
S D33003 l 区西壁 (東から)



(2) B-6 地区南一条大路北側溝
S D33003 n 区西壁 (東から)



(3) B-6 地区南一条大路南側溝
S D33002 l 区西壁 (東から)

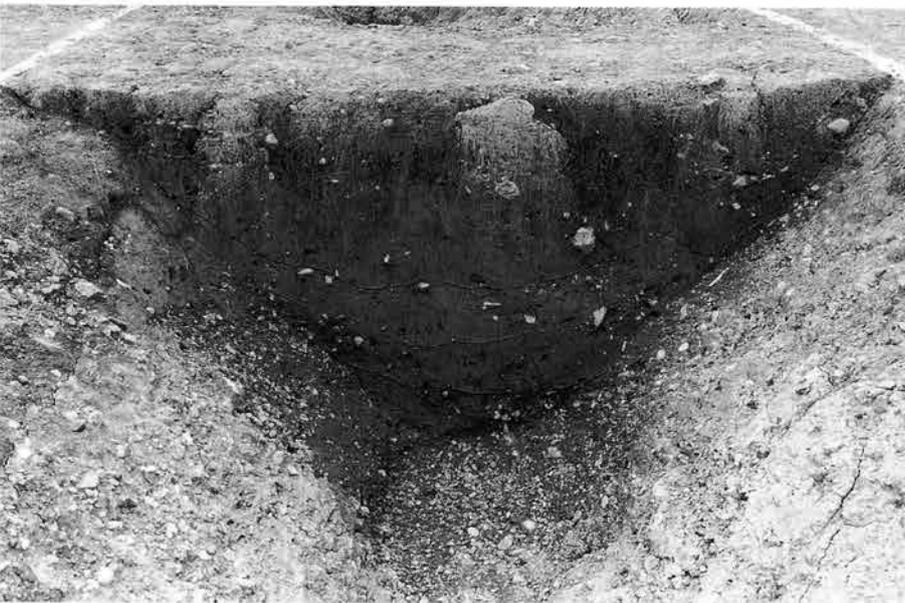




(1)B-6地区南一条大路南側溝
S D33002 n区西壁(東から)



(2)B-6地区南一条大路南側溝
S D33002 p区西壁(東から)



(3)B-6地区南一条大路南側溝
S D33002 r区西壁(東から)

(1) B-6 地区南一条大路北側溝
SD33003上層 (n区) 土器
出土状況 (南から)

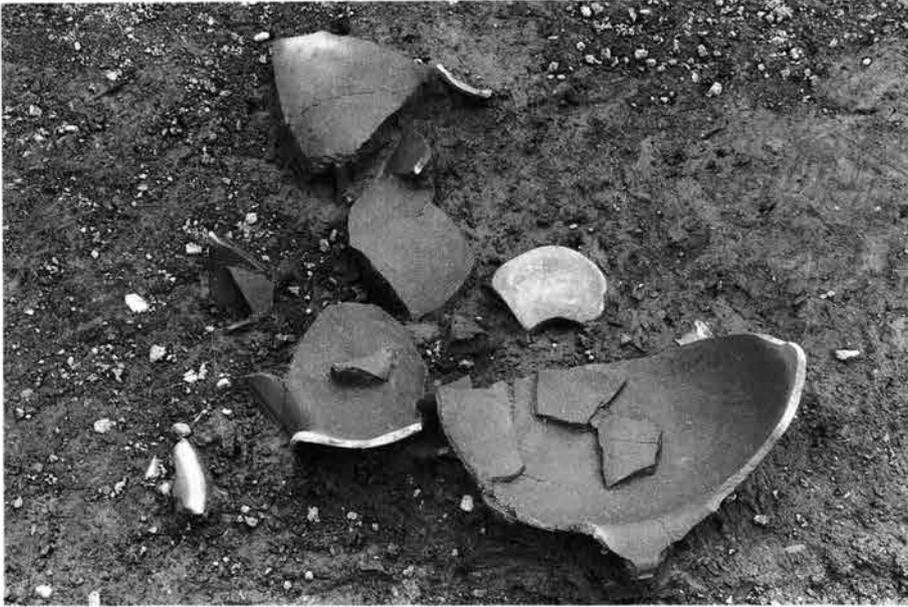


(2) B-6 地区南一条大路北側溝
SD33003下層 (o区) 土器
出土状況 (南から)



(3) B-6 地区南一条大路北側溝
SD33003下層 (o区) 土器
出土状況 (東から)

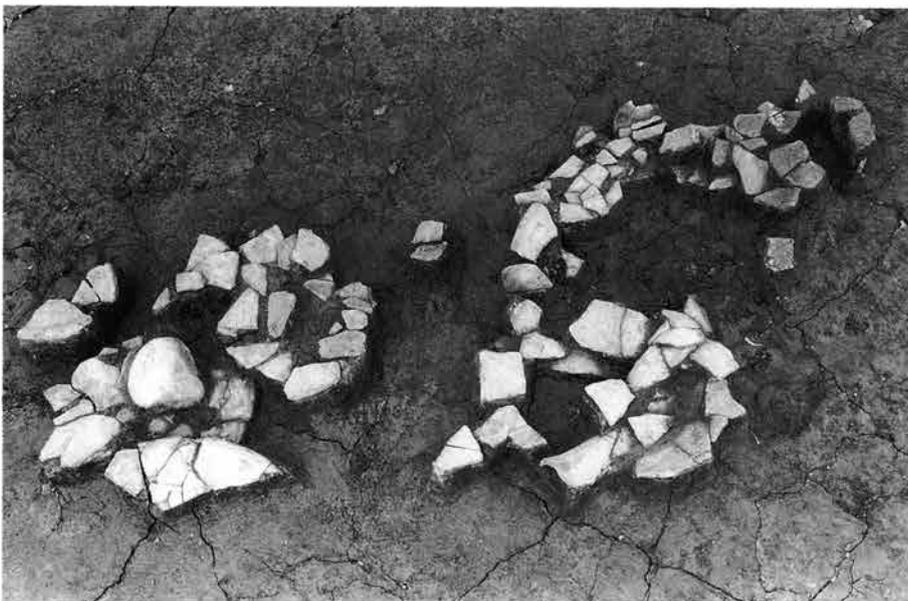




(1) B-6 地区南一条大路南側溝
S D33002下層 (r区) 土器
出土状況 (南から)

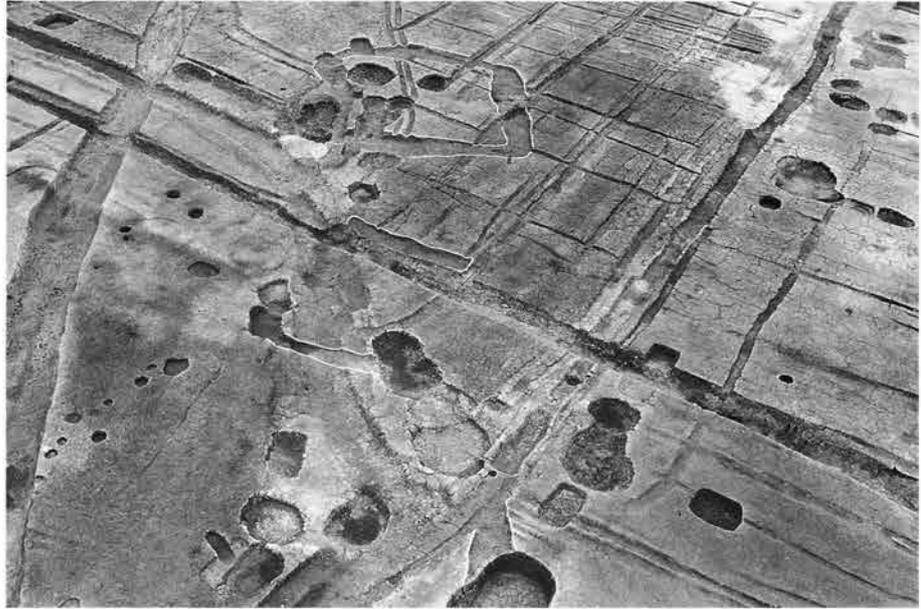


(2) B-6 地区南一条大路南側溝
S D33002下層 (r区) 偶蹄
類 (馬) 下顎骨出土状況
(南から)



(3) B-6 地区溝 S D33304
土器出土状況 (西から)

(1) B-6・B-7 地区方形周溝墓
S T 399602 および S D 399607・
609・610 (北から)

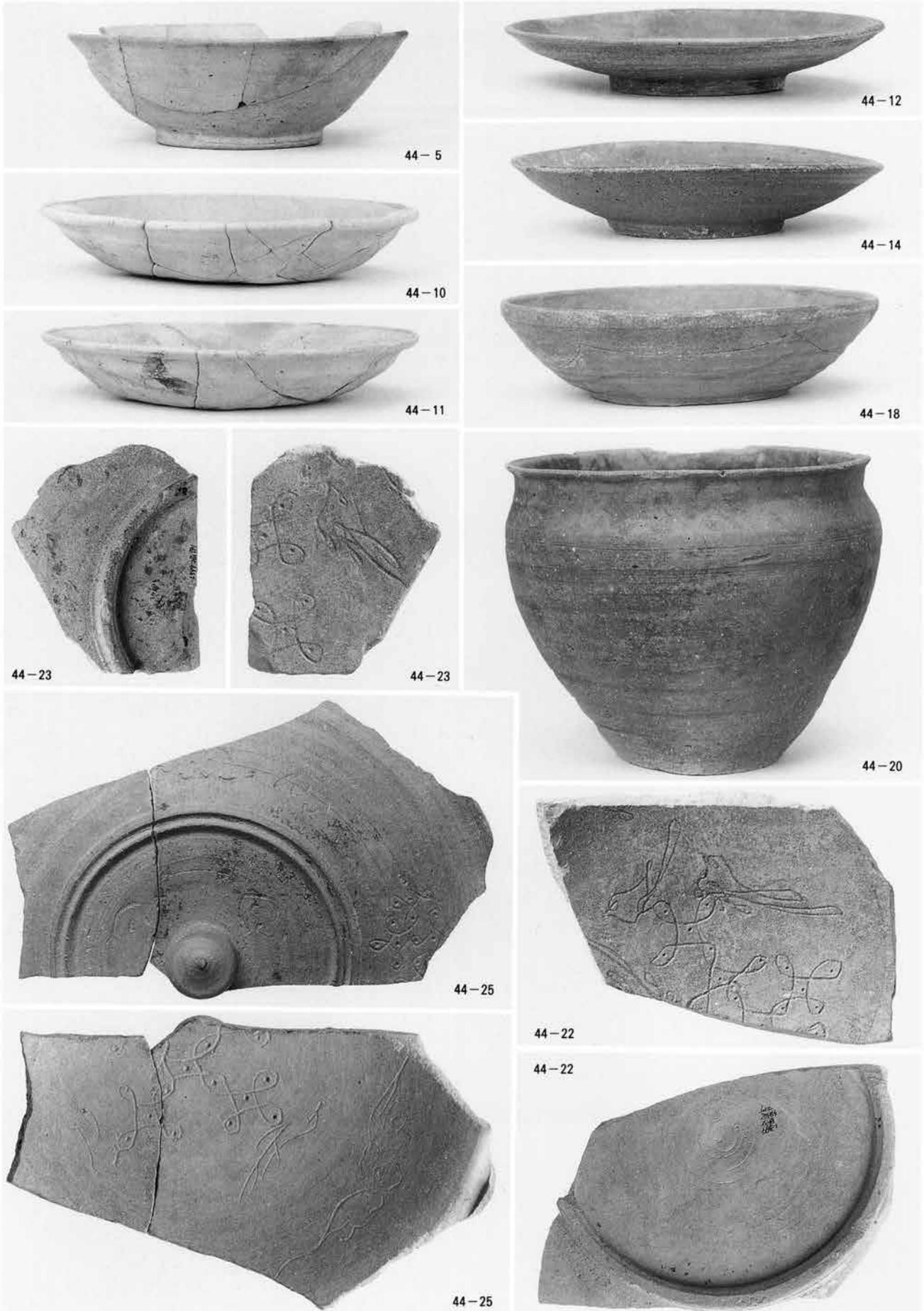


(2) B-7 地区方形周溝墓
S T 399602 土器出土状況
(西から)



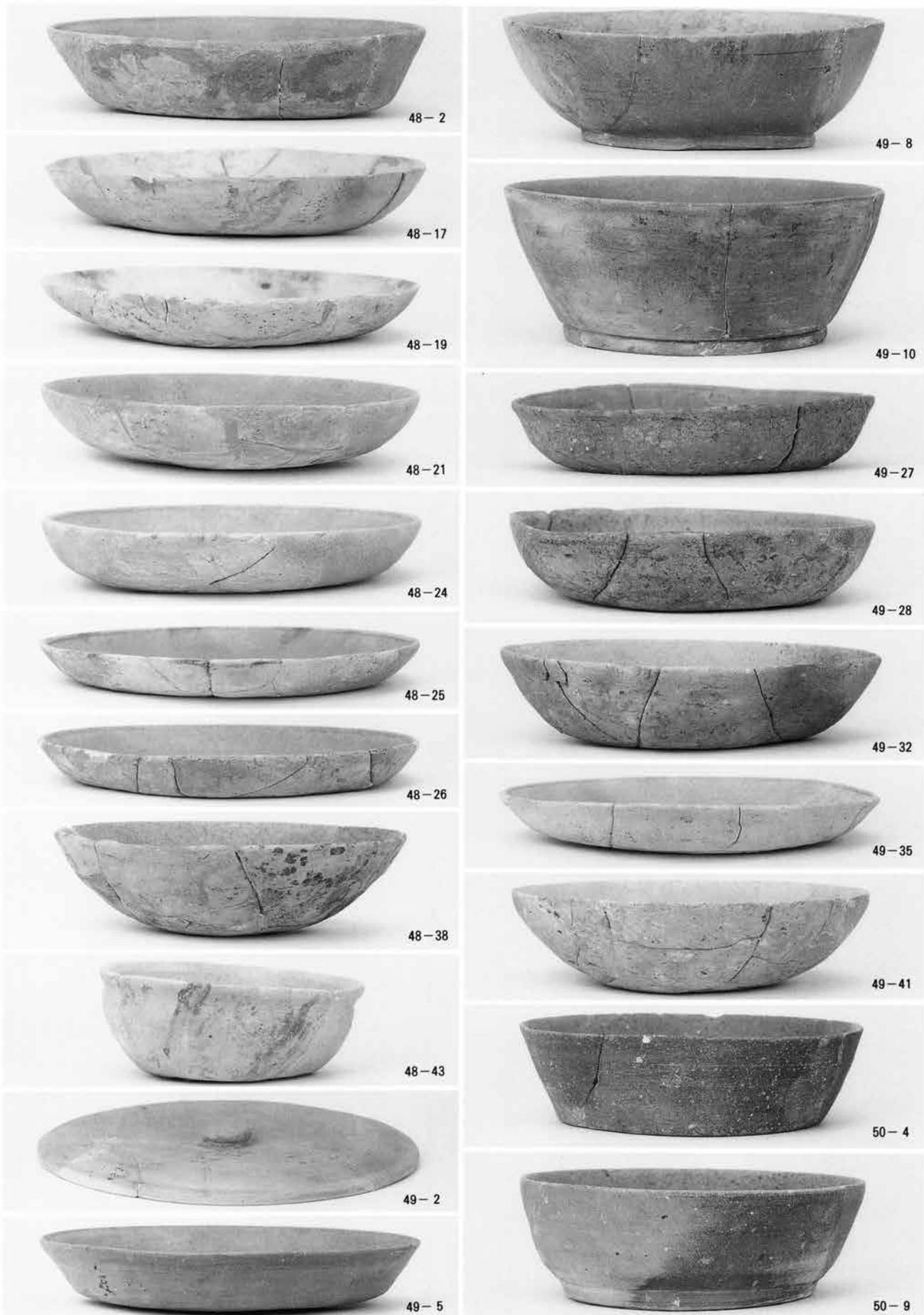
(3) B-7 地区土杭 S K 399506
土器出土状況 (南から)





長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(1) (番号は挿図と対応)

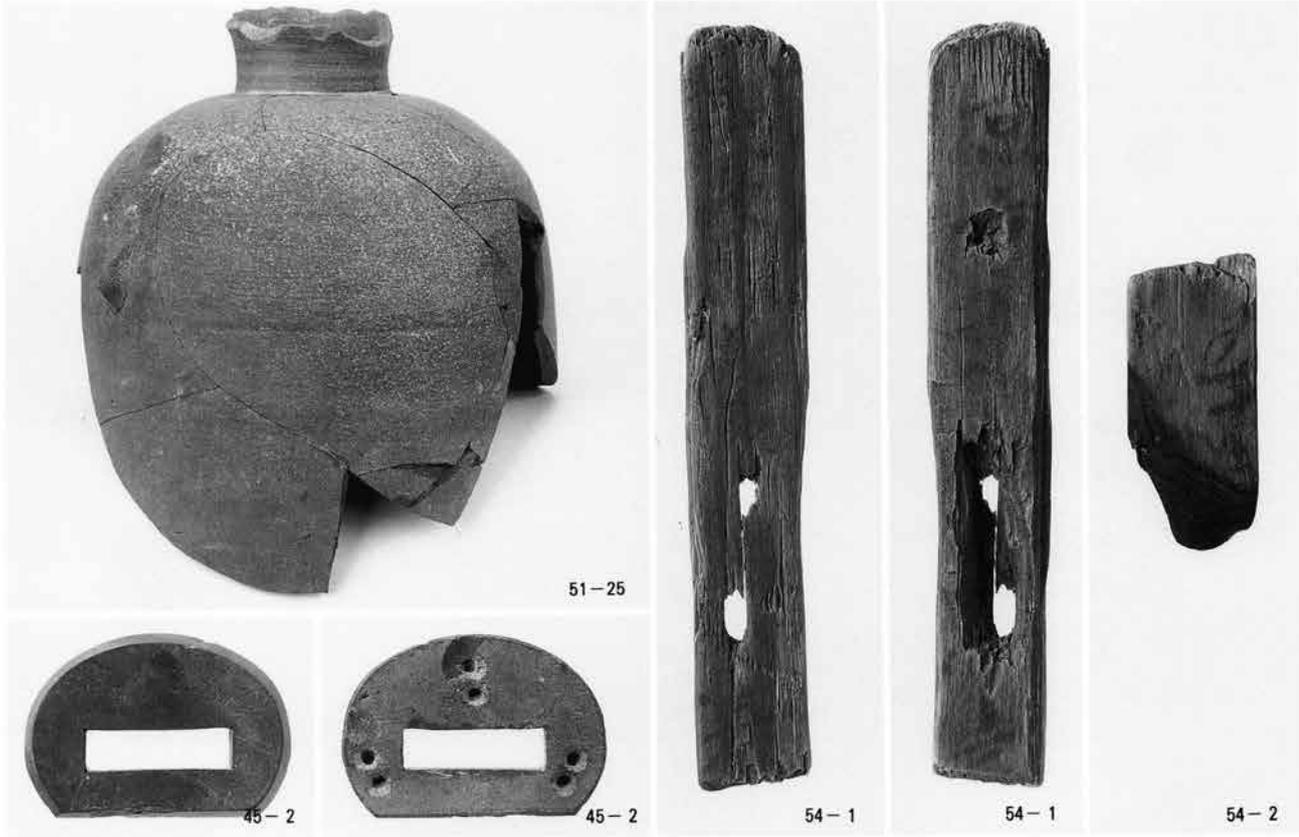
図版第37 長岡京跡左京第399次



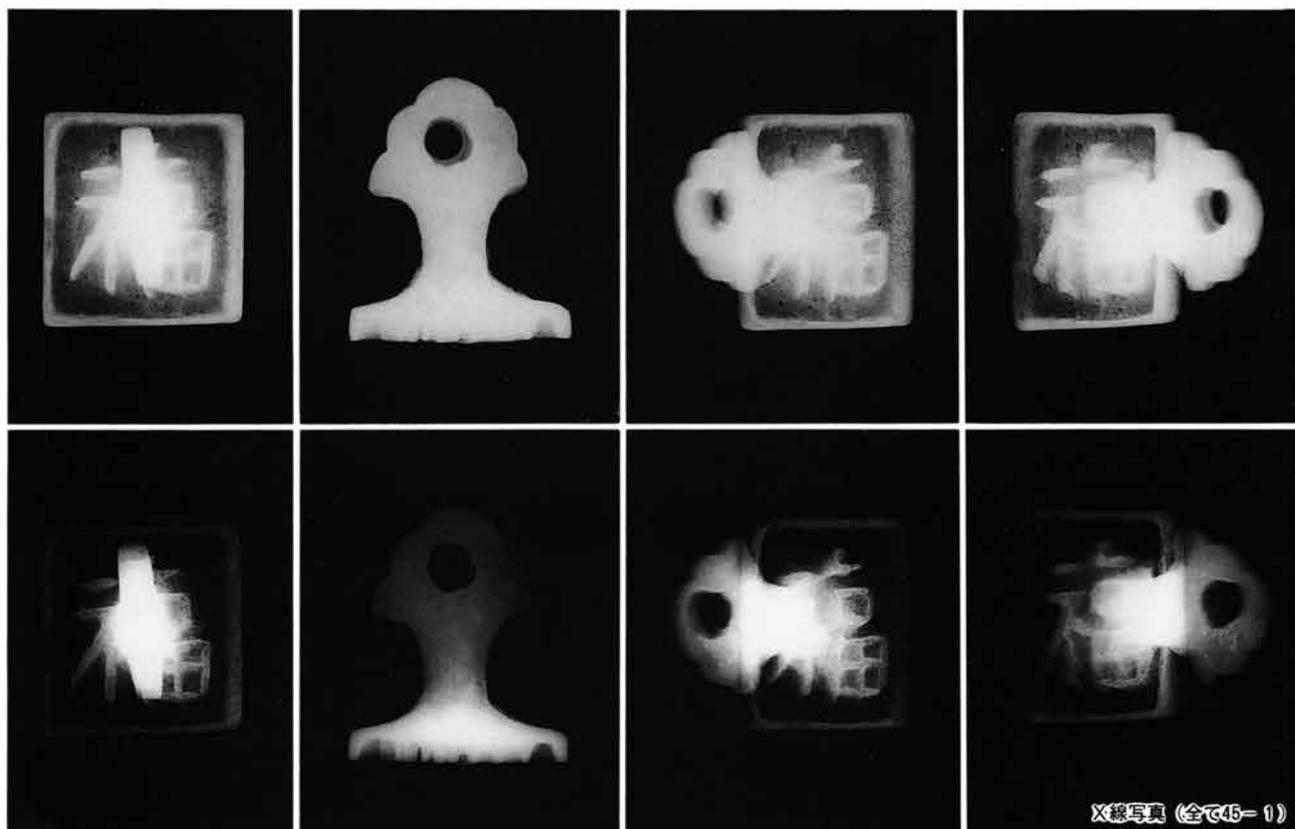
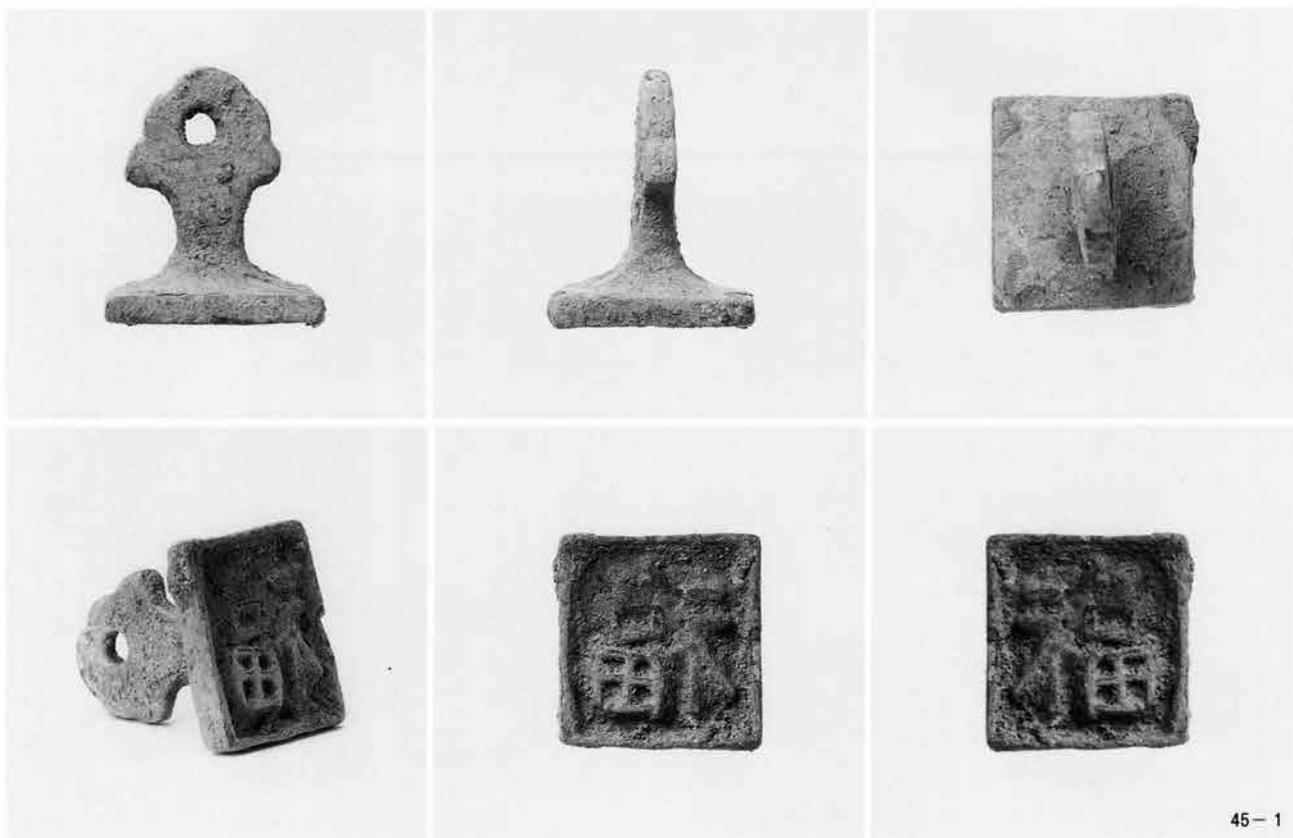
長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(2) (番号は挿図と対応)



長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(3) (番号は挿図と対応)



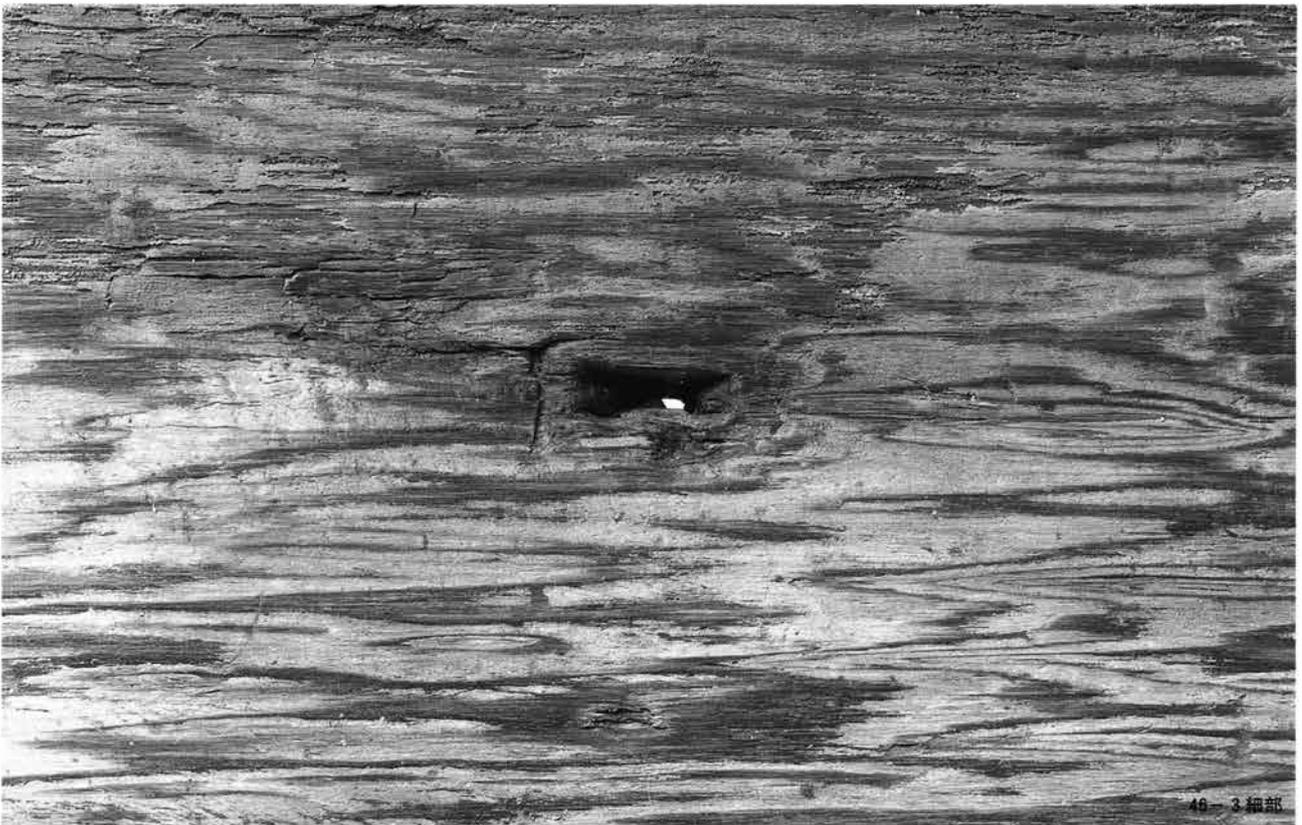
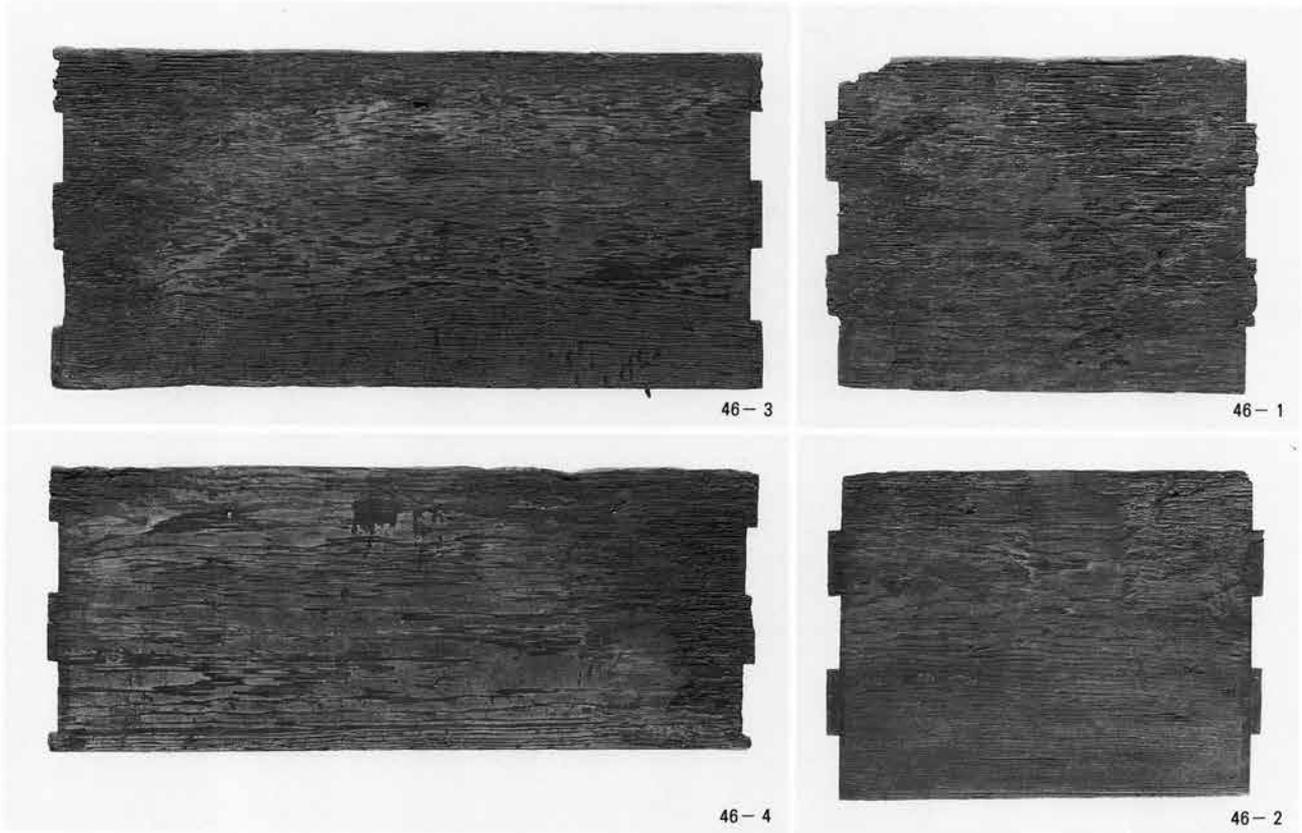
長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(4) (番号は挿図と対応)



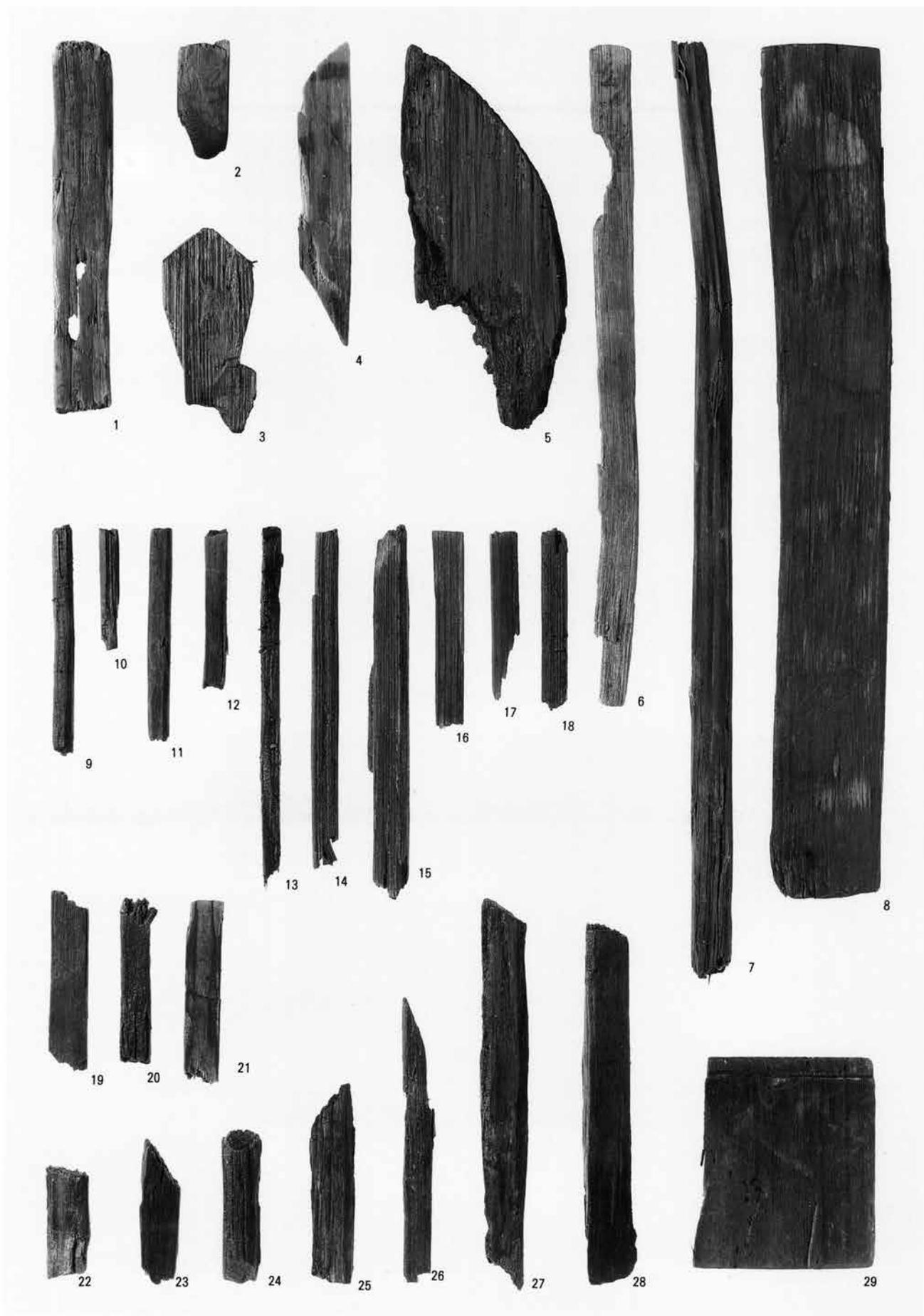
長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(5) (番号は挿図と対応)

X線写真 (全45-1)

図版第41 長岡京跡左京第399次



長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(6) (番号は挿図と対応)



長岡京跡左京第399次調査 (B-6・B-7地区) 出土遺物(7) (番号は挿図第54図と対応)

図版第43 内里八丁遺跡

(1)調査地全景
(北西上空から)



(2)E地区第1遺構面全景
(南から)



(3)F地区第1遺構面全景
(南から)

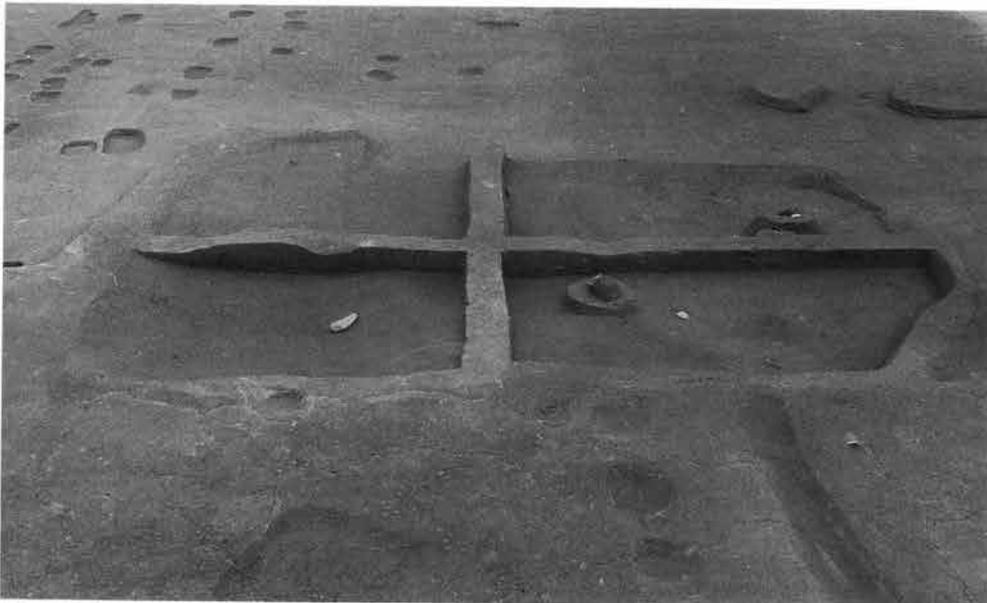




(1)E地区第2遺構面
S B212・S K201
検出状況
(北から)



(2)E地区第2遺構面
S E205完掘状況
(南から)



(3)E地区第2遺構面
S K201検出状況
(北から)

図版第45 内里八丁遺跡

(1)E地区第3遺構面全景
(北上空から)



(2)E地区第3遺構面全景
(真上から)

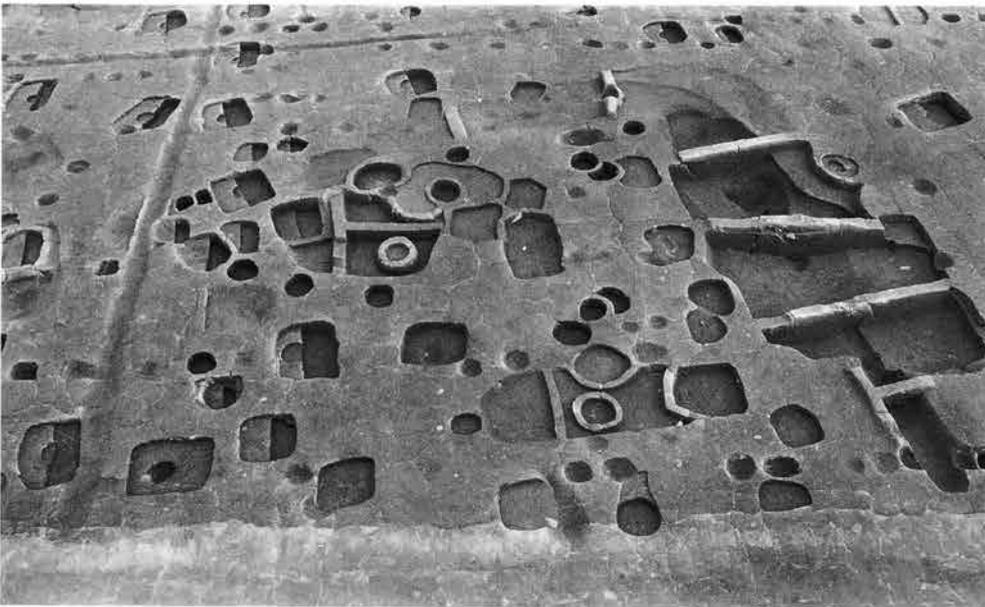


(3)E地区第3遺構面
道路状遺構検出状況
(北から)





(1)E地区第3遺構面
S B225検出状況
(西から)



(2)E地区第3～4遺構面
調査区中央部柱穴群
検出状況
(西から)



(3)E地区第3遺構面
S K203検出状況
(南から)

図版第47 内里八丁遺跡



(1) E地区第4遺構面
遺構検出状況
(南から)



(2) E地区第4遺構面
調査区南半部遺構
検出状況
(南から)



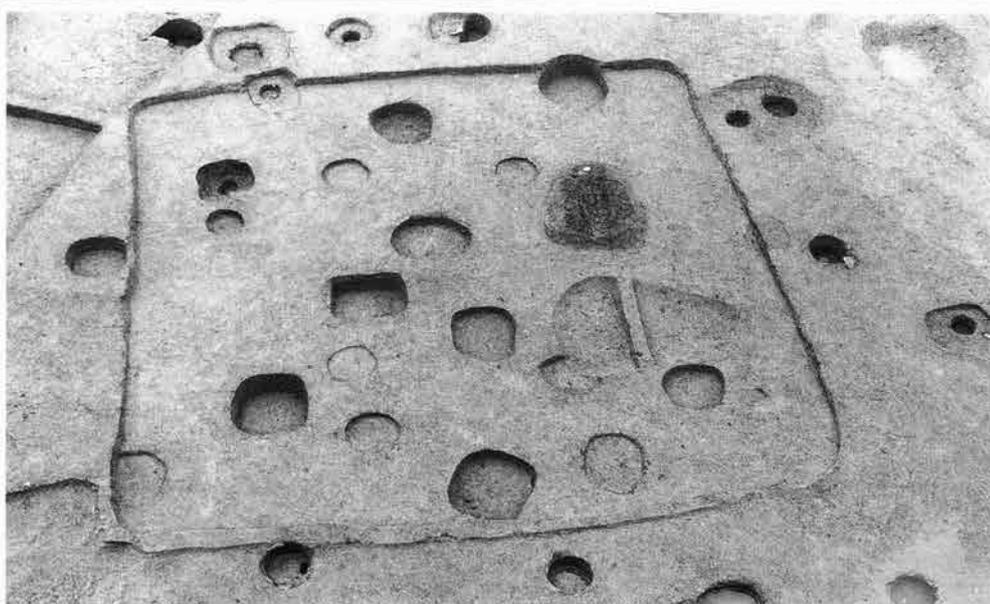
(3) E地区第4遺構面
S B 226検出状況
(南から)



(1) E地区第4遺構面全景
(北から)



(2) E地区第4遺構面全景
(南から)



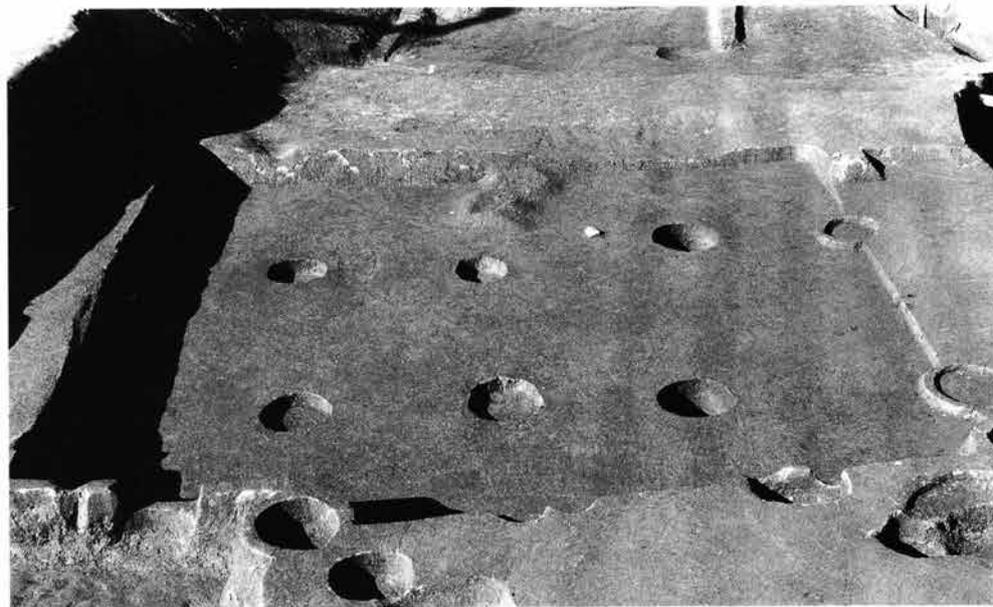
(3) E地区第4遺構面
S H279検出状況
(西から)



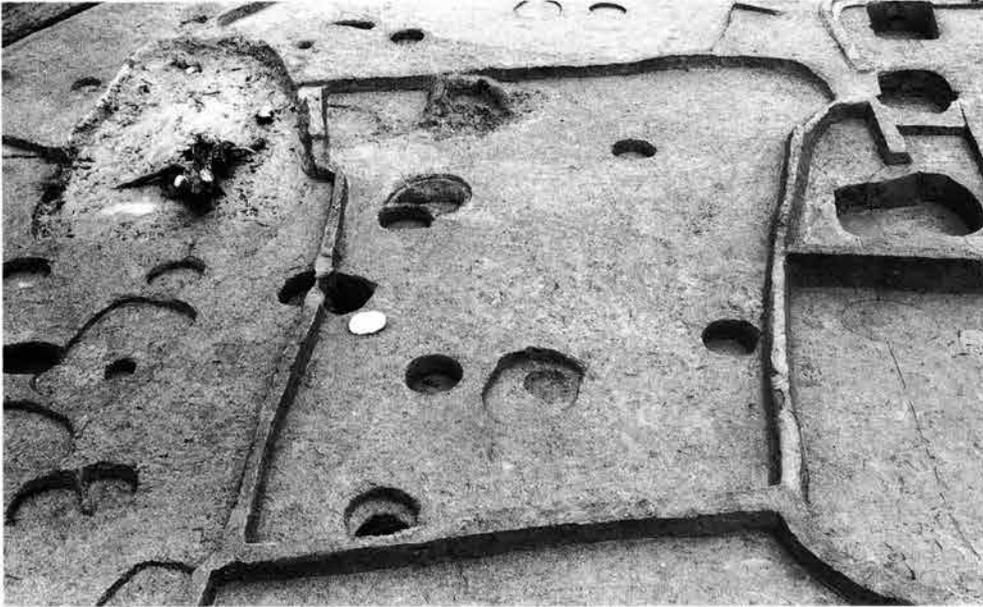
(1)E地区第4遺構面
SH280完掘状況
(南から)



(2)E地区第4遺構面
SH266完掘状況
(西から)



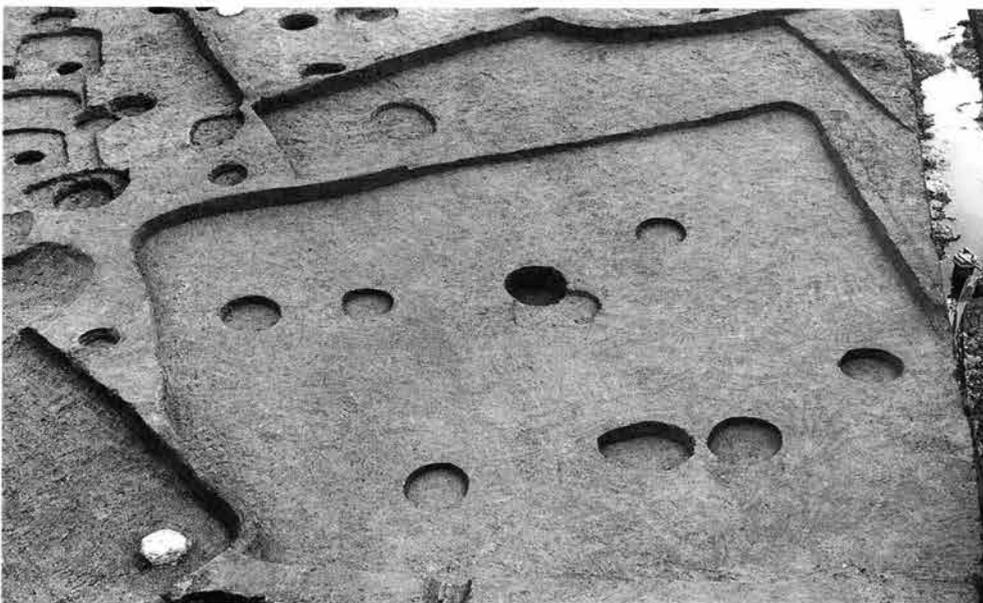
(3)E地区第4遺構面
SH259完掘状況
(南から)



(1)E地区第4遺構面
SH283完掘状況
(南から)



(2)E地区第4遺構面
SH283竈検出状況
(南から)



(3)E地区第4遺構面
SH287検出状況
(南から)

図版第51 内里八丁遺跡

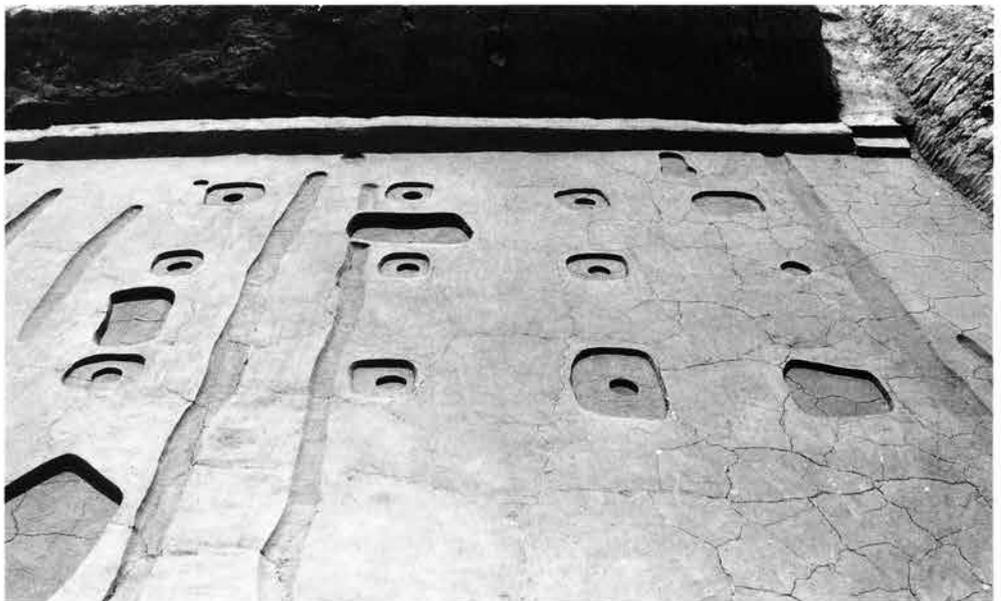
(1) F地区第2遺構面全景
(南から)

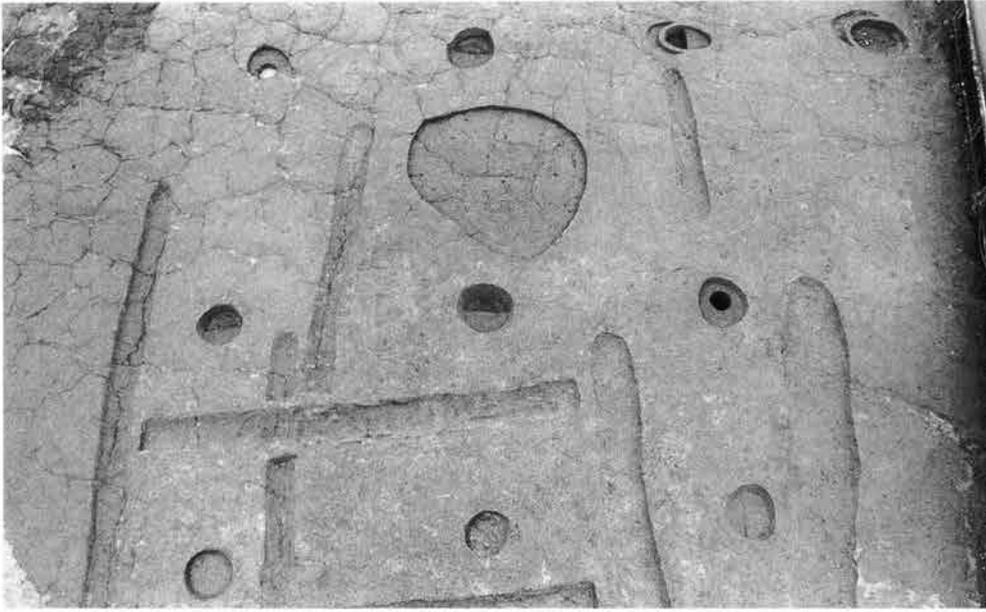


(2) F地区第3遺構面全景
(南上空から)

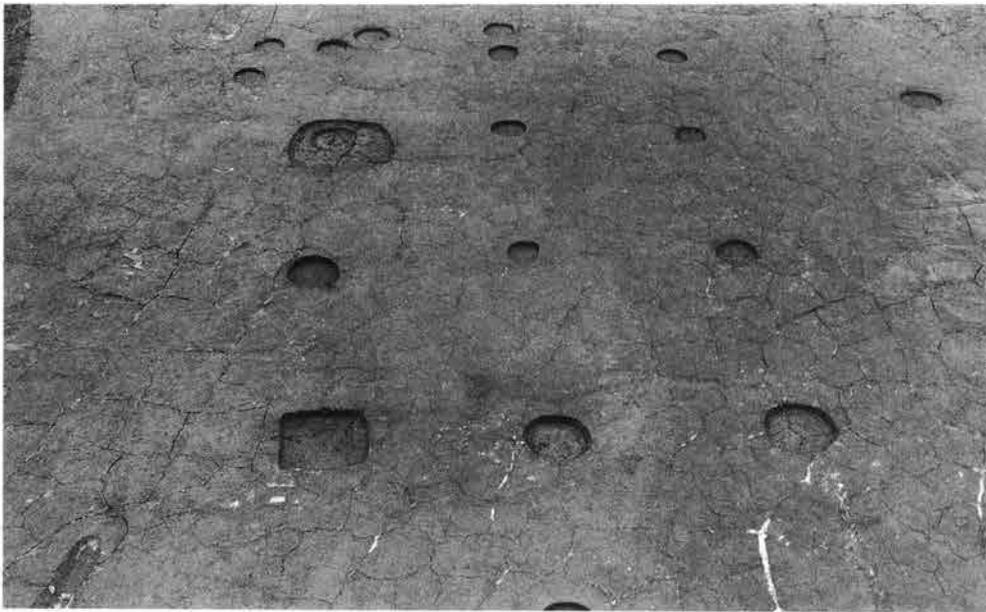


(3) F地区第3遺構面
S B 317検出状況
(北から)





(1) F地区第3遺構面
S B313検出状況
(南から)



(2) F地区第3遺構面
S B311検出状況
(北から)



(3) F地区第3遺構面
S E319検出状況
(北から)

図版第53 内里八丁遺跡



(1) F地区第4遺構面全景
(南から)



(2) F地区第5遺構面全景
(南から)



(3) F地区第5遺構面
S R 535遺物出土状況
(南から)

図版第54 内里八丁遺跡



(1) F地区第6遺構面全景
(南から)



(2) F地区第6遺構面
水田部全景
(南から)



(3) F地区第6遺構面
水田部全景
(真上から)

図版第55 内里八丁遺跡

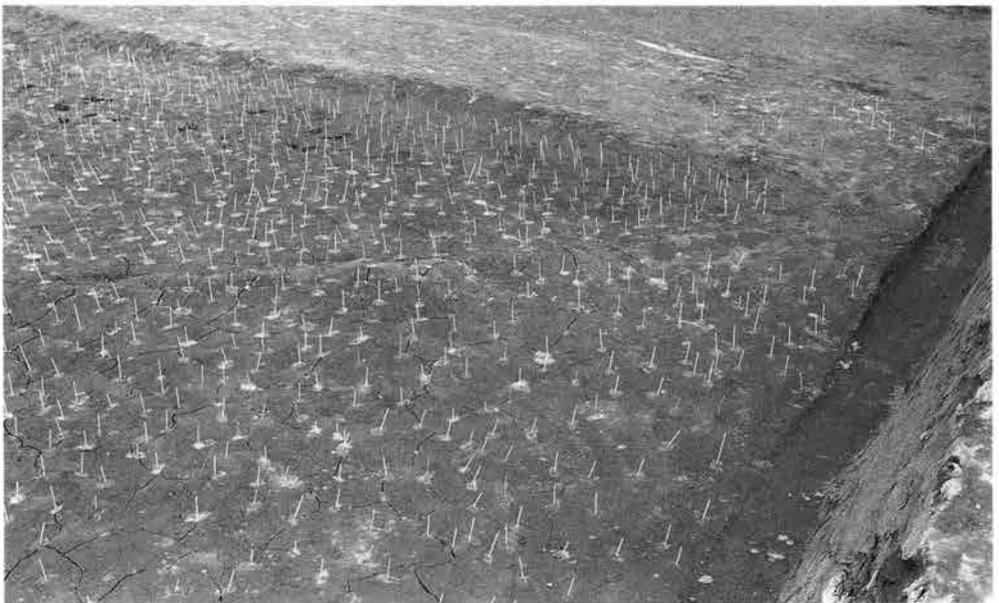
(1) F地区第6遺構面水田跡
検出状況
(北から)



(2) F地区第6遺構面水田跡
稲株痕等検出状況
(南東から)



(3) F地区第6遺構面水田跡
稲株痕等検出状況
(南東から)

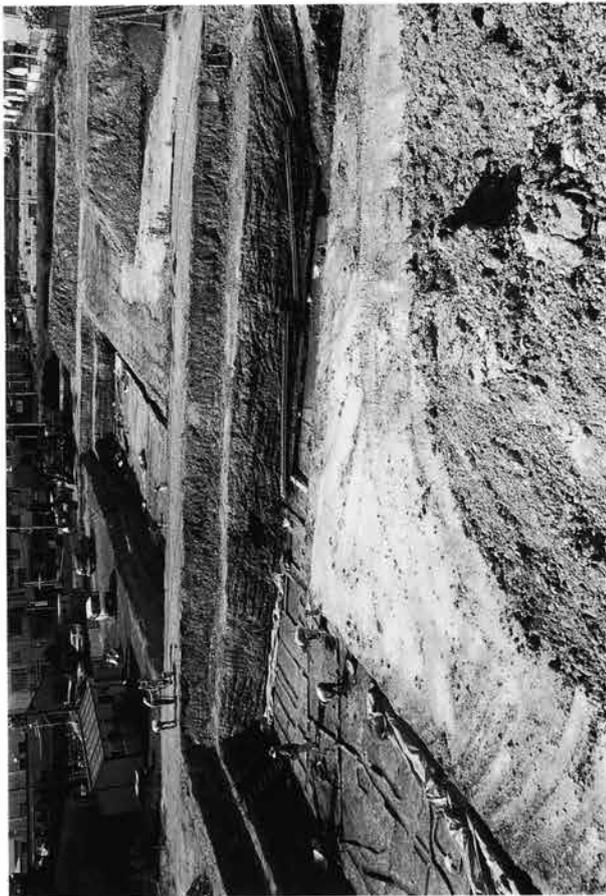




(3)第1トレンチSH01・SD01検出状況(北から)



(4)第1トレンチSH08遺物出土状況(東から)



(1)第1・2トレンチ全景(南東から)



(2)第1トレンチ全景(南から)



(3)第2トレンチSH03検出状況(北から)



(4)第2トレンチSD03遺物出土状況(南から)



(1)第2トレンチ全景(西から)



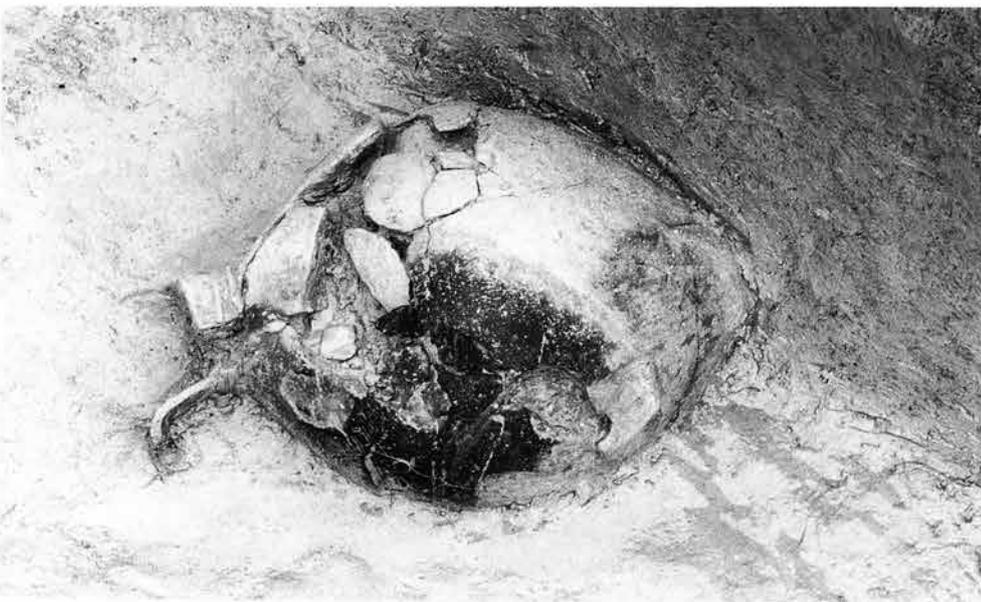
(2)第2トレンチSH06・SH07・SD03検出状況(北東から)



(1)第4 トレンチ素掘溝群
検出状況
(南から)



(2)第5 トレンチ全景
(南から)

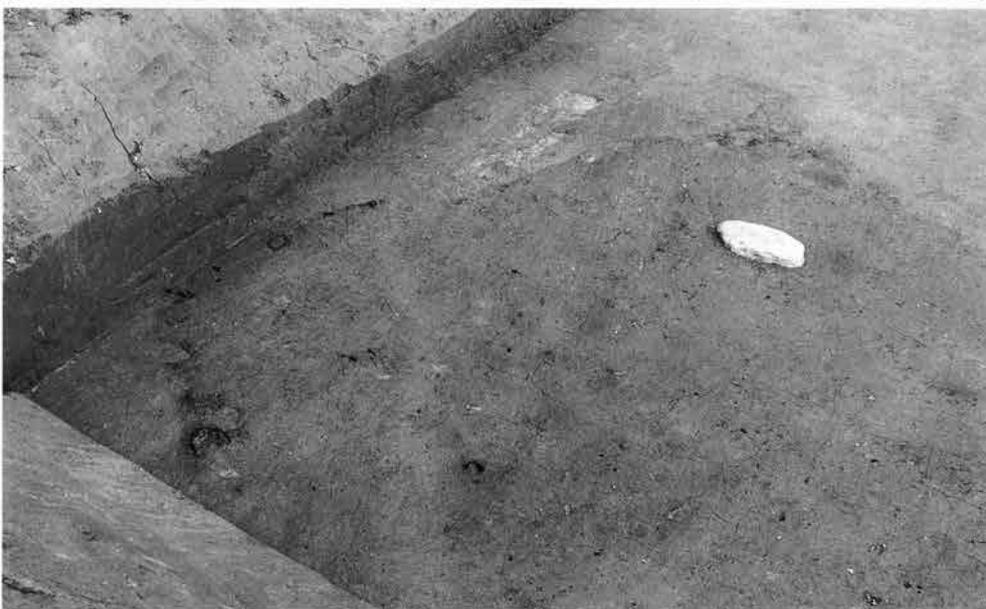


(3)第5 トレンチ弥生土器壺
検出状況
(北から)

(1)第7トレンチ全景
(西から)



(2)第7トレンチ竪穴式
住居跡検出状況
(南西から)



(3)第7トレンチ噴砂
検出状況
(南西から)





(1)第10トレンチ全景
(西から)



(2)第11トレンチ全景
(北西から)



(3)第15トレンチ全景
(東から)

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第84冊							
編著者名	伊野近富・竹原一彦・河野一隆・村田和弘・野島 永・森下 衛・岩松 保							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3			Phone	075(933)3877			
発行年月日	西暦 1998 年		10 月		26 日			
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
あさごだにみ なみじょうあ と・あさごだ にみなみふん は 浅後谷南城 跡・浅後谷 南墳墓	たけのぐんあみのち ようたかはし 竹野郡網野町高橋	501	153	35° 39' 21"	135° 2' 46"	19971002 ～ 19980226	350	農地造成
よこまくらい せき 菩提城跡・ 菩提東古墳	たけのぐんやさかち ようよっさわ 竹野郡弥栄町吉沢	503	119	35° 38' 21"	135° 5' 56"	19971013 ～ 19980123	460	農地造成
ながおかきよ うあとさきよ うだい399じ 、ひがしつち かわいせき 長岡京跡左 京第399次 、東土川遺 跡	きょうとしみなみく くぜひがしつちかわ ちようかないだ・ま さのぼり 京都市南区久世東 土川町金井田・正 登	107	10	34° 56' 24"	135° 43' 28"	19970407 ～ 19971016	7,220	道路拡幅
うちさとはっち よういせき 内里八丁遺 跡	やわたしうちさとひ ゆうがどう 八幡市内里日向堂	210	37	31° 51' 33"	133° 14' 51"	19970415 ～ 19980310	4,000	道路建設
さやまいせき 佐山遺跡	くぜぐんくみやまち ようさやま 久世郡久御山町佐 山	322		34° 52' 6"	135° 45' 6"	19980527 ～ 19980730	3,600	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
浅後谷南城 跡・浅後谷 南墳墓	山城 墳墓 墳墓	鎌倉 江戸 弥生		掘立柱建物跡、柵 墳墓 埋葬主体		陶磁器 陶磁器 弥生土器、玉類、 鉄製品		
菩提城跡・ 菩提東古墳	山城 古墳	平安末～鎌倉初 古墳		掘立柱建物跡、塀 古墳		須恵器、鉄製鋤先 銅鏡、玉類		
東土川遺跡	墓	古墳・弥生		溝・方形周溝墓		土師器・弥生土器		
長岡京跡左 京第399次	耕作地 集落 都城	中世 平安 長岡京期		素掘り溝 掘立柱建物跡・井戸 掘立柱建物跡・条坊側溝		瓦器 施釉陶器・石帯・櫃 須恵器・木簡		

内里八丁遺跡	耕作地 集落	弥生 古墳 飛鳥 奈良 平安 中世	水田 竪穴式住居跡 竪穴式住居跡 道路・掘立柱建物跡 掘立柱建物跡・井戸 素掘り溝	弥生土器 須恵器・土師器 須恵器・土師器 須恵器・製塩土器 施釉陶器・須恵器	
佐山遺跡	集落	弥生 古墳 平安	竪穴式住居跡 竪穴式住居跡 掘立柱建物跡	弥生土器 土師器・須恵器	

京都府遺跡調査概報 第84冊

平成10年10月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Phone (075)256-0961 (代)